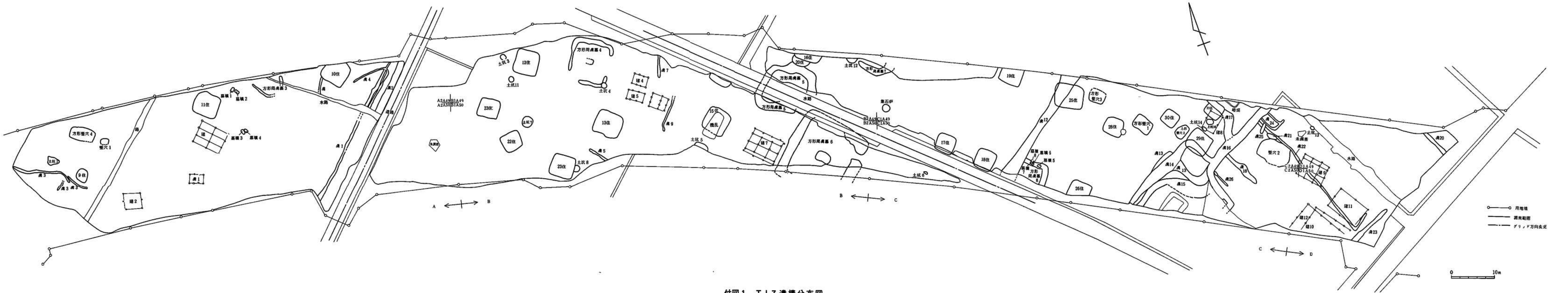
田井座遺跡
一色遺跡
名古熊下遺跡

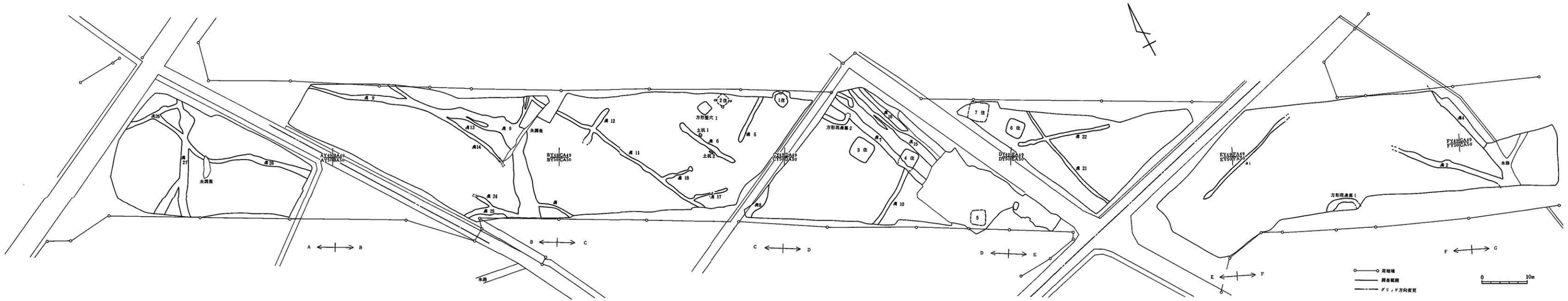
一般国道153号飯田バイパス（２工区）
用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

１９９１．３

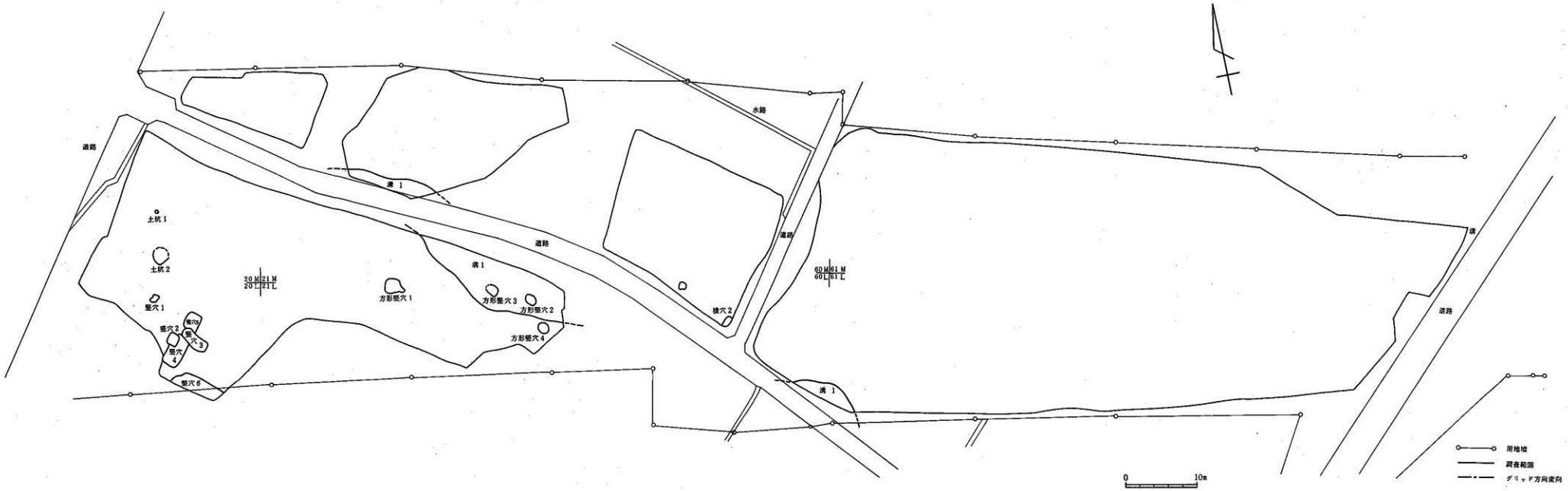
建設省中部地方建設局飯田国道工事事務所
飯田市教育委員会



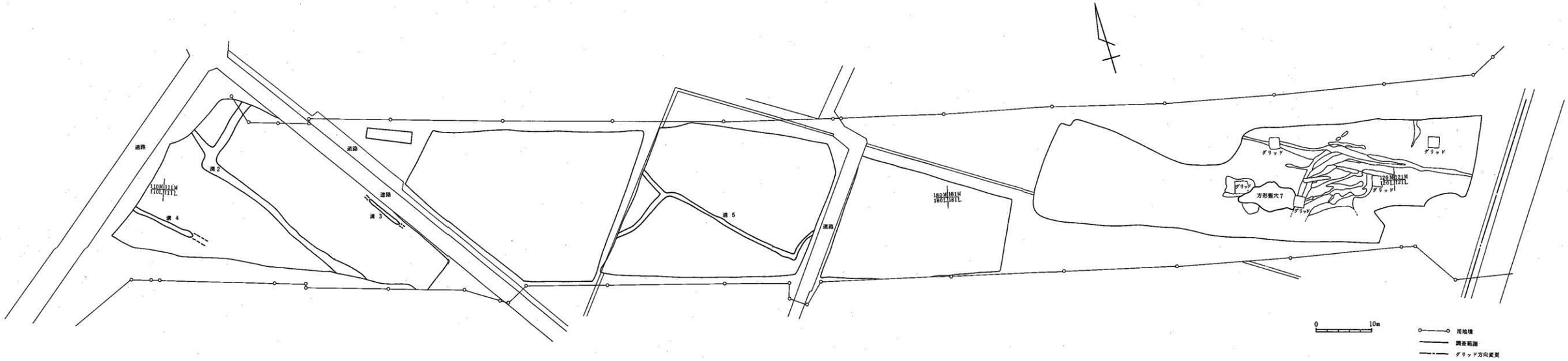
付図1　ＴＩＺ遺構分布図



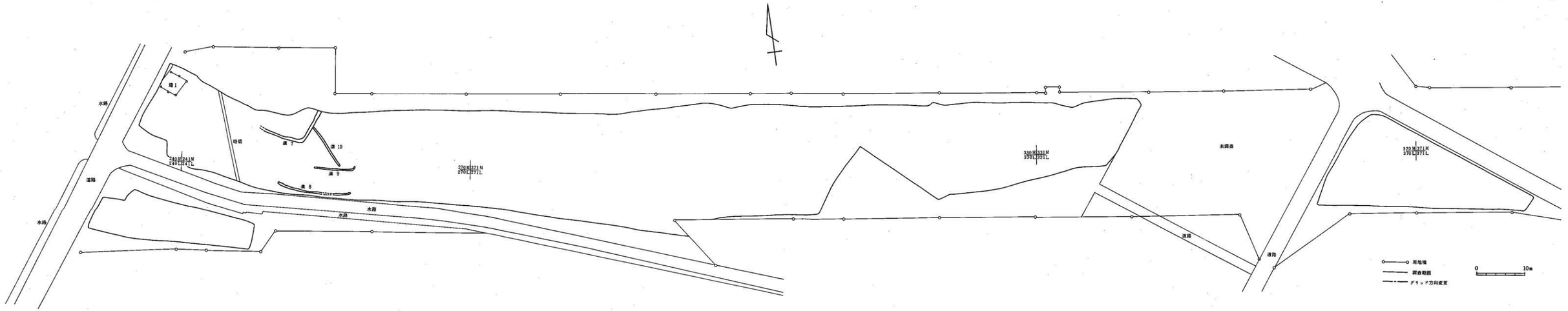
付図2　ＩＳＫ遺構分布図



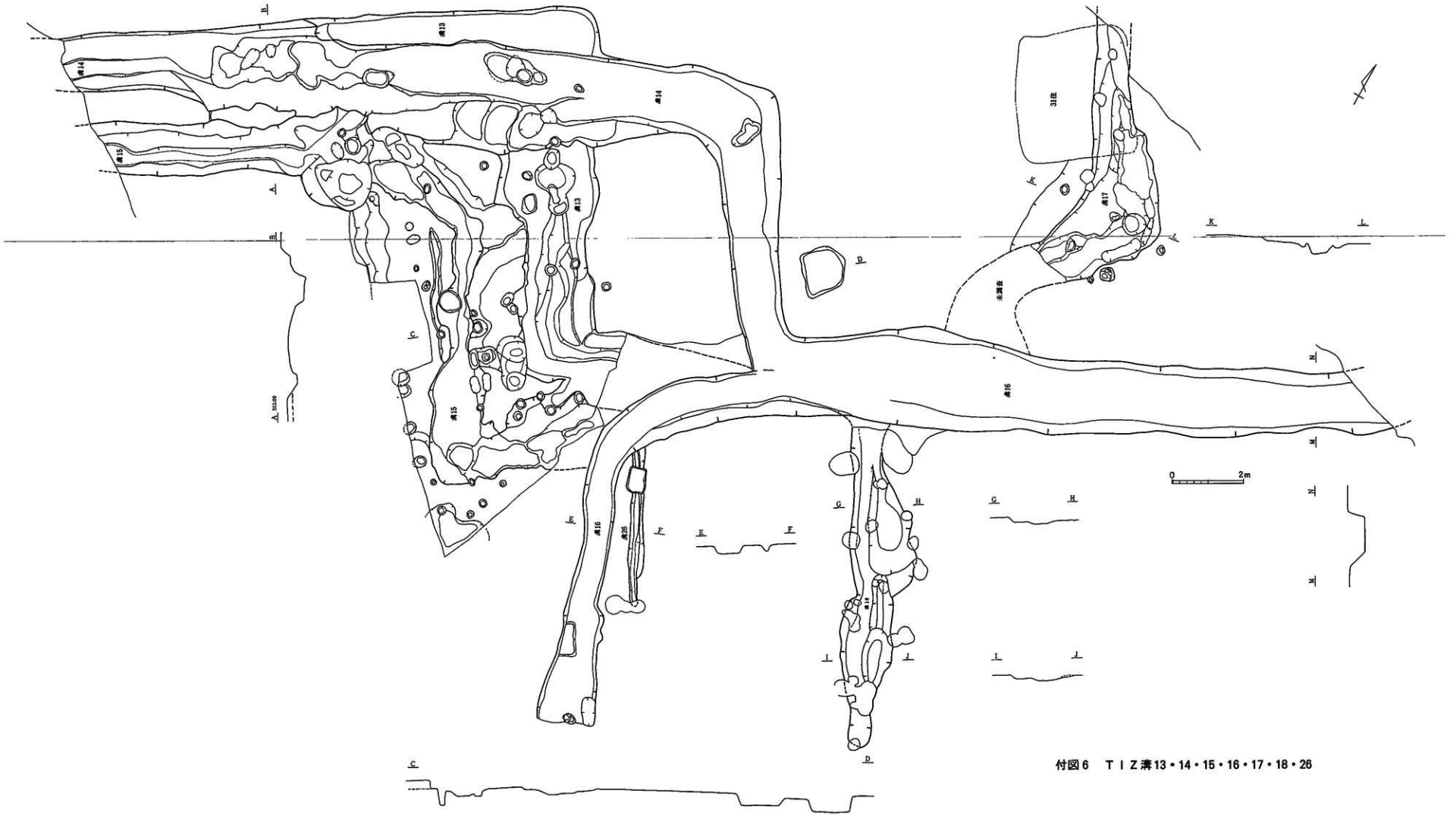
付図3　NGK遺構分布図　1



付図4　NGK遺構分布図　2

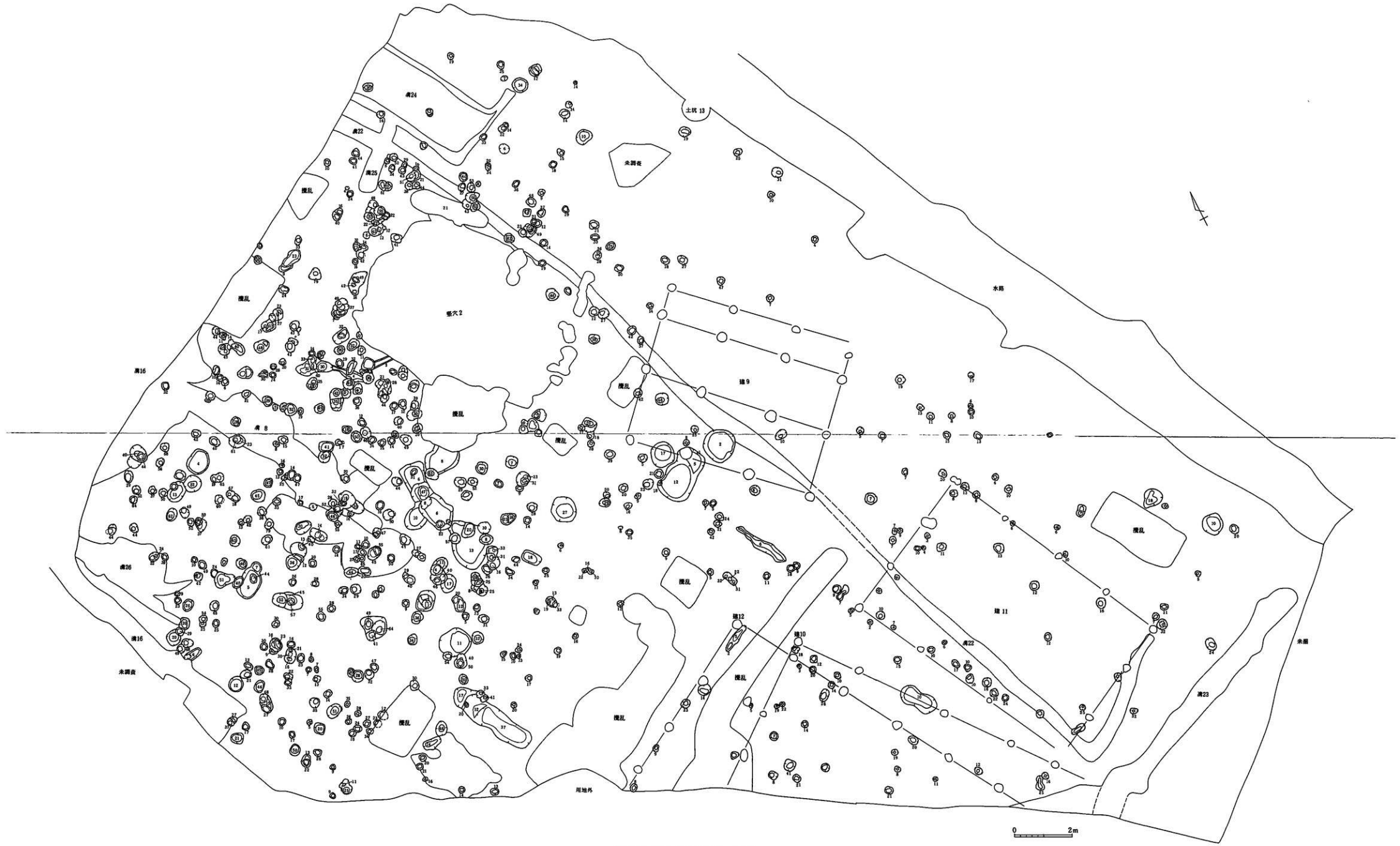


付図5　ＮＧＫ遺構分布図　3

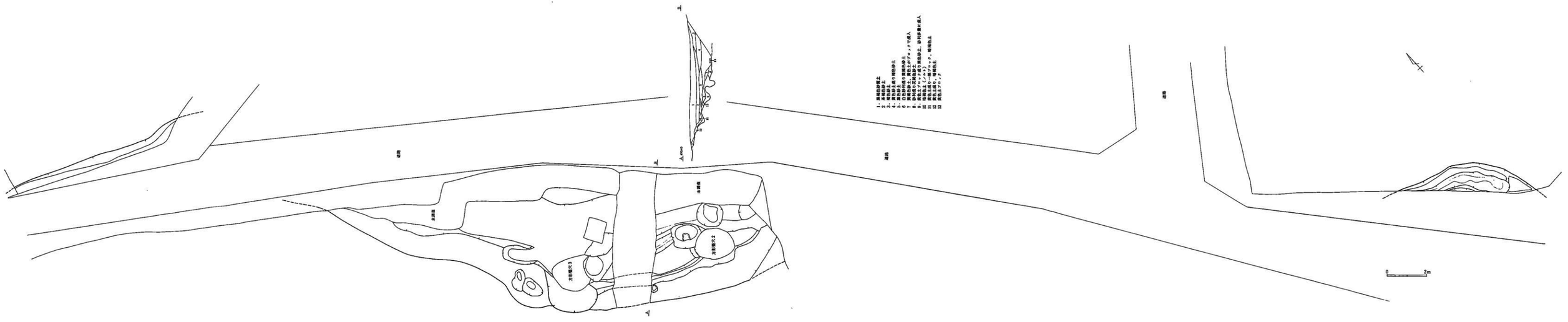


付図6　ＴＩＺ溝13・14・15・16・17・18・26

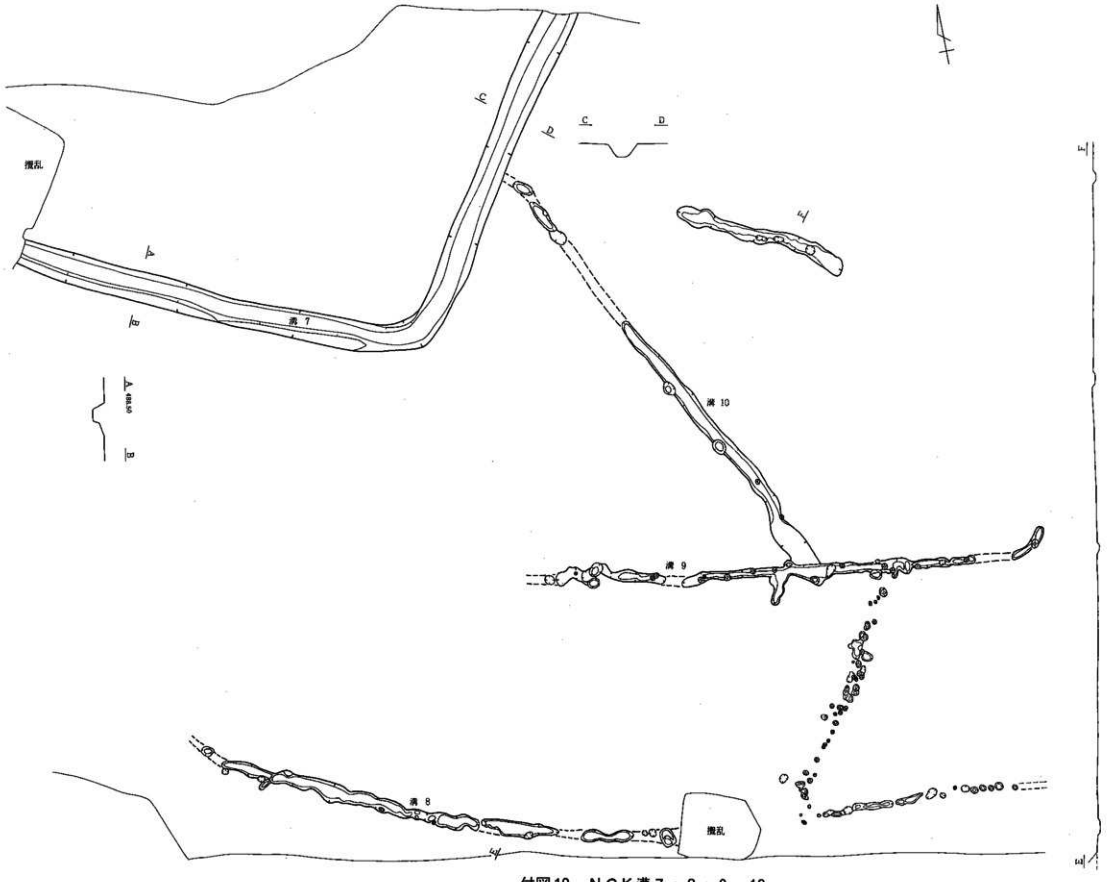
付図7　ＴＩＺ柱穴群　Ａ区



付図8　ＴＩＺ柱穴群　Ｄ区


1. 黒褐色砂質土
2. 茶褐色砂土
3. 褐色砂土
4. 黒色砂土
5. 黒色砂土
6. 白色砂質の黒褐色砂土
7. 黒褐色砂土
8. 黒色砂土
9. 黒色土(ノシ)
10. 褐色土(ノシ)
11. 黒色土
12. 黒色土
13. 黒色土
0
2m

付図9　ＮＧＫ溝１



付図10　ＮＧＫ溝７・８・９・10

田井座遺跡
一色遺跡
名古熊下遺跡

一般国道153号線飯田バイパス（２工区）
用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

1991．3

建設省中部地方建設局飯田国道工事事務所
飯田市教育委員会

序

いまや地域社会の発展は交通網の整備を抜きにしては考えられなくなっております。この飯田地域においては、一般国道153号が座光寺バイパスの開通により、市街地以北の交通に関する限り、以前よりその混雑は解消されました。しかし、市街地以南においては、中央自動車道西宮線の飯田インターチェンジからのびる飯田バイパスが一部共用されているのみで、朝夕の混雑の解決にはならず、飯田バイパスの早期全線開通が待たれるところです。

そのような状態の中、鼎地区内を2工区としバイパスを建設することとなり、それに先立つ発掘調査が行なわれたわけであります。

今回の発掘調査を実施した鼎地区は松川の河岸段丘に発達した地域で、全域にわたって先史からの人々の生活の跡が認められる所です。その河岸段丘の最上段にあたる一色地籍においては、比較的大規模な弥生時代の集落や特殊な中世の遺構が確認できました。

内容については、報告書に記したとおりであり、今後の研究に供されることを希望しております。

近年、考古学ブームといわれるなかで様々な調査・報告がなされていますが、これらの文化遺産を後世に保存、継承していくことは私たちの責務であることはいうまでもありません。そのままの姿で残すことができれば、それに越したことはないと思いますが、地域全体における今日的な課題の解決のためには、やむをえない部分もあると考えます。社会の発展と文化財保護とがうまく調和のとれた地域にすることが大切だと思います。

最後になりましたが、調査実施にあたり、その趣旨を深いご理解をいただいた建設省中部地方建設局、同飯田国道工事事務所をはじめとする関係機関各位と、猛暑・酷寒の中で長い間の発掘作業や細かい整理作業に従事いただいた作業員の皆様に心よりの感謝を申し上げて、刊行の言葉といたします。

平成3年3月

飯田市教育長

福　島　　稔

例　　言

1．本書は、一般国道153号飯田バイパス第２工区建設に伴う緊急発掘調査報告書である。

2．本書に掲載した遺跡は、田井座・一色・名古熊下の３遺跡である。なお、名古熊下遺跡については、当初下伊那農業高校付近遺跡と地蔵面遺跡とに分けて諸手続きを行なったが、地形等の状況から同一の遺跡として統合し、新名称とした。

なお、現地作業・整理作業実施にあたり、各遺跡について下記の略号を用いた。

田井座遺跡 …… ＴＩＺ

一色遺跡 …… ＩＳＫ

名古熊下遺跡 …… ＮＧＫ

3．本調査は、飯田市教育委員会が建設省中部地方建設局飯田国道工事事務所より委託を受け実施したものである。

4．発掘調査は、昭和62年６月から試掘調査に着手し、平成２年11月まで断続的に実施し、遺跡毎のそれぞれの実施年度は以下のようである。

昭和62年度
- ＊全遺跡の試掘調査
- ＊田井座遺跡

昭和63年度
平成元年度
- ＊田井座遺跡
- ＊一色遺跡
- ＊名古熊下遺跡

5．　整理作業は、平成元年度の後半と平成２年度にわたって実施した。

6．本書の記載にあたり、調査地点の西側から東方へ、田井座遺跡・一色遺跡・名古熊下遺跡の順とした。

7．本書は、吉川豊・佐々木嘉和・馬場保之・小林正春が分担執筆し、それぞれの分担は文末に記した。なお、本文の一部について小林が加筆・訂正を行なった。

8．本書に掲載した図面類の整理は、調査員があたり、整理作業員が補佐した。

9．本書の編集は調査員全体で協議の上、吉川が行い、小林が総括した。

10．本書に関連する諸資料・諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市上川路飯田市考古資料館に保管している。

本 文 目 次

序

例言

目次

Ⅰ 調査の経過 …… 1

1．調査に至るまで …… 1

2．調査の経過 …… 2

3．調査組織 …… 4

Ⅱ 遺跡の環境 …… 6

1．自然環境 …… 6

2．歴史環境 …… 7

Ⅲ 調査結果 …… 11

1．田井座遺跡 …… 11

1）縄文時代 …… 11

(1) 住居址 …… 11

9号住居址　20号住居址

(2) 土坑 …… 12

土坑 2　土坑 5　土坑 6

(3) 集石炉 …… 13

2）弥生時代 …… 14

(1) 住居址 …… 14

10号住居址　11号住居址　12号住居址　13号住居址

14号住居址　15号住居址　16号住居址　17号住居址

18号住居址　19号住居址　21号住居址　22号住居址

23号住居址　25号住居址　26号住居址　28号住居址

29号住居址　30号住居址　31号住居址

(2) 掘立柱建物址 …… 34

建物址 4　建物址 5　建物址 6

(3) 方形周溝墓 …… 36

方形周溝墓 3　方形周溝墓 4　方形周溝墓 5　方形周溝墓 6

方形周溝墓 7　方形周溝墓 8

3）中世～近代、及び時期不明遺構 …… 43

(1) 掘立柱建物址 …… 43
建物址 1　建物址 2　建物址 3　建物址 7
建物址 8　建物址 9　建物址 10　建物址 11
建物址 12
(2) 方形竪穴 …… 53
方形竪穴 1　方形竪穴 2　方形竪穴 3　方形竪穴 4
(3) 竪　穴 …… 58
竪穴 1　竪穴 3
(4) 墓　壙 …… 58
墓壙 1　墓壙 2　墓壙 3　墓壙 4
墓壙 5　墓壙 6　墓壙 7　墓壙 8
(5) 土　坑 …… 60
土坑 3　土坑 4　土坑 7　土坑 8
土坑 10　土坑 11　土坑 12　土坑 13
土坑 14　土坑 15
(6) 溝 …… 64
溝 1　溝 2　溝 3　溝 4
溝 5　溝 6　溝 7　溝 9
溝 10　溝 12　溝 13　溝 14
溝 15　溝 16　溝 17　溝 18
溝 19　溝 20　溝 21　溝 22
溝 23　溝 24　溝 25　溝 26
4）そ の 他 …… 77
(1) 柱 穴 群 …… 77
A区　B区　C区　D区
(2) 遺構外出土遺物 …… 77
2．一色遺跡 …… 81
1）弥生時代 …… 81
(1) 住 居 址 …… 81
3号住居址　4号住居址　5号住居址　6号住居址
7号住居址
(2) 方形周溝墓 …… 85
方形周溝墓 1　方形周溝墓 2
2）中世～近代、及び時期不明遺構 …… 87

(1) 住 居 址 …… 87
1号住居址　2号住居址
(2) 方形竪穴 …… 88
(3) 土　　坑 …… 88
土坑 1　土坑 2
(4) 石敷遺構 …… 89
(5) 溝 …… 89
溝 1　溝 2　溝 4　溝 5
溝 6　溝 7　溝 8　溝 9
溝 10　溝 11　溝 12　溝 13
溝 14　溝 15　溝 16　溝 17
溝 18　溝 19　溝 20　溝 21
溝 22　溝 23　溝 24　溝 25
溝 26　溝 27　溝 28
3）そ の 他 …… 105
(1) 柱 穴 群 …… 105
B区　C区　D区　E区
F区
(2) 遺構外出土遺物 …… 105
3．名古熊下遺跡 …… 111
1）中世～近代、及び時期不明遺構 …… 111
(1) 掘立柱建物址 …… 111
建物址 1
(2) 方形竪穴 …… 111
方形竪穴 1　方形竪穴 2　方形竪穴 3　方形竪穴 4
(3) 竪　　穴 …… 112
竪穴 1　竪穴 2　竪穴 3　竪穴 4
竪穴 5　竪穴 6　竪穴 7
(4) 横　　穴 …… 117
横穴 1　横穴 2
(5) 土　　坑 …… 117
土坑 1　土坑 2
(6) 溝 …… 118
溝 1　溝 2　溝 3　溝 4

溝 5　溝 6　溝 7　溝 8
溝 9　溝 10
2）そ の 他 …… 124
(1) 柱 穴 群 …… 124
北平地籍　沼地籍　地蔵面地籍
(2) 沼地籍畦溝群 …… 130
(3) 遺構外出土遺物 …… 130
Ⅳ まとめ …… 133
Ⅴ 引用参考文献 …… 137

挿 図 目 次

挿図 1　調査遺跡及び周辺遺跡位置図 …… 8
挿図 2　調査位置図及び周辺地図 …… 9
挿図 3　ＴＩＺ９号住居址 …… 11
挿図 4　ＴＩＺ20号住居址 …… 12
挿図 5　ＴＩＺ集石炉１ …… 13
挿図 6　ＴＩＺ10号住居址 …… 14
挿図 7　ＴＩＺ11号住居址 …… 16
挿図 8　ＴＩＺ12号住居址 …… 17
挿図 9　ＴＩＺ13号住居址 …… 18
挿図10　ＴＩＺ14号住居址 …… 19
挿図11　ＴＩＺ15号住居址 …… 20
挿図12　ＴＩＺ16号住居址 …… 21
挿図13　ＴＩＺ17号住居址 …… 22
挿図14　ＴＩＺ18号住居址 …… 23
挿図15　ＴＩＺ19号住居址 …… 24
挿図16　ＴＩＺ21号住居址 …… 25
挿図17　ＴＩＺ22号住居址 …… 26
挿図18　ＴＩＺ23号住居址 …… 27
挿図19　ＴＩＺ25号住居址 …… 28
挿図20　ＴＩＺ26号住居址 …… 29

挿図21　ＴＩＺ28号住居址 …… 30
挿図22　ＴＩＺ29号住居址 …… 32
挿図23　ＴＩＺ30号住居址 …… 33
挿図24　ＴＩＺ31号住居址 …… 34
挿図25　ＴＩＺ掘立柱建物址４ …… 35
挿図26　ＴＩＺ掘立柱建物址５ …… 35
挿図27　ＴＩＺ掘立柱建物址６ …… 36
挿図28　ＴＩＺ方形周溝墓３ …… 37
挿図29　ＴＩＺ方形周溝墓４ …… 38
挿図30　ＴＩＺ方形周溝墓６ …… 39
挿図31　ＴＩＺ方形周溝墓５ …… 41
挿図32　ＴＩＺ方形周溝墓７ …… 42
挿図33　ＴＩＺ方形周溝墓８ …… 43
挿図34　ＴＩＺ掘立柱建物址１ …… 44
挿図35　ＴＩＺ掘立柱建物址２ …… 44
挿図36　ＴＩＺ掘立柱建物址３ …… 45
挿図37　ＴＩＺ掘立柱建物址７ …… 47
挿図38　ＴＩＺ掘立柱建物址８ …… 48
挿図39　ＴＩＺ掘立柱建物址９ …… 49
挿図40　ＴＩＺ掘立柱建物址10 …… 50
挿図41　ＴＩＺ掘立柱建物址11 …… 51
挿図42　ＴＩＺ掘立柱建物址12 …… 52
挿図43　ＴＩＺ方形竪穴１ …… 53
挿図44　ＴＩＺ方形竪穴２ …… 55
挿図45　ＴＩＺ方形竪穴３ …… 55
挿図46　ＴＩＺ方形竪穴４ …… 56
挿図47　ＴＩＺ竪穴１・３ …… 57
挿図48　ＴＩＺ墓壙１・２・３・４・５・６・７・８ …… 59
挿図49　ＴＩＺ土坑２・３・４・５・６ …… 62
挿図50　ＴＩＺ土坑７・８・10・11・12・13・14・15 …… 63
挿図51　ＴＩＺ溝１・２・４ …… 65
挿図52　ＴＩＺ溝３ …… 67
挿図53　ＴＩＺ溝５・６・７・９・10 …… 68
挿図54　ＴＩＺ溝12・22 …… 69

挿図55　ＴＩＺ溝20・23 …… 74
挿図56　ＴＩＺ溝21・24・25 …… 76
挿図57　ＴＩＺ　Ｂ区柱穴群 …… 79
挿図58　ＴＩＺ　Ｃ区柱穴群 …… 80
挿図59　ＩＳＫ３号住居址 …… 81
挿図60　ＩＳＫ４号住居址 …… 82
挿図61　ＩＳＫ５号住居址 …… 83
挿図62　ＩＳＫ６号住居址 …… 84
挿図63　ＩＳＫ７号住居址 …… 85
挿図64　ＩＳＫ方形周溝墓１・２ …… 86
挿図65　ＩＳＫ１号住居址 …… 87
挿図66　ＩＳＫ２号住居址 …… 88
挿図67　ＩＳＫ方形竪穴 …… 88
挿図68　ＩＳＫ土坑１・２ …… 89
挿図69　ＩＳＫ石敷遺構 …… 89
挿図70　ＩＳＫ溝１・２・４ …… 91
挿図71　ＩＳＫ溝５・６・８ …… 92
挿図72　ＩＳＫ溝７・10・15・16 …… 93
挿図73　ＩＳＫ溝９・13・14 …… 95
挿図74　ＩＳＫ溝11・12・17・18・19・20・23・24・25 …… 97
挿図75　ＩＳＫ溝21・22 …… 102
挿図76　ＩＳＫ溝26・27・28 …… 103
挿図77　ＩＳＫ　Ｄ区柱穴群 …… 106
挿図78　ＩＳＫ　Ｅ区柱穴群　その１ …… 107
挿図79　ＩＳＫ　Ｅ区柱穴群　その２ …… 108
挿図80　ＩＳＫ　Ｆ区柱穴群 …… 109
挿図81　ＮＧＫ建物址１ …… 111
挿図82　ＮＧＫ方形竪穴１・２・３・４ …… 113
挿図83　ＮＧＫ竪穴１・２・３・４・５・６ …… 115
挿図84　ＮＧＫ竪穴７ …… 116
挿図85　ＮＧＫ横穴１・２ …… 117
挿図86　ＮＧＫ土坑１・２ …… 117
挿図87　ＮＧＫ溝２・３・４ …… 119
挿図88　ＮＧＫ溝５ …… 121

挿図89　ＮＧＫ北平区柱穴群　その１ …… 123
挿図90　ＮＧＫ北平区柱穴群　その２ …… 125
挿図91　ＮＧＫ沼区柱穴群 …… 127
挿図92　ＮＧＫ地蔵面区柱穴群 …… 129
挿図93　ＮＧＫ沼区畦・溝群 …… 131

付　図　目　次

付図１　ＴＩＺ遺構分布図
付図２　ＩＳＫ遺構分布図
付図３　ＮＧＫ遺構分布図　１
付図４　ＮＧＫ遺構分布図　２
付図５　ＮＧＫ遺構分布図　３
付図６　ＴＩＺ溝13・14・15・16・17・18・26
付図７　ＴＩＺ柱穴群　Ａ区
付図８　ＴＩＺ柱穴群　Ｄ区
付図９　ＮＧＫ溝１
付図10　ＮＧＫ溝７・８・９・10

図　版　目　次

第１図　ＴＩＺ９号住居址・20号住居址・土坑５出土遺物 …… 141
第２図　ＴＩＺ土坑５・10号住居址・11号住居址出土遺物 …… 142
第３図　ＴＩＺ11号住居址・12号住居址出土遺物 …… 143
第４図　ＴＩＺ13号住居址出土遺物 …… 144
第５図　ＴＩＺ13号住居址・14号住居址・15号住居址出土遺物 …… 145
第６図　ＴＩＺ15号住居址・16号住居址・17号住居址出土遺物 …… 146
第７図　ＴＩＺ18号住居址・19号住居址・21号住居址出土遺物 …… 147
第８図　ＴＩＺ21号住居址・22号住居址・23号住居址出土遺物 …… 148
第９図　ＴＩＺ25号住居址・26号住居址出土遺物 …… 149

第10図　ＴＩＺ28号住居址出土遺物 …… 150
第11図　ＴＩＺ29号住居址出土遺物 …… 151
第12図　ＴＩＺ29号住居址・30号住居址・31号住居址出土遺物 …… 152
第13図　ＴＩＺ方形周溝墓４・方形周溝墓５・方形周溝墓７出土遺物 …… 153
第14図　ＴＩＺ方形竪穴１出土遺物 …… 154
第15図　ＴＩＺ方形竪穴１出土遺物 …… 155
第16図　ＴＩＺ方形竪穴２・方形竪穴４・竪穴３・土坑13出土遺物 …… 156
第17図　ＴＩＺ溝１・溝12・溝13出土遺物 …… 157
第18図　ＴＩＺ溝13出土遺物 …… 158
第19図　ＴＩＺ溝13・溝14出土遺物 …… 159
第20図　ＴＩＺ溝16出土遺物 …… 160
第21図　ＴＩＺ溝16出土遺物 …… 161
第22図　ＴＩＺ溝16出土遺物 …… 162
第23図　ＴＩＺ溝16・遺構外出土遺物　その１ …… 163
第24図　ＴＩＺ遺構外出土遺物　その２ …… 164
第25図　ＴＩＺ遺構外出土遺物　その３ …… 165
第26図　ＴＩＺ遺構外出土遺物　その４ …… 166
第27図　ＴＩＺ遺構外出土遺物　その５ …… 167
第28図　ＴＩＺ出土古銭 …… 168
第29図　ＩＳＫ３号住居址・４号住居址・５号住居址出土遺物 …… 169
第30図　ＩＳＫ６号住居址・７号住居址・方形周溝墓２出土遺物 …… 170
第31図　ＩＳＫ方形竪穴１・土坑２・溝７・溝８・溝９出土遺物 …… 171
第32図　ＩＳＫ溝９・溝10・溝11・溝26・遺構外出土遺物　その１ …… 172
第33図　ＩＳＫ遺構外出土遺物　その２ …… 173
第34図　ＮＧＫ方形竪穴１・竪穴１・土坑１・溝１・溝５出土遺物 …… 174
第35図　ＮＧＫ遺構外出土遺物　その１ …… 175
第36図　ＮＧＫ遺構外出土遺物　その２ …… 176
第37図　ＮＧＫ遺構外出土遺物　その３ …… 177
第38図　ＮＧＫ遺構外出土遺物　その４ …… 178
第39図　ＮＧＫ遺構外出土遺物　その５ …… 179
第40図　ＮＧＫ遺構外出土遺物　その６ …… 180

写真図版目次

図版1　ＴＩＺ全景 …… 183
図版2　ＴＩＺ９号住居址、20号住居址 …… 184
図版3　ＴＩＺ土坑２、土坑５ …… 185
図版4　ＴＩＺ集石炉 …… 186
図版5　ＴＩＺ集石炉 …… 187
図版6　ＴＩＺ10号住居址 …… 188
図版7　ＴＩＺ11号住居址 …… 189
図版8　ＴＩＺ12号住居址、13号住居址 …… 190
図版9　ＴＩＺ14号住居址 …… 191
図版10　ＴＩＺ15号住居址、16号住居址 …… 192
図版11　ＴＩＺ17号住居址 …… 193
図版12　ＴＩＺ18号住居址、19号住居址 …… 194
図版13　ＴＩＺ21号住居址 …… 195
図版14　ＴＩＺ22号住居址 …… 196
図版15　ＴＩＺ23号住居址 …… 197
図版16　ＴＩＺ25号住居址 …… 198
図版17　ＴＩＺ26号住居址 …… 199
図版18　ＴＩＺ28号住居址 …… 200
図版19　ＴＩＺ29号住居址 …… 201
図版20　ＴＩＺ30号住居址、31号住居址 …… 202
図版21　ＴＩＺ掘立柱建物址４、掘立柱建物址５、掘立柱建物址６ …… 203
図版22　ＴＩＺ方形周溝墓３、方形周溝墓４ …… 204
図版23　ＴＩＺ方形周溝墓５ …… 205
図版24　ＴＩＺ方形周溝墓６ …… 206
図版25　ＴＩＺ方形周溝墓７、方形周溝墓８ …… 207
図版26　ＴＩＺ掘立柱建物址１、掘立柱建物址２、掘立柱建物址３ …… 208
図版27　ＴＩＺ掘立柱建物址７、掘立柱建物址８・土坑15 …… 209
図版28　ＴＩＺ掘立柱建物址９ …… 210
図版29　ＴＩＺ掘立柱建物址10・掘立柱建物址12、掘立柱建物址11 …… 211
図版30　ＴＩＺ方形竪穴１ …… 212
図版31　ＴＩＺ方形竪穴１ …… 213

図版32　ＴＩＺ方形竪穴２、方形竪穴３ …… 214
図版33　ＴＩＺ方形竪穴４、竪穴３ …… 215
図版34　ＴＩＺ墓壙１・墓壙２、墓壙５・墓壙６・墓壙７・墓壙８ …… 216
図版35　ＴＩＺ土坑３、土坑７ …… 217
図版36　ＴＩＺ土坑８、土坑11、土坑13 …… 218
図版37　ＴＩＺ溝１・溝４、溝２ …… 219
図版38　ＴＩＺ溝３、溝６ …… 220
図版39　ＴＩＺ溝９、溝10 …… 221
図版40　ＴＩＺ溝13・溝14・溝15、溝20 …… 222
図版41　ＴＩＺ溝24、溝25 …… 223
図版42　ＴＩＺ　Ｄ区柱穴群 …… 224
図版43　ＩＳＫ全景 …… 225
図版44　ＩＳＫ３号住居址 …… 226
図版45　ＩＳＫ３号住居址 …… 227
図版46　ＩＳＫ４号住居址 …… 228
図版47　ＩＳＫ４号住居址、５号住居址 …… 229
図版48　ＩＳＫ６号住居址、７号住居址 …… 230
図版49　ＩＳＫ方形周溝墓１、方形周溝墓２ …… 231
図版50　ＩＳＫ１号住居址、２号住居址 …… 232
図版51　ＩＳＫ方形竪穴、溝６をはさんで土坑１・土坑２ …… 233
図版52　ＩＳＫ溝１、溝２ …… 234
図版53　ＩＳＫ溝４、溝５ …… 235
図版54　ＩＳＫ溝７・溝15・溝16、溝８ …… 236
図版55　ＩＳＫ溝９ …… 237
図版56　ＩＳＫ溝９・溝14、溝９・溝13 …… 238
図版57　ＩＳＫ溝７・溝10、溝11・溝12 …… 239
図版58　ＩＳＫ溝17・溝18、溝19・溝20 …… 240
図版59　ＩＳＫ溝21・溝22、溝23 …… 241
図版60　ＩＳＫ溝24・溝25、溝27・溝28 …… 242
図版61　ＩＳＫ石敷遺構、Ｅ区柱穴群 …… 243
図版62　ＮＧＫ全景 …… 244
図版63　ＮＧＫ掘立柱建物址１、方形竪穴１ …… 245
図版64　ＮＧＫ方形竪穴２、方形竪穴３ …… 246
図版65　ＮＧＫ方形竪穴４、土坑２ …… 247

図版66　ＮＧＫ竪穴７、横穴１ …… 248
図版67　ＮＧＫ溝１ …… 249
図版68　ＮＧＫ溝２ …… 250
図版69　ＮＧＫ溝３、溝５ …… 251
図版70　ＮＧＫ溝７、溝８・溝９ …… 252
図版71　ＮＧＫ北平区遺物出土状態 …… 253
図版72　ＮＧＫ北平区柱穴群 …… 254
図版73　ＴＩＺ９号住居址・20号住居址・土坑５・土坑６出土遺物 …… 255
図版74　ＴＩＺ10号住居址・11号住居址出土遺物 …… 256
図版75　ＴＩＺ11号住居址・12号住居址出土遺物 …… 257
図版76　ＴＩＺ13号住居址出土遺物 …… 258
図版77　ＴＩＺ14号住居址・15号住居址出土遺物 …… 259
図版78　ＴＩＺ15号住居址・16号住居址出土遺物 …… 260
図版79　ＴＩＺ17号住居址・18号住居址・19号住居址出土遺物 …… 261
図版80　ＴＩＺ21号住居址・22号住居址出土遺物 …… 262
図版81　ＴＩＺ23号住居址・25号住居址出土遺物 …… 263
図版82　ＴＩＺ26号住居址出土遺物 …… 264
図版83　ＴＩＺ28号住居址出土遺物 …… 265
図版84　ＴＩＺ29号住居址出土遺物 …… 266
図版85　ＴＩＺ30号住居址・31号住居址出土遺物 …… 267
図版86　ＴＩＺ方形周溝墓４・方形周溝墓５・方形周溝墓７出土遺物 …… 268
図版87　ＴＩＺ方形竪穴１出土遺物 …… 269
図版88　ＴＩＺ方形竪穴１出土遺物 …… 270
図版89　ＴＩＺ方形竪穴２・方形竪穴４出土遺物 …… 271
図版90　ＴＩＺ竪穴３・墓壙２・土坑13出土遺物 …… 272
図版91　ＴＩＺ溝１・溝２・溝12・溝13出土遺物 …… 273
図版92　ＴＩＺ溝16出土遺物 …… 274
図版93　ＴＩＺ溝16出土遺物 …… 275
図版94　ＴＩＺ遺構外出土遺物 …… 276
図版95　ＴＩＺ遺構外出土遺物 …… 277
図版96　ＩＳＫ３号住居址・４号住居址出土遺物 …… 278
図版97　ＩＳＫ５号住居址・６号住居址・７号住居址出土遺物 …… 279
図版98　ＩＳＫ方形周溝墓２・方形竪穴・土坑２出土遺物 …… 280
図版99　ＩＳＫ溝２・溝７・溝８・溝９・溝10・溝12・溝26出土遺物 …… 281

図版100　ＩＳＫ遺構外出土遺物 …… 282
図版101　ＮＧＫ方形竪穴１・竪穴７・土坑１出土遺物 …… 283
図版102　ＮＧＫ溝１・溝５出土遺物 …… 284
図版103　ＮＧＫ遺構外出土遺物 …… 285
図版104　ＮＧＫ遺構外出土遺物 …… 286
図版105　ＮＧＫ遺構外出土遺物 …… 287
図版106　作業風景　重機による表土剥ぎ …… 288
図版107　作業風景　検出 …… 289
図版108　作業風景　遺構掘下げ …… 290
図版109　作業風景　遺構実測・見学会 …… 291

Ⅰ 経　　過

1．調査に至るまで

中央自動車道西の宮線飯田インターチェンジは、飯田市街地の南西方約3㎞の伊賀良地区にあり、飯田への玄関口となっている。しかし、市街地への国道153号は、その交通量の多さに比して道路幅は狭く、朝夕の交通渋滞は大きな社会問題ともなっており、その解決のため、飯田インターチェンジと下伊那郡上郷町とを結ぶバイパスの建設が、各方面から強く要望されていた。

昭和47月に、国道153号飯田バイパスの計画路線が決まり、これを受け、長野県教育委員会・飯田市教育委員会・建設省中部地方建設局飯田国道工事事務所により、何回かの協議が行なわれた。

その後、建設計画の具体化とともに、用地買収等も進展する中で、昭和59年から60年にかけて、飯田バイパス第1工区にあたる伊賀良地籍にかかわる小垣外・八幡面・殿原の各遺跡について事前の緊急発掘調査を飯田市数育委員会が実施した。

遺跡発掘調査終了後、第1工区の工事が実施され、昭和63年飯田市道である運動公園通りまでは共用が開始されている。

一方、伊賀良地区の埋蔵文化財調査実施に合わせ、その先線にあたる飯田市鼎地籍内の飯田バイパス第2工区に係わる埋蔵文化財の保護協議も順次行なわれた。

具体的には、昭和61年5月21日付で、建設省中部地方建設局飯田国道工事事務所長より長野県教育委員会文化課長宛に、飯田バイパス第2工区内における埋蔵文化財現地立合調査の依頼が飯田市教育委員会経由で提出された。

それに基づき、同年6月9日長野県教育委員会・飯田市教育委員会・飯田国道工事事務所の各担当者による現地協議を行なった。

その結果、路線延長が長く、現状で遺跡個々の具体的な在り方が判断し難い部分もあり、全線にわたっての試掘調査実施不可欠の方向が示され、その結果に基づいて、飯田市教育委員会による本調査実施等の保護協議を行なうことが確認された。

また、その間に飯田バイパス第2工区の沿線にあたる八幡原地籍に、飯田市立病院の移転新築が決定され、その開院に合わせ、バイパスの開通も地域全体の最重要課題となってきた。

その後、用地取得等の進展に合わせ、昭和62年5月29日建設省中部地方建設局長岩本利彦と飯田市長松澤太郎との間で、田井座遺跡から八幡原遺跡までの試掘調査実施に関する受委託の契約がなされた。

その調査結果を受け、昭和62年7月28日県教育委員会・飯田市教育委員会・飯田国道工事事

施、名古熊・八幡原の２遺跡は本発掘調査不要の判断がなされ、同年８月31日付で、長野県教育委員式より調査計画と予算を付した回答がなされた。

引き続き、上記の経過・回答等を踏まえ、９月16日付で飯田国道工事事務所長より、飯田市教育委員会教育長宛に、飯田バイパス第２工区内の田井座遺跡の早期発掘調査実施の依頼がなされた。

これを受け、飯田市教育委員会では具体的な状況等を検討し、11月７日、田井座遺跡の発掘調査に関する計画書と予算書を飯田国道工事事務所長に提出し、12月14日付で中部地方建設局長赤松惟央と飯田市長松澤太郎との間で発掘調査実施に関する委受託の契約が締結された。

なお、それに合わせ、９月30日付で飯田国道工事事務所長より、文化財保護法57条の３第１項の通知が提出され、飯田市教育委員会でも、同法98条の２第１項の通知を行なった。

また、昭和62年度の田井座遺跡の調査後、用地取得の状況に合わせ、昭和63年度・平成元年度にも一連の諸手続きを経て、現地での発掘調査を実施した。

２．調査の経過

１）昭和62年度の調査

先述の諸手続き終了後、昭和63年１月８日から現地での発掘調査に着手した。

本年度の調査地は、飯田バイパス第１工区に接した気賀沢川に面した台地端部で、飯田バイパス第２工区にかかる田井座遺跡の約⅓の範囲である。

調査は、重機により表土剥ぎ作業を実施し、その後人力による遺構検出掘り下げ作業を行なった。しかし、現地には、土建業者により土木工事の廃棄物が相当量投棄されており、調査範囲を２分割して実施せざるを得ない状況があった。

調査の結果に関する詳細は後章に記すが、当初の予想よりは若干少ない遺構等の検出状況であったが、弥生時代後期の住居址、中世の竪穴、溝址等を検出調査し、２月29日に現地での作業を終了した。

２）昭和63年度の調査

飯田市教育委員会では、前年の調査に引き続き年度当初から現地調査実施の方向であり、国道工事事務所からは４月７日付で発掘調査の早期着手の依頼もあったが、用地取得等の状況から、７月に入っての調査着手となった。

その間、５月９日付で飯田国道工事事務所長より文化財保護法57条の３第１項の通知、飯田市教育委員会の98条の２第１項の通知をするとともに、５月13日付で中部地方建設局長赤松惟央と飯田市長松澤太郎との間で、昭和63年度一般国道153号飯田バイパス（第２工区）埋蔵文化財第三次発掘調査の委受託の契約を締結した。

当初の調査実施計画は、前年度調査終了の用地西端から順次東方へ実施予定であったが、

土地の取得状況及び取得後の土地利用状況など複雑な事情もあり、調査地点を小分割して西へ東へと移さざるを得ない結果となった。

実際の調査は、田井座遺跡について3回に分割して実施した。

第1回目の調査は、7月4日に重機による表土剥ぎ作業に着手し、引き続き遺構等の精査作業を行ない、10月11日に完了した。

第2回目は、10月15日に重機を導入し、調査作業は11月22日に終了した。

第3回目は、11月11日に重機導入、11月22日に本年度の当遺跡における作業を終了した。

その間に、縄文時代前期・弥生時代後期の竪穴住居址・方形周溝墓などの遺構や、それらに伴う出土遺物があった。

一色遺跡についても、田井座遺跡と同様の事情があり、4回に分割しての調査となった。重機による表土剥ぎ作業を11月4日、11月8日、11月12日、11月15日のそれぞれ着手し、調査地点を移動して遺構等の精査を行ない、12月26日現地作業を完了した。

検出された遺構・遺物は、あまり多くないが、弥生時代後期の住居址や中世の溝址等に伴う遺物が出土している。

名古熊下遺跡についても前2者の遺跡と同様の状況があり、9個所に分けての調査となった。重機による表土剥ぎ作業を6月13日、7月7日、7月18日、10月13日、昭和64年1月4日、1月5日、平成元年1月10日、2月8日、3月2日にそれぞれ着手した。その後、順次遺構検出等の諸作業を行ない、現地での作業を3月6日に終了した。

調査遺構等は少ないが、中世溝址などがあり、縄文時代から中・近世にかけての遺物が出土した。

その間における調査進行上、用地取得状況をはじめとするいくつかの問題点があり、当初の予定では、飯田バイパス2工区の埋蔵文化財調査は、本年度で全て終了の予定であったが、次年度に継続して実施せざるを得ない状況となり、12月13日付で契約内容の変更を行なった。

3）平成元年度の調査

前年度調査残となった、田井座・一色・名古熊下の各遺跡の調査を実施した。

調査着手前の諸手続きとして、5月17日付で、飯田国道工事事務所長より飯田市教育委員会教育長宛に、発掘調査早期着手の依頼があり、計画書の提出、文化財保護法の通知等を行ない、8月1日付で中部地方建設局長藤井治芳と飯田市長田中秀典との間で平成元年度一般国道153号飯田バイパス（2工区）埋蔵文化財発掘調査業務の委受託の契約を締結した。

本年度の調査は、前年度調査残となった部分についての調査であり、結果として前年度と同様に細切れの調査となった。

田井座遺跡については、8月7日と9月26日に重機による表土剥ぎ作業に着手し、10月23日までに調査を終了したい。

調査地点が、住居敷地下であったこともあり、遺構等の一部が残存状態が不良の部分もあったが、弥生時代の住居址及び竪穴など各種の遺構・遺物を検出することができた。

一色遺跡については、4個所に分割しての調査であり、9月20日に重機による表土剥ぎ作業実施後、10月25日まで精査等行なった。

調査の結果として、弥生時代後期の住居址と、それに伴う出土遺物及び中世の遺物等を検出した。

名古熊下遺跡については、3回に分けての調査であり、9月2日、10月11日、平成2年2月7日にそれぞれ重機による表土剥ぎ作業実施後、精査作業を行ない、平成2年2月27日に終了した。

調査結果として、中世の溝址等の遺構と縄文時代から中世にかけての遺物が出土した。

名古熊下遺跡の調査終了により、飯田バイパス2工区に関連する埋蔵文化財包蔵地の現地調査はすべて完了し、その後平成2年度に整理作業を実施し、記録保存としての本報告書作成にあたった。

3. 調査組織

(1) 調査団

調査担当者　小林　正春

調査員　吉川　豊・佐々木嘉和・馬場　保之・佐合　英治・功力　司
渋谷恵美子

作業員　伊藤　正男・市瀬　長年・今村　春一・大島　利男・岡島　定治
上沼　由彦・木下　和子・木下喜代恵・木下　傳・木下　当一
北村　重実・窪田多久三・小室　幸充・佐々木　啓・坂下やすゑ
沢柳　敞介・沢柳　謙二・清水　巽・所沢　啓二・杉山みのり
関沢　実・高木　義治・高橋収二郎・高橋　寛治・遠山　駒吉
中平　隆雄・中村　亮平・西尾　茂人・萩原　和一・橋爪　宗一
秦野　実・原田　睦夫・東　伸之・平沢今朝光・平沢俊太郎
福沢トシ子・福沢　昌子・藤本　幸吉・細井　茂・細田　七郎
正木実重子・松下　敬子・松下　真幸・松下　直市・溝上　清見
向田　一雄・森　章・矢沢　忠義・横井　近枝・吉川　正実
井原　恵子・池田　幸子・大蔵　祥子・金井　照子・金子　裕子
唐沢古千代・唐沢さかえ・川上みはる・木下　早苗・木下　玲子
榛原　勝子・小池千津子・小平不二子・小林　千枝・渋谷千恵子
田中　恵子・筒井千恵子・丹羽　由美・萩原　弘枝・原沢あゆみ
林　勢紀子・橘本　宣子・平栗　陽子・福沢　育子・福沢　幸子

牧内喜久子・牧内とし子・牧内　八代・松本　恭子・三浦　厚子
南井　規子・宮内真理子・森　　信子・森藤美智子・吉川　悦子
吉川紀美子・吉沢まつ美・若林志満子

(2) 事 務 局

飯田市教育委員会

塩沢　正司	飯田市教育委員会社会教育課長	（昭和62年度）
竹村　隆彦	〃	（昭和63年度～）
池田　明人	飯田市教育委員会社会教育課文化係長	（昭和62年度）
中井　洋一	〃	（昭和63年度～）
小林　正春	飯田市教育委員会社会教育課文化係	
吉川　　豊	〃	
馬場　保之	〃	
功力　　司	〃	（平成元年度）
土屋　敏美	〃	（昭和62～平成元年度）
篠田　　恵	〃	（平成２年度～）

Ⅱ 遺跡の環境

1．自然環境

今回調査実施した、飯田バイパス２工区内に関連する田井座・一色・名古熊下の各遺跡は、飯田市鼎地区に所在する。

鼎地区は、昭和59年12月の飯田市との合併により行政区画上、飯田市鼎となった。合併前の下伊那郡鼎町は周囲を飯田市に囲まれた下伊那郡の飛地であった。鼎地区は、飯田市街地の南西側を流れる飯田松川の対岸に位置し、飯田松川に沿った細長い地区である。西側は伊賀良地区に接し、東南側は松尾地区と下伊那郡上郷町に接する。地形を概観すると、標高500ｍ前後に伊賀良地区を形成する、発達した扇状地形の末端部（扇端）があり、それより以東が鼎地区となる。鼎地区全体としては、微地形による変化はあるが、段丘の方向は、いずれも飯田松川に平行している。

１）田井座遺跡・一色遺跡

田井座遺跡の立地する一色地区は、鼎地区の最上位段丘上にあり、飯田市伊賀良北方地区と接している。中央アルプスの笠松山麓から発達した扇状地が終息し、段丘地形を示す付近で、天竜川の小支流気賀沢川による侵蝕谷が始まり、飯田松川に面した段丘崖との間に舌状台地が形成される。この舌状台地基部付近が一色地区で、その東方は名古熊地区となる。標高は500ｍ前後で形成され始めた舌状台地の巾は約300ｍである。台地の中央部が縦方向（東西）にやや凹み湿地を成している。西側の段丘崖に近い部分約100ｍずつが乾燥した台地で、中央の約100ｍが湿地である。

台地上は、全面に強い粘質のローム層に覆われており、自然の風水害に対しては、安定した地形条件下にあるといえる。

田井座遺跡は、一色地区の西隅に位置し、北西側は山麓から続く大扇状地の続きであり、伊賀良西の原地区に接する。南西側は気賀沢川に面する台地の縁部が端で、東南側は鼎名古熊地区に接する。北東側は湿地を挟んで一色遺跡である。気賀沢川に面する台地端から中央湿地までの間が、やや小高い台地で、中央から北東と南西に緩く傾斜している。

南西向の緩斜面は、水田の造形により削平埋立てがあり、ローム面まで削平が及んでいた。

北東側の緩斜面は、果樹園で深耕はあったが削平はなく、地表から100～50㎝でローム面であった。検出調査した遺構は、ローム面に掘り込まれている。

以上のように、田井座遺跡は台地端に位置し、乾燥した場所であるがすぐ近くに湿地があり、生活・生産に適した場所と言える。

一色遺跡は、台地中央部にある凹地をはさんで、田井座遺跡と対峙するが、北側の松川に面する段丘崖の比高差が大きく、より乾燥する地帯といえる。

田井座遺跡に比較して、生活水の供給条件が悪く、過去における生活条件としては若干劣る姿が考えられる。

2）名古熊下遺跡

名古熊下遺跡は、鼎名古熊地籍に所在する。

名古熊地籍は、鼎一色地籍の東方に広がり、松川からの段丘面とすれば、中位と上位の段丘上にある。上位の段丘は、先述の田井座・一色遺跡から連続するもので、この段丘北端に名古熊神社がある。

名古熊地区における高位の段丘上の地形的な状況は、田井座・一色遺跡の姿に共通する。古代等における生活条件は、一色遺跡の東端部の姿そのものであり、水利条件の悪さなどから、生活適地とは言い難い状況である。ただ、台地端（東端）部においては、下段の段丘崖下には湧水も各所にあり、小規模な集落の存在は可能な地形といえる。

名古熊地区の下段は、松川の段丘面としては、中位の段丘面にあり、標高480～495mであり、上位の段丘面との比高差約10m、下位段丘面との比高差約30mを測る。

段丘面上は、ほぼ平坦ではあるが、東方に向かって緩やかに傾斜し、北端の段丘端部が微高地上になり、南側の段丘崖下が若干凹地状に低くなる。

その南端段丘崖下に名古熊下遺跡は所在する。丁度、その位置周辺は、上位段丘に起因すると考えられる小規模な湧水が所在し、それにより原始からの生活適地であったと判断される。

2．歴史環境

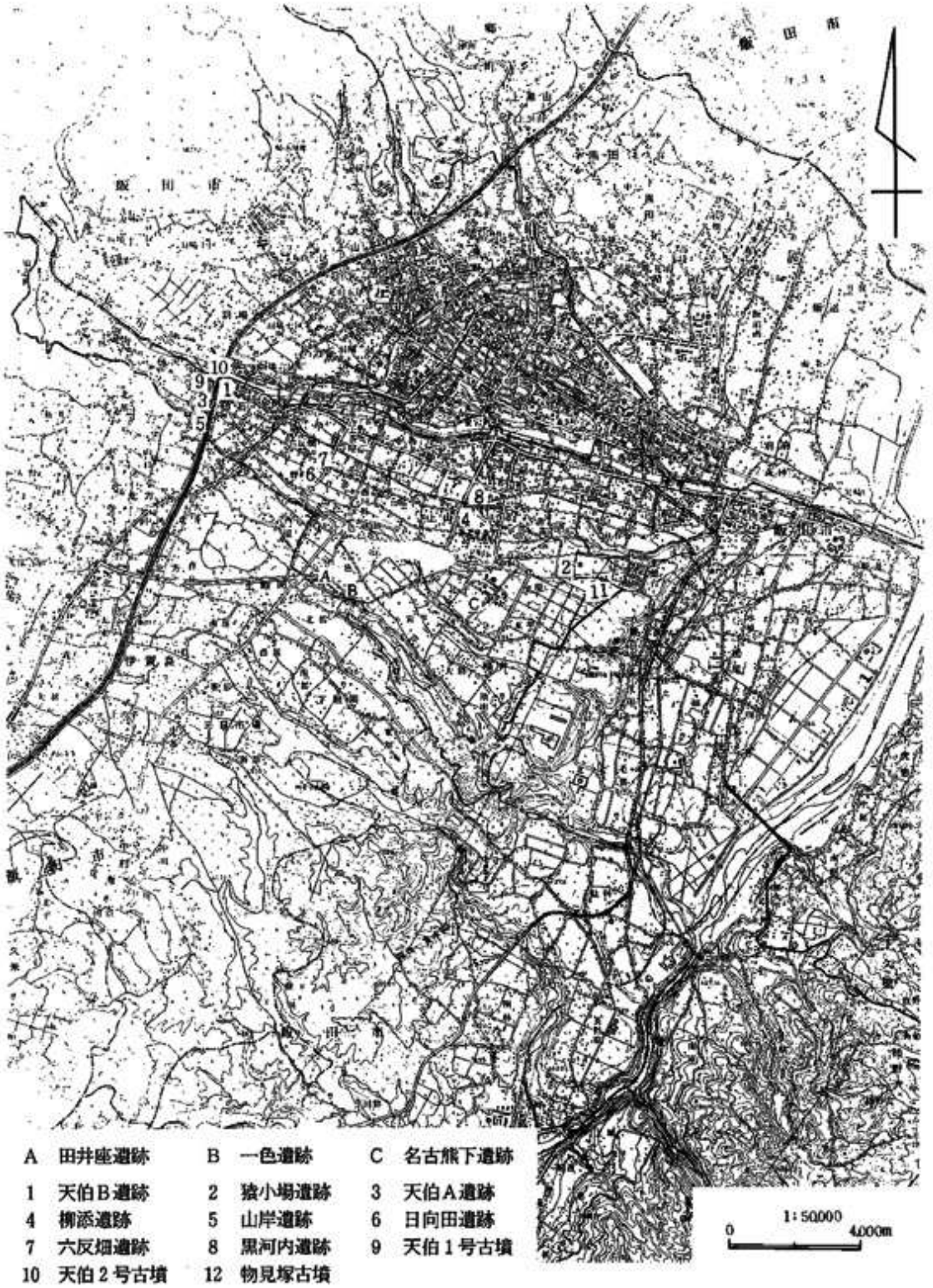
鼎地区における人間の足跡としては、先土器時代に始まる。断片的な資料ではあるが、天伯B遺跡・猿小場遺跡よりナイフ形石器の出土を見ている。

縄文時代に至ると、遺跡の分布状況はより濃密となる。しかし、現在までの調査例による早期・前期における資料は、切石地区の幾つかの遺跡にみられる程度である。

鼎地区において、本格的に人間の定着した姿がみられるのは、縄文時代中期以降といえる。地区内全域の中位・高位段丘上の各所に相当規模の集落址の展開した姿がある。縄文時代中期の代表的な遺跡としては、天伯A遺跡・柳添遺跡などがある。

縄文時代後期、晩期の遺跡での調査例は少なく、猿小場遺跡、山岸遺跡、日向田遺跡などが調査されている。

弥生時代後期になると、集落址の調査例が急増する。後期前半には、猿小場遺跡、山岸遺跡で住居址が調査されている。



挿図1　調査遺跡及び周辺遺跡位置図

挿図2　調査位置図及び周辺地図

後期後半の遺跡では、調査面積の大小、遺跡範囲内での調査区の位置など問題はあるが、調査区内に住居址が密集する大規模な集落址と、住居址が散在する集落址という２つの傾向がみられる。

前者には低位段丘面の山岸遺跡に代表され、後者は高位段丘面から扇状地上に多く、猿小場遺跡があげられる。

古墳時代後期になると、調査事例が増加する。この時期の大規模な集落址としては、低位段丘面上の山岸遺跡、天伯Ｂ遺跡、六反畑遺跡、黒河内遺跡で集落址が調査されている。

古墳時代の遺跡としては、集落址の以外に特徴的なものとして古墳がある。

鼎地区には、現在消滅したものも含め14基の古墳が知られている。詳しく調査された古墳は、後期古墳である天伯１号・２号古墳があり、最近調査した古墳に物見塚古墳がある。物見塚古墳については現在整理中である。

古墳時代後期を含め、奈良・平安時代以降は隣接する伊賀良地区に、東山道の経路と「育良駅」の所在地、荘園を構成する村落の起源などの問題を考える上で、注目すべき点があり、当鼎地区においてもそれらと関連を考える必要がある。

平安時代の集落址は、地区内全域に分布し、猿小場遺跡では25軒と多くの住居址が検出されている。

一般的には遺跡単位での住居址は少なく、散在する分布状態をみせている。

平安時代の住居址が検出された遺跡の多くからは、中世の住居址も検出されている。猿小場遺跡では、16軒の住居址が調査されている。

以上のような地区全体の歴史の流れの中に、今回調査を行なったそれぞれがどのように位置付けられるのかは、本書の内容の中で、さらには今後の諸々の状況等を整理・検討する中で、より具体的にされるものといえる。

Ⅲ 調 査 結 果

1．田井座遺跡

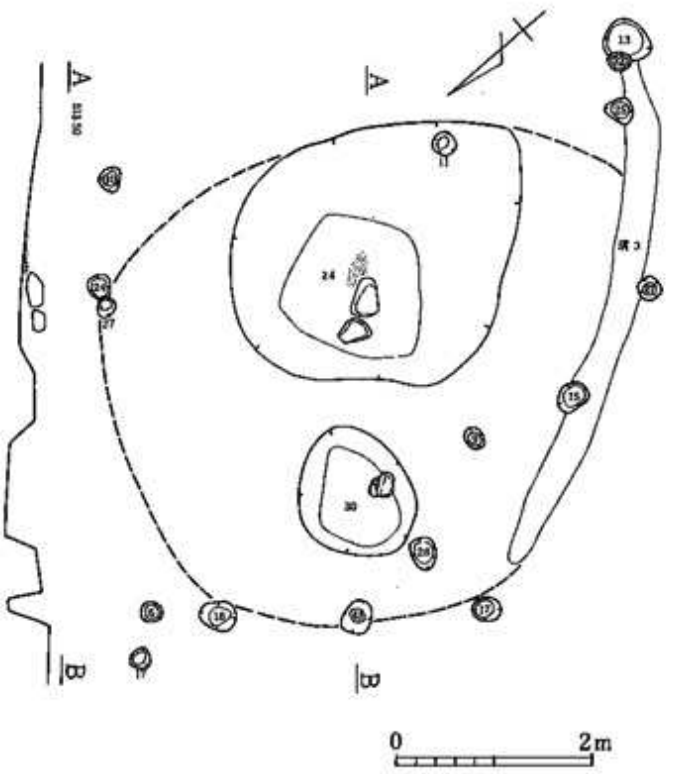
1）縄文時代

(1) 住 居 址

◇ 9号住居址（挿図3・第1図）

A1F50にかかって不整円形の褐色土の落ち込みを検出し、ほぼ中央に石2個があり、横に焼土も検出した。石の下は緩い落ち込みの穴になっており、深さ35cmを測る。褐色土の落ち込みは3.3×3.0mの範囲で緩く窪み検出面から20cm前後である。石の横に検出した焼土も底まで柱状に入っていた。焼土と石から炉と推測し、9号住居址とした。長軸はほぼ北である。周囲を精査したが、柱の痕跡は確認できなかった。

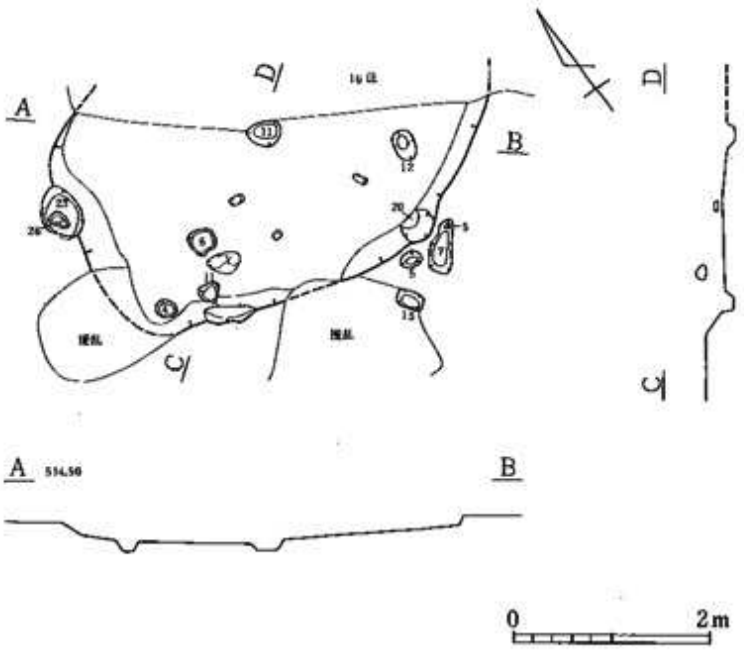
遺物としては、硬砂岩製の打製石斧（第1図1）の基部が出土した。時期は縄文時代である。（佐々木嘉和）



挿図3 ＴＩＺ9号住居址

◇ 20号住居址（挿図４、第２図）

旧道の北側、No.66の北幅杭付近Ｂ２Ｐ43を中心に検出した。直径4.4ｍの円形と見られるが、北側ほぼ半分を16号住居址に切られている。床面はやや軟らかく平坦である。壁は緩やかではあるが、おおむね20cmほど立ち上がっている。床面に６個の穴を確認したが、



挿図４　ＴⅠＺ20号住居址

規模・深さとも揃わず柱穴を特定することは困難である。また炉も確認できなかった。

覆土は褐色土であり、その中には黒曜石・硬砂岩の小剥片（第１図２～14）が混入していたが土器片はほとんどなかった。

(2) 土　坑

◇ 土坑２（挿図49）

９号住居址の北側、Ａ１Ｃ47を中心に検出し完掘した。規模は2.9×1.0ｍの三角形に近い不整形をしている。底は４段に別れ、深さは深い順に100cm、78cm、27cm、14cmである。壁はいずれもほぼ垂直に掘り込まれている。

土器の小破片が出土したが、時代の特定はできなかった。

◇ 土坑５（挿図49、第１・２図）

No.65の南幅杭付近Ｂ２Ｅ55で検出したが用地境に近いため完掘できなかった。調査した範囲は3.2×1.1ｍの半楕円形である。底は、底の中央やや東よりにある直径約40cmで二段になった深さ26cmの穴に向かってごくわずか傾斜している。壁は約10cmで緩やかに掘り込まれている。底には20cm前後の石が４個あり、その周囲に縄文時代後期と見られる深鉢（第１図15）が破片となって散在した。

縄文時代後期のものと見られるが、性格は不明である。

◇ 土坑6（挿図49）

C1F57・58で土器片が集中して確認できたため土坑とした。表土検出時に深く削り過ぎたため範囲は確認できない。そのため、土器の散在した部分と1.0×0.6m、深さ20cmの穴までをその範囲とした。1.8×1.0mの円形と推定できる。

遺物としては、縄文時代中期と見られる深鉢（第2図1～7）及び打製石斧の基部（第2図8）、硬砂岩製の石錘（第2図9）が出土している。

縄文時代中期であるが、詳細時期は不明である。

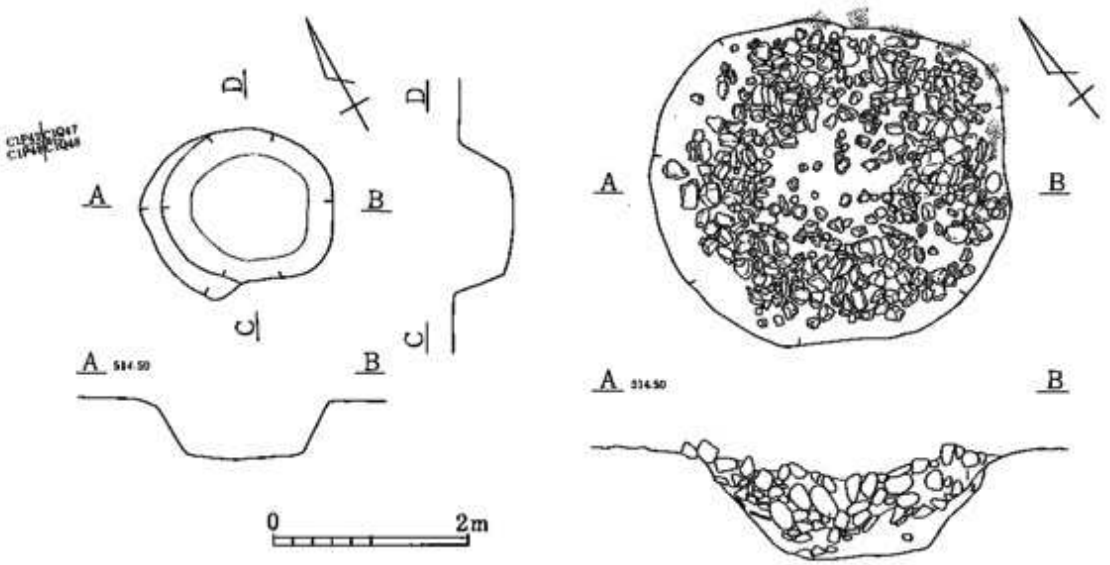
(3) 集 石 炉

◇ 集石炉1（挿図5）

C1A48に検出した集石炉で、1.8×1.6mのややつぶれた円形を呈している。断面形は逆台形を成し、底部径は80cm前後である。深さは60cmあり、上面から底部直上まで焼石が入っていた。断面観察では石の間の土は2層に分かれ上層はこげ茶色を呈し、下層は炭・焼土が混入した黒色土である。石は花崗岩の山石がほとんどである。

土器は皆無で時期は不明である。

（佐々木嘉和）



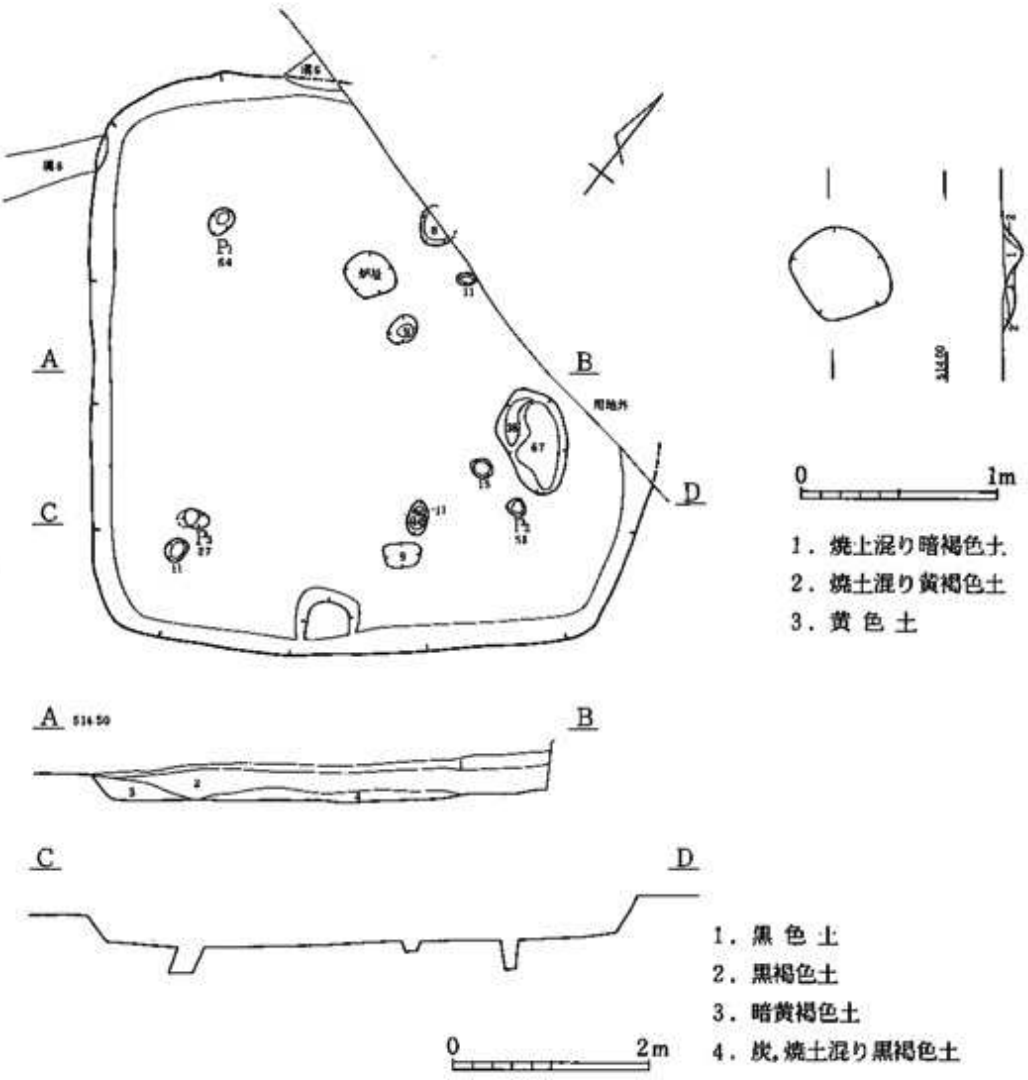
挿図5 ＴＩＺ集石炉1

2）弥生時代

(1) 住 居 址

◇ 10号住居址（挿図６、第２図）

試掘時にグリッドで一部を確認したもので、Ａ２Ｎ44を中心に検出した。一部が用地外に続くため、完掘はできなかった。6.0×5.6mの隅丸方形で、主軸方向はＮ35° Ｗを測る。床面は平坦でしっかりした貼り床が施されている。壁高はほぼ30cmで比較的急角度に掘り込まれており、南東側の壁中央にはやや盛り上がった部分があり、入り口に関係する施設の可能性が在る。主柱穴はＰ₁～Ｐ₃を確認したがあとひとつは用地外と考えられる。Ｐ₂はやや浅く斜めに20cm掘られているが、ほかの２つは64・51cmとしっかり



挿図６　ＴＩＺ10号住居址

掘られている。炉はP₁の東隣に位置している。浅い掘り込みの地床炉である。また、P₂の隣には貯蔵穴と考えられる1.0×0.7mで深さ約60cmの楕円形の穴があった。

覆土は4層からなり上層ほど黒色が強く徐々に褐色をおびていく。覆土中には炭化物がまとまっている部分があり、火災に遭ったことを予想させる。遺物の量としては比較的多いが、図化できるものは脚部・胴部に波状文をもつ甕（第2図10）、口縁付近に3本の波状文をもつ台付きの小型甕（第2図11）のみで、それ以外は甕や壺の胴部や底部の小破片がほとんどである。石器はほとんど出土していないが、砂岩製の砥石（第2図12）がある。

弥生時代後期と考えられる。

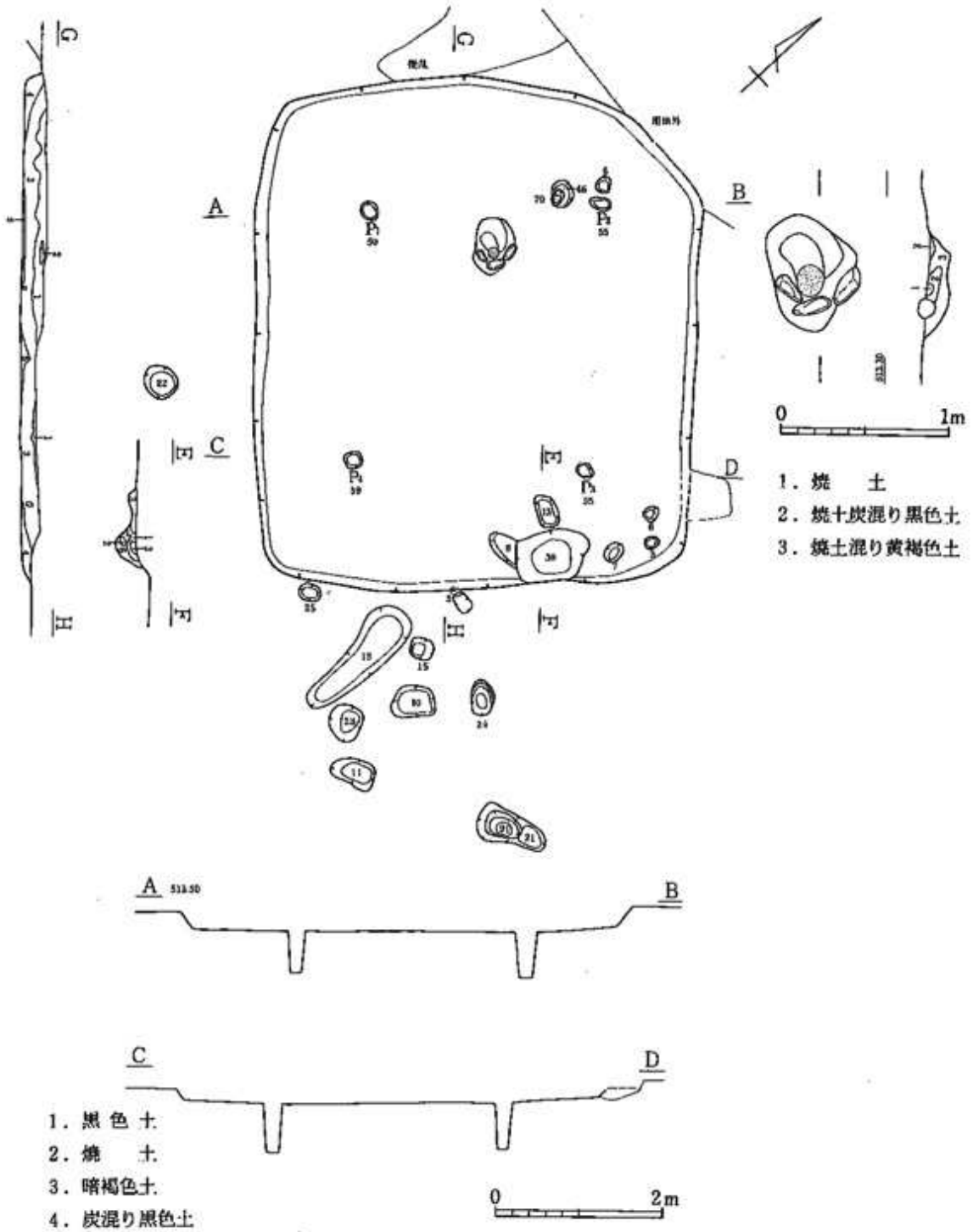
◇ **11号住居址**（挿図7・第2、3図）

A1V44にかかって検出した、隅丸方形の竪穴住居址である。6.0×5.3mの規模をもち、主軸はN51.0° Wを測る。覆土はほぼ3層で上層に黒土が入り、焼けており炭も混入していた。中層は暗褐色土で炭が入り、下層の壁際にも黒土が入り炭が混っていた。床面にも炭が検出され、火事の住居である。壁高は30～20cmでほぼ垂直を成す。床面は壁下1.5～0.7mくらいが堅く良好で、内側はやや軟かで凹凸が著しい。主柱穴は4本で規模は30cm以下と小さく、不正方形であるが、深さは床面から60～50cmを測り深い。炉は北西側主柱穴間に3個の炉縁石をもつ地床炉である。南東壁下に30cmほどの深さを持つ穴を検出し、入り口施設と推測した。

遺物として、土器は無文の甕（第2図13）、鉢（第2図14）、高坏の脚部（第3図1）が出土している。他にも小破片がある。石器は硬砂岩の打製石斧（第2図2）・緑泥岩の打製石斧（第2図3）及び磨製石鏃が4点（第2図4～7）出土している。

時期は弥生時代後期である。

（佐々木嘉和）

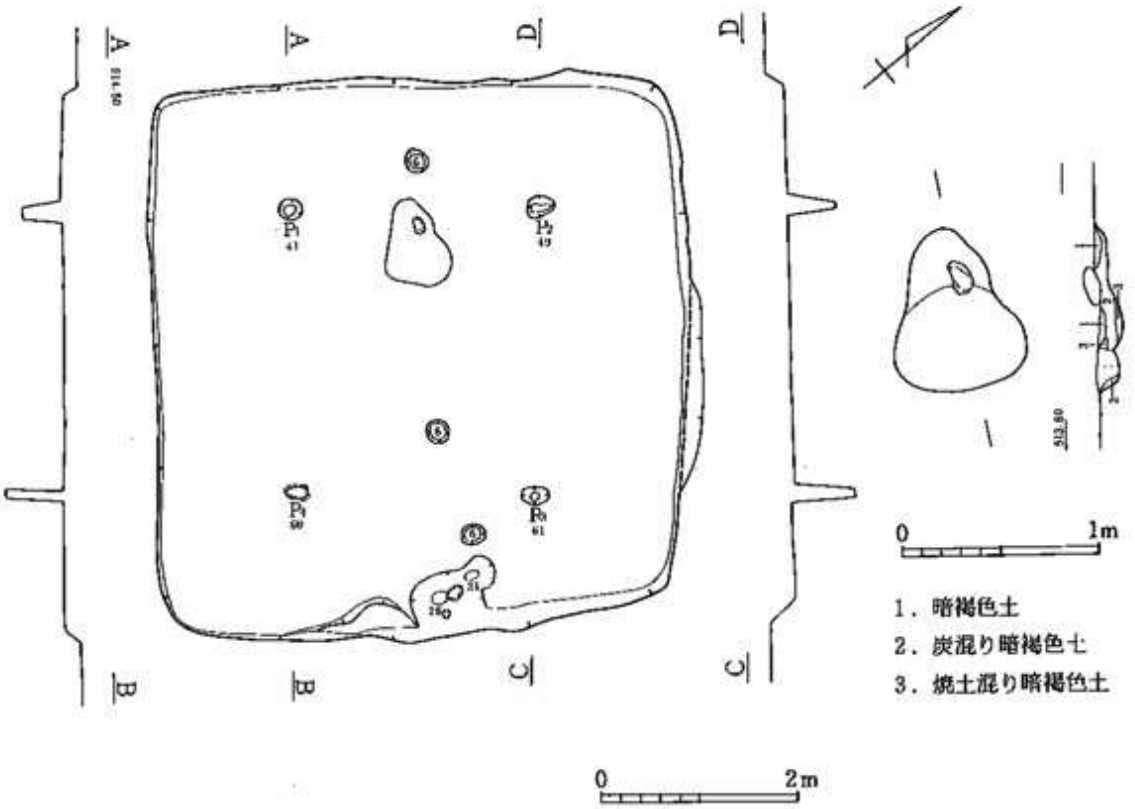


挿図7　ＴＩＺ11号住居址

◇ 12号住居址（挿図8、第3図）

B1 I45を中心に検出し、完掘した。5.8×5.4mの隅丸方形で主軸方向はN57° Wを示している。床面には貼り床が施されており、主柱穴はP₁～P₄で平面形はP₁が円形である以外はいずれも楕円形をしており、深さは60～40cmと多少ばらつきはあるが、しっかり掘り込まれている。とくにP₄は上部より底部が広く袋状になっている。壁高は8～6cmとごく浅いが比較的急角度に掘られている。東壁のほぼ中央に深さ約26cm大きさ70×60cmの円形の穴とその南側に少し盛り上がった部分がある。入り口施設と考えられる。炉はP₁とP₂の中間に位置し、炉縁石を伴う地床炉である。

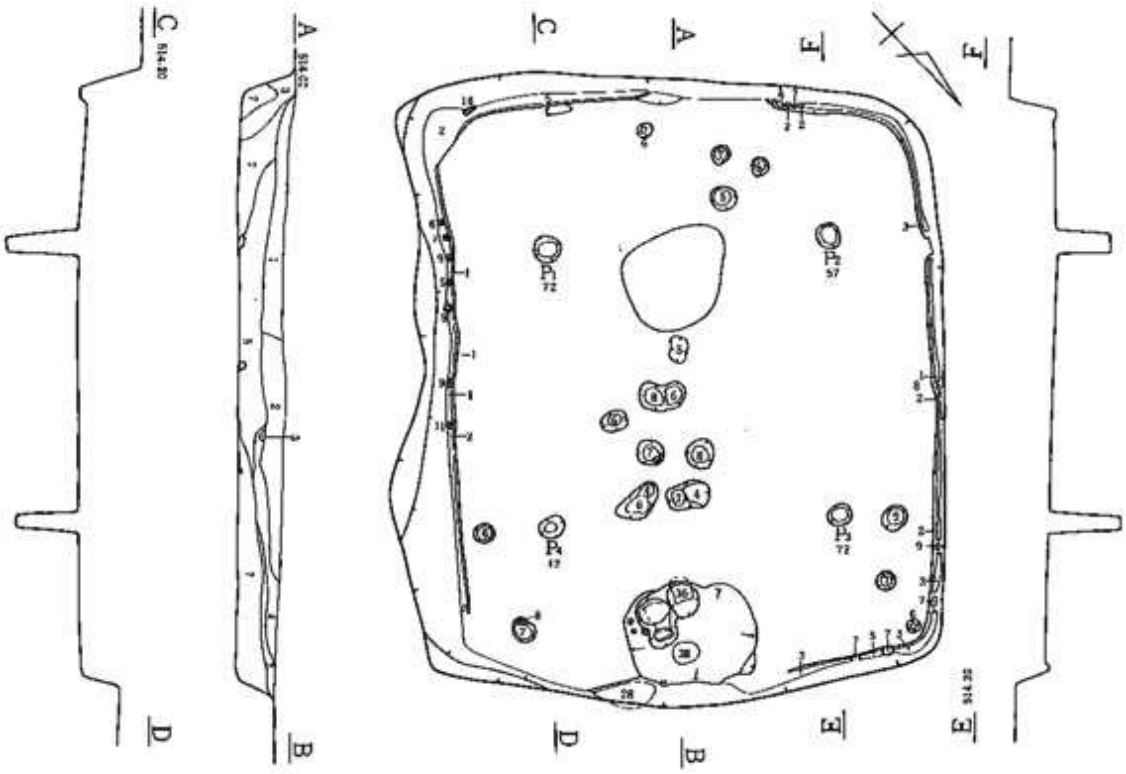
暗褐色の覆土からは壺の口縁・底部や波状文を施した甕の胴部のほか小破片も出土している。（第3図8～11）石器としては緑泥岩製の打製石斧が2点（第3図12・13）出土している。時期は出土した土器から弥生時代後期中島式期でに比定できる。



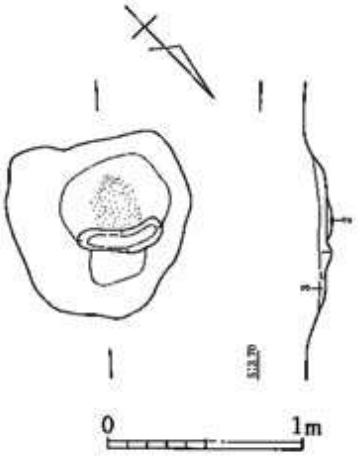
挿図8　T I Z12号住居址

◇ 13号住居址（挿図９、第４・５図）

ＢｉＳ52グリッドを中心に検出した。方周４の南側に位置する。東西6.3×南北5.4mの長方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN40.0° Wを示す。覆土は上層より黒色土・褐色土、黄褐色土、黒褐色土、暗黄褐色土等がレンズ状に堆積しているのが認められた。



1．黒色土
2．褐色土
3．漆黒土
4．黄褐色土
5．黒褐色土
6．暗黄褐色土
7．黄色土



1．炭，焼土混り暗褐色土
2．焼　土
3．灰炭，焼土

挿図９　ＴｉＺ13号住居址

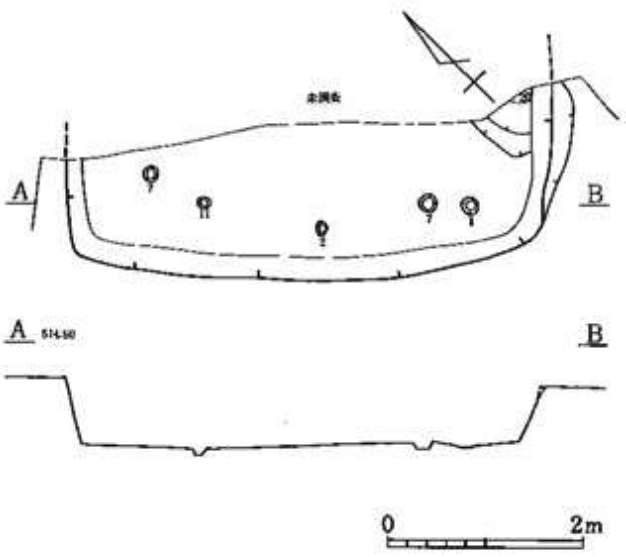
炉址の南東側に炭が検出された。壁高は35～55cmを測り、東・南・北壁は上部まで急な立ち上がりが良好な状態で確認された。西壁側はプランは不明瞭であり、壁上部の検出できない箇所に対応して壁下に崩落したロームがある。壁の下半は安定的に検出できる。周溝は壁直下にほぼ全周して検出され、深さ２～３cmを測る。幅狭で、底部に間隔をおいて小穴が認められる。西壁下付近の床面はきわめて硬い。主柱穴は４本確認され、不整円形を呈し径約20cmを測る。深さは55～75cmとばらつく。南壁中央直下の穴は100×140cm、深さ35cmを測る不整楕円形の掘り込みで、貯蔵穴と考えられる。炉址は北側の柱穴のほぼ中央に設けられ、90×90cmの不整形を呈する。中央南寄りに炉縁石を抜いた跡があり、その形態から炉縁石は２個あったと思われる。抜き取り痕の北側に厚く焼土が発達する。炉縁石を持つ地床炉と推測される。

遺物は比較的多い。甕（第４図１・２）がある、壺は破片がほとんどである。石器としては、緑泥岩製の磨製石斧（第４図３）、硬砂岩製の有肩扁状形石器（第４図４～７）、同じ材質の石匙（第４図８）さらに砂岩の敲打器（第５図１）、編み物石と見られる硬砂岩（第５図２）、安山岩の台石（第５図３）などがある。

出土遺物から本址の所属時期は弥生時代後期に比定される。　（馬場保之）

◇ 14号住居址（挿図10、第５図）

Ｂ２Ｇ47を中心に検出したが、旧道と水路があり北側約半分は調査できなかったため、規模ははっきりしない。調査した範囲は5.2×1.6mの長方形部分のみである。東側の壁直下には、半分しか掘れなかったが縁部分にわずかな盛り上りをもった直径60cmの半円形と思われる深さ約20cmの穴があり、入り口施設と考えたため主軸方向をN35° Wとした。床面は平坦で全面に貼り床が残っている。壁高は60cmを測りほぼ垂直にしっかりと掘り込まれている。床面にいくつかの柱穴はあるが、ごく浅いた主柱穴を特定できなかった。炉は未査部分にあるものと思われる。



挿図10　ＴＩＺ14号住居址

完掘できなかったが遺物の量は比較的多く、ほとんど甕・壺の小破片である。外反する口縁をもつ甕（第５図４・５）は中島式土器

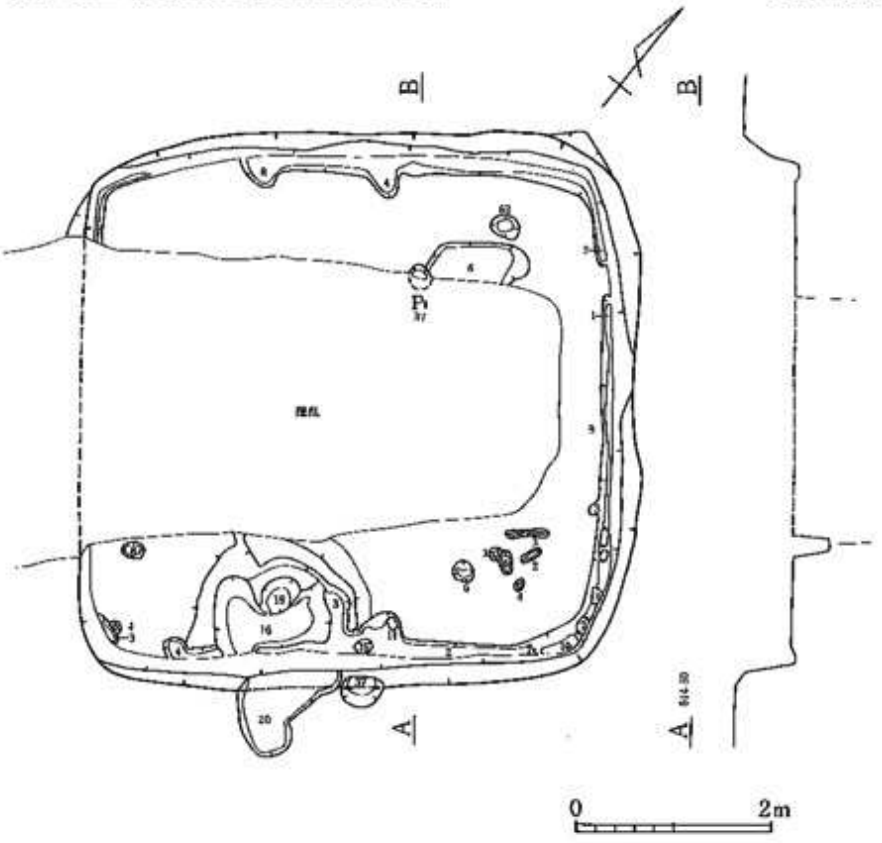
の特徴を顕著に示している。石器としては硬砂岩製の打製石斧の基部（第５図６）及び有肩扇状形石器（第５図７）が出土している。　弥生時代後期中島式期の遺構である。

◇　**15号住居址**（挿図11・第５図）

Ｂ２Ｇ52に掛かって検出したが、バイパス用地にかかった住宅を取り壊した際廃材を焼却した穴に大きく切られている。5.8×5.5mの隅丸方形竪穴住居址であるが、主軸方向は不明である。壁高は50cm前後あり、ほぼ垂直をなしている。破壊からのがれた床面は非常に堅く良好である。主柱穴と確認できた穴はなかったが、撹乱に切られた南の穴は良いと思われ、深さは床面から37cmを測る。壁下にほぼ全周する周溝があったが浅いものである。北西壁下に入口部と推定した穴があるが、床面から15cm余りと浅い。周囲は床面から５cm前後高い土手で囲まれている。

遺物の出土量は多いが、波状文を持つ壺の口縁（第５図８・９）及び波状文と斜走短線を持つ甕（第５図10）以外はほとんどが小破片である。丹彩を施したものもあったが、図化はできなかった。石器としては硬砂岩製の打製石斧（第６図１）、有肩扇状形石器（第６図２）、横刃形石器（第６図３）が出土している。

時期は弥生時代後期座光寺原式期である。　（佐々木嘉和）



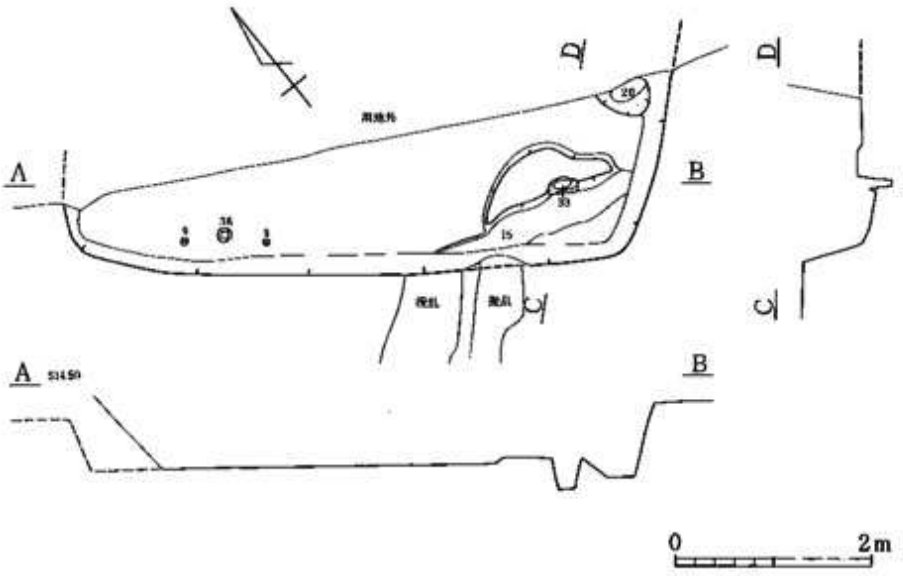
挿図11　ＴＩＺ15号住居址

◇ 16号住居址（挿図12、第６図）

旧道の北側、№66の北幅杭付近Ｂ２Ｑ43を中心に検出した。南側では20号住居址を切るが、北側はほぼ３分の２が用地外にかかるため、全体の規模は不明である。調査した範囲は5.6×2.0ｍの三角の部分のみである。床面は平坦で全面貼り床である。壁高は60～50cm程度でほぼ垂直にしっかりと掘り込まれている。床面にはいくつかの穴が確認できたが、主柱穴を特定することはできなかった。また、南角に約15cmの掘り込みとそれに隣接する格好でわずかな盛り上がりが確認できたが、性格は不明である。炉は用地外と見られる。

覆土中からの遺物の出土は甕・壺の小破片があったが図化できるものはほとんどなかった。（第６図４、５）また、石器は緑泥岩製の打製石斧（第６図６）がある。

弥生時代後期の住居址と考えられる。



挿図12　ＴＩＺ16号住居址

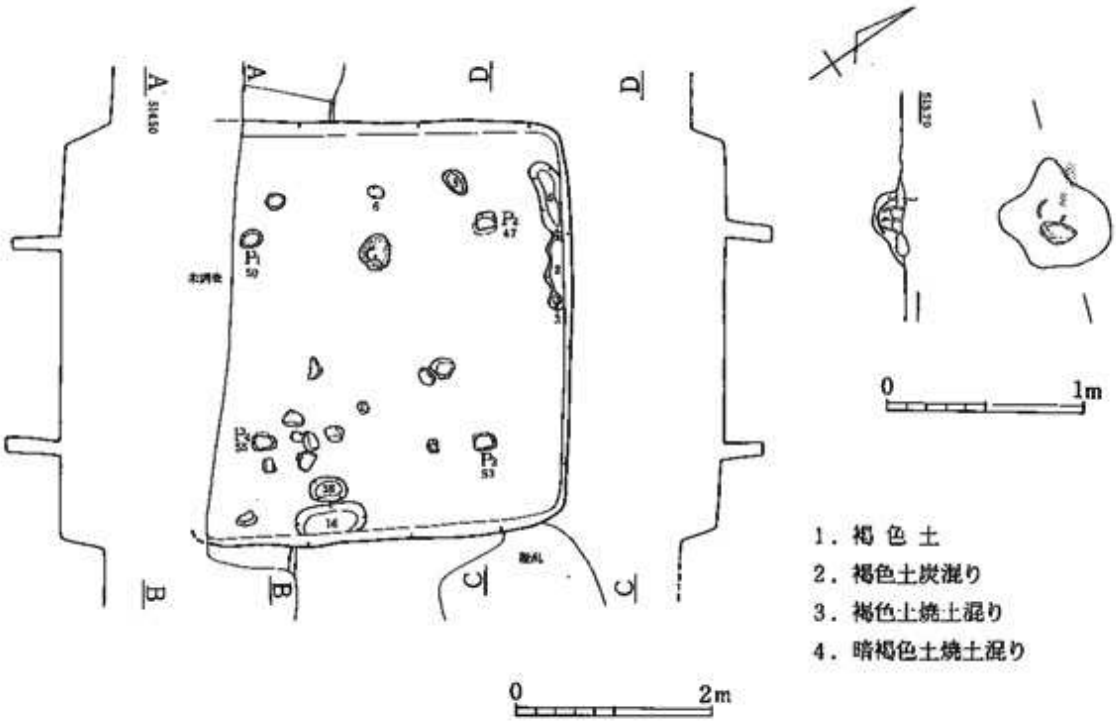
◇ 17号住居址（挿図13第６図）

Ｃ１Ｘ51を中心に検出、南側が水路にかかり完掘はできなかったもののおおむね調査できた。規模は推定ではあるが、4.2×3.8ｍの隅丸方形と判断できる。主軸方向はＮ50° Ｗを示している。床面は非常に堅い貼り床になっておりほぼ平坦である。壁高は約40cmあり、ほぼ垂直に掘り込んである。主柱穴はＰ₁～Ｐ₄であり、いずれも平面形が長方形で深さも約50cmと揃っている。また、Ｐ₁をのぞいては底のほうが広い袋状をしている。北壁直下には幅16cm深さ３cm程度の周溝と見られる掘り込みが1.5ｍみられる。

南側壁中央付近には入り口施設と考えられる70×30cm、深さ20cm及び40×25cm深さ30cmの楕円形の穴がある。炉は、P₁とP₂の中間にあり、炉縁石を伴う土器埋設炉である。覆土中及び床面直上には、20cm程度の石があったが住居址に関係しないと判断した。

遺物としては、表面が荒れているため模様のよくわからない甕（第6図7）、炉に使用されていた甕（第6図8）ほかには壺の小破片が出土したのみで比較的量は少ない。石器も少なく砂岩製の打製石斧（第6図9）のみである。

弥生時代後期に比定される。



挿図13　ＴＩＺ17号住居址

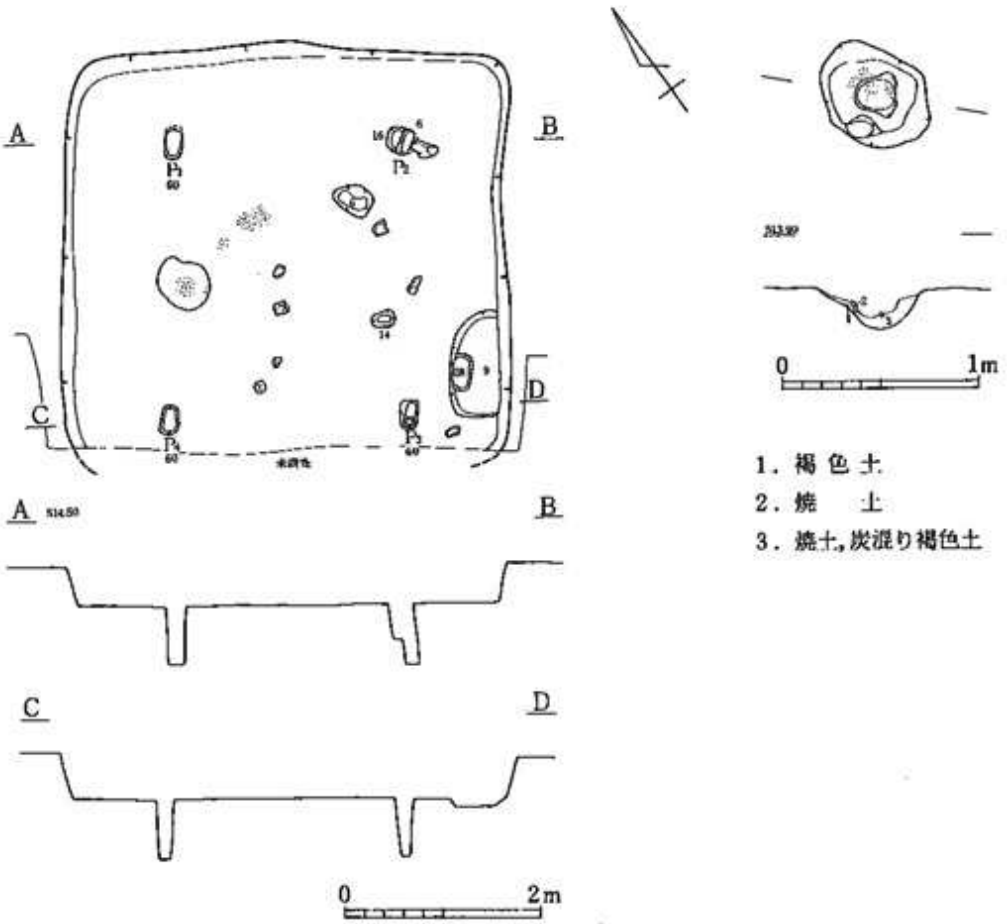
◇　18号住居址（挿図14、第7図）

Ｃ２Ｃ52を中心に検出、17号住居址と同様南側が水路にかかるため完掘はできなかったが、おおむね調査できた。規模は推定であるが4.5×4.3mの隅丸方形と判断できる。主軸方向はN45°Wを示している。床面はほぼ平坦で全面に貼り床がある。主柱穴はP₁～P₄でいずれも平面形が長方形、深さも60cm程度としっかり掘られている。P₁・P₂は袋状になっており、17号住居址に似ている。壁高は約40cmでほぼ垂直に掘り込まれている。南角付近には入り口施設と考えられる、深さ8cm、25cmと二段になった1.0×0.5mの半楕円形の穴がある。炉はP₁とP₄の中間にあるが、本来は土器埋設炉と

思われるが、なんらかの理由で土器を抜き取ってある。炉の周辺には焼土や土器片が散らばっていた。

覆土中や床面から出土した土器は甕や壺の小破片がほとんどであり、図化しなかった。（第７図１）石器としては、硬砂岩製の打製石斧（第７図３・４・５）及び同じく硬砂岩製の横刃型石器（第７図２）がある。

弥生時代後期に比定できる。



挿図14　ＴＩＺ18号住居址

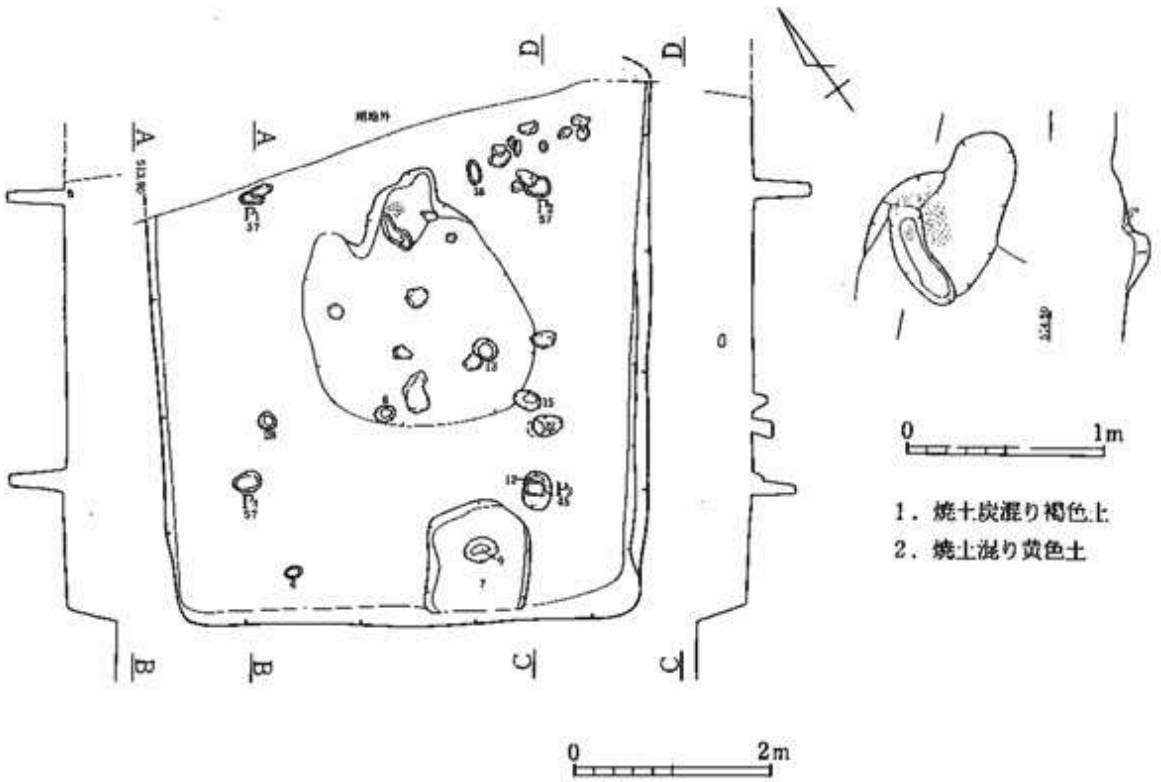
◇ **19号住居址**（挿図15・第７図）

Ｃ１Ｐ44を中心に検出し、用地外にかかった。隅丸長方形の竪穴住居址で規模は推定で5.7×4.8m、主軸方向はN37° Eを測る。壁高は50cm前後あり、深く急な壁面をなす。床面は比較的良好であったが、中央部分の床は、軟らかく緩く窪んでいた。中央以外の床はほぼ平坦である。主柱穴は４本で、いずれも長楕円形をなす。深さは、一番浅い南

の穴が45cmあり、他は、50cm以上ある。北と東の主柱穴には横に石器と石が検出された。炉は、断面調査の時穴が検出でき、土器埋設炉の掘り方と推測した。床面中央から炉にかけて、後世の撹乱が入っているものであろう。南主柱穴の西側が壁にかけてわずか窪み、ほぼ中央に床面から14cmを測る穴があり、入り口施設であろう。

遺物としては、破片ではあるが波状文を施した甕（第7図5）や打製石斧（第7図6・7）が出土している。

時期は遺物からみて、弥生時代後期である。　　（佐々木嘉和）



挿図15　ＴＩＺ19号住居址

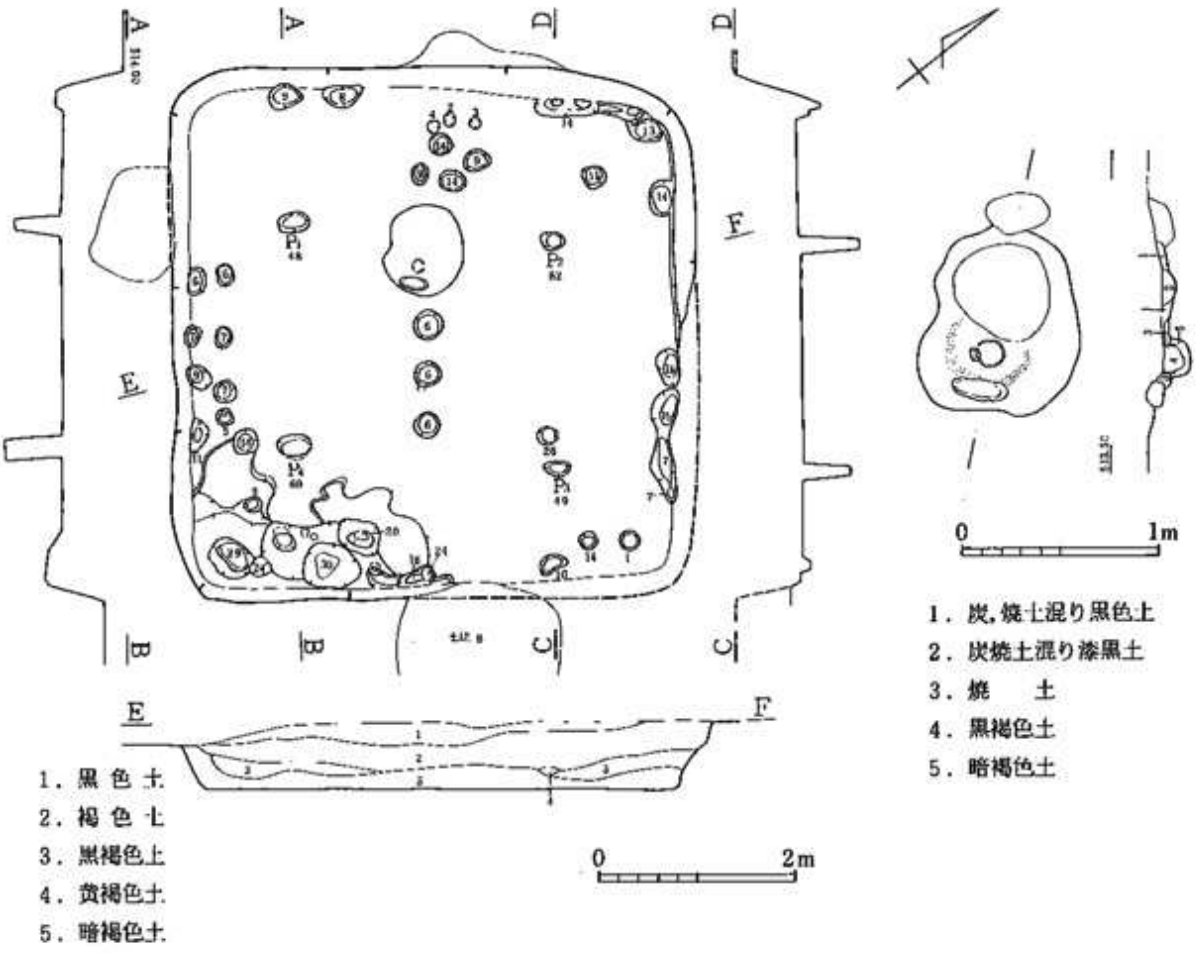
◇　21号住居址（挿図16、第8図）

ＢＩＮ57グリッドを中心に検出した。土坑8に切られる。東西5.4×南北5.1mのほぼ方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN41.7° Wを示す。覆土は上層より黒色土、褐色土、黒褐色土、暗褐色土等がレンズ状に堆積しているのが認められた。壁高は35～65cmを測り、重機により削平された東・南壁の一部を除き、壁は上部まで急な立ち上がりが良好な状態で確認された。周溝は東・南壁直下に痕跡的に検出され、深さ7～14cmを測る。床面は全体的にやや軟らかい。主柱穴は4本確認され、およそ不整楕円形を呈し

長径約30cmを測る。深さは45～60cmとばらつく。南壁西半直下の穴は180×60cm、深さ17cmを測る長方形の掘り込みで、両端はさらに10～20cmくぼむ。壁際より中央部を除く部分には、土手状縁部が痕跡的に検出され、入口施設と判断される。炉址は北側の柱穴のほぼ中央に設けられ、70×90cmの不整形を呈する。中央南端に炉縁石があり、これと接して埋設土器がある。さらにその北側に炭・焼土が多量に混じる掘り方がある。地床炉から土器埋設炉へ作り替えられたと推測される。炉址の南側に礫の集中が検出されたが、性格等は不明である。　遺物としては、波状文と斜走短線を組み合わせた甕（第7図9）、壺の胴部（第7図10）、高坏の坏部（第8図1）等が出土している。石器としては、有肩扇状形石器（第8図2）はあるが出土量は少ない。

出土遺物から本址の所属時期は弥生時代後期に比定される。

（馬場保之）



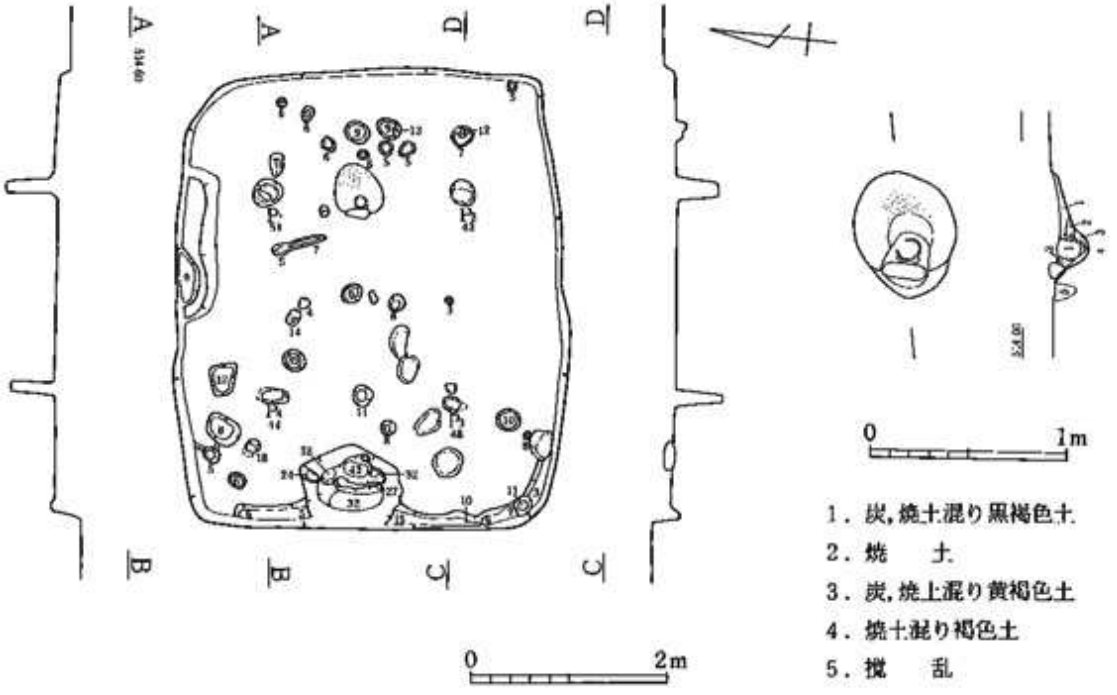
挿図16　ＴＩＺ21号住居址

◇　22号住居址（挿図17・第８図）

Ｂ１Ｈ５４を中心に検出した、隅丸長方形の竪穴住居址である。規模は4.6×4.0mで主軸方向はN6.5° Eを測る。検出面から床面まで20cm弱であり浅い。床面は平坦で堅く良好であったが、小さな穴が多数検出された。地表からも浅いため、攪乱による穴もあろう。主柱穴は４本で掘り方は長方形ないしは長楕円形を呈し、小形で内側に向かって斜めに掘られている。深さは50～43cmを測る。炉は西側主柱穴中央に位置し、内側に炉縁石をもつ土器埋設炉である。掘り方に焼土・炭の混入があり、埋設土器の埋め替えが推測できる。東側壁下には周溝があり、中央には入り口施設とみられる穴がある。穴の底部は凹凸があるが、最深部は床面から40cm余りある。南側壁下には床面からわずか高い部分があった。

遺物は、炉に使用されていた甕（第８図３）の他にはほとんどない。（第８図４・５）石器は有肩扇状形石器（第８図６）がある。

弥生時代後期である。　　（佐々木嘉和）



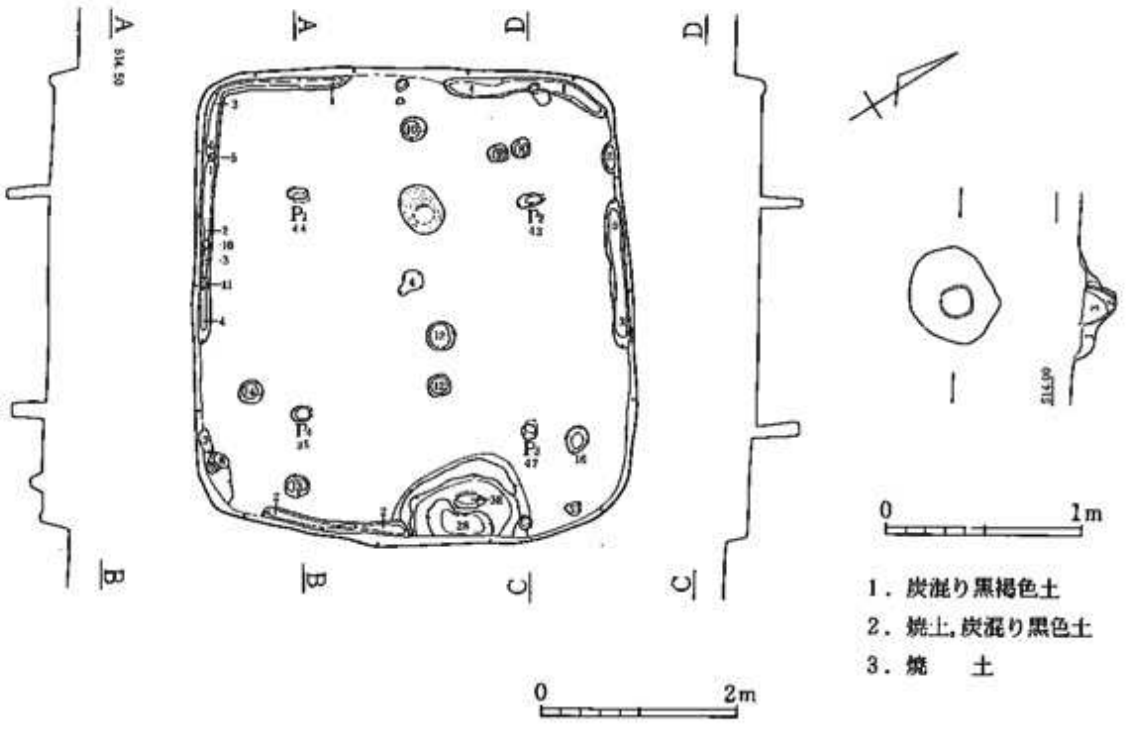
挿図17　ＴＩＺ22号住居址

◇ 23号住居址（挿図18、第８図）

Ｂ１Ｅ50グリッドを中心に検出した。22号住居址の北側に位置する。東西4.4×南北4.8mのほぼ方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN47.7° Wを示す。南東隅はやや丸みを帯びる。覆土は上層より黒褐色土、黒色土、暗黄褐色土等がレンズ状に堆積しているのが認められた。壁高は20～30cmを測り、急な立ち上がりが良好な状態で確認された。周溝は壁直下に不連続に検出され、幅10～15cm、深さ３～５cmを測る。炉から南壁下にかけての中央付近の床面はきわめて硬い状態で、良好に検出された。主柱穴は４本確認され、不整円形ないし不整楕円形を呈し径約20cmを測る。深さは35～45cmとほぼ揃う。南壁中央やや東寄りの穴は50×100cm、深さ23cmを測る不整形の掘り込みで、入口施設と考えられる。炉址は北側の柱穴ほぼ中央に設けられ、40×50cmの楕円形を呈する。炉の中央から北側に厚く焼土が発達する。土器埋設炉である。

遺物は炉に使用されていた甕（第８図７）のほか壺の底部（第８図９）、高坏の坏部（第８図８）等が、また石器としては、打製石斧（第８図10）、有肩扁状形石器（第８図11）があったが、出土量は少ない。

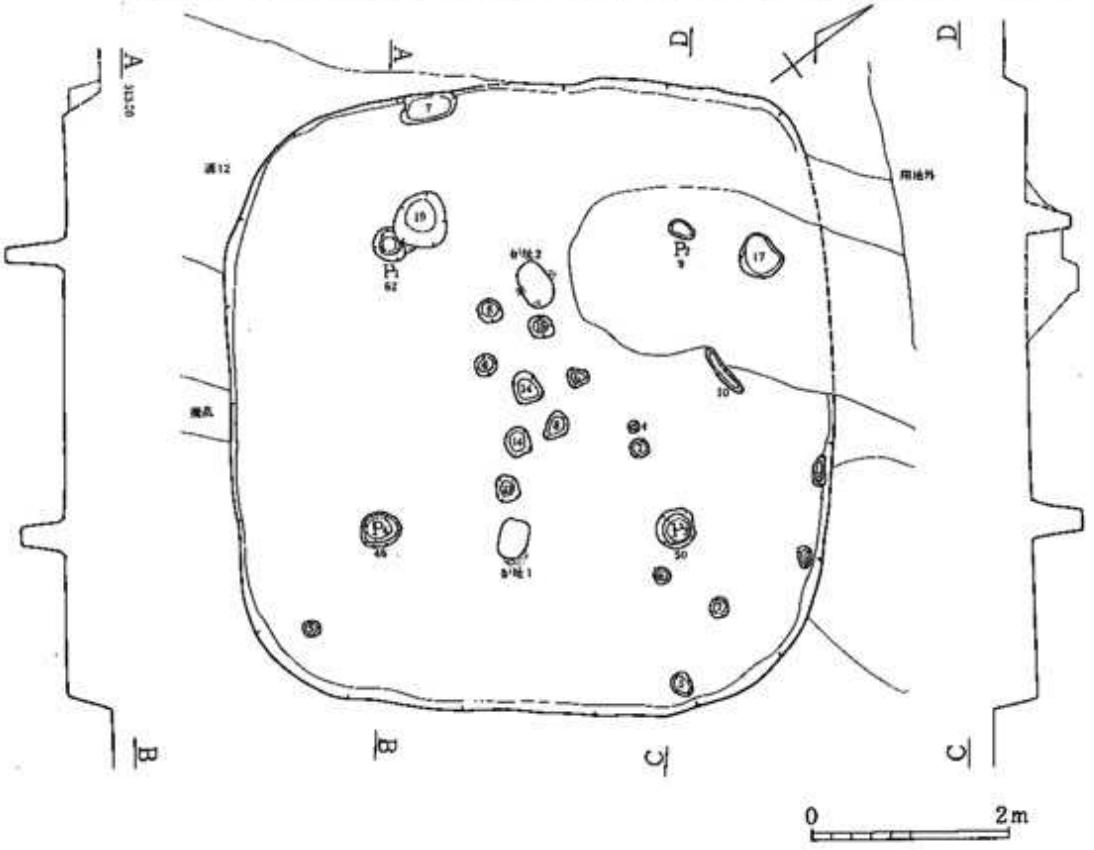
出土遺物から本址の所属時期は弥生時代後期に比定される。　　（馬場保之）

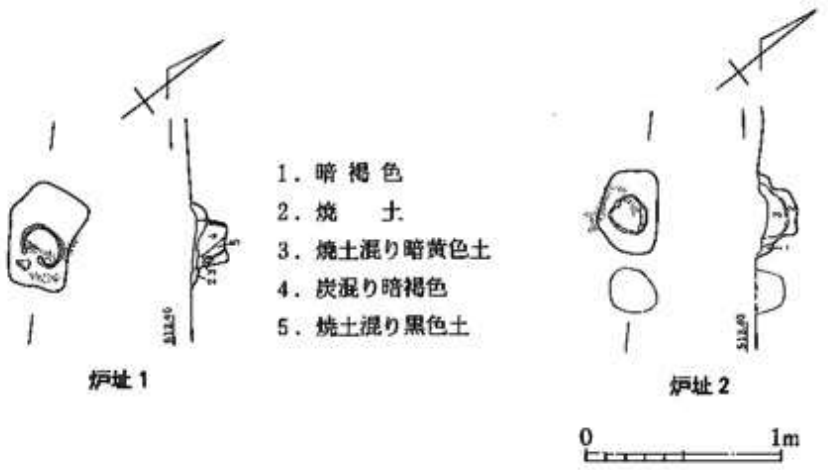


挿図18　ＴＩＺ23号住居址

◇ 25号住居址（挿図19、第９図）

№69北側幅杭の南Ｃ１Ｘ44を中心に検出し、完掘した。しかし、溝12により北側は切られている。6.3×6.0ｍと比較的大型の隅丸方形の住居址で、主軸方向はＮ49° Ｗを示している。床面は全体に貼り床が残りほぼ平坦ではあるが、北の隅は溝12に伴う落ち込





挿図19　Ｔ Ⅰ Ｚ25号住居址

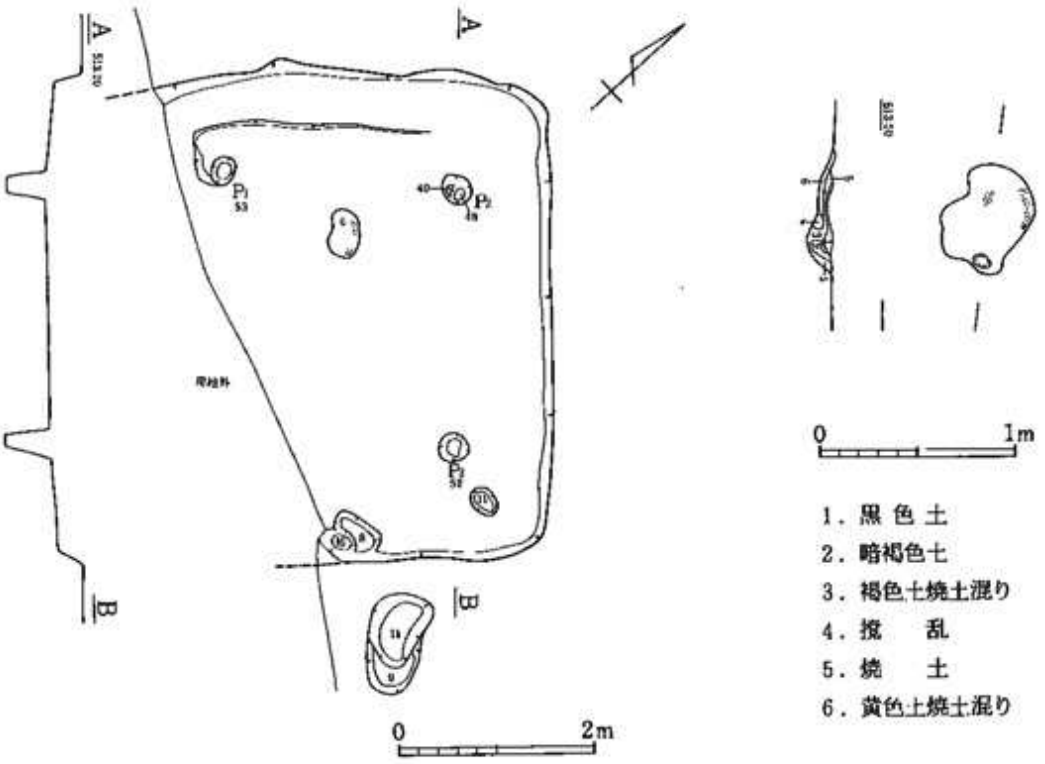
みが床を削り取っている。壁はやはり溝により北から西にかけてはほとんど残っていない。残りの良い東側でも高さは10cmと浅く立ち上がりもさほど急ではない。主柱穴はP₁～P₄である。P₃は溝に削られたため規模・深さとも確実にはつかめないが、ほかの3つはいずれも平面形で径30cm程度の円形、深さも約50cmと揃っており、穴の途中に陵をもつことも似ている。炉は2つ、P₃とP₄の中間及び、P₁とP₂の中間にある。いずれの炉も土器埋設炉である。床面には間仕切りに使用したと思われる浅い穴がある。

遺物としては、炉1で埋設されていた甕の胴部（第9図1）、台付甕の台部分（第9図2）がある。そのほかは図化しなかったが甕の底部や壺の破片も出土している。石器としては砂岩製の打製石斧（第9図4）、緑泥岩製の横刃型石器（第9図3）がある。

弥生時代後期である。

◇ 26号住居址（挿図20、第9図）

C2A55を中心に検出したが、南側半分は用地外へ拡がっていたため、完掘はできなかった。規模は推定で5.0×4.5mの隅丸方形で、主軸方向はN45° Wを示している。床面に残る貼り床は壁際のみで、中央付近は軟らかく多少掘り過ぎかもしれない。壁高は約30cmでおおむね垂直に掘り込まれている。主柱穴はP₁～P₃であり、もうひとつは用



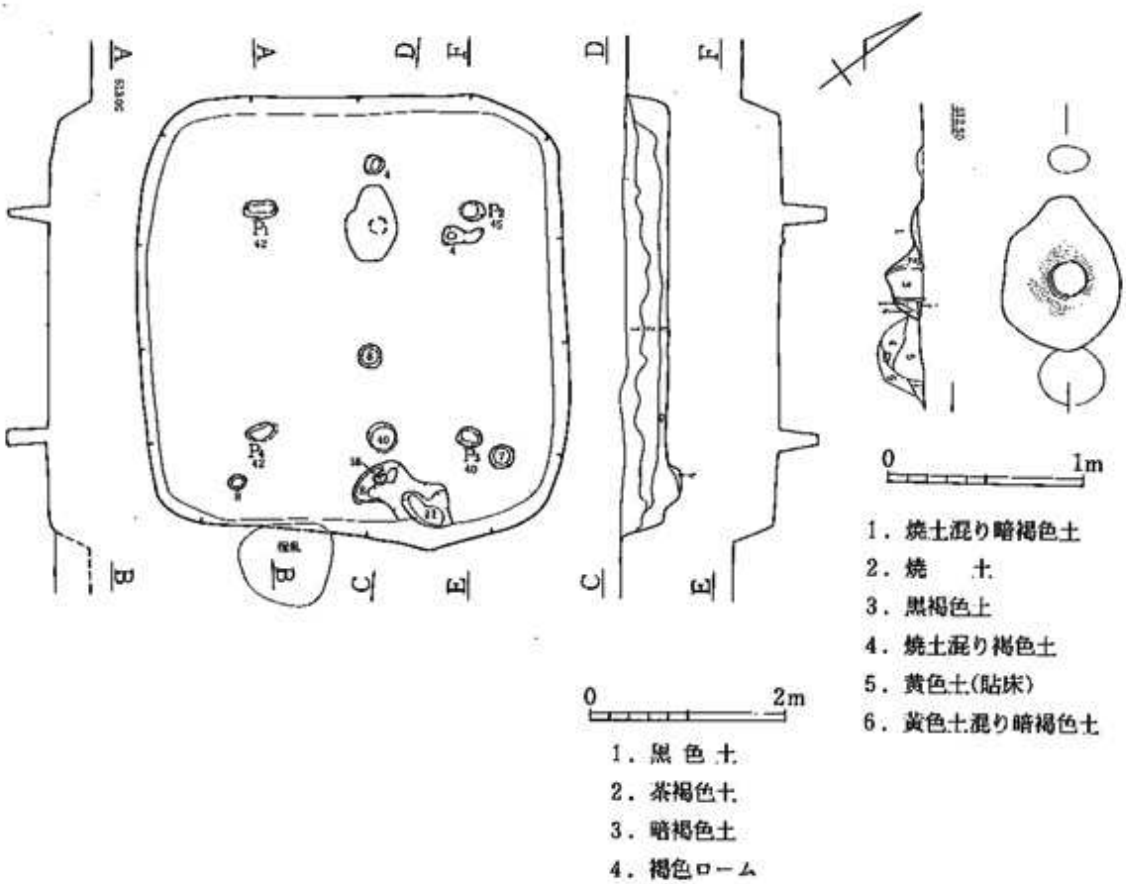
挿図20　ＴＩＺ26号住居址

地外にあると思われる。深さはいずれも約50cmと比較的しっかりしている。調査範囲の南端に二段に掘られた穴が在る。深いほうでも16cmと浅いが入り口施設と考えられる。炉はP1とP2の中間に位置する地床炉である。　遺物は、甕（第9図5・6・8）、台付甕の台（第9図7）、壺を中心に比較的多量に出土してはいるが、破片が多いため図化しなかった。石器としては硬砂岩製の打製石斧（第9図9・10）及び、同じ材質の有肩扁状形石器（第9図11・12）も出土した。

弥生時代後期である。

◇ 28号住居址（挿図21、第10図）

C2D48を中心に検出した。撹乱により、南角付近の壁がごく一部切られるのみで完掘できた。規模は4.5×4.3mの隅丸方形で、主軸方向はN53° Wを示している。床全面にしっかりした貼り床が残っていた。壁高は約40cmを測り、ほぼ垂直にしっかりと掘り込まれている。主柱穴はP1～P4であり、深さはいずれも40cm程度、平面形は円形のP2を除けば長方形を呈する。南東壁の中央付近に入り口施設と見られる深さ15cmの掘



挿図21　ＴＩＺ28号住居址

り込みがある。その他には間仕切りに関係すると見られる柱穴が6つある。炉はP_1とP_2の中間に位置する土器埋設炉である。

遺物としては炉に使用されていた甕（第10図1）、壺の口縁（第10図2）・底部（第10図4）、高坏の脚部（第10図3）のほか、甕・壺等の破片があった。石器としては、硬砂岩製の有肩扇状形石器（第10図5・6・7）、緑泥岩製で未製品の石包丁（第10図8）がある。また、混入品と考えられるが砂岩製の石錘（第10図9）がある。

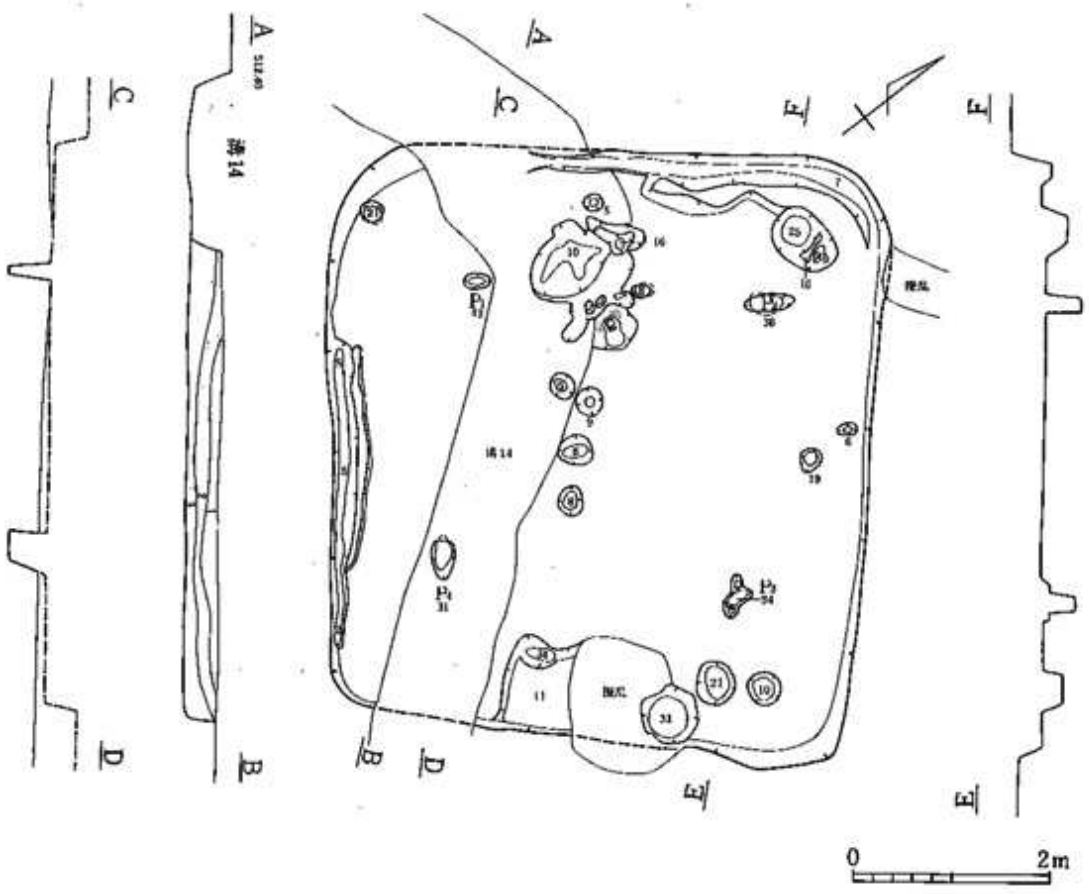
弥生時代後期である。

◇ 29号住居址（挿図22、第11・12図）

センター杭No.71の北側C2N48を中心に検出した。西側約半分を溝14に、また東側の壁を攪乱に切られている。規模は6.0×5.4mと比較的大形の隅丸方形の竪穴住居址である。主軸はN45° Wと18号及び26号住居址と同方向を示している。床面はしっかりとした貼り床があるが、西角から南角にかけての部分では溝によりその貼り床は削られている。壁高は南西が約40cmあるが、その他は25cm程度であるが、いずれの壁もほぼ垂直に掘ってある。周溝は南西壁直下に長さ3.1m幅20cm深さ5cm、また北西から北角にかけての壁直下に長さ4.2m幅30cm深さ9cmのものがあり、双方の内側に少し盛り上がる部分を伴っている。主柱穴はP_1～P_4でありいずれも平面形は楕円であり、深さはP_1が40cmとやや深い以外、P_2～P_4はおおむね30cm程度である。入り口施設と考えられる穴が南東壁中央にあるが攪乱により切られているため全容はつかめなかった。炉は土器埋設炉でP_1とP_2の中間で、すぐ横を溝が通っている。

遺物の量としては比較的多いが図化できたのは、炉に使用されていた甕（第12図1）、約一個体分の壺（第11図）、壺の口縁（第12図2）、周溝から出土した甕（第12図3）のほか高坏の脚部（第12図4）のみである。また、石器は硬砂岩製とみられる打製石斧の基部（第12図5）と泥岩製の敲打器（第12図6）のみであった。

弥生時代後期である。



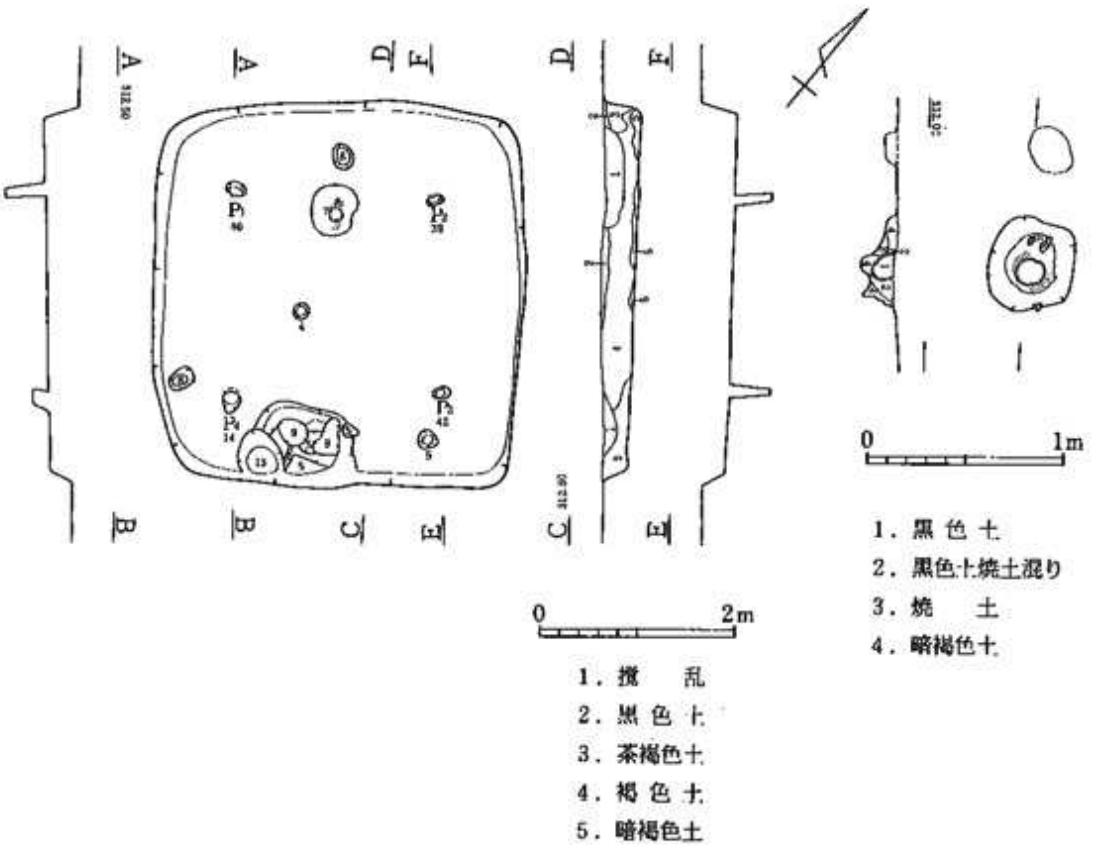
挿図22　ＴＩＺ29号住居址

◇ 30号住居址（挿図23、第12図）

C 2 J46を中心に検出し、完掘した。3.9×3.7mと比較的小形の隅丸方形で、主軸方向はN40° Wを示している。床面はほぼ平坦で、全面にわたり貼り床が施されている。壁高は北東のみが25cm、それ以外は約30cmを測り、ほぼ垂直に掘り込んである。主柱穴はP₁～P₄であり、掘り方は比較的小さい。深さはP₄が14cmと他のものに比べると浅いがP₁～P₃は約40cmとしっかり掘ってある。北東壁の中央付近には入り口施設と思われる、底が凹凸している掘り込みがある。主柱穴以外に間仕切りに用いたと考えられる4つの穴が床面にある。炉はP₁とP₂の中間に位置する、炉縁石を伴った土器埋設炉である。

遺物は比較的少なく、炉に使用した甕（第12図7）以外には壺の底部や甕の底部の破片があるのみである。石器としては、硬砂岩製の有肩扁状形石器（第12図8）及び破片ではあるが砂岩製の紡錘車（第12図9）がある。また、砥石として使用しているが、石鏃等の材料の可能性のあるチャート系の礫もあった。

弥生時代後期の遺構である。

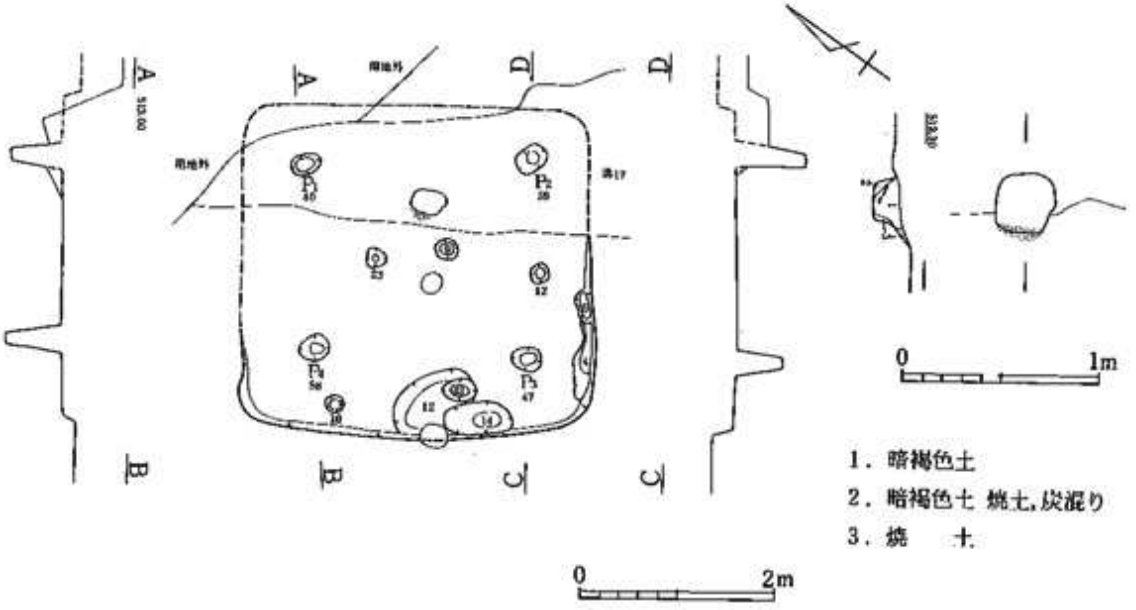


挿図23　ＴＩＺ30号住居址

◇ 31号住居址（挿図24、第12図）

No.71幅杭の西側、C2O45で検出したが、北東側約半分を溝17により切られている。規模は推定で3.5×3.3mの隅丸方形で、主軸方向はN51° Eを示す。床に貼り床が残っているが、やや北東へ傾斜している。壁は南西側のみが残るだけで、その高さも16cmと浅いがほぼ垂直に掘ってある。周溝は南東の壁直下に長さ1.0m幅20cm深さ5cmで残っているだけである。主柱穴はP₁～P₄である。P₁とP₂は溝の中にあったが、掘り込みがしっかりしていたため、その底部を確認することができた。P₁・P₂は、それぞれ58・47cmの深さを測る。炉も溝により削られているがP₁とP₂の中間に位置する地床炉である。

遺物はほとんど出土していないが、破片（第12図10）からみるに弥生時代後期の遺構と判断できる。



挿図24 T I Z31号住居址

(2) 建 物 址

◇ 建物址4（挿図25）

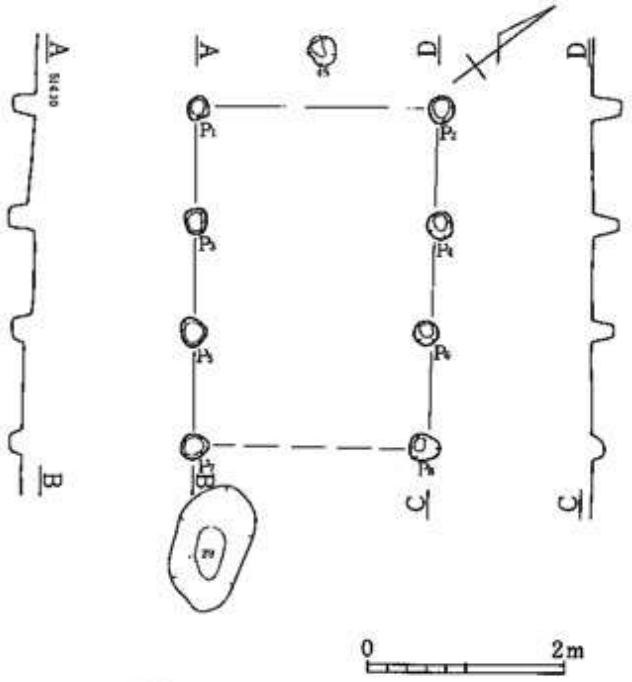
B1W47を中心に検出した。3×1間で3.5×2.3mの長方形をした掘立柱建物址である。柱間は桁行で1.1m、方向はN52° Wを示している。柱穴の掘り方の平面形はいずれも円形で直径も26～22cmとほぼ揃っている。深さはP₂・P₄が30cm、P₇が12cm以外は20cm前後である。

遺物の出土がないため時期決定はできないが、覆土が漆黒に近い黒色をしており、こ

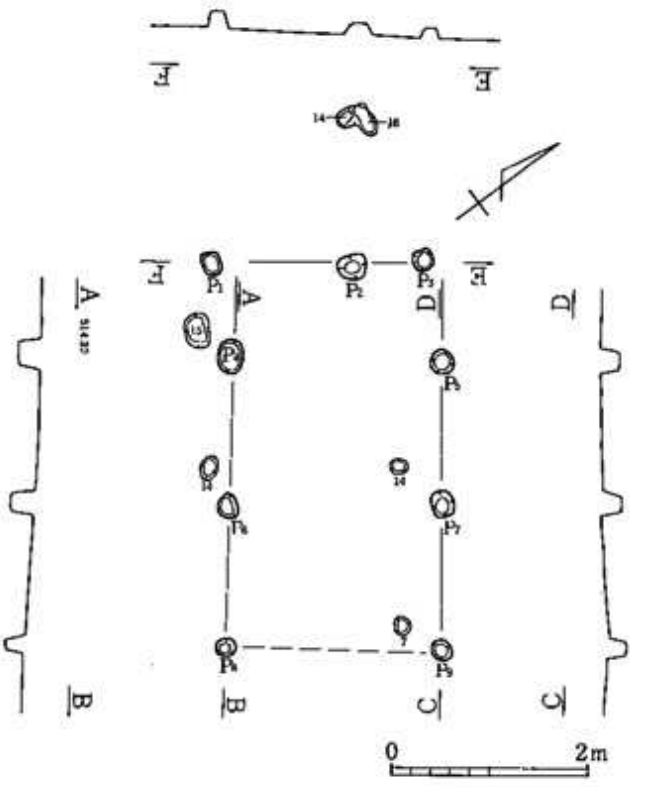
れは弥生時代の住居址のものと同じであるため弥生時代のものと考えたい。また、この程度の柱で支えられる建物として小規模な高床式の倉庫が考えられるが、決め手がない。柱列の西側外に斜めに45cm掘り込まれた穴を入り口施設と考えることもできる。

◇ 建物址5（挿図26）

B1V49を中心に建物址4の西側に並列する格好で検出した。3×1間とみられるが北西の一列が少し西にずれている。規模も建物址とほぼ同じで3.9×2.2mの長方形をした掘立柱建物址である。柱間は桁行で1.4m程度、方向はN50° Wを示している。柱穴の掘り方は一定でなく平面形でも方形のもの（P1・2・3・7）、円形のもの（P5・8・9）、楕円形のもの（P4・6）がある。深さはP2・P3が11cm、と浅い以外は20cm前後である。やはりこの建物にも柱列の西側外に斜めに16cm掘り込まれた穴がある。



挿図25　T I Z掘立柱建物址4

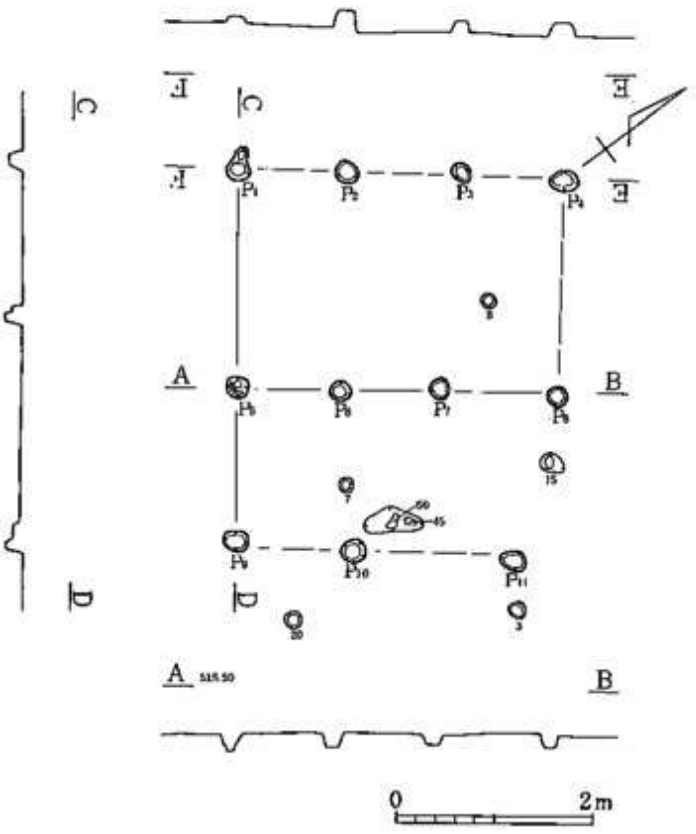


挿図26　T I Z掘立柱建物址5

遺物の出土はない。建物の性格としては、建物址４と同様高床式の倉庫の可能性が強い。

◇ 建物址６（挿図27）

Ｂ１Ｙ49を中心に建物址５の南側に並列する格好で検出した。基本形は３×１間、3.3×2.2mの長方形をした掘立柱建物址とみられ、柱間は桁行で1.1m、方向はＮ38°Ｅを示しているが、南東側にもう一列柱穴列があるため、全体では３×２間、3.8×3.2となる。



挿図27　ＴＩＺ掘立柱建物址６

柱穴の平面形はＰ₁が瓢箪形、またＰ４・Ｐ９・Ｐ11が22×20cm前後の楕円形以外は円形をしている。深さもＰ₃が23cm、Ｐ₂が12cm、Ｐ₇が11cm以外は、いずれも15cm前後でおおむね揃っている。Ｐ₈の底には柱痕らしき落ち込みがあった。建物の付近に数個の穴があるが、直接建物に関係するかは不明である。

遺物の出土はないが、覆土の状態から建物址４及び５と同時期であり、用途も高床式の倉庫と考えられる。

(3) 方形周溝墓

◇ 方形周溝墓３（挿図28）

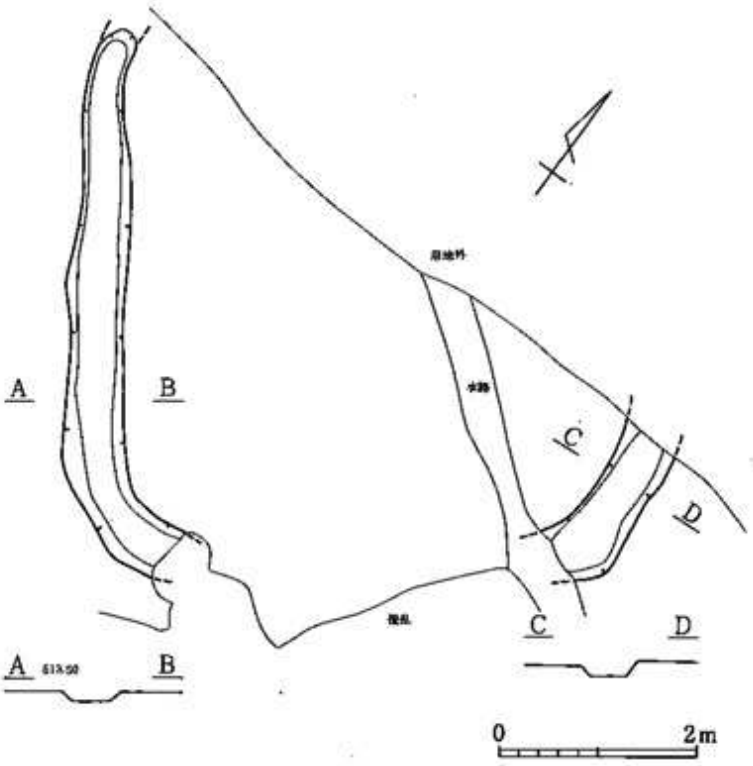
No.60の北幅杭付近Ａ２Ｅ44で黒色の覆土を持つ溝を検出した。途中を攪乱等に切られているが、ほぼ半円形に用地外へ延びたため、方形周溝墓とした。しかし、規模・主軸方向ともに不明である。調査できたのは西側の周溝で長さ5.4m幅60～40cm深さ12cmと東側で長さ1.8m幅60cm深さ15cmの部分のみである。主体部は確認できなかった。

遺物の出土はなかった。

◇ 方形周溝墓４

（挿図29、第13図）

Ｂ１Ｌ47で溝を確認、付近の検出をおこない方形周溝墓であることがわかった。規模は10.5×9.8ｍで主軸方向はＮ52° Ｗを示している。



挿図28　ＴＩＺ方形周溝墓３

周溝は南角で土坑４に、また東側の土橋部分は攪乱によって切られている。西角付近は表土剥ぎの時に削り過ぎたためか確認できなかった。溝は北側が比較的しっかり残っており、幅1.0ｍ深さ43～22cmあり、断面形がＵの字をしているのに対し、西側は幅60cm深さ15cm・南側でも幅70cm深さ15cmと浅い。土橋となる東側では、溝の底及び壁に小さな穴がある。

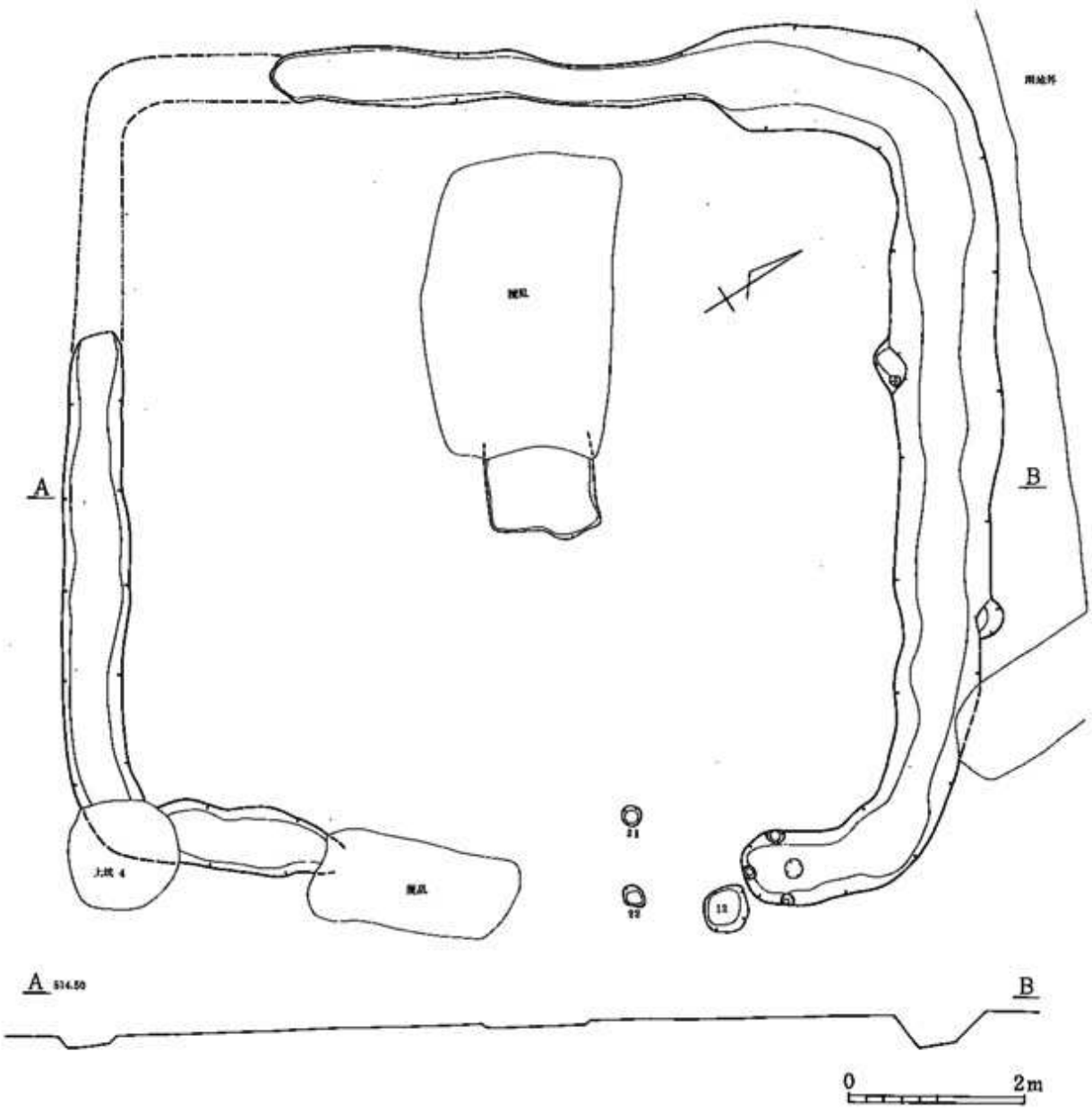
主体部は溝に囲まれた部分のほぼ中央にあったが約半分が攪乱により切られているため、長さはわからないが、幅は1.2ｍある。壁はほとんど残っていないのは耕土がごく浅かったため、表土剥ぎの時に削られたものと考えられる。

周溝からは、高坏の脚部（第13図１）・甕の底部とみられる小破片が出土しているが図化しなかった。石器としては、硬砂岩製の有肩扁状形石器（第13図２）がある。

◇ 方形周溝墓５（挿図31、第13図）

センター杭№66は旧道際の水路にあるが、その南側で溝を検出した。また旧道北側でも攪乱に切られてはいるが溝を確認した。形態からみて方形周溝墓と判断した。前述したとおり旧道と水路があり、完掘できないが、規模は12.0×12.0ｍの隅丸方形と推定できる。主体部が確認できなかったため主軸方向も不明である。水路の南側では幅約2.0ｍ深さ40cm前後と比較的緩やかに立ち上がる周溝を10ｍほど調査した。また、旧道の北側で確認した周溝は、全体のほぼ半分程度とみられる。20号住居址の壁を切るが、攪乱により壁を切られる部分がある。溝の幅は1.6～1.2ｍ深さも65～26cm南側に比べしっかりしており、断面形もＵ字形である。

周溝からの遺物は、甕等の小破片のみであり図化しなかった。石器は硬砂岩製の有肩

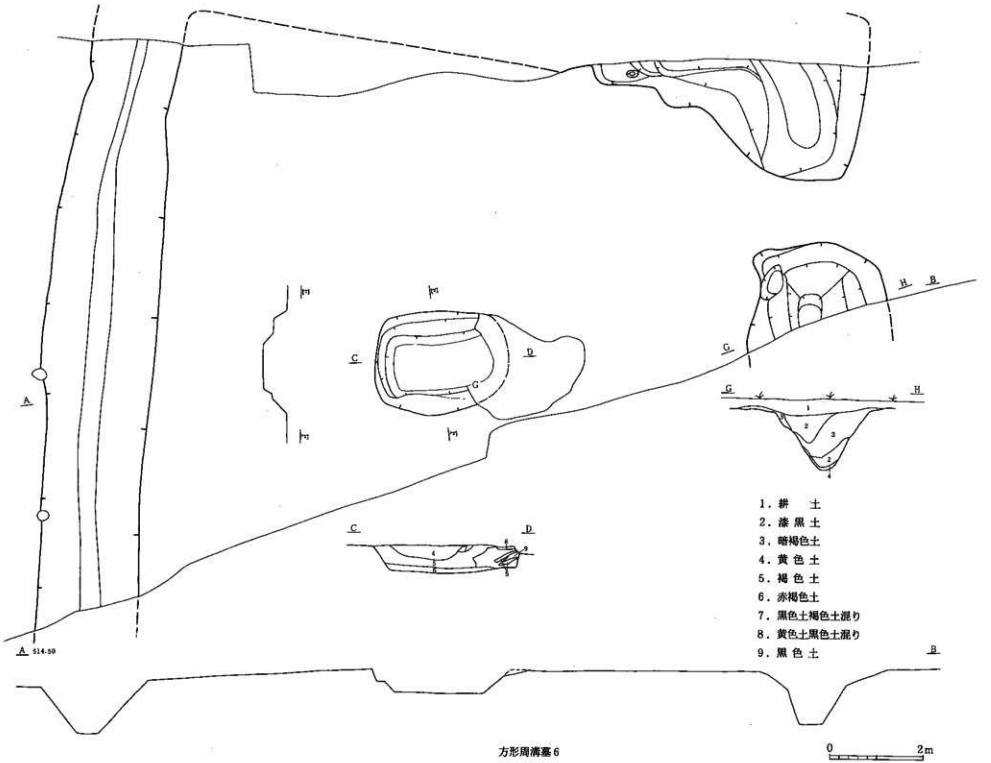


挿図29　ＴＩＺ方形周溝墓４

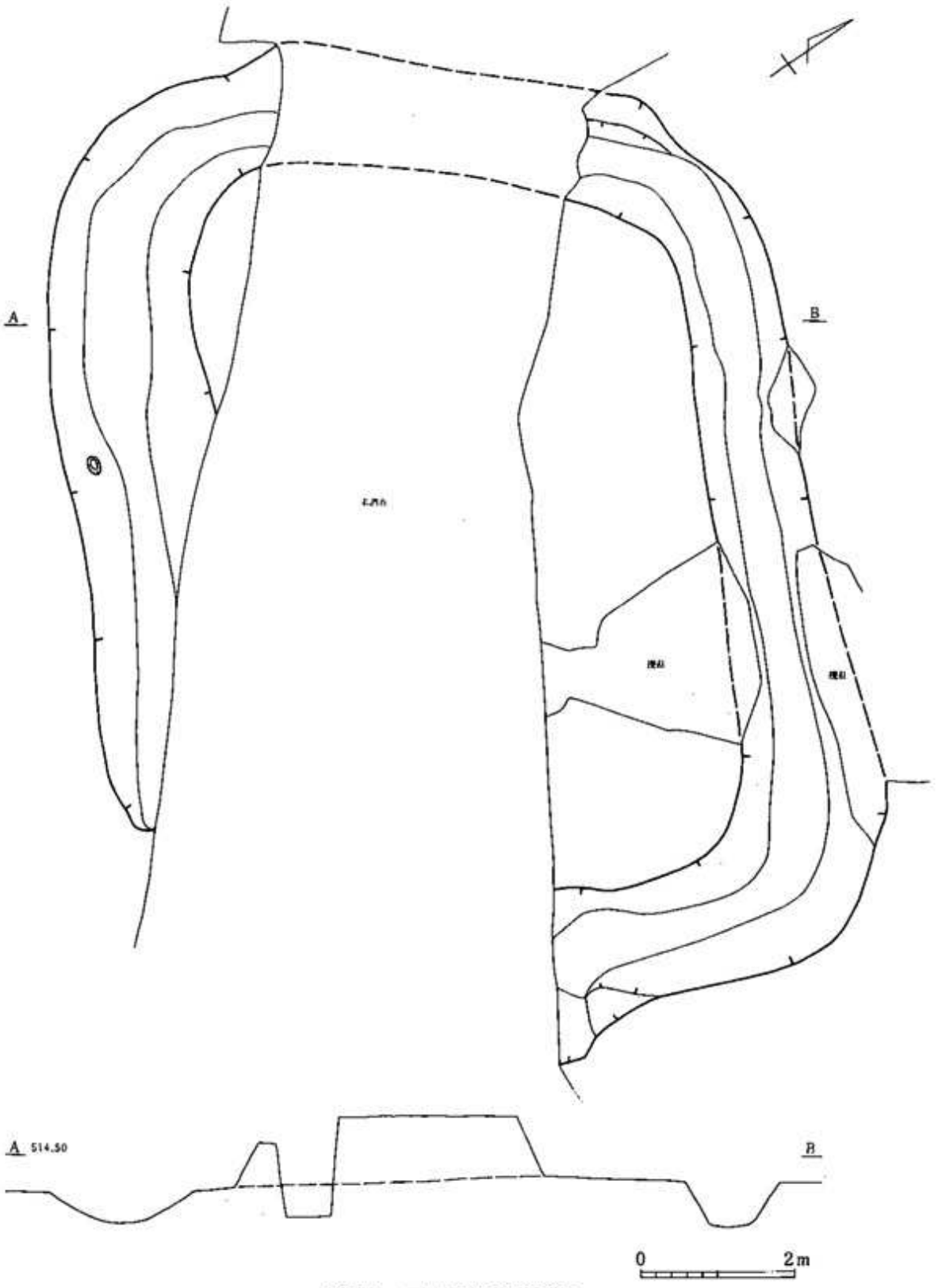
扇状形石器（第13図４・５・７）と破損しているが緑色片岩製の打製石斧（第13図４）、硬砂岩製の打製石斧（第13図６）がある。

◇　方形周溝墓６（挿図30）

Ｂ２Ｐ54付近で漆黒の覆土を持つ幅約2.4ｍの溝を検出、当初溝として掘り下げていた。しかし、その溝から14ｍほど東へいったＢ２Ｗ54付近で中央にブリッジを持つ溝が確認されたことから、方形周溝墓と判断した。南側は用地外にまた北側は旧道にかかるため、規模は不明だが、東西方向で長さが17.5ｍとかなり大きな方形周溝墓である。主

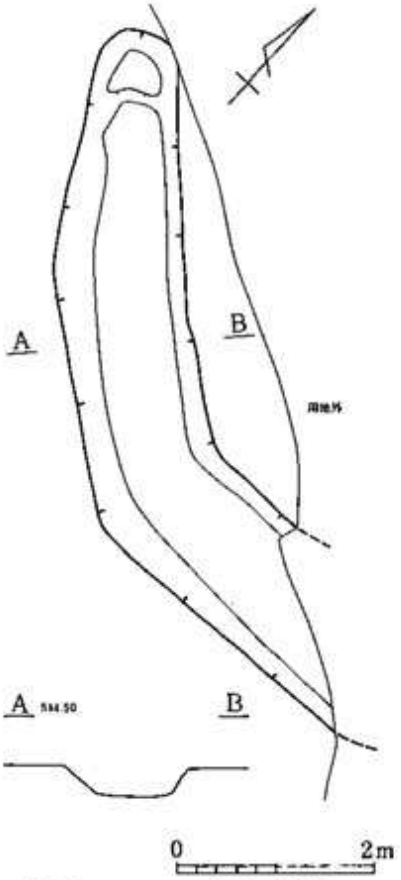


挿図30　ＴＩＺ方形周溝墓６



挿図31　ＴＩＺ方形周溝墓５

体部はＢ２Ｓ55付近で確認できたため、主軸方向をN44° Wと判断した。西側の周溝のうち調査できたのは、長さ12mであり、幅は２mとほぼ一定で深さは深いところで1.4m、最も浅いところでも約1.0mあり、断面形はＶ字形をしている。東側ではちょうど土橋の両側が確認された。土橋の南側は幅3.0m深さは約1.3mあるが1.7mしか調査できなかった。これに対して北側はちょうど東端の曲がり角にあたり、幅は2.4m深さ約1.4mあった。覆土はどの部分でも３層で漆黒土に暗褐色土が挟まれた感じになっている。主体部は5.6×2.2mの隅丸方形を呈しているが南側を穴に切られている。主体部の北から西にかけては25cmの中段を持っている。底は中央がやや窪み断面形で船底形になり、深さは一番深い中央部で58cmを測る。主体部の埋まり方をみると一番下にはやや赤みのかかった褐色土があり、その上を褐色土で覆い、さらに最上部に黄色のロームを被せたものと考えられる。しかし、確認できたのは掘り方のみで内部主体はわからなかった。



挿図32　ＴＩＺ方形周溝墓７

遺物の出土は周溝からのみで、図化できるものはなかったが甕・壺の破片が多少ある。

◇　**方形周溝墓７**（挿図32、第13図）

№67の北幅杭南側Ｂ２Ｙ44で溝を検出した。この溝が用地外に向かって弧を描いて延びたため方形周溝墓とした。ほとんどが用地外にかかるため規模、主体部、主軸方向とも不明。西隣にある土坑12の部分に切り合いがないので、土橋の可能性もある。調査したのは、くの字にまがった幅1.2～0.9m深さ32～23cmで長さは6.5mの部分に過ぎなかった。この溝の先端は段を持っている。

遺物は混入品と考えられるが石錘（第13図８）の出土があった。

◇　**方形周溝墓８**（挿図33）

№69の南幅杭付近の北側Ｃ１Ｖ54で直角に曲がる溝を検出し、方形周溝墓とした。北は溝12により切られ、南から西にかけては水路と旧道にかかり調査できなかったため、規模・主軸方向・土橋・主体部は不明である。調査できた東から北の部分でも東角は攪乱により壁が、また、北側の溝も近世のものと見られる墓壙が中央を切っている。したがって満足に掘ることのできたのは東側の4.5mのみである。この部分での溝の幅は1.4

m、深さは22～11cmと比較的浅く掘り方も緩やかである。

遺物の出土はなかった。

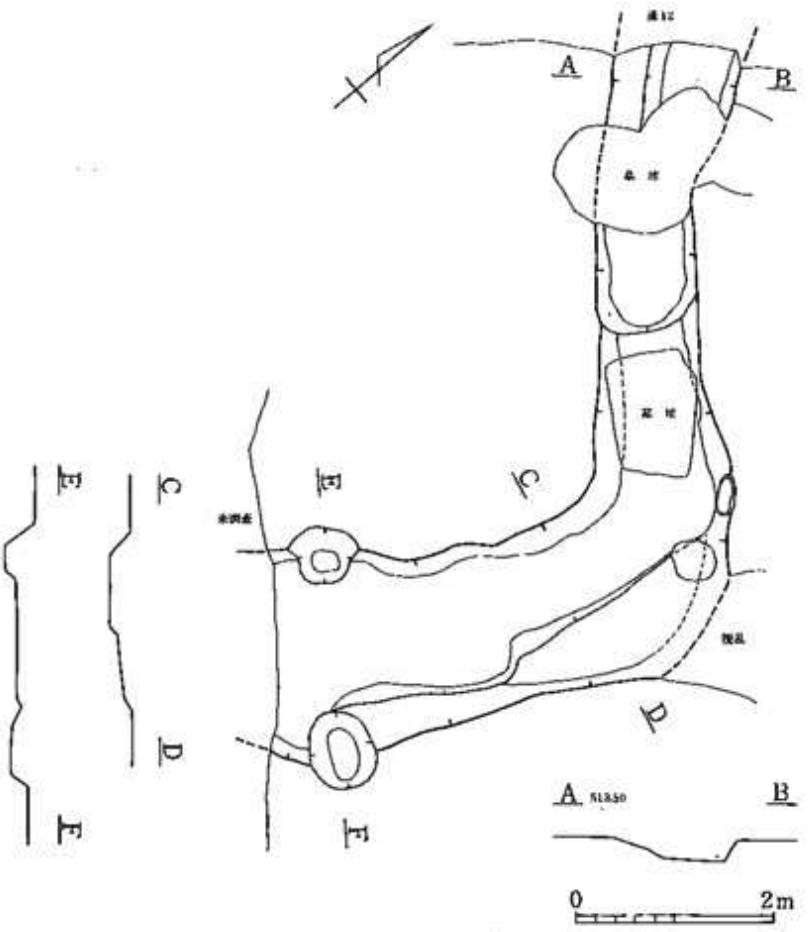
3）中世～近代、及び時代不明遺構

(1) 建　物　址

◇ 建物址1

（挿図34）

A 1 T53を中心に検出した。3×1間で3.2×2.0mの長方形の掘立柱建物址である。長軸方向でN70° Wを示す。桁行の柱間は約1.0mである。柱穴はP₁～P₈である。P₁は中段を持つため不定形をしており、深さは23cmとこの中では最も深い。P₂は平面形は36cmの円形で深さは13cmと浅い。P₃は40×30cmの方形で深さはP₁と同じ。P₄は80×50cmの楕円形で大きな掘り方をしているが、深さは13cmと浅い。P₅は楕円形と見られるが撹乱によってその半分ほどが切られるため、規模は不明。深さは17cmある。P₆は確認できなかった。P₇は28×28cmの方形、底は2段になっており深いほうで24cmある。P₈は30cmの円形で深さは20cmを測る。



挿図33　T Ⅰ Z方形周溝墓8

形態では弥生時代の高床式倉庫の可能性も考えられるが、遺物の出土がなく、時期・性格とも断定できず、中世以降とした。

◇ 建物址2（挿図35）

A 1 N54付近で6個の柱穴を確認した。2×1間で3.6×3.6mの正方形の掘立柱建物址である。桁行方向はN11° Eを示しており、柱間は1.8mである。しかし、良くみればP₃とP₄は少し外側にそれていることがわかる。柱穴の平面形はいずれも20cm前後の

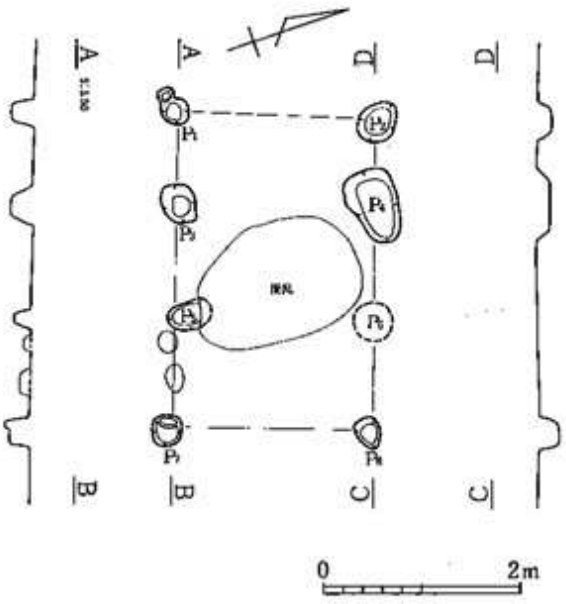
円形であるが深さは32～18cmとひらきがある。

遺物の出土がなく、詳細な時期・性格とも不明である。

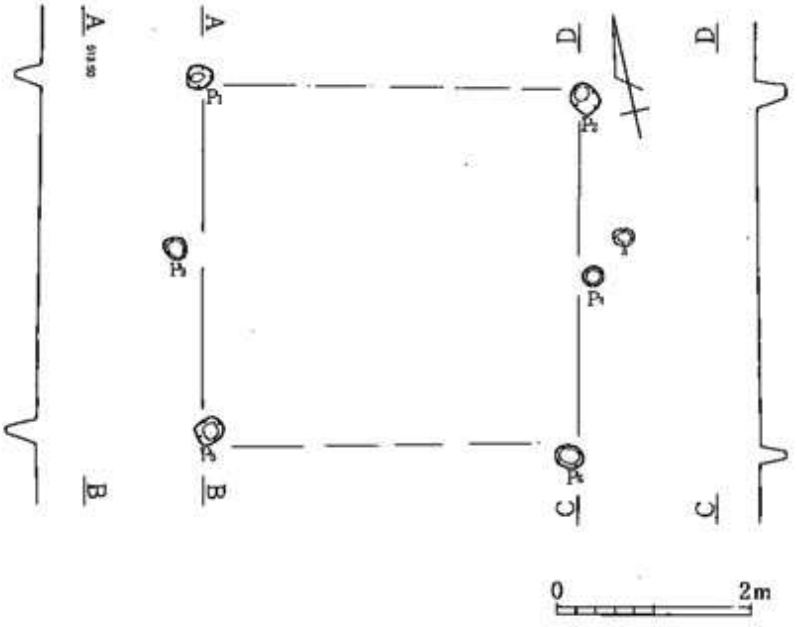
◇ 建物址３（挿図36）

Ａ１Ｖ48を中心に柱穴列を検出した。

３×２間で5.3×6.5mの長方形をした総柱の掘立柱建物址である。長軸方向はN47°Eを示している。柱間は桁行で3.2m、梁行で1.8～1.6mある。柱穴のうちP₉は確認できず、P₁₂は撹乱のためわからなかった。平面形でいえば、円形のものはP₁・P₂・P₄・P₈・P₁₀の５つあり、大きさでいえばP₁・P₄・P₈は40cmでほぼ同じ、P₂は30cmと一回り小さくP₁₀はさらに小さく20cm程度、深さはそれぞれ11・12・22・24・12cm

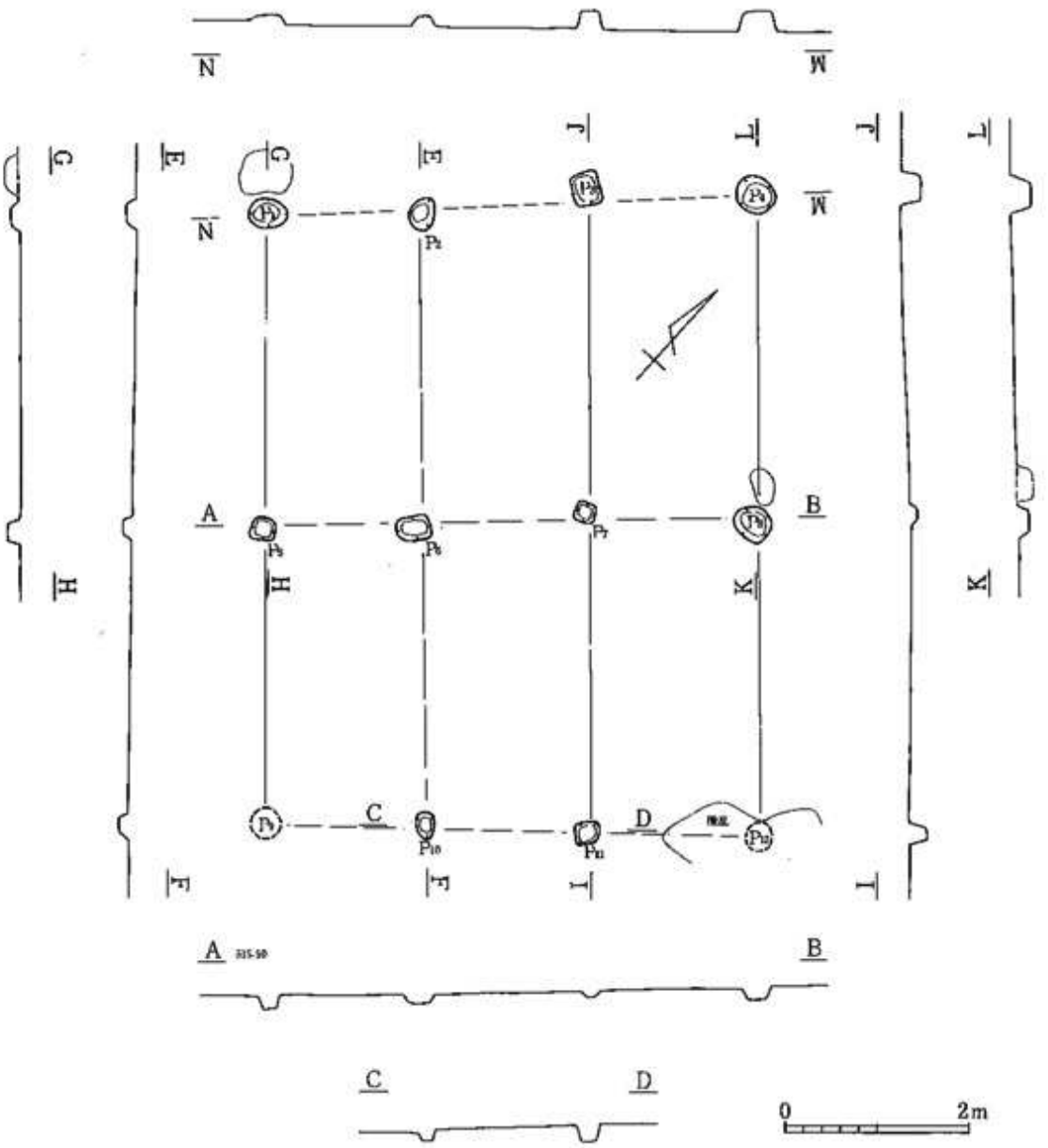


挿図34　ＴＩＺ掘立柱建物址１



挿図35　掘立柱建物址２

とばらばらである。それ以外の柱穴は方形である。P₃・P₄が長方形で深さは24・11cm、P₅・P₇・P₁₁は正方形であり、深さは14・8・18cmと揃っていない。付近には大きさ・深さがまちまちな穴があるが、直接この建物址とは関係ないものと判断した。遺物の出土がなく、時期・性格とも不明であるが、前述の建物址1及び2よりは新しいと思われる。



挿図36　ＴＩＺ掘立柱建物址3

◇　建物址７（挿図37）

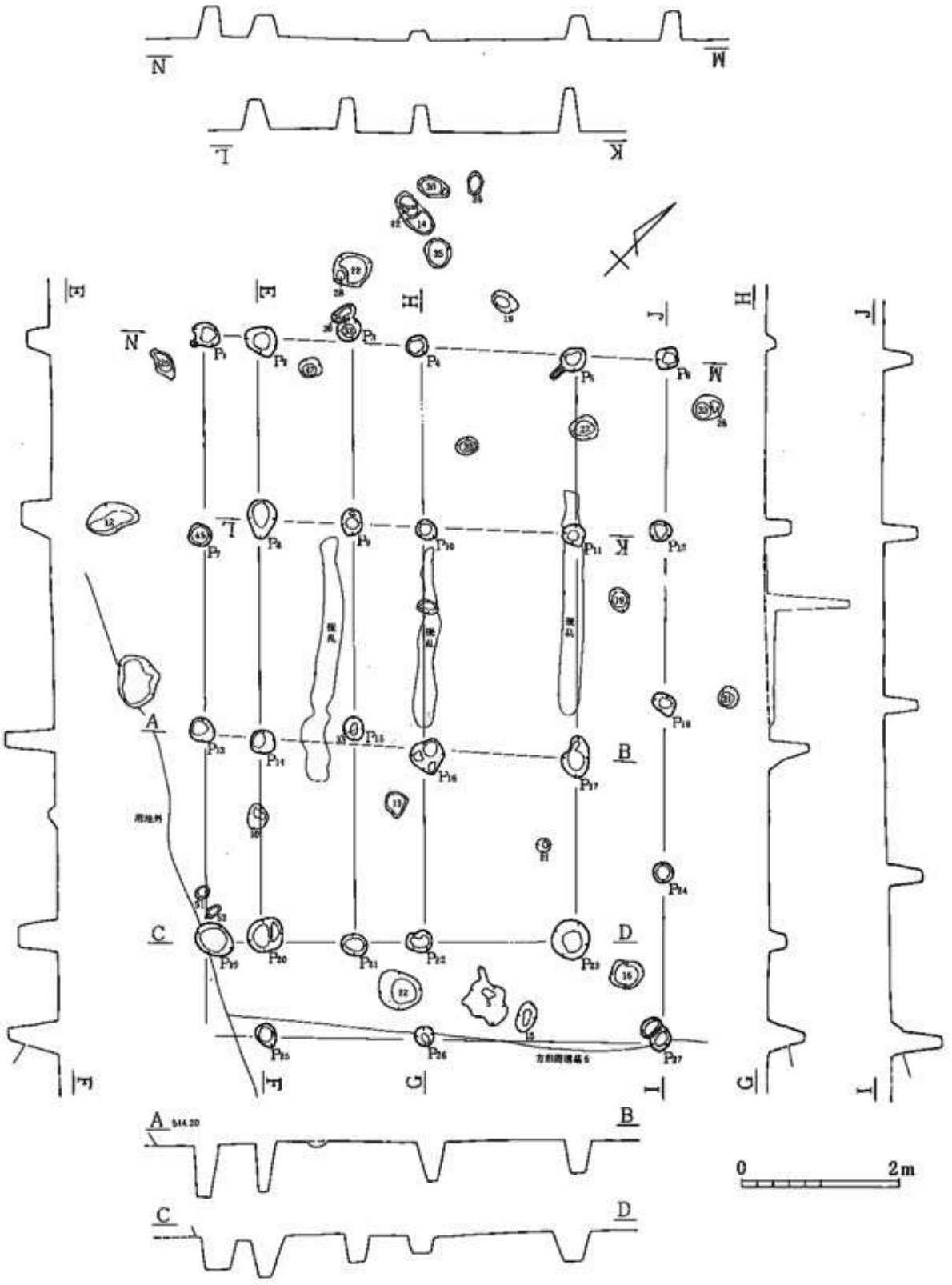
№66の南幅杭の北側付近に暗褐色土の柱穴を多数検出した。いくつかは方形周溝墓６の溝を切るものもある。基本形は３×２間の総柱の掘立柱建物址とみられるが西を除いた外側には廂下もしくは庇が取り付けられていたものと考えられ、全体で8.6×5.8mの長方形である。長軸方向はN48°Wを示している。庇と考えた柱穴はP_1・P_7・P_{13}・P_{19}・P_{25}・P_{26}・P_{27}・P_{24}・P_{18}・P_{12}・P_6であり、柱間は南側では2.4m、北側で2.1m、東側は揃っていない。また、建物の梁行になる東西の柱列は４列ある。南から２列目の柱列は１列目と３列目の中間に位置している。柱間の１列目と３列目及び３列目と４列目は2.0mである。桁行となる南北の柱列では柱間が少しずつ違っている。西から１列目と２列目の間は2.2m、２列目と３列目の間は2.8m、３列目と４列目の間は2.4mである。柱穴の平面形はおおむね円形であり、大きさは50～12cmと一定でなく、深さも66～12cmとまちまちである。　柱穴からの遺物の出土がないため、詳細な時期・性格は不明である。

◇　建物址８（挿図38、第24図）

センター杭№71の北側、Ｃ２Ｐ46付近で検出した。P_1は31号住居址を切り、P_2は溝17に切られる。２×１間、4.0×2.4mの掘立柱建物址であり、長軸方向はN49°Eを示している。梁行の柱間は２m前後である。P_1の掘り方は直径20cmの円形で深さは28cmと一番浅い。P_2は24×24cmの方形で深さ44cmと一番深い。西隣はひとまわり大きい穴と接する。P_3は直径20cmの円形で深さは41cm接してはいないが同規模の穴が西隣にある。P_4は土坑15に切られるグリッドピットの壁を切っている。32×24cmの楕円形、深さ40cm、東側がひとまわり大きい穴と接しているため、瓢箪形になる。P_5も東側に同規模の穴があるため、瓢箪形である。深さ43cm。P_6は28×24cmの方形で深さ36cmを測る。

柱穴の状態からみるとある時期に建替がなされたと考えられる。とすれば付近にある他の柱穴もこの建物址に関係する可能性もある。

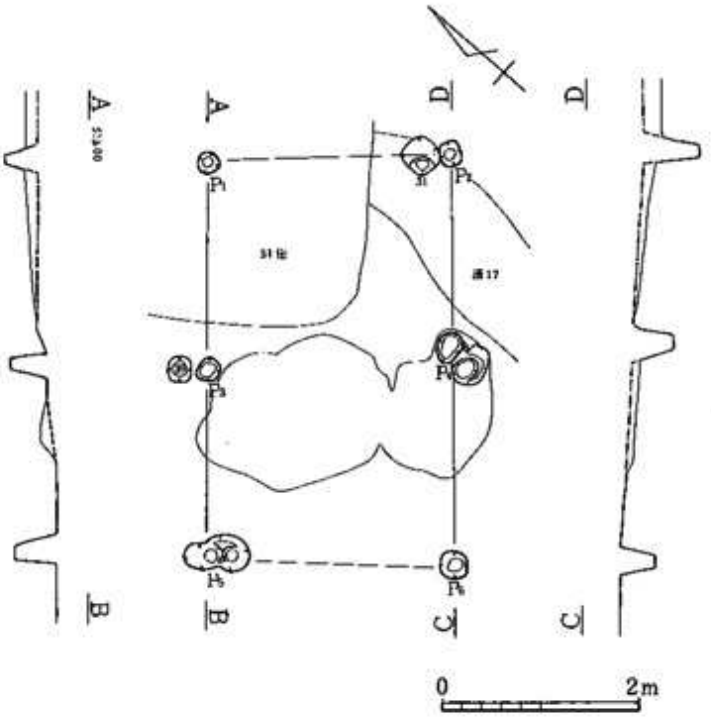
柱穴からは遺物の出土はなかったが、Ｃ２Ｏ47にある同様の柱穴からは大平鉢（第24図１）が出土しているため、これらの柱穴を中世のものと考えた。



挿図37　ＴＩＺ掘立柱建物址７

◇ 建物址9（挿図39）

D1A50を中心に検出した。P4はピットにより上部を切られ、P5は溝22によりやはり上部を削られている。それ以外は切り合いがないため全容がよくわかる。基本形は3×2間の総柱の掘立柱建物址であるが北側に庇か廊下のような施設をもっているため6.7×5.2mの長方形をしている。長軸方向はN43° Wを示している。建物本体の柱間は梁行で2.2m、桁行で2.1mとあまり違わない。本体と庇（廊下）との間は約1.0mある。柱穴の平面形はおおむね円形であるが直径は建物本体が40～26cmで24～20cmの庇（廊下）部分より多少大きい。深さは庇（廊下）部分が20cm前後と揃っているのに対し、建物本体は65～14cmとばらつきがある。遺物の出土はないが、形態から推定するに中世以降であろう。



挿図38 TIZ掘立柱建物址8

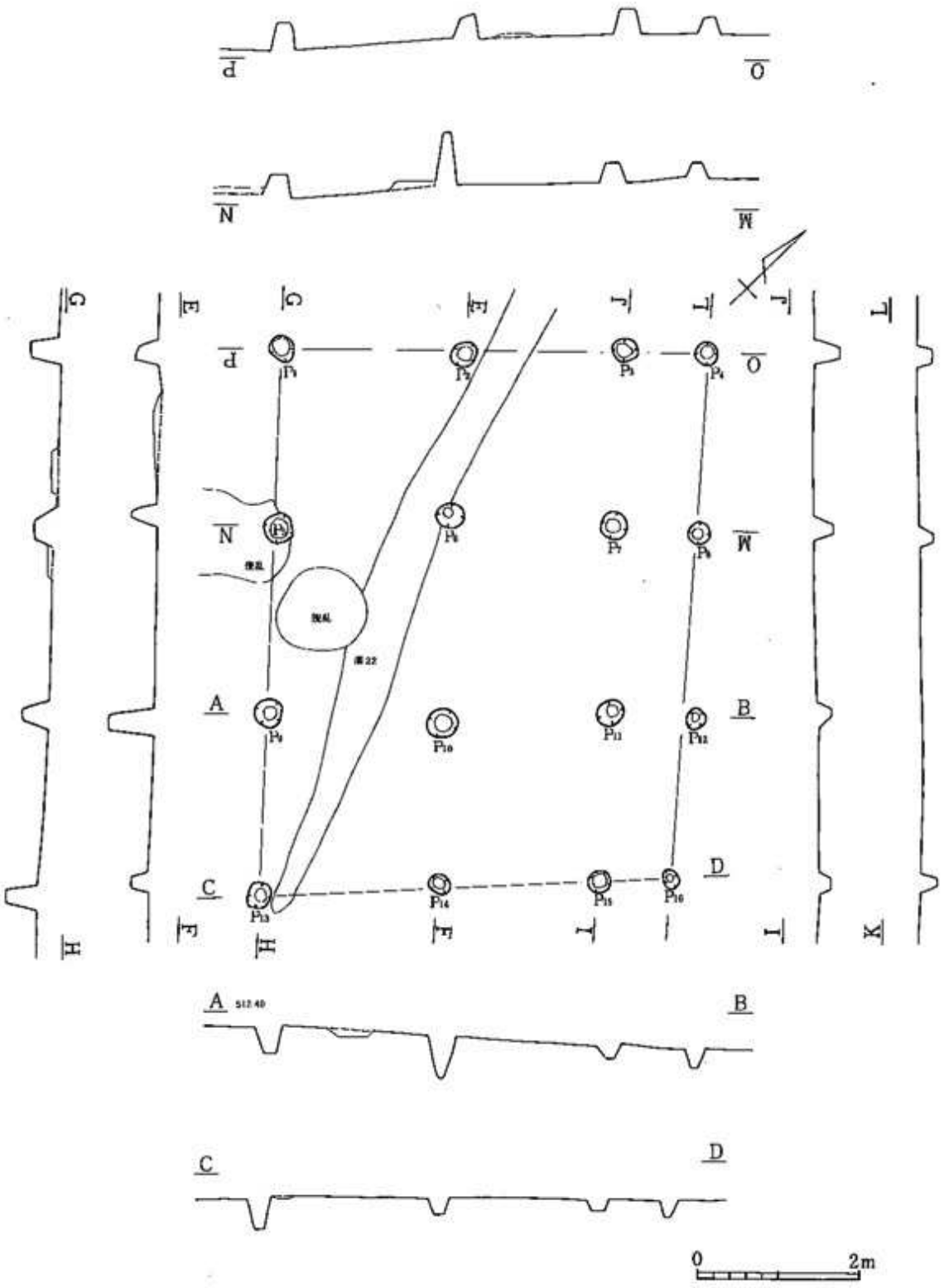
◇ 建物址10（挿図40）

No.72の南幅杭の付近には、多数の柱穴がある。そのうちD1C54に角をもち用地外に拡がると考えられる掘立柱建物址がある。調査できた部分は南北方向の柱穴3つと、東西方向の柱穴5つのみで、規模、長軸方向はわからない。柱穴はP1が40×30cmの楕円形である以外は直径20cm前後の円形である。深さはP3が28cm、P4が19cmと深い以外は13～8cmと浅い。

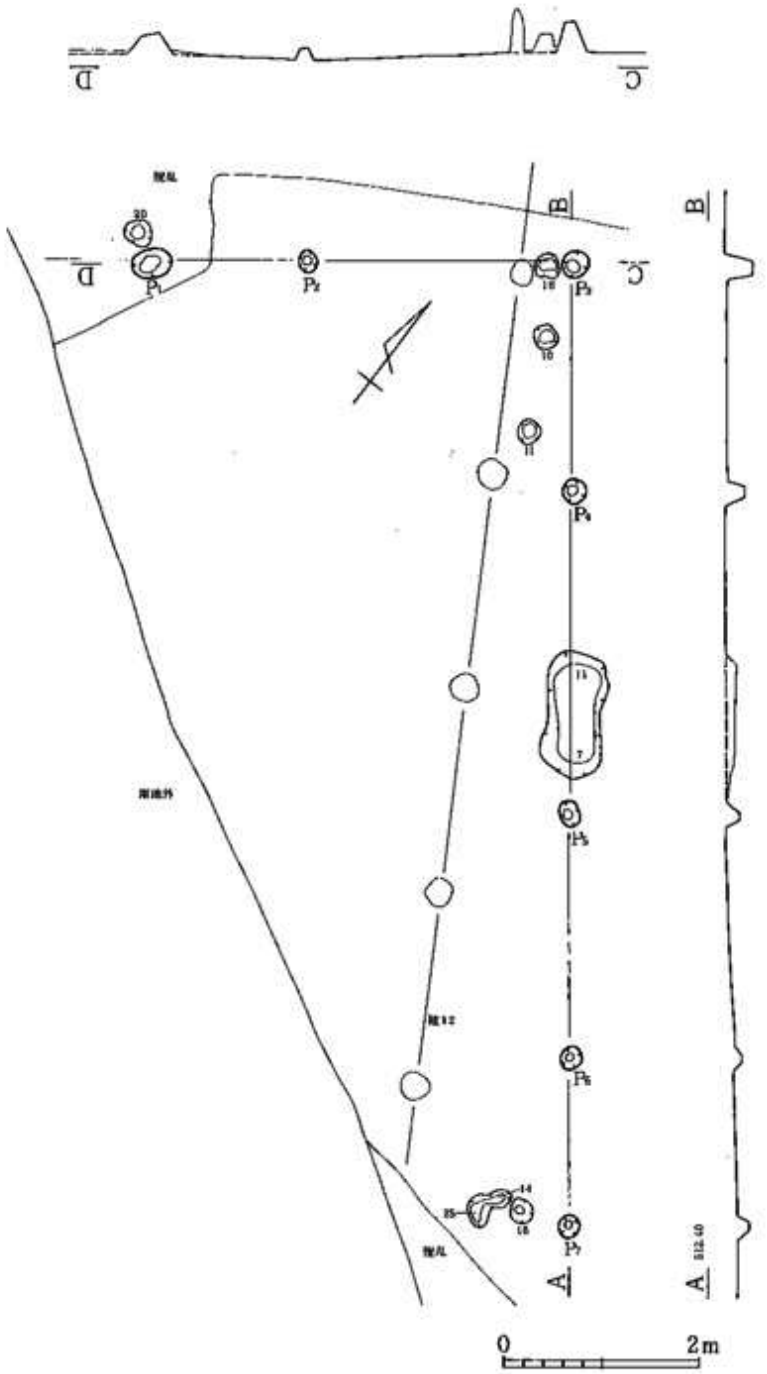
柱穴からの遺物の出土がないため、詳細な時期・性格は不明である。

◇ 建物址11（挿図41）

D1I53に角をもつ柱列があり、4×3間の掘立柱建物址としたが、南側の梁行方向では柱穴を特定することができなかった。規模は推定であるが、8.4×5.4mのやや歪んだ長方形であり、長軸方向はN26° Wである。柱間は北側の梁行で2.1m西側の桁行で

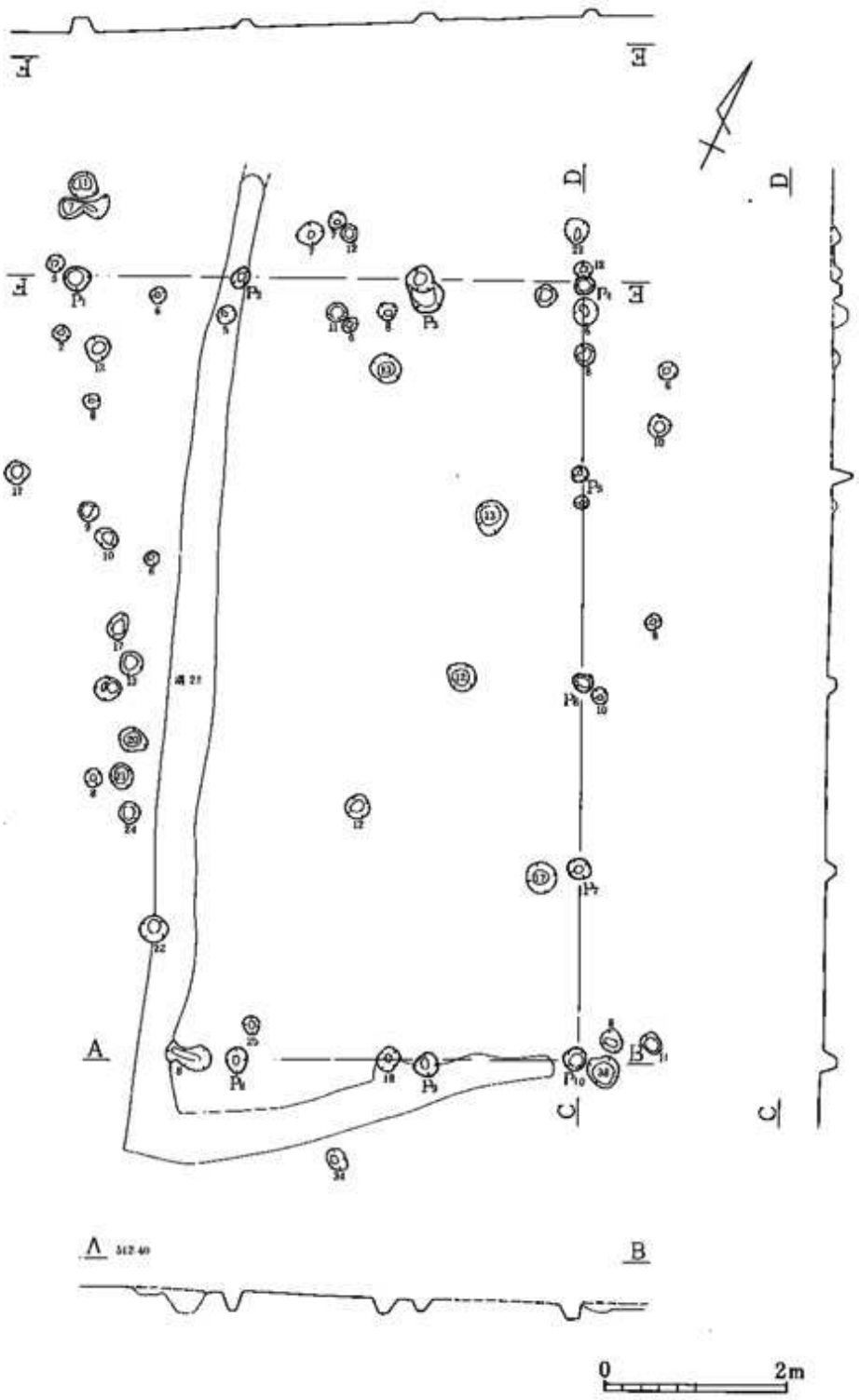


挿図39　ＴⅠＺ掘立柱建物址９



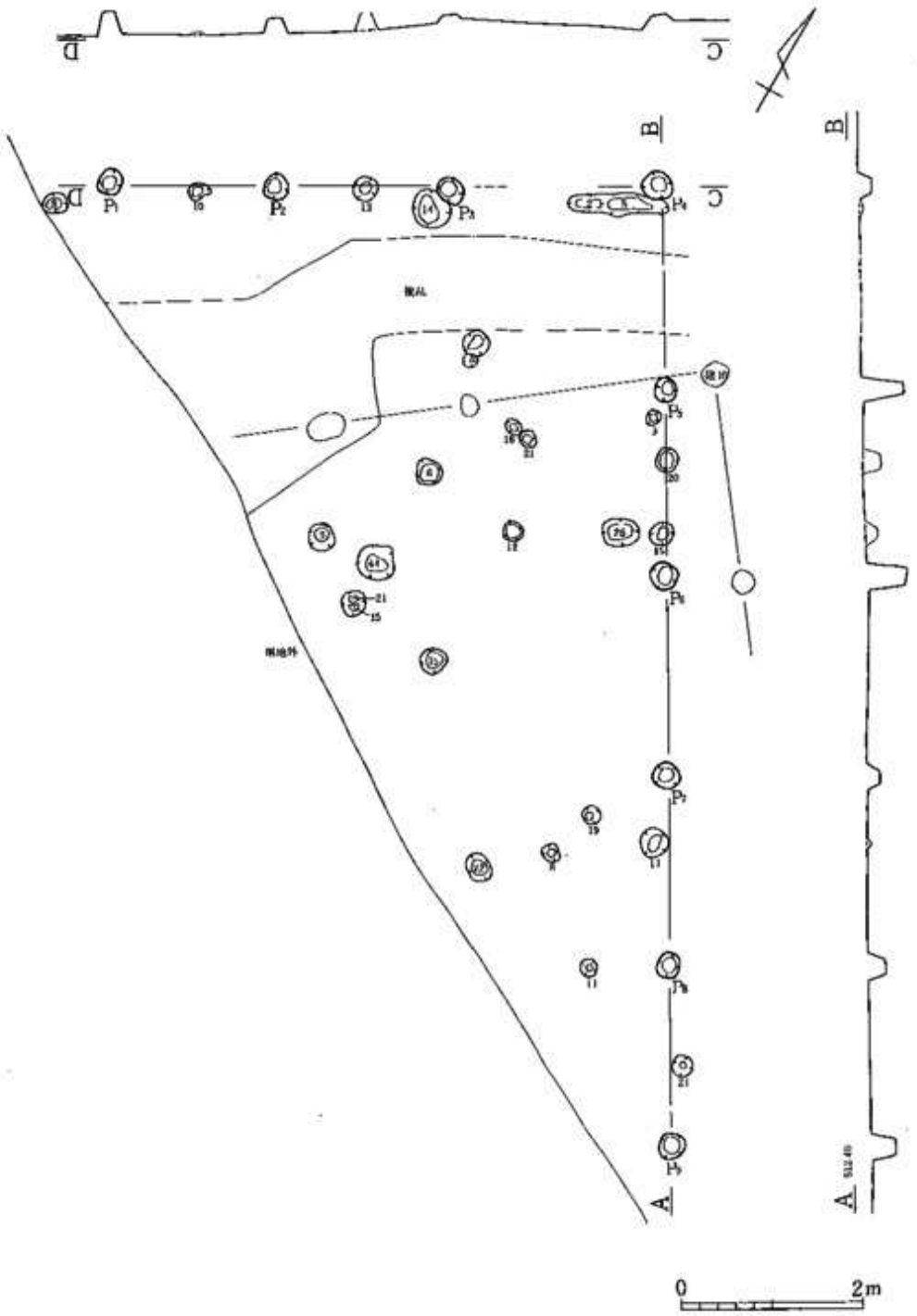
挿図40　ＴＩＺ掘立柱建物址10

約1.9ｍである。柱穴の平面形は円形がほとんどであり、深さは10㎝以内のごく浅いものが多い。



挿図41　ＴＩＺ掘立柱建物址11

柱穴からの遺物の出土がないため、詳細な時期・性格は不明である。



挿図42　ＴＩＺ掘立柱建物址12

◇ 建物址12　（挿図42）

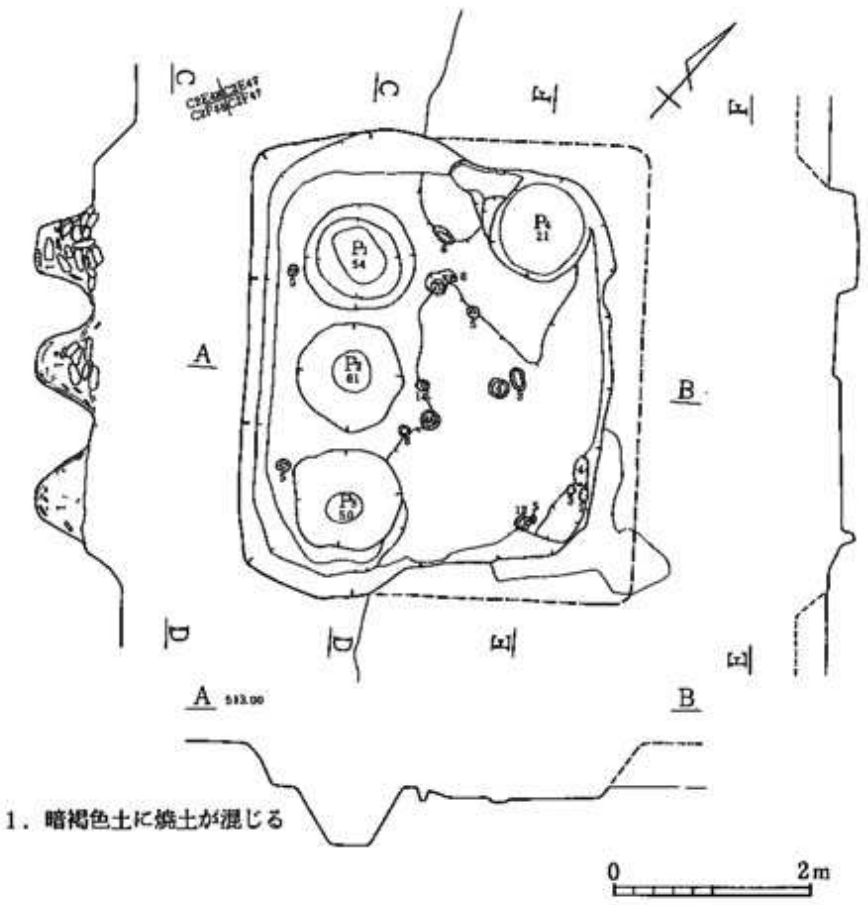
Ｄ１Ｂ53に角をもち用地外に延びる柱列があり、掘立柱建物とした。完全に調査できなかったため、規模、長軸方向はわからないが、建物址11と並列する位置関係にあるとすれば、東西方向に並ぶ６個の柱穴が梁行方向の一部であり、主軸方向はＮ30° Ｗとなる。それに対し南北方向に並ぶ４個の柱穴は、桁行方向の一部となる。柱穴が中間にあることが多いため主柱穴を特定するのが難しかったが、梁行で2.1～2.0m、桁行で2.2～1.8mとほぼ一定の柱間を持つＰ₁～Ｐ₄とした。いずれの柱穴も平面形は円形もしくはそれに近い不整形である。大きさは直径で30前後と揃っているが、深さにおいては48～15cmとふぞろいである。

柱穴からの遺物の出土がないため、詳細な時期・性格は不明である。

(2) 方形竪穴

◇ 方形竪穴１（挿図43、第14・15図）

28号住居址と30号住居址の中間でＣ２Ｇ47を中心に検出した。北半分が旧水田の造成



挿図43　ＴＩＺ方形竪穴１

時に削られたため上段と下段との比高差は約40cmある。北側の壁はほとんど残っていないため規模は推定になるが4.6×4.0mの隅丸方形の遺構である。長軸方向はN38° Wである。床には北側に1つ、南側に3つ合計4つの大きな穴がある。北側のものは北角の壁直下にあり直径1.0mで深さは21cm、底はほぼ平坦であり、壁はほぼ垂直に掘られている。覆土は炭・焼土であった。南側の穴のうち西側に位置するものは直径約1.0m、深さは58cmである。底はほぼ平坦で、壁は途中に陵をもちながら急角度で立ち上がっている。覆土は炭・焼土が多量に含まれたものあり、ぎっしりと詰まった人頭大の石の上部には板状の炭化物があった。真ん中のものは、直径1.1m程度で深さは61cmである。底は平坦であり、壁は比較的急角度で立ち上がっている。覆土の状態は西側に位置するものとほぼ同様であるが、石の量が少なかった。東側に位置するものは、直径1.0m、深さは61cmである。底は中央がやや窪んでおり、壁は比較的急角度で立ち上がる。覆土には炭・焼土が多量に含まれたものであり、上部には板状の炭化物があった。この穴には石は入っていなかった。遺構の中央付近に1.4mの間隔を持って直径20cmの穴が2つある。深さは西よりのものが70cm、東よりのものが50cmと深い。柱穴の可能性もある。その他にいくつかの穴が確認できたが、性格については不明である。床面の残るのは東側のみで北側の穴付近が多少盛り上がっている以外は平坦であり、三和土状になっている。壁は南から西にかけての半分は完全に残っている。高さは40cmでほぼ中間に陵を持つ。陵の上部では緩やかに立ち上がるのに対し、下部では垂直に近い角度で立ち上がっている。それに対し東から北にかけての半分は削平により高さが12cmとほとんど残っていない。特に東角は撹乱により破損している。

出土した遺物は、南側の3つの穴に破片となって入っていたが底部を欠く常滑焼の大甕（第14図）が約一個体分出土した。この大甕の大きさや形態、表面に残るたたき跡は、以前調査した、飯田市下久堅南原の古刹文永寺にある重要文化財の石室・五輪塔の下部に埋設されている甕と似ている。その他にも常滑焼の甕の口縁（第15図1・2）や胴部の破片が比較的多量にあった。また、いわゆる『かわらけ』と呼ばれる素焼きの小皿（第15図3）もある。その他、大鎌（第15図4）・刀子（第15図5）・釘（第15図6）の鉄製品も出土した。

時期は中世であり、遺構の状況・遺物の出土状況等が特異なものであり、一般的な家とは考え難く、何らかの特殊な作業を行なった工房的な性格が考えられる。また、火災に遭ったものと考えられるが穴の中にあった石には火をうけた痕跡はなく、投げ込まれた可能性もある。

◇ 方形竪穴2（挿図44、第16図）

29号住居址と30号住居址の中間でC2L47を中心に検出した。南と西の一部が撹乱により切られている。3.6×2.5mの多少歪んではいるが、隅丸方形で長軸方向はN28° W

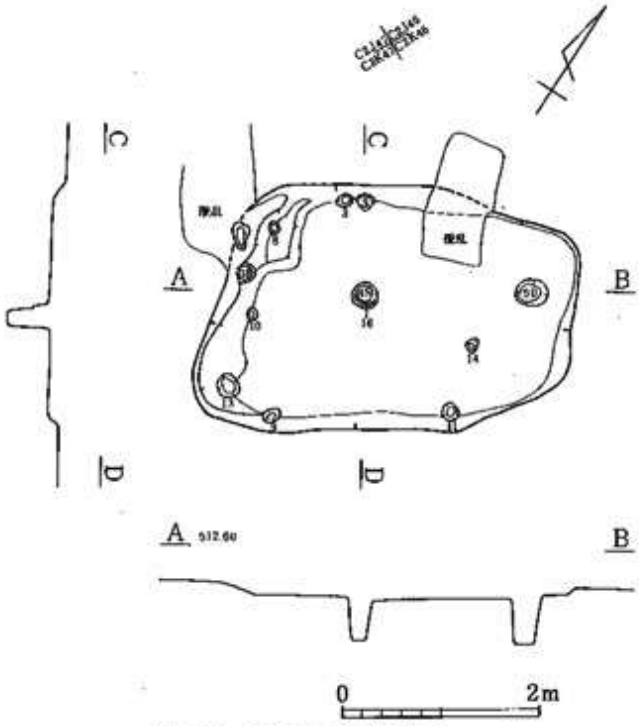
を示している。床面は南角では階段状になっている以外は、ほぼ平坦である。壁は南側で10cmあり途中に陵を持ちながらごく緩やかに立ち上がり、西側と東側は高さはほぼ同じであるが南側よりやや角度を持つ。北側では高さ6cmではあるが垂直に近い立ち上がりである。東側壁直下に2個、南側壁直下に1個、西側壁直下に2個の深さ5cm前後の小さな穴を確認した。また、中央には直径26cm中段を持ち、深さ41cmの穴と、その穴の1.7m北に直径26cm深さ50cmの穴がある。しっかりした掘り方からみると柱穴かも知れない。

黒色土の覆土からは鉢の底部（第16図1）が出土している。

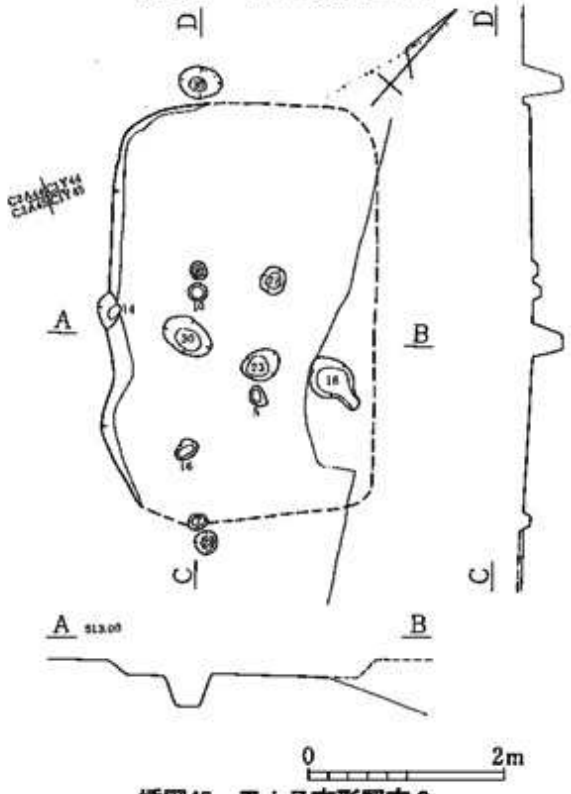
時期は中世である。

◇ 方形竪穴3（挿図45）

25号住居址の東側C2A44を中心に検出したが、旧水田の造成時に北半分が削平をうけ南側の調査となった。規模・主軸方向は不明、形態は隅丸方形と推定できる。しかし、調査できた部分が4.2×2.6mで、壁も南側に比較的急角度で10cmの高さを持つもの以外残っていないため断定はできない。床面と考えられる部分は北に向かって傾斜している。いくつかの穴があるが、この遺構に関係するものか特定



挿図44　ＴＩＺ方形竪穴2



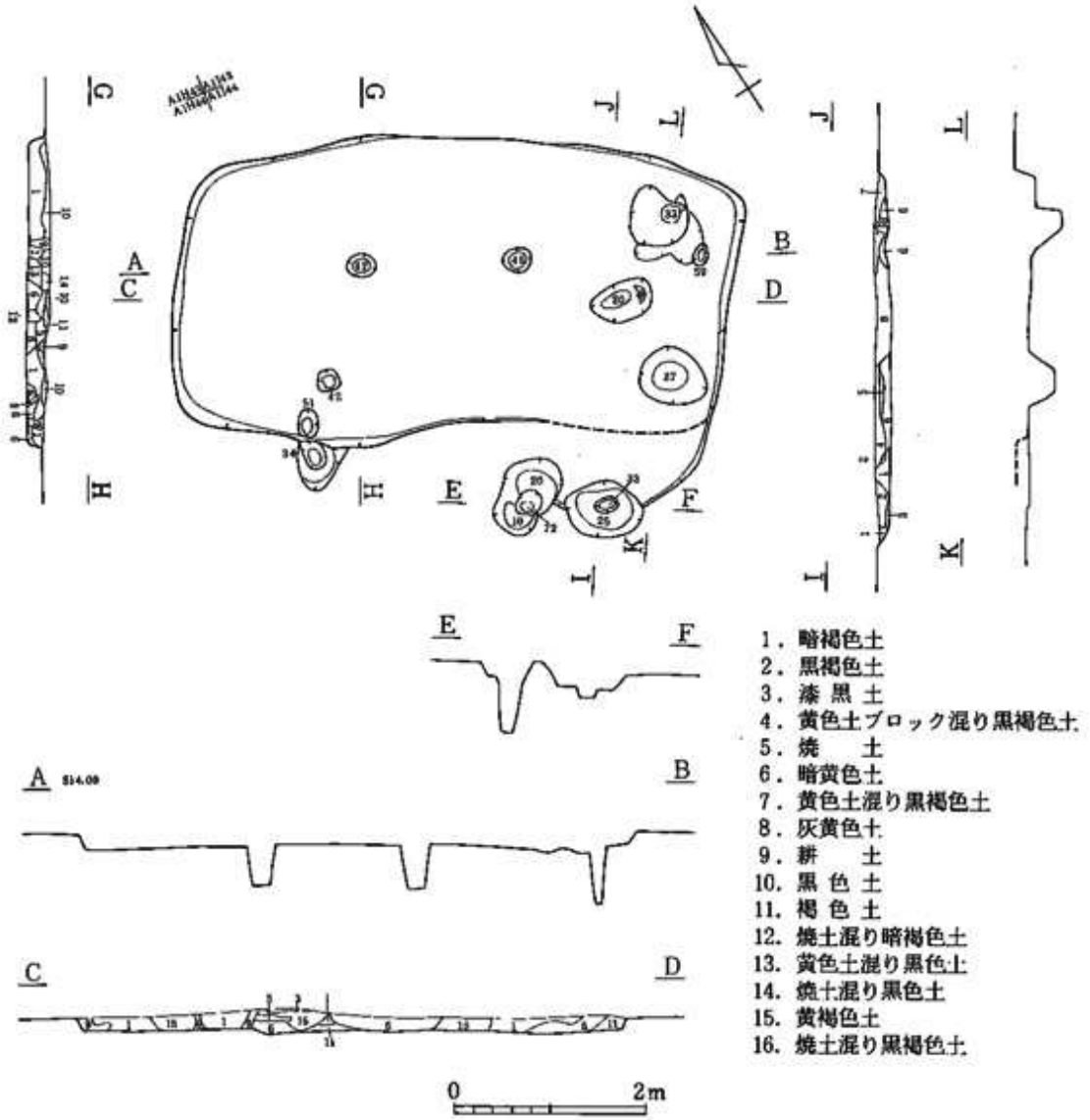
挿図45　ＴＩＺ方形竪穴3

することができなかった。

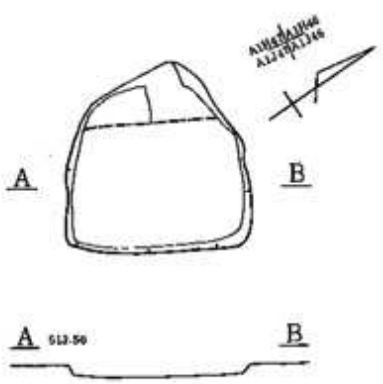
遺物の出土はないが、形態が方形竪穴２と類似していることから、方形竪穴とした。時期はやはり中世と考えられる。

◇ 方形竪穴４（挿図46、第16図）

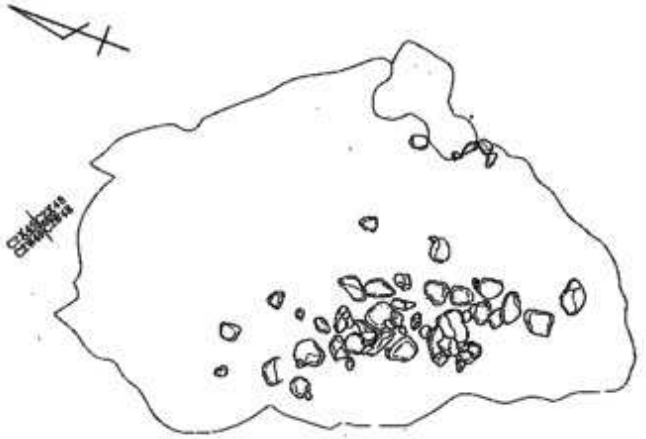
Ａ１H45を中心に検出した。当初は単なる竪穴と考えていた。しかし、後日方形竪穴２・３を調査したことにより、この遺構が方形竪穴であるとの結論に達した。



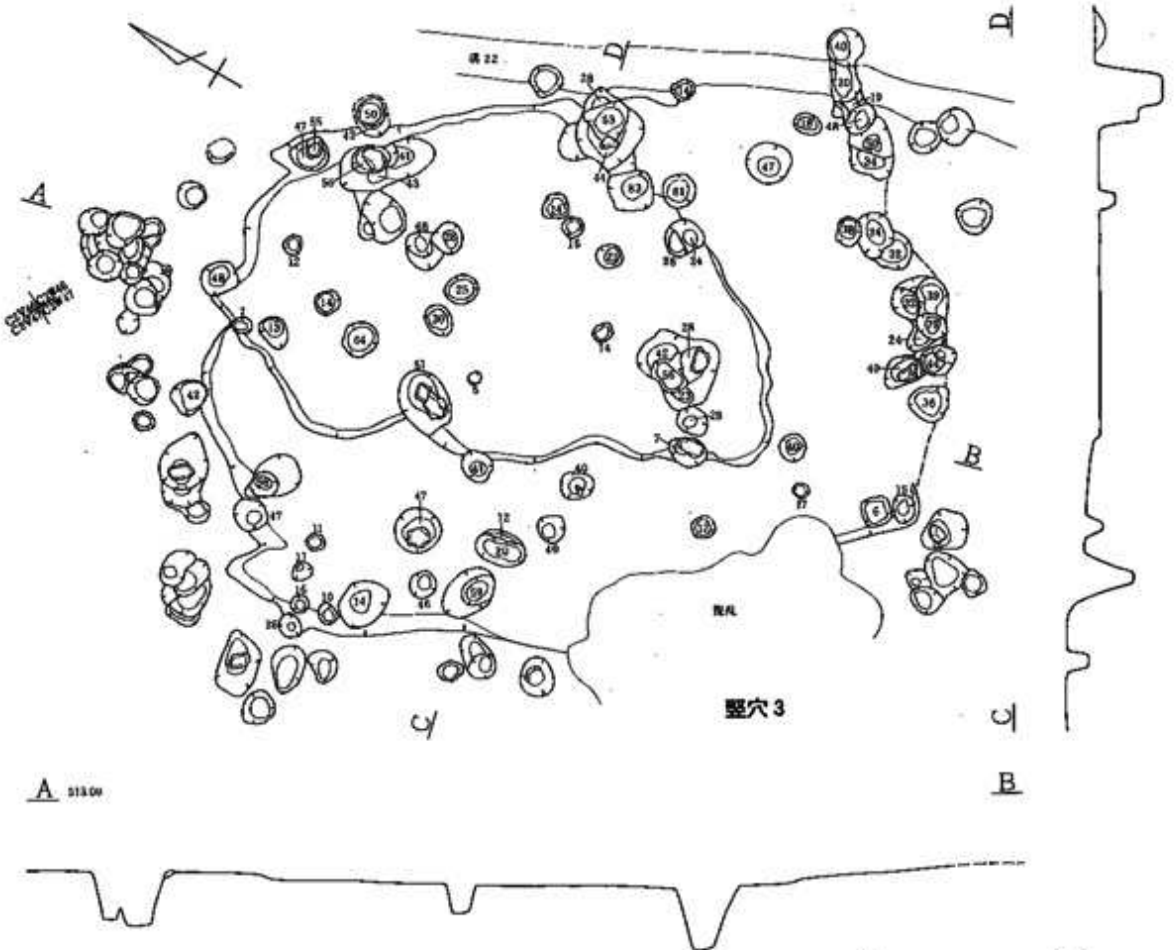
挿図46 ＴＩＺ方形竪穴 4



竪穴1



竪穴3 中央部 集石



竪穴3

0 2m

挿図47 ＴＩＺ竪穴 1・3

5.6×3.0mの隅丸方形で長軸方向がN53° Wを示している。壁高は10cm前後とさほど深く掘られていないが立ち上がりはほぼ垂直である。また、南角は浅い落ち込みにより切られたためか壁は残っていない。床はほぼ平坦であり、中央西よりには直径30cm深さ42cmの穴、また、1.8m東にもほぼ同形で直径30cm深さ46cmの穴がある。柱穴の可能性がある。

遺物は東側にまとまっていた。山茶碗（第15図2・3）、瓦質の小皿（第16図4）及び砥石（第16図9）がある。また、用途は不明であるが鉄製品（第16図5・6）がある。その他混入品と見られる横刃形石器（第16図7・8）も出土している。

中世の遺構である。

(3) 竪　　穴

◇ 竪穴　1（挿図47）

A1 J46付近に黄色土の混じった暗褐色土をもったものを検出した。しかし、西側を撹乱により切られているため、その規模がはっきりしないが、1.8×1.2mの隅丸方形と推定できる。底はほぼ平坦で、壁高は約10cmほぼ垂直に掘られている。この遺構に付随するとみられる穴はないため、墓穴の可能性もある。

遺物の出土はなかったため、時期は不明。

◇ 竪穴　3（挿図47、第16図）

C2 W48付近で人頭大の石が3.0mにわたり、80cmの幅で並んでいた。周辺を覆う漆黒土を掘り下げたところ7.2×5.5mの不整楕円形の落ち込みになったため、竪穴とした。

壁高は6cmほどしかなく立上がりも緩やかで、所々を穴に切られている。底は北側に向かって傾斜している。石のあった部分は、竪穴の北壁を共有する格好で位置し、一段低く掘り込まれている。その範囲は、5.5×3.8mで深さは10cm前後とごく浅い。壁高はほとんどなく底の中央がやや低いため、だらりとした落ち込みのようである。底のあちこちには大小様々な穴があるが直接この遺構に付随するものかどうかわからない。

竪穴の全域から常滑焼とみられる甕の破片（第16図10・11・12・13）また、小片ではあるが珠洲焼（第16図14）が出土している。特に中央部からの出土量が多い。時期は中世と考えられるが遺構の性格等は不明である。

(4) 墓　　壙

◇ 墓壙　1（挿図48）

A1 Y43で検出し、調査した。1.2×0.6mの長方形で、長軸方向はN42° Eを示している。底は平坦になっており、深さ40cmをほぼ垂直に掘ってある。

遺物の出土はないが、隣接する墓壙2と同時期の墓であろう。

◇ 墓壙　2（挿図48、第28図）

A2 A44で検出し、調査した。西側を撹乱により切られているが規模は1.1×0.7m

の長方形で、長軸方向はN42° Wを示し、墓壙1とほぼ直交する位置にある。底は東隅に直径30cm深さ5cmの穴がある以外は、おおむね平坦である。壁高は10cmと比較的浅いがほぼ垂直に掘られている。　覆土から、銅銭が5枚出土したが、腐蝕がひどく銭名が確認できたのは『元祐通宝』（第28図1）のみである。

古くから人を葬る時にお金を6枚一緒に入れる風習があり。また、形態から判断しても、墓であろう。時期的には中世以降であるが、確定できない。

◇ 墓壙　3（挿図48）

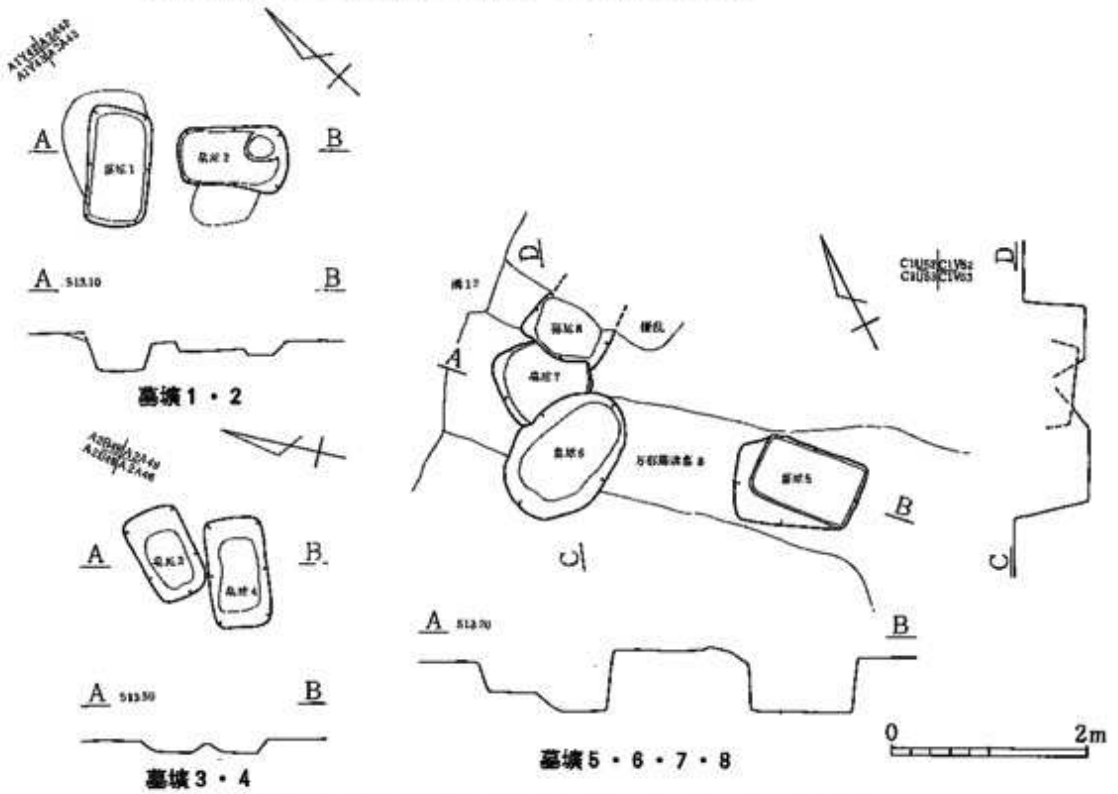
A2A48で2基の墓壙を検出した。そのうち西側のものを墓壙3とした。1.1×0.6mの長方形で、長軸方向はN20° Wを示している。底は平坦で深さは14cmと比較的浅いが壁は比較的急角度に立ち上がっている。

出土遺物はないが、形態から判断すれば、墓であろう。

◇ 墓壙　4（挿図48）

A2A48で2基の墓壙を検出した。そのうち東側のものを墓壙4とした。1.0×0.6mの長方形で、長軸方向はN38° Wを示している。底は中央がやや窪み断面形は船底形を呈しており、深さは10cmと浅いが壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物はないが、形態から判断すれば、墓であろう。



挿図48　ＴＩＺ墓壙　1・2・3・4・5・6・7・8

◇ 墓壙　5（挿図48）

№69センター杭付近は墓地であったため、墓壙があった。C1U54で、方形周溝墓8の溝を切って検出した。1.1×0.7mの長方形で長軸方向がN38°Wを示す。深さ70cmで底が平坦に掘られており、壁は垂直に立ち上がる。

出土遺物はないが、墓であろう。時期は新しいと考えられる。

◇ 墓壙　6（挿図48）

C1T53で、やはりこれも方形周溝墓8の溝を切って検出した。西側では墓壙7を切っている。1.4×1.0mの楕円形で長軸方向がN20°Wを示す。深さ70cmで底が平坦に掘られており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

出土遺物はないが、墓であろう。時期は新しいと考えられる。

◇ 墓壙　7（挿図48）

C1T53で、方形周溝墓8の溝を切り、東側では墓壙6に、北側で墓壙8に切られる。規模は推定で直径1.0mの円形。深さ60cmで底が平坦に掘られていたと考えられる。壁は垂直に立ち上がる。

出土遺物はないが、墓であろう。時期は新しいと考えられる。

◇ 墓壙　8（挿図48、第24図）

C1T53で検出したが、南側を墓壙7に切られる。北側では撹乱に切られており、完全には掘らなかったため、規模その他はわからないが、深さ70cmで底が平坦、壁が垂直に立ち上がっていることなどから考えると、新しい墓の可能性が強い。

この付近からは近代の陶磁器（第24図8）が出土したが、供物と考えられる。

(5) 土　　坑

◇ 土坑　3（挿図49）

12号住居址の西側、B1G44で検出した。直径1.1mの円形で、深さ67cmを測る。底は東から西へやや傾斜しており、上部より広く断面形は袋状になる。

黒色の覆土からは遺物の出土がないため、時期・性格とも不明である。

◇ 土坑　4（挿図49）

B1S48で検出した。方形周溝墓4の南角を切っている。上部では直径1.3mの円形であるが、底部では1.5mと広くなり、断面形は袋状となる。深さ96cmとかなり深く、底は中央がやや壁際より低くなっている。

黒褐色の覆土からは遺物の出土がないため、時期・性格とも不明である。

◇ 土坑　7（挿図50）

22号住居址の東側、B1I52付近で検出した。直径2.2mの円形である。底部は3段になっている。中央の1.1×0.8mの範囲は周囲より高く、深さは88cmで西壁際との比高差は14cmある。また、西側とそれ以外の壁際でも10cmの比高差を持つ。最深部となるの

は北壁直下で109cmの深さがある。壁は垂直に掘られているが底からの立ち上がり部分のみは緩やかである。

覆土からは、弥生式土器片および須恵器片が出土しているが後世の混入と見られるため、時期・性格を決定することはできなかった。

◇ 土坑 8（挿図50）

21号住居址の東壁に接してB10I57付近で検出したが、表土剥ぎの時点で削り過ぎたため、壁が多少低くなった。規模は推定で直径2.0mの円形、底部は中央にややほぼ窪み、深さ90cm、壁は途中に陵をもつがほぼ垂直に掘り込まれている。

漆黒の覆土からは弥生式土器片が1点のみ出土しているが、後世の混入と考えられるため、時期は不明である。

◇ 土坑 10（挿図50）

A2X53で検出した、1.0×0.8mの楕円形をしたものである。長軸方向はN45° Eを示す。深さは30cm、底は平坦で堅くしまっている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、東西南北のそれぞれの壁直下には径10cm深さ5cm前後の小さい穴がある。

覆土からの遺物の出土はなく、時期・性格ともに不明である。

◇ 土坑 11（挿図50）

B1H47で検出した、直径1.3mの円形をしたものである。深さは89cm、底は中央がやや低くなっており、壁は垂直に立ち上がる。壁直下には径10cm深さ10cm前後の小さい穴が5個ある。

漆黒の覆土からの遺物の出土はなく、時期・性格ともに不明である。

◇ 土坑 12（挿図50）

方形周溝墓7の北側B2W43で検出したが、北側が用地外になるため、完掘できなかった。調査した範囲は2.4×1.1mの半楕円形部分のみである。深さは24cmで壁は緩やかに立ち上がる。壁の斜面と直下には14個ほどの小さな穴をもつ。

土坑としたが、遺物の出土はない。

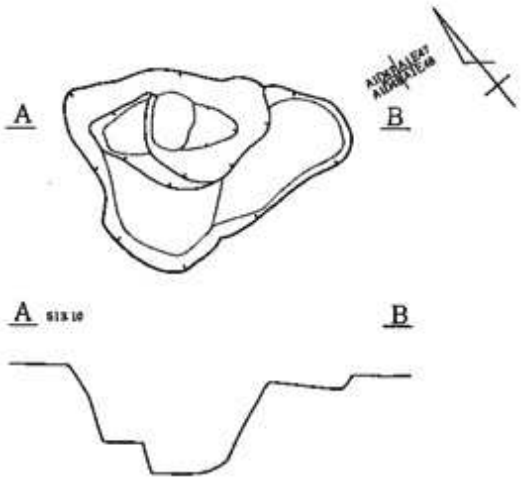
◇ 土坑 13（挿図50、第16図）

D1A45を中心に検出したが、北側は新しい水路により切られている。規模は0.8mの円形と推定される。緩やかに立ち上がるものとみられる壁はほとんど残っていない。深さは8cmとごく浅く、底は北側に傾斜している。

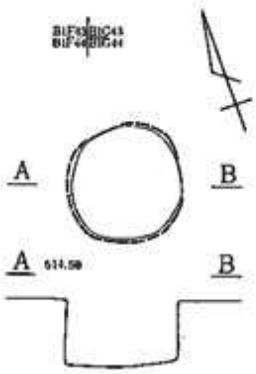
中世のものとみられる甕の底部（第16図15）が出土している。

◇ 土坑 14（挿図50）

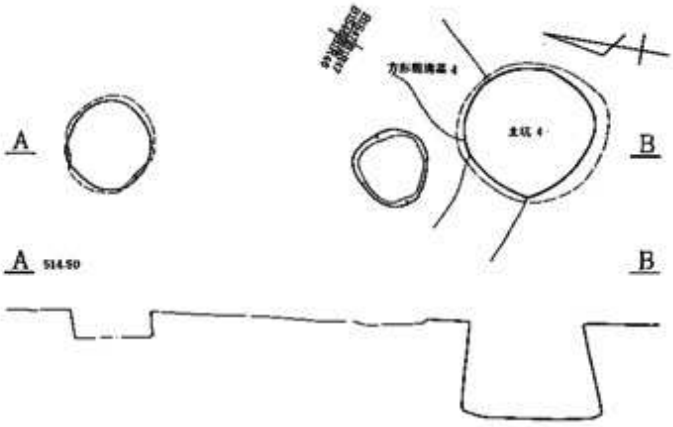
29号住居址の北側、C2N47で検出した。1.0×0.7mの方形である。底はほぼ平坦で深さ27cm、壁は比較的急角度に立ち上がっている。東隣には4cmの深さで落ち込みが2.4mほど続いている。土坑に付随した施設とは考えにくい。



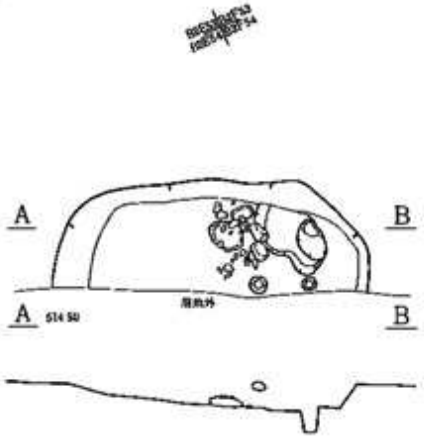
土坑2



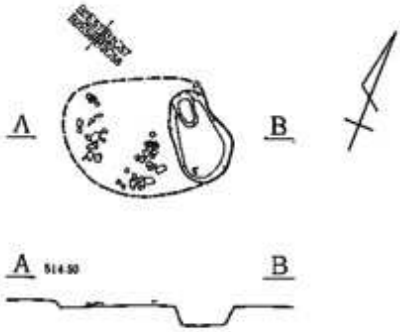
土坑3



土坑4



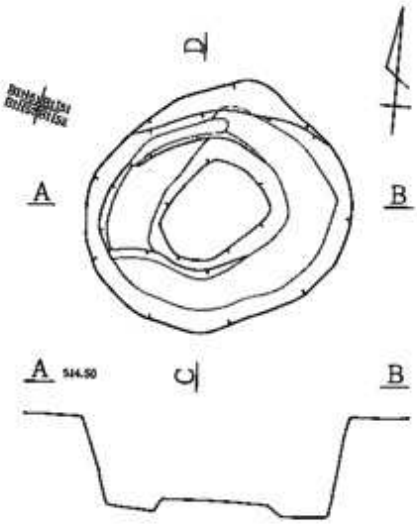
土坑5



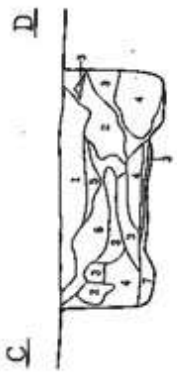
土坑6

0 2m

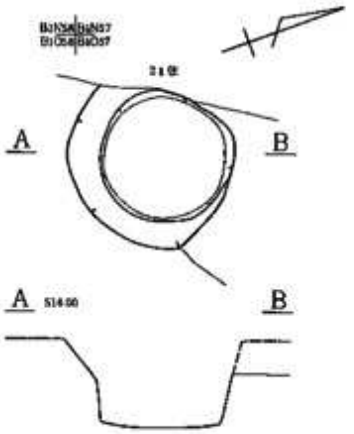
挿図49　ＴＩＺ土坑　2・3・4・5・6



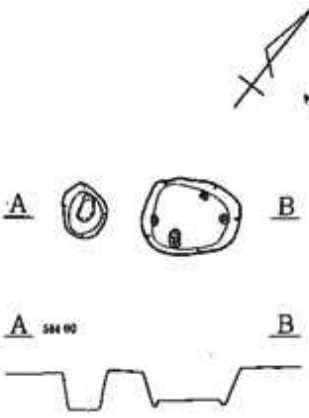
土坑7



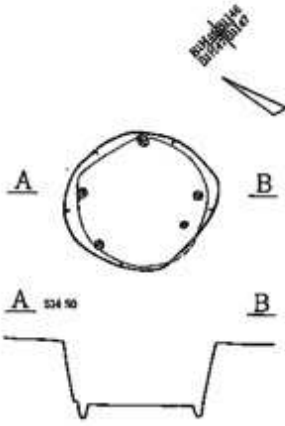
1．暗褐色土
2．黒 色 土
3．褐 色 土
4．黄 色 土
5．黄色土混り暗褐色土
6．灰褐色土
7．茶褐色土



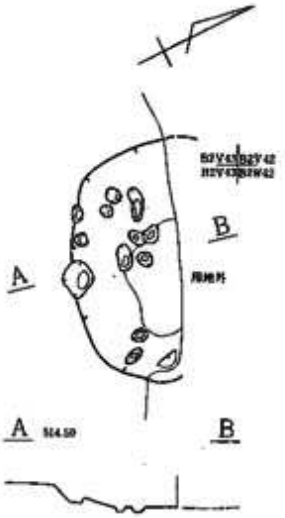
土坑8



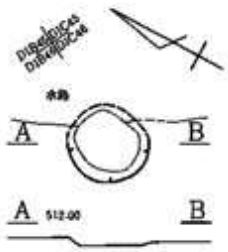
土坑10



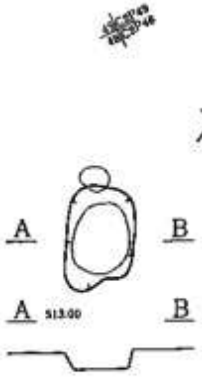
土坑11



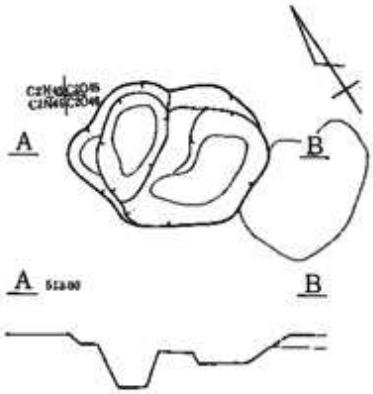
土坑12



土坑13



土坑14



土坑15

挿図50　ＴＩＺ土坑　7・8・10・11・12・13・14・15

中世のものとみられる甕の破片が出土している。

◇ 土坑 15（挿図50）

建物址８の範囲内、C2046で検出した。2.0×1.4mの不正円形をしている。底は東西の２つに別れていて、深さはそれぞれ24.39cmである。どちらかといえば二つの穴が一つになっているといった方がよい。西側のほうの壁には途中に段があるが、立ち上がりの角度は双方ともさほど急ではない。また、この土坑の東隣にも４cm程度の深さで、直径1.2m円形の落ち込みがあるが、土坑との関係は不明である。

中世のものとみられる甕の小破片が出土している。

(6) 溝

◇ 溝 1（挿図51、第17図）

センター杭No.61は旧道の近くにある。この道から西側３mのところに道と平行して北東から南西にのびる溝がある。両端とも用地外となり、また途中を新しい水路や攪乱に切られているため完掘できなかった。調査した範囲は、全長36mで、幅は広いところで１mほどである。深さは20cmほどあるが、壁はごく緩やかに掘られている。南西部の一部には、東側に10cmの段をもつ所もある。

遺物としては打製石斧（第17図１・２）が出土しているが、混入品と考えられる。水路もしくは隣地境の溝と考えられるが、時期は不明である。

◇ 溝 2（挿図51、第28図）

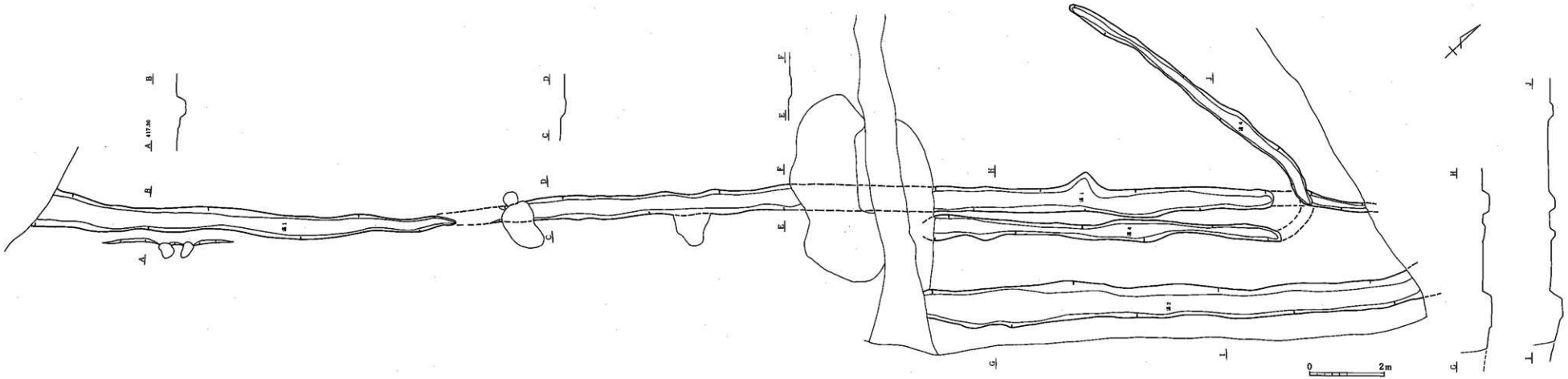
溝１の東側と旧道の間で、調査区の北側のみ道に接して検出した。道路部分が調査できなかったため全容はわからない。調査できた部分で全長13m幅1.5mのみ。北西の端は用地外に延び南西の端は新しい水路で切られ終わっている。底は東西２段になっており、西側は深さ20cm程度で幅60cmで平坦、東側は道路にかかり完掘できなかったため、調査した部分では、幅60cm深さ10cmの底がやや西側に傾斜していた。

遺物としては、『寛永通宝』の銅銭（第28図２）が出土しているが、水の流れた痕跡も認められず、時期・性格とも不明である。

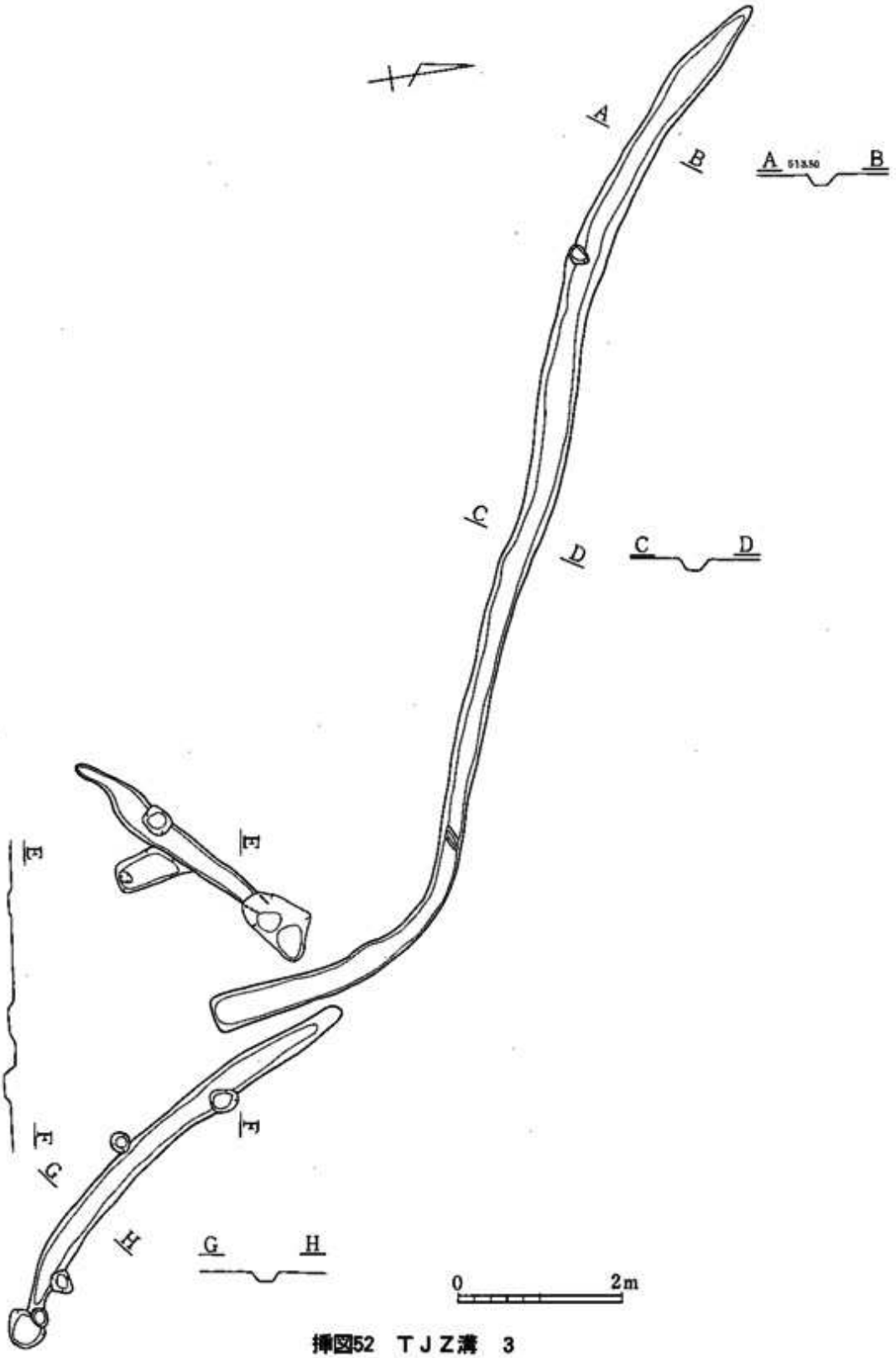
◇ 溝 3（挿図52）

調査範囲内で最も起点よりセンター杭No.59付近で検出した。３本に別れているが、一括して溝３にした。最も長いものは全長14m幅40cm前後深さ20cmでほぼ東西にのびる。それにつながる格好で北西から南東へのびる長さ５m幅cm深さcmの溝がある。この２本の溝に直交する向きに長さ３m幅cm深さcmのものもある。いずれの溝も断面形では上部のひらいたU字形になっている。

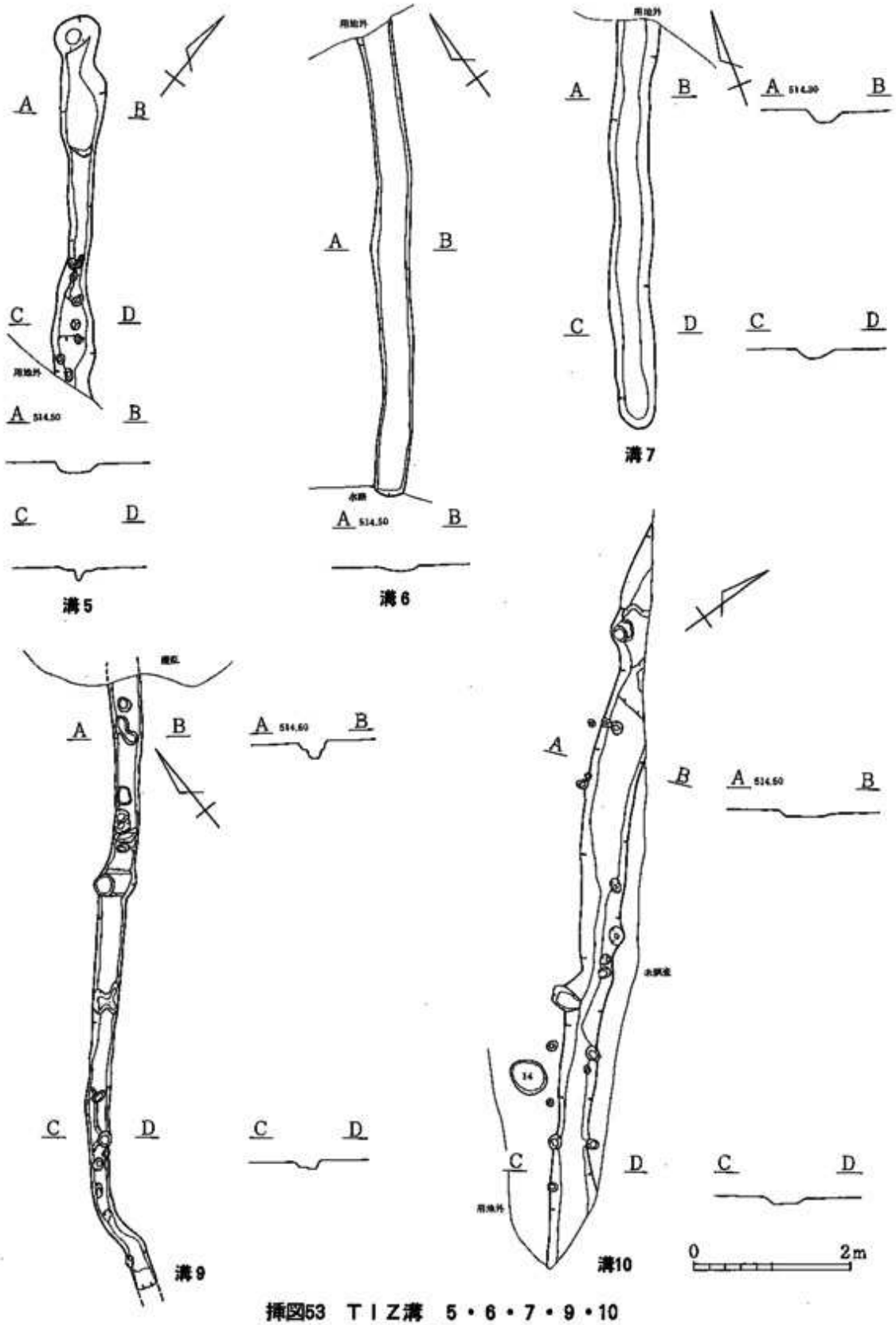
漆黒した覆土からは縄文時代とみられる土器が一片、近代の陶磁器および擂鉢が出土したのみである。時期・性格とも不明である。



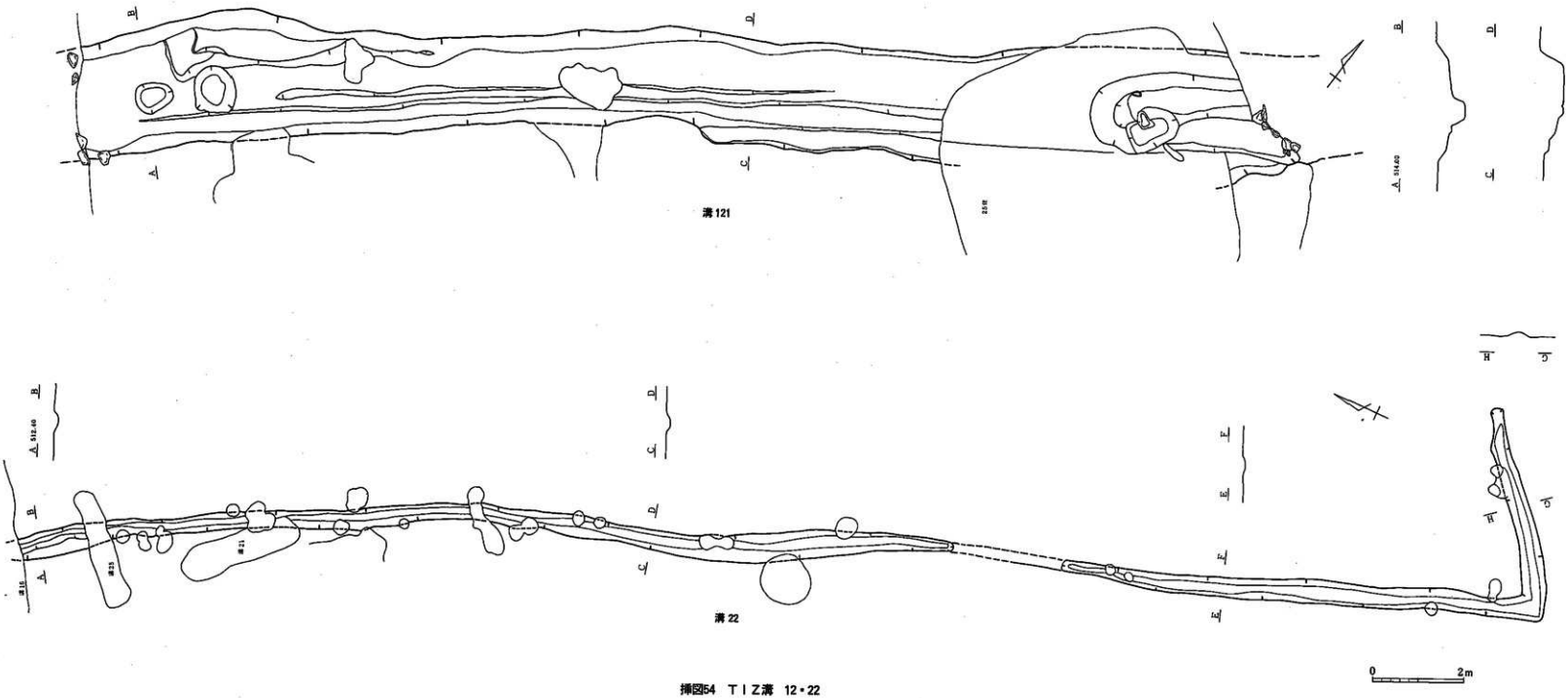
挿図51　ＴＩＺ溝　１・２・４



挿図52　ＴＪＺ溝　3



挿図53　ＴＩＺ溝　5・6・7・9・10



挿図54　ＴＩＺ溝　12・22

◇ 溝　4（挿図51）

溝1と溝2の間に白砂を覆土とする溝を確認した。この溝は溝1に平行して南西から北東へ9mほど伸びそこでおよそ90°西に向きを変え8.3m伸びたところでわからなくなる。幅は60～40cm深さ10cmほどの浅いものである。

遺物の出土はなく時期は不明だが、水路であろう。

◇ 溝　5（挿図53）

21号住居址と13号住居址の中間で南北に延びる溝を検出した。南側は用地外に続くものとみられる。調査できたのは、全長で5m、60～30cmで溝自体の深さは12～3cmにすぎないが南端（用地境）には杭穴とみられる直径10cm、深さ10cmほどのものが9個ある。

遺物の出土はなく時期は不明だが、田境の溝の可能性がある。

◇ 溝　6（挿図53）

11号住居址の上部を切っている。新しい溝と用地外までの間6mの長さがある。北西から南西にのびる幅60cm深さ9cmのごく浅い溝である。そのため、11号住居址は西側の壁の上部を削られた程度であった。

遺物の出土はなく時期・性格ともに不明である。

◇ 溝　7（挿図53）

建物址4の北東側に北東の用地外から南東に向かって延びる、長さ5m・幅50cmのほぼ真直ぐな溝である。深さは15cm程度で、壁も比較的緩やかである。

覆土からは弥生時代の土器片が1点出土しているが、後世の混入とみられるため、時期決定にはいたらなかった。

◇ 溝　9（挿図53）

B2B49には、それまでにあった住宅の関係で大きな攪乱がある。この溝はこの攪乱に切られるところから始まっている。長さは8.2mで北東から南西に向かい南の端で少し東に曲がるため、平かなの『し』の字に似ている。本来はここで終わるのではなくさらに続くものとみられるが、表土剥ぎの時深く削り過ぎたため、ここまでしか検出できなかった。深さは溝自体のものが10cm程度、底には凹凸や穴があり、一定していない。これは、水の流れた痕跡と考えられる。

遺物の出土はなく時期は不明であり、性格は水路と判断される。

◇ 溝　10（挿図53）

旧道の南側C1F57付近で検出した。土坑6はこの溝の南側になる。調査した部分では旧道と平行に北西から南東に用地外へ延びるものと推定できる。長さ9m幅60～40cm深さ5cm前後と浅い。壁は緩やかに上がっている程度である。また、壁の所々には直径15～10cm、深さ10cm前後の小さな穴がある。

遺物の出土はなく時期は不明であるが、旧水路と考えられる。

◇ 溝 12（挿図54、第17図）

センター杭№69付近は、以前農道があり、その横を南西から北東に水路が流れていた。今回の調査でこの水路は、方形周溝墓８や25号住居址を切っていたため、新しい水路ではあるが調査した。掘り方は、幅2.0ｍで深さ60cmであり、底の東側には、やや段がついている。そこに石が積まれていたものとみられる。

遺物はすべて混入品と見られるが、比較的多く出土している。（第17図３～８）

◇ 溝 13（付図６、第17・18・19・28図）

これもやはり新しく、最近まで排水路として使用されていたものである。南から北に向かって15ｍほどいったところで二つに別れる。一つは東に向きを変えるもの。もう一つは直進するものである。溝13としたのは、直角に曲り９ｍほどいったところでまた、北に向きを変えクランク状になり、センター杭№71付近で溝16に合流するものである。

底の状態からみると溝14より古いものと判断できる。北端は重なっているが南下するに連れて２本あることがわかる。底が２段になり、深さも70・50cmと差がついてくる。と同時に溝の壁が西側に広がり、中段がやや西にそれてくる。分岐点では溝13の底が溝14の底により切られているのがわかる。曲がり角には直径1.2ｍ円形で、深さ39cmの穴を中心にして比較的深い穴が続いている。この部分だけ幅が2.7ｍと広くなっている。しかし、曲がった後は、幅1.7ｍ深さ16cm程度を保ちながら東に向かっている。再び北に向きを変えるところでも幅1.8ｍ深さ10cmである。しかし、それから先の溝16に合流するまでの４ｍは未調査のため推定でしかない。

遺物については近世の陶磁器が中心である。（第17図９・10）染め付けの角鉢（第18図）は興味深い。また、石臼（第19図）、古銭（第28図３～７）も出土している。

◇ 溝 14（付図６、第19図）

直角に曲がった溝13と別れ、センター杭№71付近で再び合流するまでのＬ字形の部分を溝14とした。この溝は29号住居址を切っている。

前述したとおり溝13と重なってはいるが、その部分は４ｍにすぎず南下するにしたがい深さを増してくると同時に底には凹凸が現れる。その間約10ｍほどである。Ｌ字形の部分の全長は約10.0ｍ幅は1.7～1.4ｍ、深さは上流にあたる南端で45cm下流になる北の端で27cmである。底はほぼ平坦であるが、29号住居址を切る部分では貼り床がでてきている。この溝は住宅が立ち退くまで排水路として使用されていたものであり、しっかりと掘られているが、石は積まれていなかった。

遺物には、中世の甕片（第19図２）及び近代の灯明皿（第19図３）がある。

◇ 溝 15（付図６）

№70南幅杭付近には、地山の上に赤土が盛られていた。古老の話によるとこの地には

以前大きな屋敷があり、蔵や水車小屋もあったという。表土剥ぎの時この赤土を全部外さなかったため、この周辺の水路の位置を正確につかむことができなかった。一部外した赤土の下で確認したのがこの溝である。溝13と平行して約6m南下し東に直角に曲がる。この曲り角は径1.9m深さ70cmの落ち込みになっている。ここから東に向かって延びるごく浅い溝状の落ち込みが約7続き、これもまた北側に向きを変える。それより東は調査していないためわからないが、そのまま延びていけば、溝16に合流するだろう。溝のうち一番上流になる用地境付近では深さ30cmで壁の途中には陵があり、陵の下部のほうはほぼ垂直に立ち上がるが、陵より上部では緩やかである。大きな落ち込みを過ぎてから南北の2本に別れるが、5m程でまた一緒になる。この部分では壁がほとんどわからない。底には凹凸がかなりある。調査区境ではかなりの落ち込みが見られるものの全容がわからないため、どのように続いているか判断できない。

これらの付近一帯には大小様々な穴があるが、並ぶものがないため、建物とはしなかったが、古老の話からすれば、柱穴の可能性が高い。

◇ 溝 16（付図6、第20・21・22・23図）

C2R55で用地外から東に延びてきた幅1.9m深さ6cmの溝が北方向に直角に折れ曲がる。約8m程直進すると今度は東に向かって緩やかに向きを変え溝13（14）と合流し、そのまま用地外まで16m東進する。合流した時点で幅も2.2mに広がり、深さも約50cmと深くなる。合流地点からは排水路としてごく最近まで使用されていたもので石積みがなされていた。したがって一番最近まで使われていた排水路はセンター杭No.71までは溝14でセンター杭No.71からは溝16ということになる。

この溝からは多岐にわたる遺物が出土した。とくに近世の陶磁器はその数が多い。（第20図1～7、第21図1～9、第22図1～15、第23図1～6）

◇ 溝 17（付図6）

C2P47付近で溝16と別れて、おおよそS字形に曲がりながら31号住居址を切り、用地外へ流れる。幅2～1.2m程度深さは15cm前後とあまり深くない。底には凹凸があり水の流れたことを示している。

◇ 溝 18（付図6）

C2U51付近から北西へ向かい、溝16につながる。長さは8mあるが、北側に20cm程度ではあるが落ち込みの連続があるため溝の幅を確定できず、推定ではあるが1.0m程度だろう。深さは18～9cmと浅い。壁は比較的緩やかであり、柱穴で切られている部分がある。 時期・性格とも不明である。

◇ 溝 20（挿図55）

調査区の東の隅で検出した、南北にのびる真直ぐな溝である。南側は道路に北側は用地外につながるため、調査できた範囲で、全長6m幅80cm深さ5cmとごく浅い溝である。

出土遺物がないため、時期・性格は不明である。

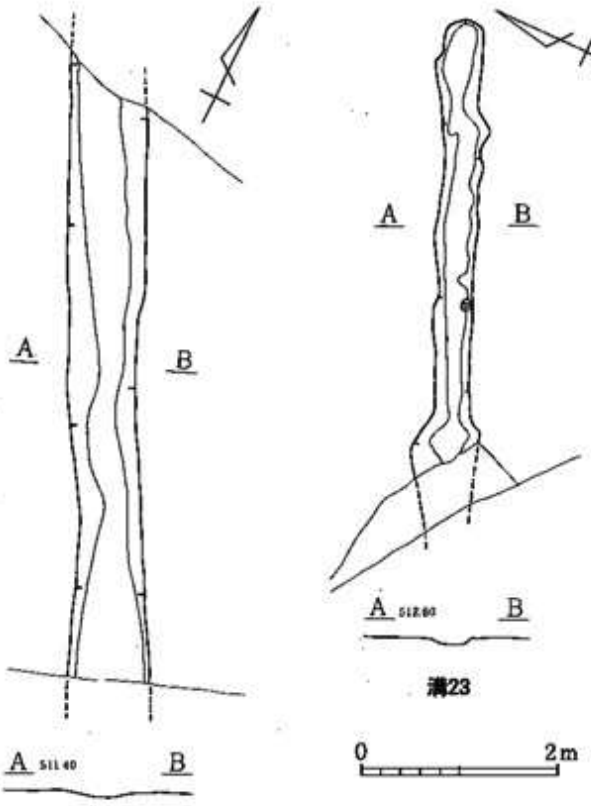
◇ 溝 21（挿図56）

C２V46付近で検出した溝としたが、形態からみれば土坑としてもかまわないだろう。東西に2.7mと長く、幅は60cmである。東側で竪穴２と壁を接し、北では溝22を切る。深さは中央部分が一番深く45cmある。底はほぼ平ではあるが、中央に向かってほんのわずか傾斜する。壁は垂直に立ち上がっているが、３ヶ所ほど穴により切られている。

出土遺物がないため、時期・性格は不明である。

◇ 溝 22（挿図54）

溝16から南東に向かってほぼ真直ぐに延び、建物址10と11の間で直角に北東に折れ曲がる、全長38mの溝である。途中溝25、21に切られ、竪穴２と壁を接し、建物址９、11を抜けている。幅はおおむね30cmと一定であり、深さも５cm程度であまり差がない。



挿図55 ＴＩＺ溝 20・23

出土遺物がないため、時期・性格は不明である。

◇ 溝 23（挿図55）

溝22が直角に曲がる地点の南に用地外から東に延びる溝である。用地境は撹乱によりはっきりしないが、全長10mで幅90～60cm深さ９～６cmとごく浅く、壁は緩やかな溝である。 出土遺物がないため、時期・性格は不明である。

◇ 溝 24（挿図56）

溝16から南東に向かってほぼ真直ぐに延び溝22と平行して細い溝が２本ある。これらの溝は２mの間隔を保ち4.4mいったところでそれぞれが直角に曲がり北東に向きを変えて１本になる。南側に位置するものは全長7.5m北側のものは5.5mであり、一緒になる部分は1.0mと短いが一つの溝とした。幅は北側が若干太く30cm南側は20cmである。

2本が一緒になるところでも30cmである。深さは北側が7cm、南側が3cmいずれもごく浅い。

出土遺物がないため、時期・性格は不明である。

◇ 溝 25（挿図56）

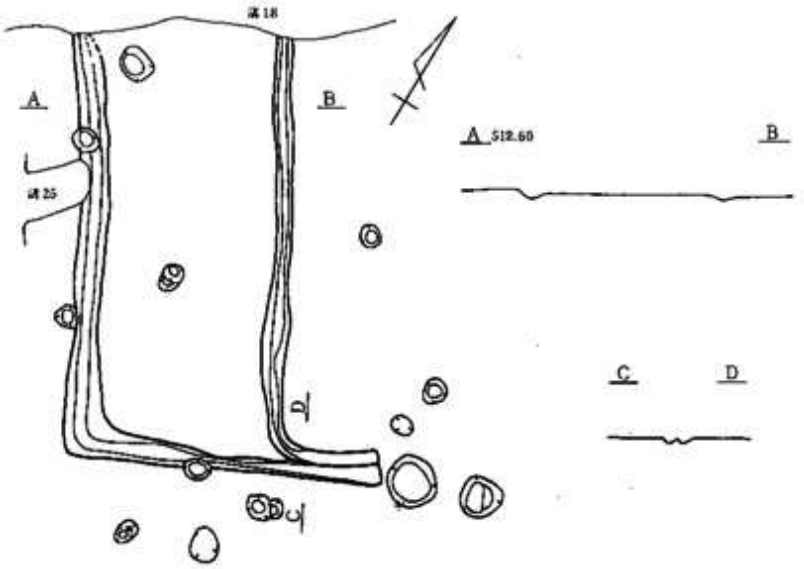
C2U46付近で検出した溝としたが、溝21と同様で形態からみれば土坑としてもかまわないだろう。南北に2.7mと長く、幅は50cmである。位置的にみれば、溝21と直交する方向にある。溝22を、また北端で溝24を切る。深さは22cmである。底はほぼ平ではあるが、北に向かってほんのわずか傾斜する。壁は垂直に立ち上がっている。

出土遺物がないため、時期・性格は不明である。

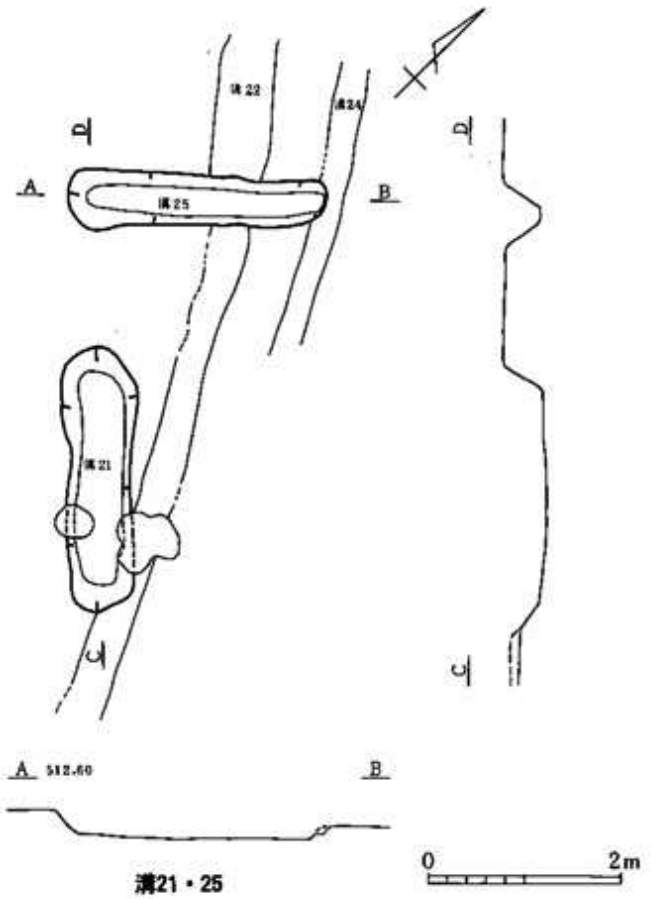
◇ 溝 26（付図6）

C2R53付近で溝16と平行して4.2m延びる溝である。溝16が向きを変えるためこの溝は溝16と交わる。幅50cm深さ20cmで北側の壁は段をもっており、断面形はV字形に近い。途中に70×50cm深さ22cmの長方形の掘り込みがあり溝を切っている。また、この溝の始まるC2R53付近でも、穴に切られている。

出土遺物がないため、時期・性格は不明である。



溝24



溝21・25

挿図56　ＴＩＺ溝21・24・25

4）そ の 他

(1) 柱 穴 群

① A区柱穴群（付図７）

調査区全域に認められるものであるが、建物址として把握したもの以外は、大きさ・形・深さ・覆土の色等は様々であり、さらに耕作や撹乱により破壊されたものもあると考えられるため、一概に建物址ではないと断言できないが、間隔・配列等から掘立柱建物址の柱穴とはしなかった。

柱穴内からの遺物の出土は少ないが、縄文時代・弥生時代・中世のものがある。

② B区柱穴群（挿図57）

掘立柱建物址４・５・６を検出した付近で、砂を覆土として持つ直径10cm前後の柱穴を多数検出した。しかし、間隔・配列からみて掘立柱建物址の柱穴とできなかった。

柱穴からは磁器片が１片出土しただけで時期の決定にはいたらなかった。

③ C区柱穴群（挿図58）

19号住居址と溝12との間にまとまって検出できた。しかし、大きさ・形・深さ・覆土の色等が様々であり、建物に関係した柱穴ではないだろう。

柱穴からの遺物の出土はなかった。

④ D区柱穴群（付図８、第24図）

D区にある新しい水路の北側に多数の柱穴がある。とくに溝16の東側から建物址９までの間には大きさ・形・深さが様々な柱穴がある。新旧関係は把握できないが、切り合うものが多く、溝状につながるものさえある。中には底部に石を持つものもあり、掘立柱建物址の柱穴の可能性の高いものがある。しかし、配列が揃わず、掘立柱建物址の確定はできなかった。

柱穴の中からは、竪穴３から出土しているものと同系統の甕の破片（第24図３～６）が出土したものもある。

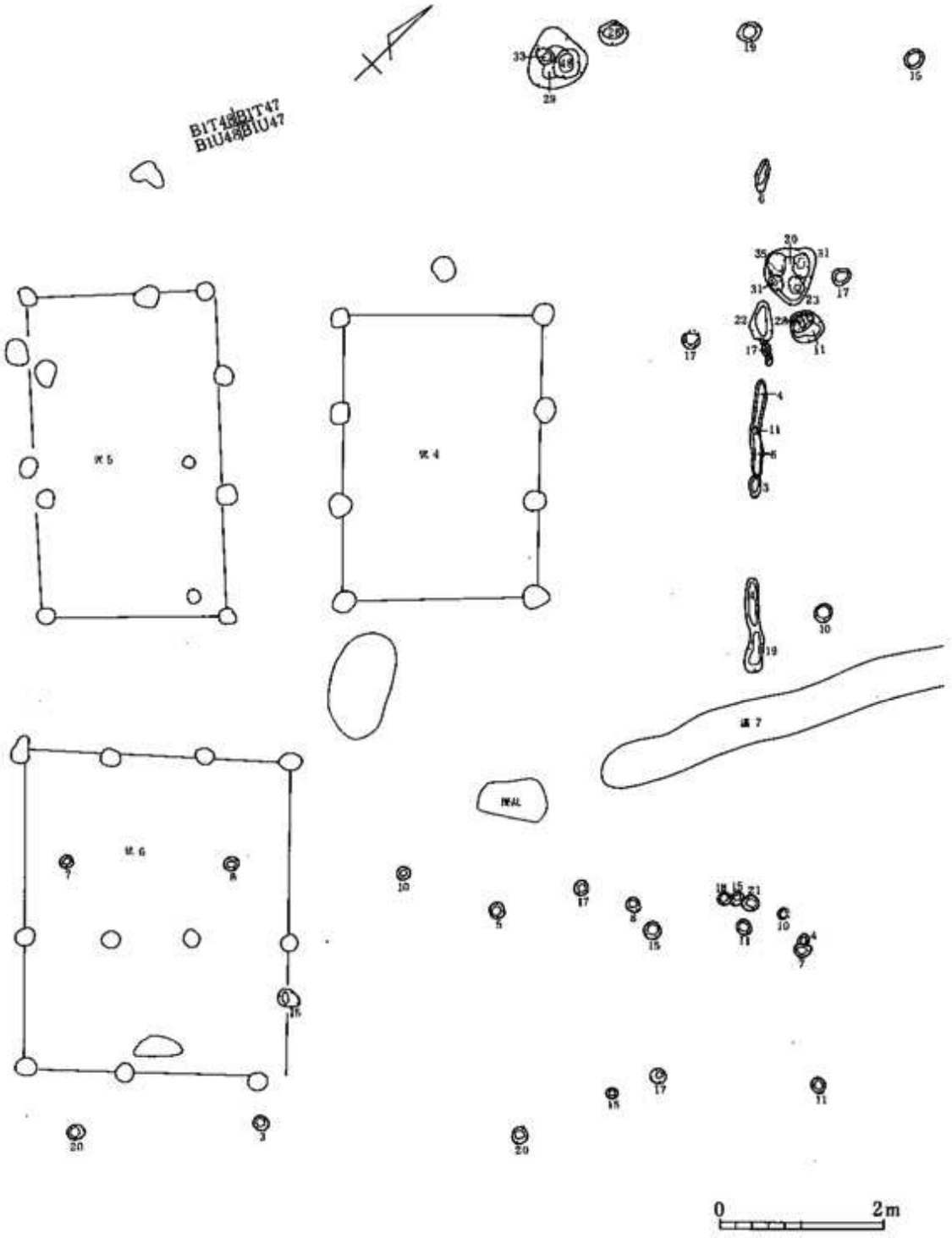
(2) 遺構外出土遺物（第23・24・25・26・27図）

今回の調査により出土した遺物のうち、住居址等の遺構に結びつかないものは調査区全体から出土している。しかし、本来はなんらかの遺構内に所在したものと推測される。時代的には縄文時代・中世が多い。

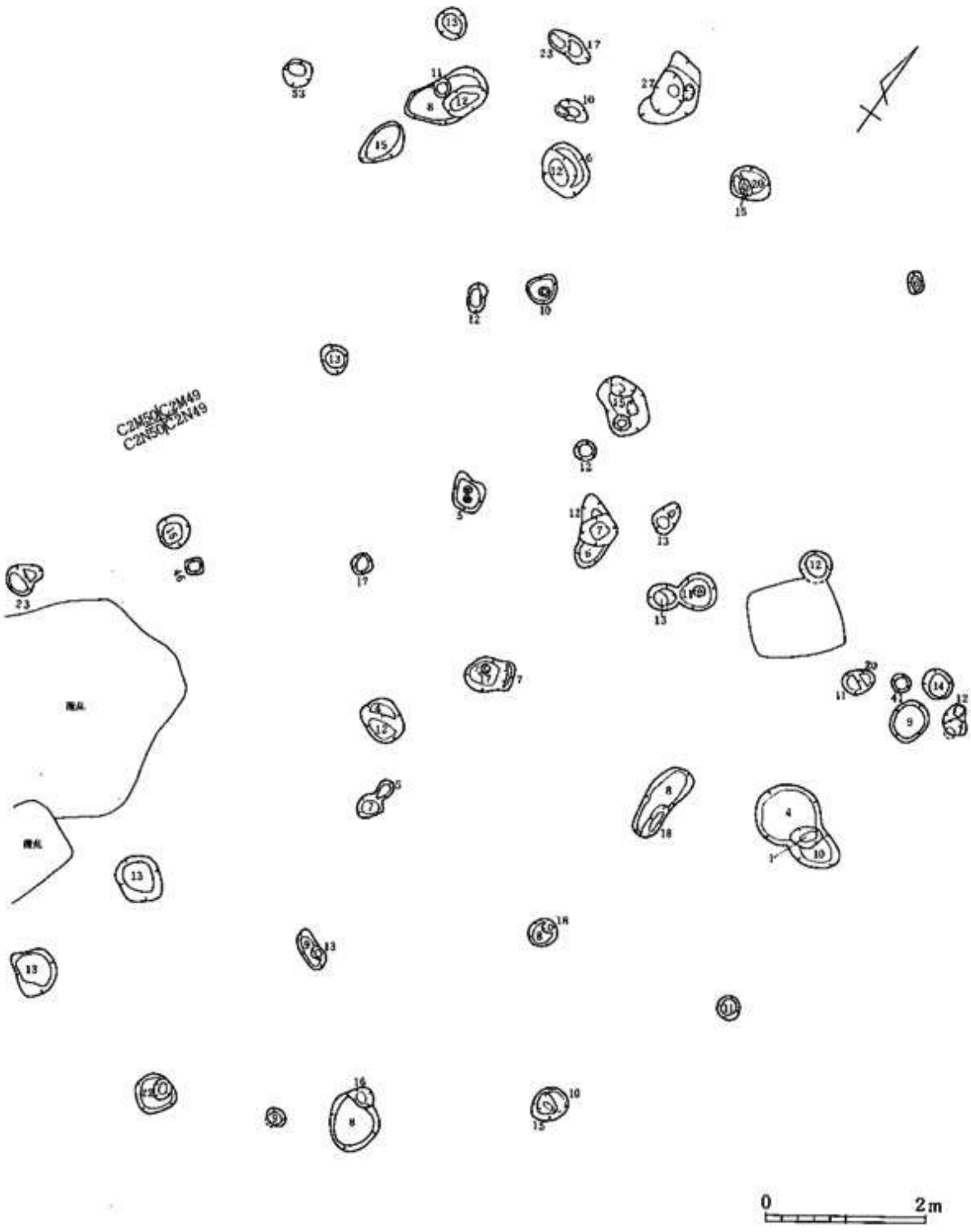
土器・陶磁器としては、縄文時代中期の土器が中心で、そのほとんどが深鉢と見られる小破片である。（第23図７～13）中世としては、甕のほか、摺鉢（第24図２）があり、その他に近世の茶碗（第24図７）などもある。

石器としては、打製石斧（第24図10～12、第25図１～12、第26図１～６）が多いが時代区分はできなかった。縄文時代と見られるものは黒曜石製の石鏃（第27図１）・硬砂岩製

の石錘（第27図４）がある。また弥生時代のものと考えられるものは、磨製石斧（第26図７）、有肩扁状形石器（第26図８・９）、石包丁（第26図10・11）がある。その他いくつかの石器も出土している。



挿図57　ＴＩＺ　Ｂ区柱穴群



挿図58　ＴＩＺ　Ｃ区柱穴群

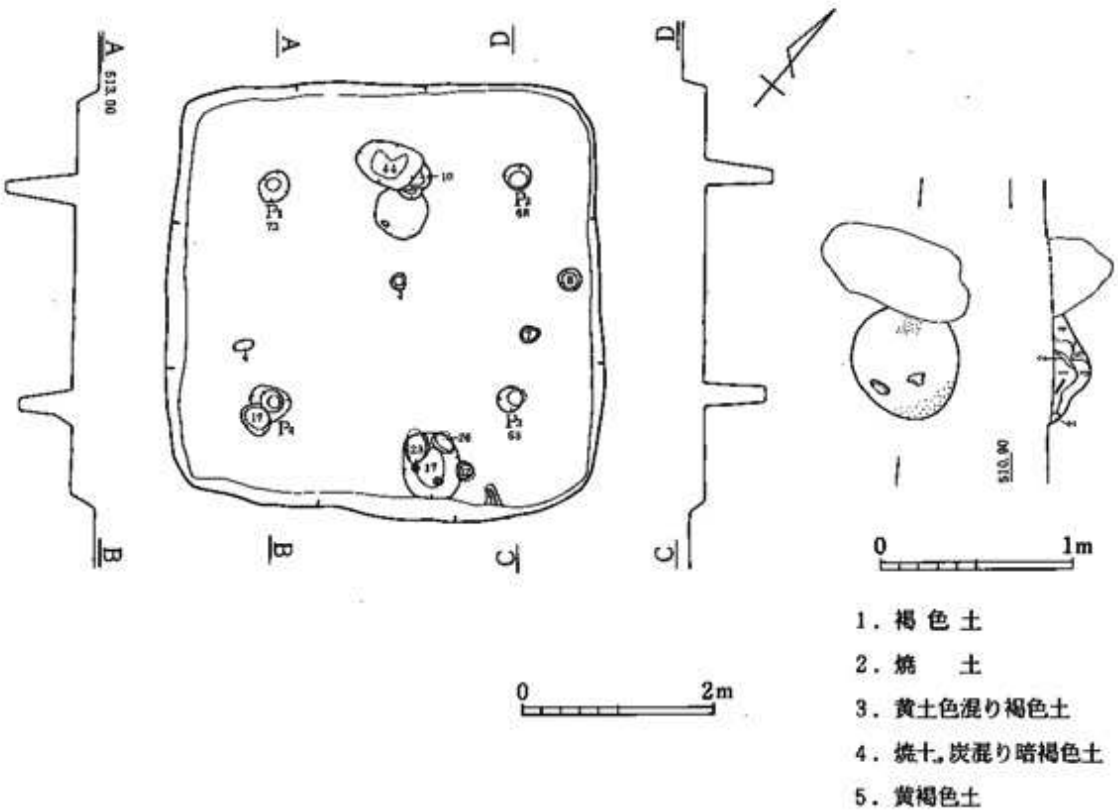
2．一色遺跡

1）弥生時代

(1) 住 居 址

◇ 3号住居址（挿図59、第29図）

149グリッドを中心に検出した。溝址7の西側に位置する。東西4.5×南北4.4mの方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN40.5° Wを示す。壁高は15～26cmを測り、東・北壁は上部まで急な立ち上がりが良好な状態で確認されたのに対し、南・西壁側は緩やかな立ち上がりを示す。周溝はない。床面はやや軟質である。主柱穴は4本確認され、不整円形を呈し径25～35cmを測る。深さは54～73cmとばらつく。東壁中央直下の穴は100×140cm、深さ35cmを測る不整楕円形の掘り込みで、貯蔵穴と考えられる。周縁に土手状の高まりがある。炉址は北側の柱穴のほぼ中央に設けられ、55×60cmの不整円形を



挿図59 ＩＳＫ 3号住居址

呈する。南側が特によく焼けており周辺部に焼土・炭の分布がみられる。炉縁石を持つ地床炉と推測され、壷の口縁部部片が内部より出土した。

出土遺物は底部のみを欠くほぼ完形の甕（第29図１）・口縁部のみの壷（第29図２）等が出土している。石器は有肩扇状形石器（第29図３）等があり、出土量はやや少ない。

遺物から本址の所属時期は弥生時代後期に比定される。

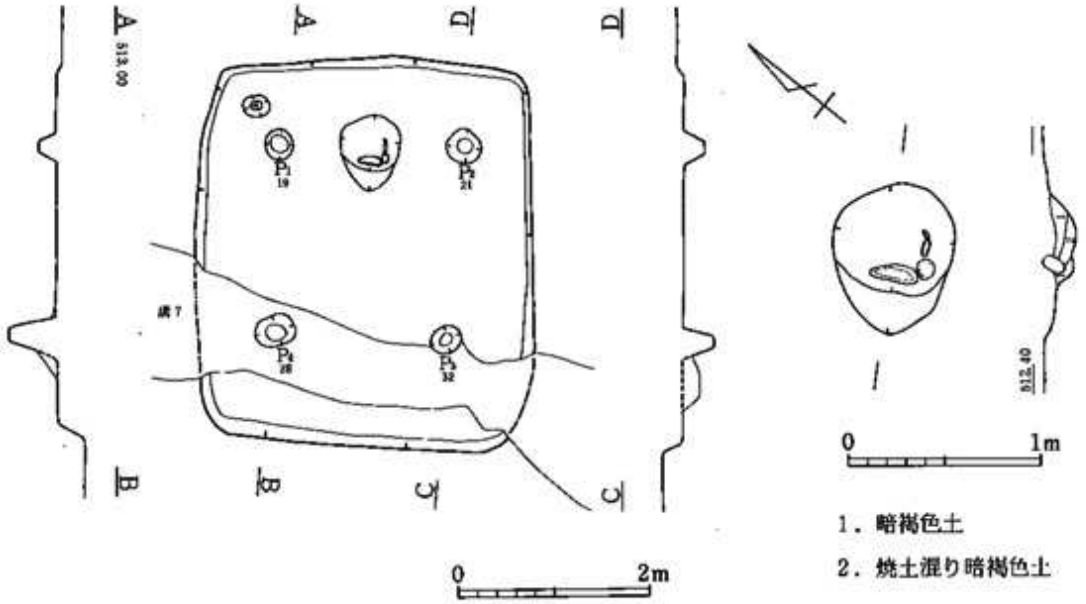
（馬場保之）

◇　４号住居址（挿図60、第29図）

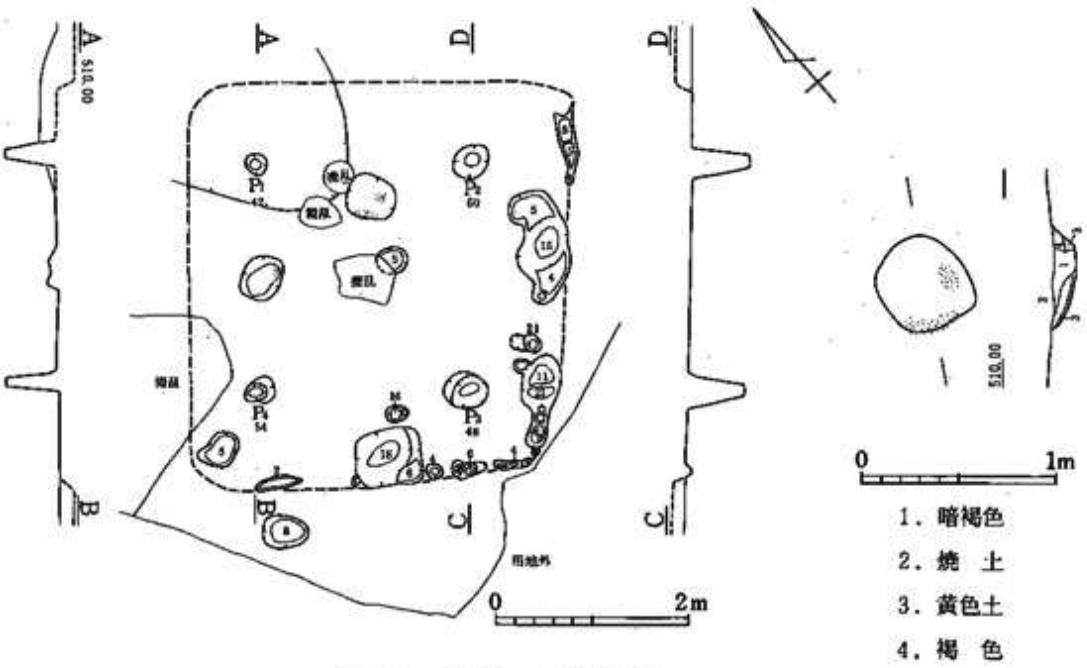
№83センター杭付近、ＤＭ50を中心に検出した。4.0×3.5ｍの隅丸方形で主軸方向はＮ52°Ｅを示している。西側から南側にかけて溝７により切られている。床面はほぼ平坦で、貼り床が施されている。壁は西側が28㎝とかなりしっかりしているのに対し、東側は７㎝とごくわずかしか残っていない。主柱穴はＰ₁～４で、Ｐ₃・Ｐ₄は溝７に切られてはいるが確認できた。掘り方はいずれも30㎝の円形であり、深さはＰ₃が32㎝Ｐ₄が28㎝と他の柱穴が20㎝前後であるのに比べると深く掘られている。炉はＰ₁とＰ₂の中間に位置する、炉縁石を伴う地床炉である。

遺物としては、土器はおおかた破片であった。石器としては硬砂岩製の有肩扇状形石器（第29図４）および硬砂岩製の石匙（第29図５）がある。

弥生時代後期と見られる。



挿図60　ＩＳＫ　４号住居址



挿図61　ＩＳＫ　５号住居址

◇　５号住居址（挿図61、第29図）

ＤＲ58で貼り床らしきものを確認したため、付近を見直してみると焼土をもった穴や短いが溝状の掘り込みも認められたため、住居址とした。この付近は水田の造成のため地山まで削平が及んでいた。そのため、この住居址は壁が完全に削られている。その他にも耕作と思われる攪乱があり貼り床の残りも良くない。壁はないが周溝の一部と入り口施設が確認できたのでおおよその規模は4.2×3.9で主軸方向はＮ41°　Ｅと判断した。主柱穴はＰ₁～Ｐ₄でいずれもかなりしっかりと掘られている。Ｐ₂とＰ₃は直径約40cmでＰ₁・Ｐ₄が20cmであるのに比べればかなり大きい。北東の壁のあったと思われる所に、溝と呼ぶには多少太く、穴と呼ぶには多少長い掘り込みがある深さは21～４cmである。また、北角から西に向って幅10～６cm深さ６～２の浅い溝が切れ切れではあるが、残っている。その中間に70×60cmの方形で深さ18cmの穴がある。入り口施設と考えた。したがって、炉はＰ₁とＰ₂の中間にある直径25cmで焼土を伴う穴がそれであり断ち割りの結果、地床炉であることがわかった。

遺物は輝緑岩の敲打器（第29図６）以外はほとんど出土しなかったが、弥生時代後期と考えられる。

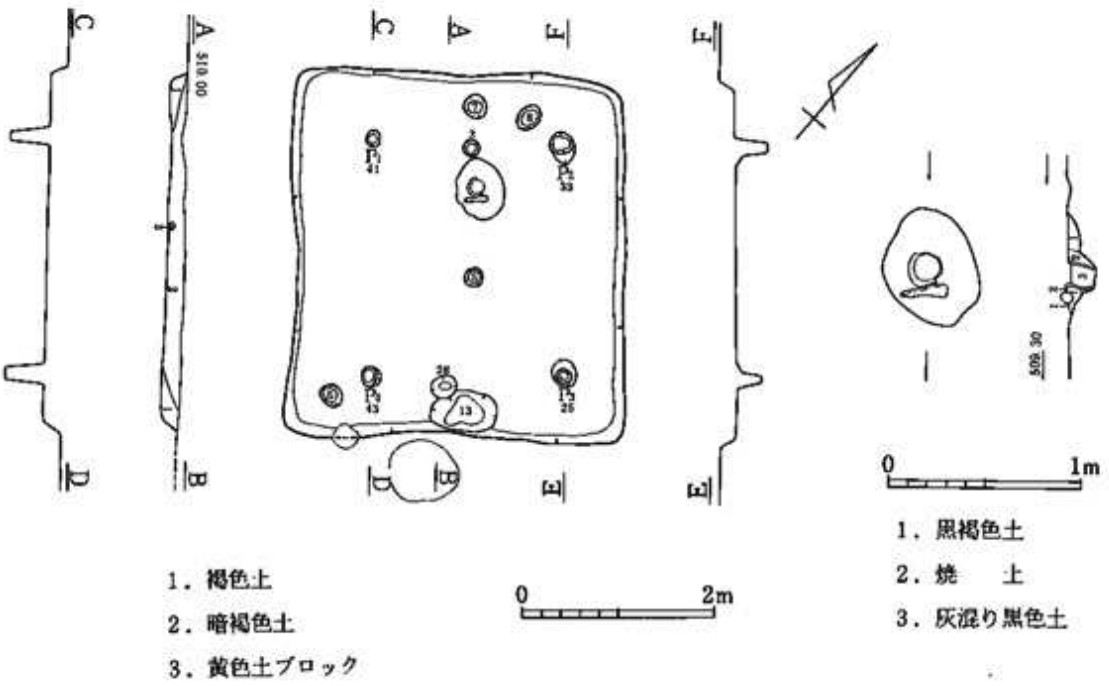
◇　６号住居址（挿図62、第30図）

ＤＴ47を中心に検出した住居址である。ここは、旧道の北側にあたり、３・４号住居址を検出した地表面との差は３ｍもある。3.8×3.4ｍの隅丸方形で、主軸方向はＮ37°

Wを示している。床面はほぼ平坦で全面にしっかりとした貼り床が施してある。壁高は19～15cmで比較的急角度で立ち上がっている。北東の壁中央には入り口部分と考えられる、直径20cm深さ28cmの穴を伴う60×40cmの半楕円形で深さが13cmの穴がある。主柱穴はP₁～P₄であり、炉はP₁とP₂の中間にあり、炉縁石を伴う土器埋設炉である。床には主柱穴のほかに間仕切りと考えられる、浅い穴が5つあるのみ。

遺物としては、炉に用いられていた甕（第30図1）のほか壺・甕の破片が数点出土したのみで、石器としては有肩扇状形石器（第30図2～4）があった。

この遺構の時期は弥生時代後期である。



挿図62　ＩＳＫ　6号住居址

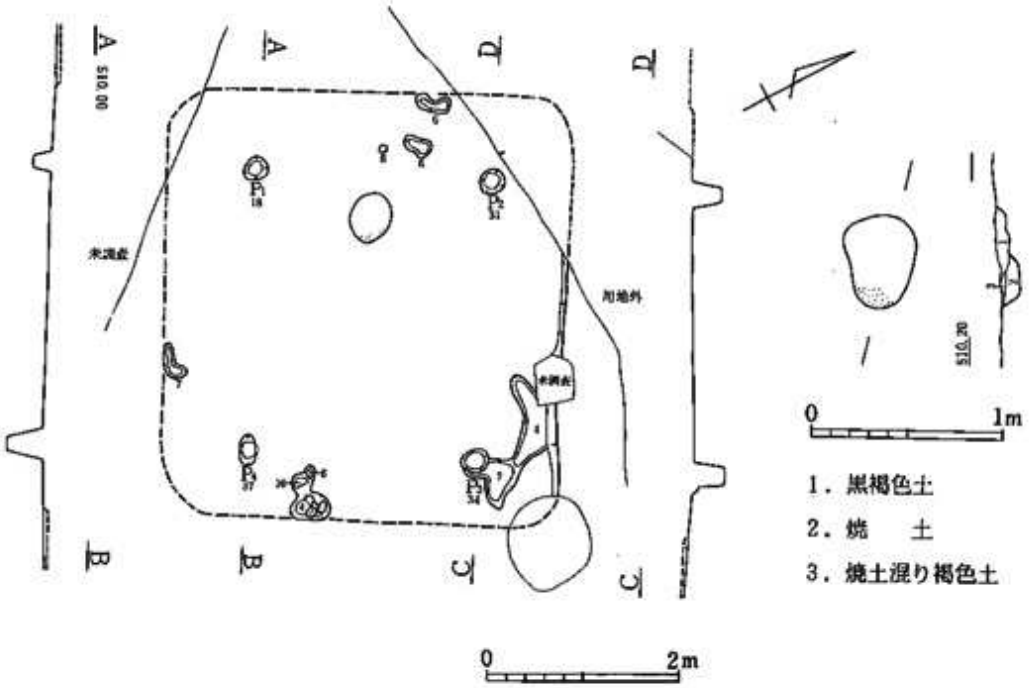
◇　7号住居址（挿図63、第30図）

ＤＯ45付近で焼土をもつ穴と貼り床らしきものを確認したため、周囲の検出を再度行なった結果、焼土を中間にして柱穴が2個わかったため、貼り床の残っている部分を住居址とした。規模は推定であるが、4.4×4.1mの隅丸方形であろう。主軸方向は入り口施設と炉の位置が確認でき、N37° Wを示すことはわかった。壁は北東にごく一部が残るのみでその以外は、水田の造成時に削られたものと考えられる。床はほぼ平坦で、全面に貼り床が施してある。主柱穴はP₁～P₄であり、P₁が楕円形で、やや斜めに掘られている以外は、円形をしている。主柱穴P₄の東に不整形ではあるが、50×40cmで深

さ16cmの穴があり、覆土に石、石器が含まれており、入り口施設と考えた。P₃の西に長さ30cm幅10cmの浅い掘り込みがある、また、同様のものがP₄の西にある。これらの箇所は推定で壁と考えられるため、周溝の一部と見られる。また、P₃の北側に不整形の浅い落ち込みがあるが、直接住居址に付随するものではないと判断した。炉はP₁とP₂の中間に位置する地床炉である。

遺物の出土は、土器はなく、石器は硬砂岩製の有肩扇状形石器（第30図５）があるのみである。

この遺構の時期は弥生時代後期と見られる。



挿図63　ＩＳＫ　７号住居址

(2) 方形周溝墓

◇ 方形周溝墓１（挿図64）

№88南側幅杭の北側、ＦＫ56付近で検出した。用地境や工事実施の関係で調査できたのは、北側の約半分と考えられる。規模、主軸方向および主体部の位置などは不明。調査できた6.2×2.4ｍの範囲での周溝の幅は80cm深さ30cmで比較的急角度で掘られており、

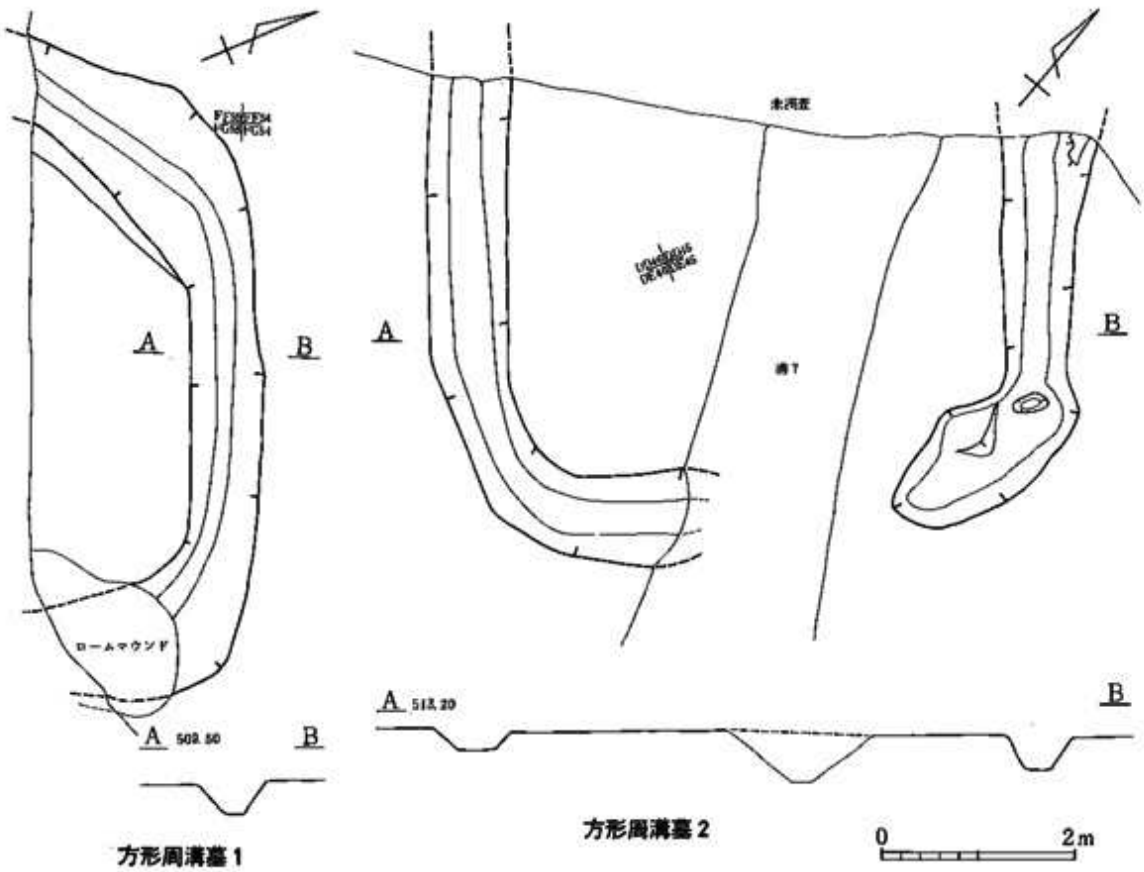
断面形はV字形に近い。なお、東端では下部にあったロームマウンドまで掘ってしまったため原形をとどめていない。

遺物は出土しなかった。

◇ 方形周溝墓２（挿図64、第30図）

No.82北側幅杭の南側で検出した。西側が水路で調査できないため、全容はわからない。また、溝７が２本の周溝の真ん中を切っている。調査した範囲は6.6×4.6mである。北側の周溝は全長４m幅1.0～0.7mで深さは20cm程度、南端が曲り『J』字形になる。南側は『L』字形に曲がっており、端部を溝７により切られている。全長は約６m幅0.8m深さ20cmである。北側の周溝が溝７と切り合わず終わることから、この部分が土橋になるものと考えられる。主体部は確認できず、主軸方向はわからなかった。

遺物は周溝から打製石斧（第30図６）の出土のみであった。



挿図64　ＩＳＫ方形周溝墓１・２

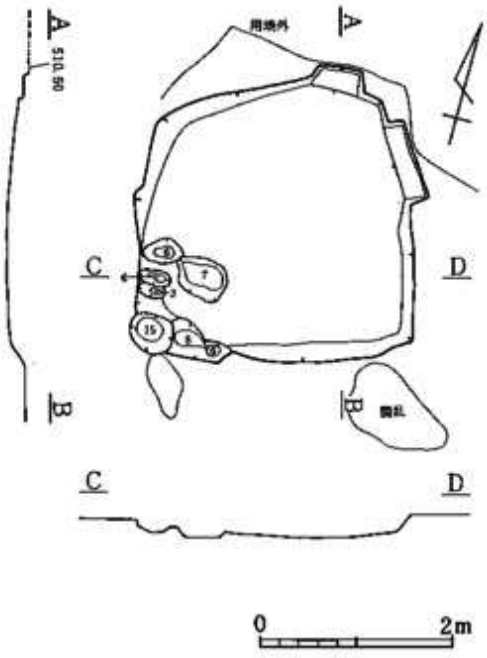
2）中世～近代、及び時期不明遺構

(1) 住 居 址

◇ 1号住居址（挿図65）

ＣＹ44を中心に検出した2.8ｍの正方形のものである。調査の結果、床が三和土になっていたため、住居用としたが、柱穴及び火の使用をうかがわせる痕跡もなく、住居址ではない可能性が強い。床面は壁際から中央に向かって、やや傾斜している。が南側ほど残存状態は悪い。壁は穴により切られている南側以外は残っていて、高さは1816㎝で比較的緩やかに立ち上がっている。北角には張出し部が両側にあり、若干ではあるが２段になり、壁の高さは10㎝程度しかない。周囲でも柱穴は確認できなかった。

遺物としては、覆土上部から近代のものと思われる陶磁器の小片が出ているが時代の特定にはいたらなかった。



挿図65 ＩＳＫ１号住居址

◇ ２号住居址（挿図66）

№83北側幅杭付近、ＤＳ44で三和土状になった部分を確認したため、住居址とした。この三和土の範囲は3.0×2.0ｍであるが、一部は用地外に広がり、一部は耕作による攪乱を受けている。壁が完全に削られている。三和土の床を囲むようにして外側に柱穴があった。Ｐ₁～Ｐ₃がそれであり、主柱穴と考えた。Ｐ１は途中に陵を持つ30㎝の楕円形で47㎝と深い。Ｐ₂は40㎝の不整と円形で斜めに33㎝掘られている。Ｐ₃は50㎝の円形で途中に陵があり、40㎝の深さがある。形態からいえばもう１本の柱は用地外にあるものと考えられる。

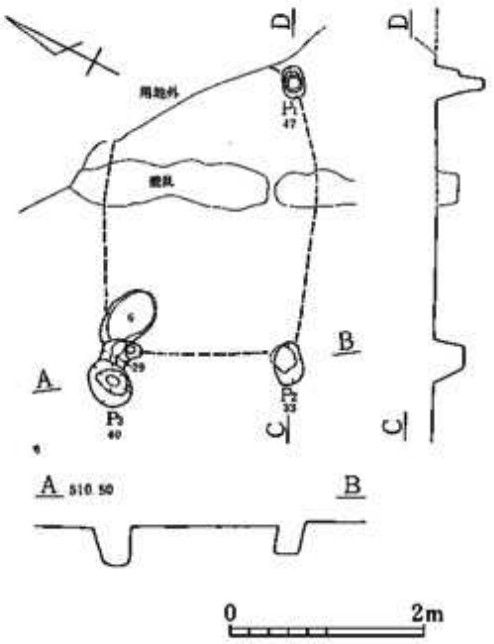
遺物が出土しなかったため、時期特定することはできない。

(2) 方形竪穴

◇ 方形竪穴1（挿図67、第31図）

ＣＯ46を中心に検出された。東西170cm×南北200cmの不整方形を呈する竪穴で、深さ120cmを測る。北側はさらに30cm程低くなる。北壁上段はやや内側に入り込む。南西隅を除き、壁直下に柱穴が痕跡的に検出された。埋土はロームブロックを含む土で、一気に埋め戻された状態であった。

遺物は近世の陶器片と砂岩の砥石（第31図1）及びチャートの剥器（第31図2）が出土したのみであり、時期・性格等は不明である。　（馬場保之）



挿図66　ＩＳＫ2号住居址

(3) 土　　坑

◇ 土坑1（挿図68）

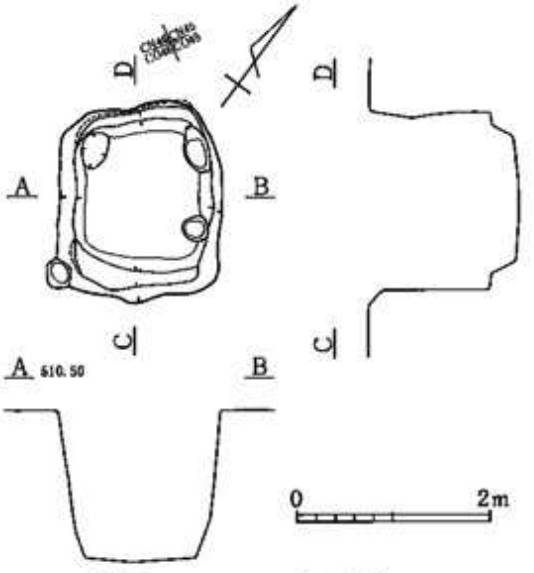
溝6の北側ＣＰ48で検出した、砂を覆土とする0.9×0.7mの楕円形のものである。深さは39cmあり、底は中央がごくわずか膨らんでいる。壁は比較的急角度で立ち上がっている。

遺物は陶磁器の破片が2点出土したのみで、時期・性格等は不明である。

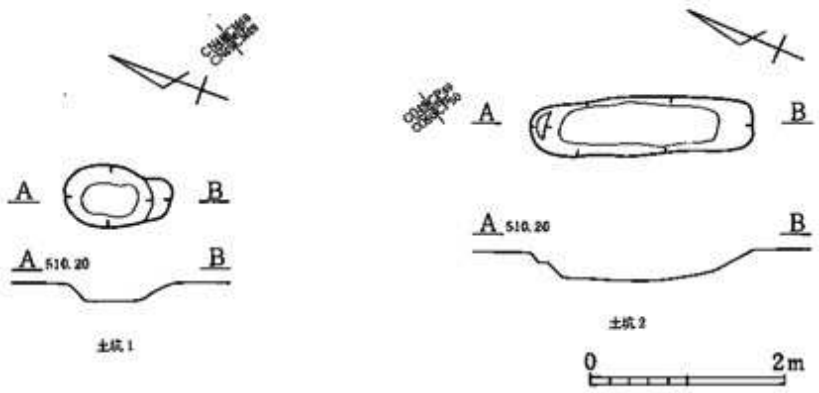
◇ 土坑2（挿図69、第31図）

溝6の南側ＣＰで検出した2.2×0.6mのほぼ南北に長い掘込みである。底は中央にやや窪み、深さは中央で33cm、両側がそれよりいくぶん浅く25cm前後である。壁はほぼ垂直に掘りこまれている。北側では中段を持つ。土坑1及び土坑2の覆土は、溝6と同じ砂であることから溝6と同時に埋まったと見られる。

遺物は陶器の小破片と敲打器（第31図3）が出土したのみで、時期・性格を特定することはできない。



挿図67　ＩＳＫ　方形竪穴1



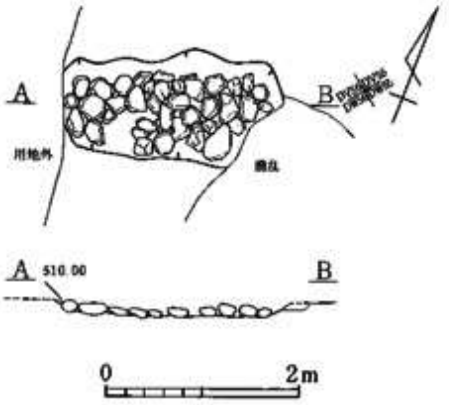
挿図68　ＩＳＫ土坑１・２

(4) 石敷遺構

◇ 石敷遺構（挿図69）

No.84南側幅杭付近では、集会所建設に伴う造成工事が実施されていた。ＥＡ55に2.0×0.8ｍの範囲で石が並んでいた。北東の隅では一部攪乱を受け、南西側はまだ続く可能性もあるが調査できなかった。石は2.2×1.0ｍの範囲を６cmほど掘り窪め、20cm前後の石を平らに敷き詰めた格好になっている。

遺物が出土しなかったため、時期は不明である。排水施設の可能性も考えられる。



挿図69　ＩＳＫ石敷遺構

(5) 溝

◇ 溝　１（挿図70）

ＦＢ49付近で連続する小さな穴を検出した。この穴の列はＥＷ54～ＦＷ45までほぼ西から東に向かって27ｍ続くが、これらは水流による凹凸が穴となって残ったものと考えられるため、溝とした。壁は、表土剥ぎの時に深く削り過ぎたため残らなかったものと考えられる。幅は推定で50cm前後、深さはわからない。

遺物の出土は小破片ではあるが弥生式土器が数点出ている。時期の特定まではいたらなかった。

◇ 溝　２（挿図70、第31図）

センター杭No.88付近からNo.90南側幅杭に向かって、延びる幅1.0ｍの溝である。方角的にいえば、ほぼ西から東になる。調査した部分で全長23.5ｍ東側は工事車両通行用地のため調査できなかったが水路に切られているものと見られ、西側はセンター杭No.88付

近が表土剥ぎの時に深く削り過ぎたため溝が残っていない。深さはおおむね40cm前後と比較的深い。壁は北側は南側にくらべてやや緩やかな立ち上がりをしており、南側は途中に陵があるにもかかわらず、急角度である。

漆黒の覆土からは高坏の脚部（第31図４）のほか、甕の破片、中世の甕の小破片、摺鉢等が出土しているが、時期の特定にはいたらなかった。

◇ 溝 4（挿図70）

№89南側幅杭の南側は用水路が流れていた。その用水路の南側に隣接する格好で検出した。ほぼ南北に延びるこの溝も用水路を使用していたため、調査できない部分があり、17mを調査したにすぎなかった。幅は用地外などにかかりわからない。底までは25cmの深さがあり部分的ではあるが、中段を持つ部分がある。壁はほぼ垂直に掘られている。

遺物の出土はなく時期は不明であるが、旧水路と考えられる。

◇ 溝 5（挿図71）

１号住居址と２号住居址の中間で確認した。ＣＳ49付近から始まり南東に向かって用地外まで続く。ＣＵ44付近では大きな穴に切られている。全長11.4m幅は60～40cmでほぼ真っ直ぐ延びている。深さは北西側で２cmとごく浅く、ＣＴ48付近で段をもちそれより南東側は10cm前後とやや深くなる。底は中央が壁際よりやや低くなっている。壁は比較的緩やかな立ち上がりをしている。

遺物が出土しなかったため、時期・性格は不明である。

◇ 溝 6（挿図71）

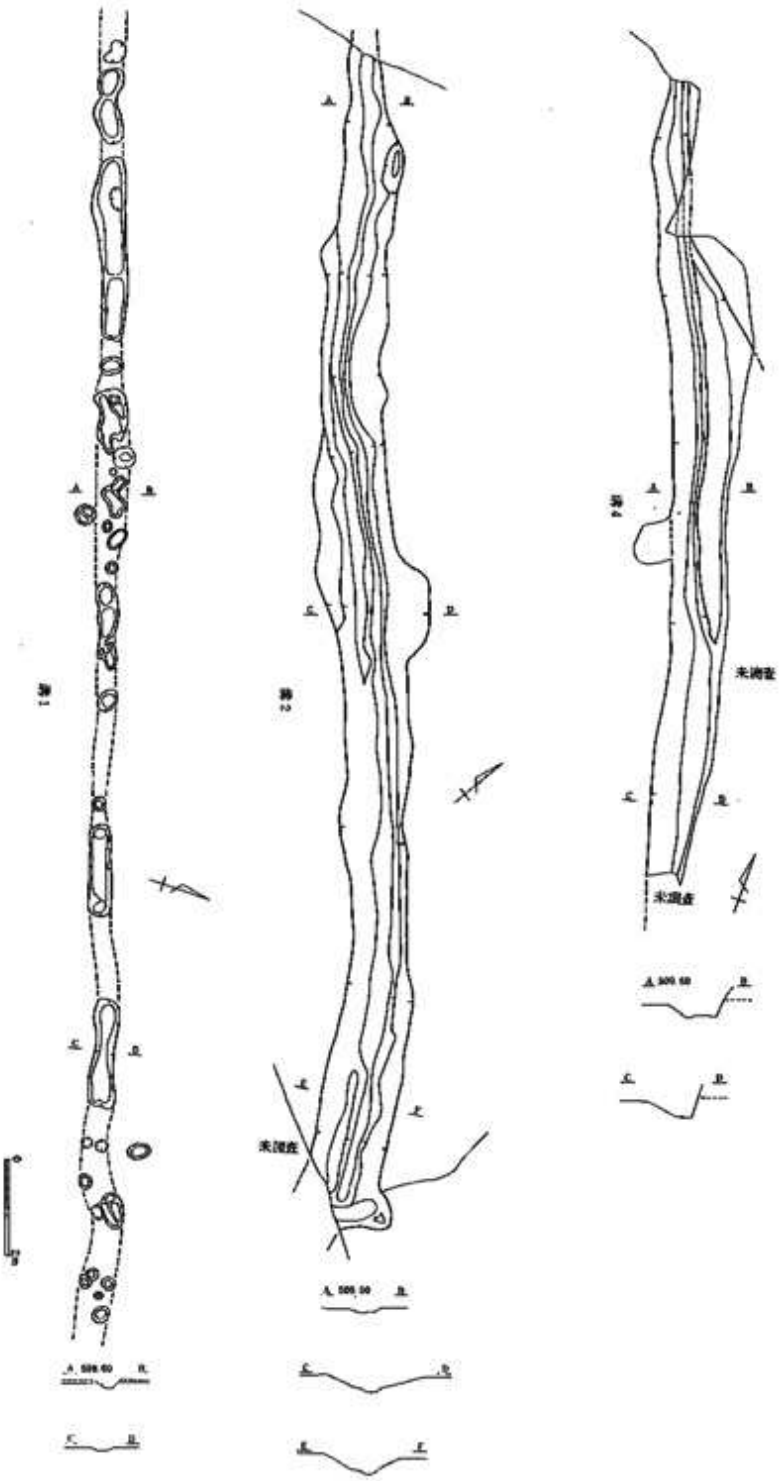
ＣＭ46付近にはさほど深くないいくつもの落ち込みがある。溝６はここからほぼ南へ向かって始まる。長さ23.5cmで南へ延び水路へ続くと見れるが、耕作による攪乱のため溝の範囲が確認できなかった。幅は約80cmと一定であるが溝の南よりに段がある。その付近で西へ多少曲がるほかは、ほぼ真っ直ぐである。深さは、段の南側では２cmとわずかであるのに対し、段の北側では20cmとやや深くなっている。また、溝の北半分の約1.0m東側には８cmほどの段が11.0m続いている。溝の範囲の可能性もある。

遺物は中世の甕とみられる小破片および近代の陶磁器片が出土しているが、時期の特定はできなかった。田境かも知れない。

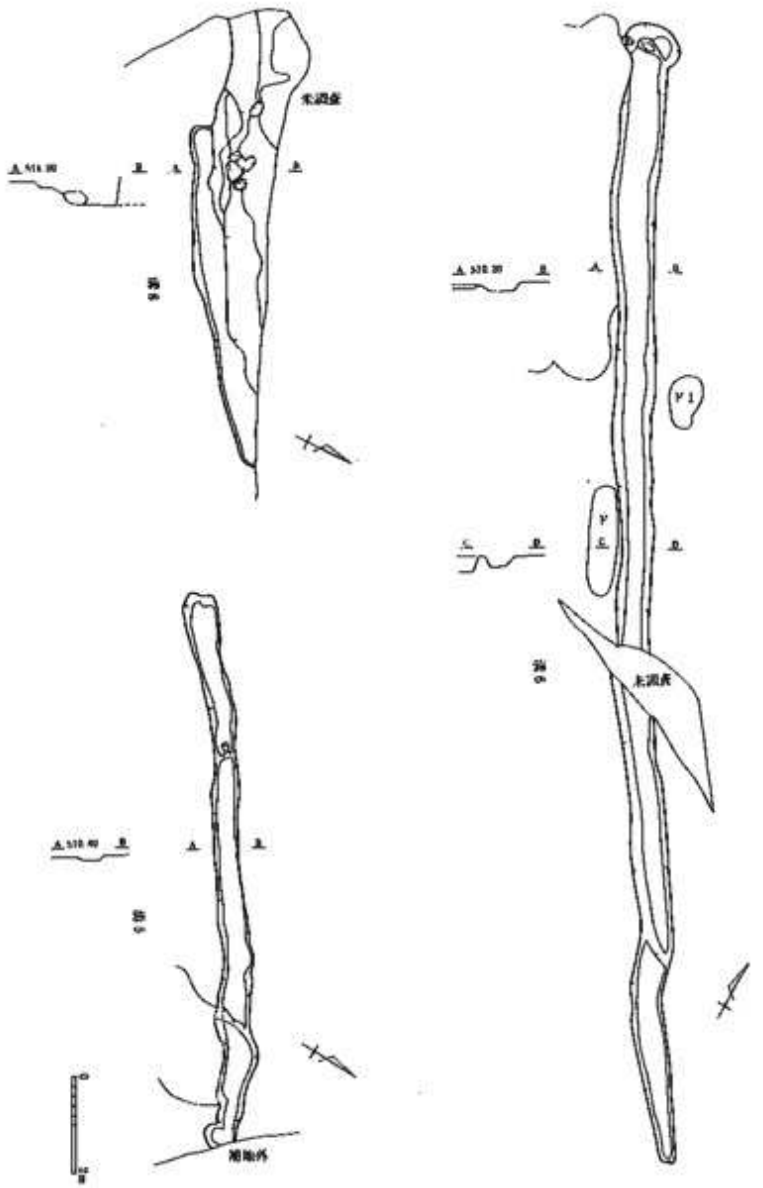
◇ 溝 7（挿図71、第31図）

方形周溝墓２の真ん中から、３号住居址の北を通り、４号住居址を切り南東へ延びる。４号住居址の東４ｍほどで田の造成のため削られ段になっている。そのため、溝もなくなっている。調査した部分は、全長27m幅はおおむね２ｍでほぼ真っ直ぐではある。深さは、55～30cmあり、底は水流により削られ凹凸があり、南北に細かく曲がりくねる。

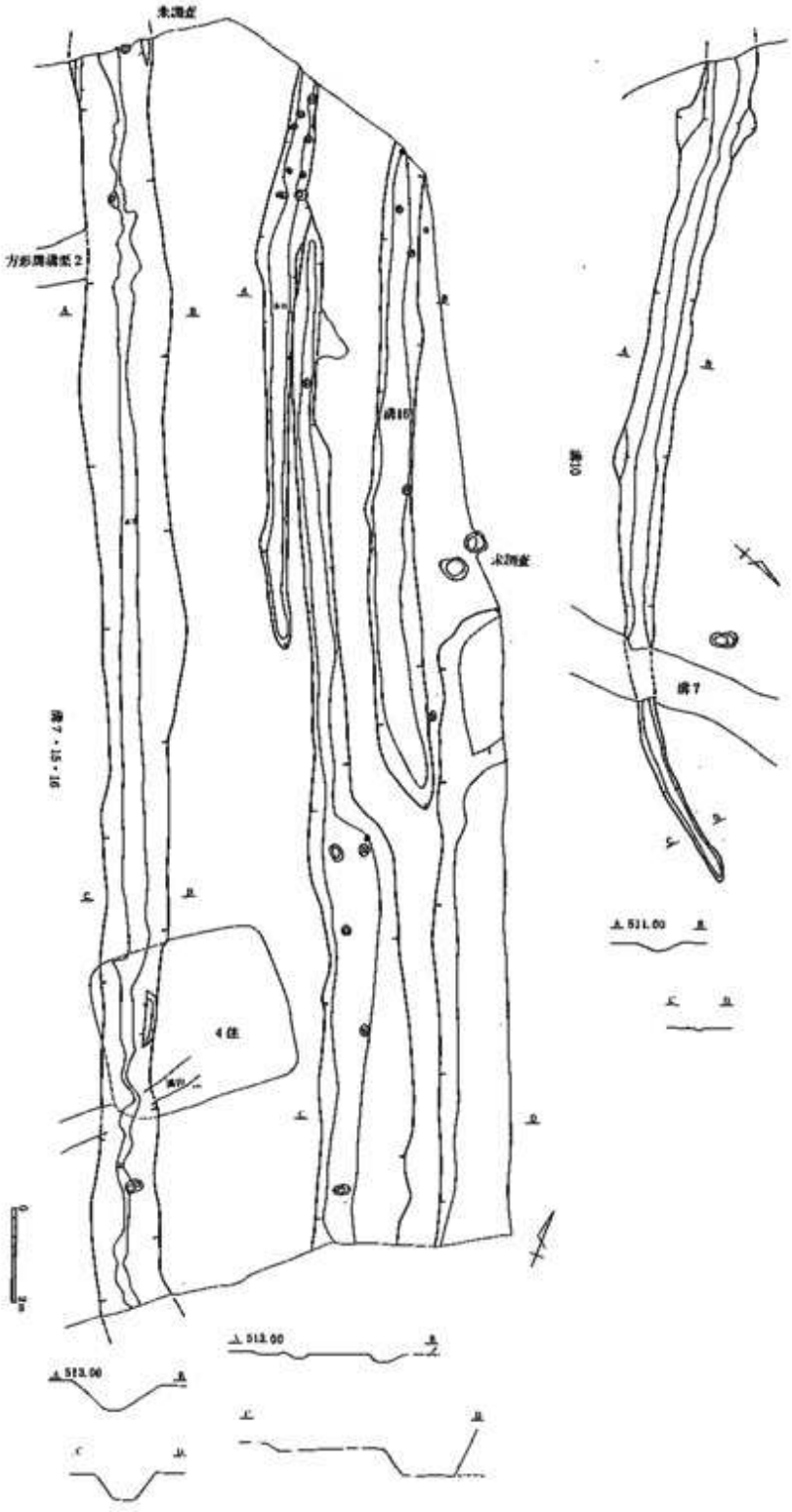
遺物としては、弥生式土器片、灰釉陶器片、中世の甕（第31図５）、青磁片、及び近代の陶磁器片が出土している。いずれも流されたものと見え、丸みをおびている。



挿図70　ＩＳＫ溝　１・２・４



挿図71　ＩＳＫ溝　５・６・８



挿図72　ＩＴＫ溝　７・10・15・16

旧道横を流れていた、旧河川である。

◇ 溝 8（挿図71）

No.81南側幅址の南側には、用水路が流れている。その用水路に接する格好で検出した溝である。全長８ｍ、深さは最深部で50cmあり、壁は３段の陵がある。用地外と水路にかかるため、全部の調査ができなかったため幅はわからない。

遺物は近代の陶磁器片が多数出土しているがすべて破片である。混入品として、打製石斧（第31図６）隣の水路は改修されたものであり、それ以前の水流の跡であろう。

◇ 溝 9（挿図73、第31・32図）

No.76北側幅杭の東側から始まり、西から東へむかって直進する。途中で溝14を切り、溝１３・19・20と合流し、ＢＵ47付近でほぼ直角に南へ向きを変え、No.79南側幅杭へむかう。用地境では溝23・25と合流する。全長は55.0ｍ、幅はNo.76北側幅杭付近で0.5ｍと狭く東進するにしたがい徐々に広がっていく。曲がり角からNo.79南側幅杭付近の用地境までは約5.0ｍある。深さは幅が広くなるにしたがい徐々に深くなる。最深部は曲がり角にあり、55cmほどある。また、この部分の底は凹凸が目立つとともに、大小様々な石があった。これらの石は意図的に置かれたものではなく投げ込まれたものと考えられる。この様な石はやはり底に凹凸の目立つ用地境にもいくつか見られた。そのほかにも底にはところどころに段がある。壁は所により２段になるところや陵をもつ所があるが、比較的緩やかな立ち上がりである。

遺物は弥生式土器、須恵器・土師器・中世の甕・青磁・山茶碗などの小破片が出土した他、石器類も出土している。（第31図７～11・第32図１～４）しかし、、時期の決定にはいたらなかった。単なる水路ではなく区画に使用された溝の可能性がある。

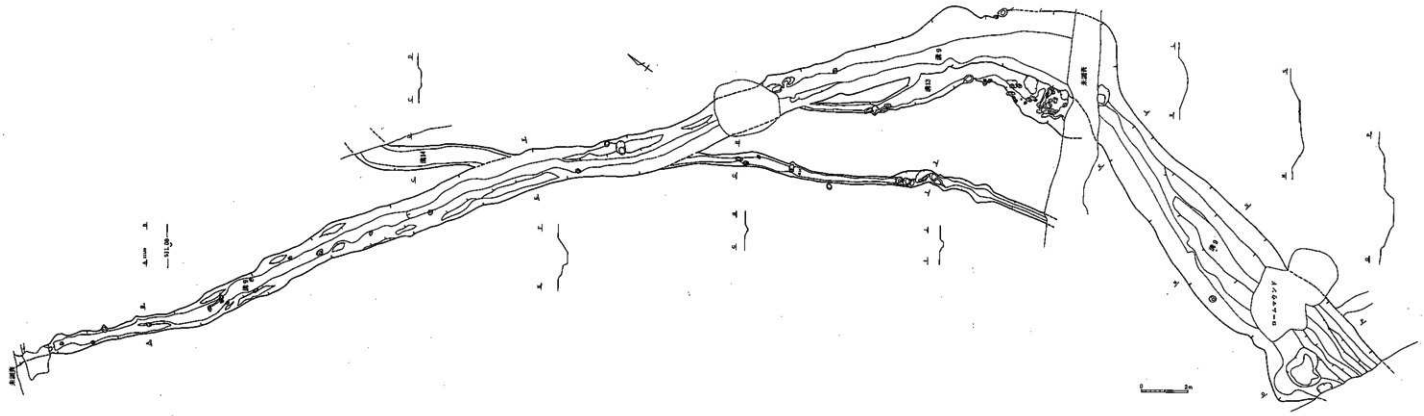
◇ 溝 10（挿図72、等32図）

４号住居址北角が溝７に切られている部分に南西に向かって延びる。調査した範囲は、幅1.0～0.6ｍの溝である。溝７から南西に真っ直ぐ12.6ｍあり、さらに用地外へ続く。また、溝７の北西で４号住居址の覆土上に3.0ｍほど痕跡があったがごく浅い。深さはほぼ一定で20cm前後である。壁は比較的緩やかに立ち上がる。

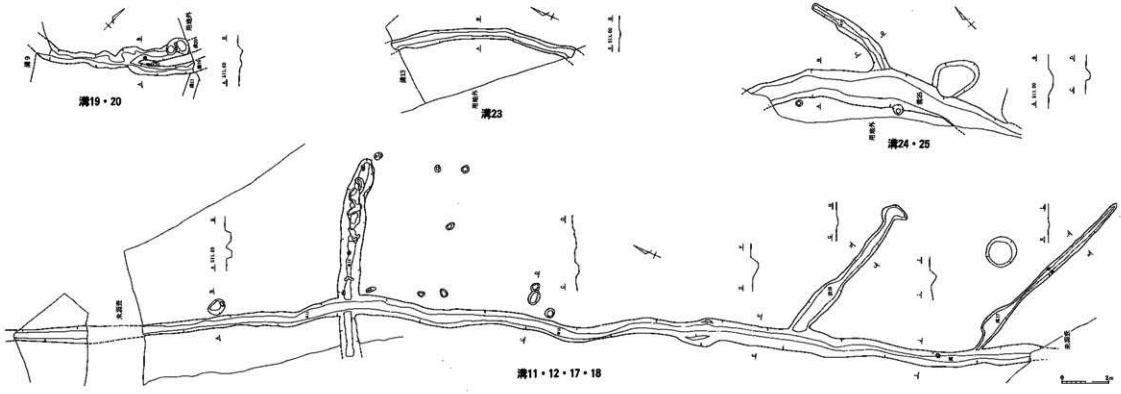
遺物は、中世の大平鉢の破片（第32図５）が１点出土しているが、時期を特定するにはいたらなかったが、溝７よりは古い。性格は不明である。

◇ 溝 11（挿図74、第32図）

No.79北側幅杭付近では、たんぼの耕作の関係で一部未調査になった部分がある。その部分をはさんでNo.79北側幅杭からNo.81南側幅杭にいたる全長45ｍの溝である。北西から南東に向かって延びているが、両側ともさらに用地外に続く。北西の用地境では溝19と交わり、さらに溝12、17、18とも交わる。幅は約70cm深さは溝12との交点で28cm、溝17との交点では33cm溝18との交点では42cmと南東にむかうにしたがって深くなる。底が深



挿図73　ＩＳＫ溝　9・13・14



挿図74　ＩＳＫ溝　11・12・17・18・19・20・23・24・25

くなるにつれて壁の立上がりは急になる。

遺物として、須恵器の蓋（第32図６）が出土したが、後世の混入品と考えられる。時期・性格等は不明である。

◇ 溝 12（挿図74）

ＣＣ47付近で溝11に直交するもので全長8.2ｍで東西に延び、西端は畑の境となり、溝はわからなくなる。幅は80cm、底は東端から３分の１程度に水流によるものと考えられる凹凸がある。深さは最深部であるが74cmと深い。それ以外はほぼ平坦であり、水流の痕跡はない。

遺物が出土しなかったため、時期・性格は不明である。

◇ 溝 13（挿図73）

No.79北側幅杭付近、溝９の南岸を南西から北東に平行して流れる長さ5.5ｍ幅50cmのごく浅い溝である。状態から見れば、溝９の一部と考えられる。

◇ 溝14（挿図73）

No.77北側幅杭付近で用地外から始まり、南に向かって延びる。溝９と交わり、さらにNo.79南側幅杭方向へ続くと考えられるが、ＢＳ50以南では表土剥ぎの時削り過ぎたのか確認できなかった。調査した部分で全長30ｍ幅は北端で70cm、中央は溝７と切りあうためわからないが、南端では40cmある。深さも北端で16cmであるが南にむかうにつれ、底に凹凸が現れる。消滅してしまう付近では８cmになってしまう。

遺物が出土しなかったため、時期・性格は不明である。

◇ 溝 15（挿図72）

溝７の北側に、溝７と平行して２本の溝がある。このうち南側に位置するものである。No.82北側幅杭付近から始まりおおむね北から南に25㎡続くが、溝７と同様造成により削平で、消滅している。よく見ると用地境から12ｍの溝と、その溝の北から３ｍのところから始まる22ｍの溝が東側にあり、約8.8ｍの間一緒になっている。幅は両方とも30cmであるが、４号住居址をすぎたあたりから1.8ｍと広がる。深さは西側のものは９cmとごく浅い。それに対して、東側に接しているものは北では11cmと浅いが、南下するにしたがい深くなり、消滅する直前では20cmとなる。壁は全体的に見て緩やかな立ち上がりである。

近代の陶磁器片が２点出土したのみである。

◇ 溝 16（挿図72）

溝15の北側に溝７・15と平行に北から南へ延びている。北側は用地外から続くものと考えられる。全長は16ｍあり、溝15の幅が広がるあたりで消滅している。溝の幅は約1.0ｍであり、深さは10cm前後と浅い。壁は緩やかに立ち上がる。

近代のものとみられる陶磁器片が出土したほか、硬砂岸製の横刃形石器の破片が出土

したが、時期の特定はできない。

また、この溝の北側の道路ぞいに大きく、深い掘り込みがあり、一時期に埋め戻された形跡があったが、全部を掘ることができず、性格はわからなかったが、道路の付け替えなどが行われたとすれば、以前の水田区画の一部とも考えられる。

◇ 溝 17（挿図74）

ＣＳ53付近から西に向かって延び溝11に交わる。全長8.5m幅30cm深さは3cmとごく浅い。幅30cmでほぼ一定であるが、交わる直前に60cmに幅が広がる。

◇ 溝 18（挿図74）

ＣＯ51付近からほぼ溝17と平行に西に向かって延び溝11に交わる。全長6.8m深さ6cmの浅い溝である。幅は一定でなく西端の3分の1ほどが80cmあるのに対し、残りは40cmである。なおＣＯ51付近では溝の幅がはっきりつかめない。

◇ 溝 19（挿図74）

ＢＶ43付近には3本の溝が集まる。用地境で溝11と切り合い南西に延び溝9に流れ込むものである。北東側はまだ用地外に続くものと見られるが、調査した部分で長さ6.9m幅40cm深さ9cmと浅い。底には水流の痕跡である凹凸が見られる。また、ちょうど中間あたりで西側を流れている溝20と合流する。

覆土である砂からは近世陶器片が1点出土したのみで、時期が特定できない。

◇ 溝 20（挿図74）

溝19の西側で用地境と溝19に合流するまでの3mのものである。用地境で穴に切られているため、幅がわからないが、その他のところでは幅50cm深さ9cm程度である。やはりこの溝も水流の痕跡が見られる。

遺物としては、内耳鍋片及び鉢と見られる陶器片が出土しているが、時期は特定できない。

◇ 溝 21（挿図75）

6号住居址の東側、ＥＢ45付近からＥＫ55に向かって南北に延びるものである。北端から7mのところで溝22と切り合うが新旧関係は不明。両端とも用地外に延びるが、調査した部分で、長さ26.5m幅は60cmとほぼ一定であり、深さもおおむね10cm前後であり、壁は比較的急角度に立ち上がっている。

近世の陶磁器片が数点出土したのみであり、時期の特定はできない。

◇ 溝 22（挿図75）

6号住居址の南側、ＥＢ48からＥＫ46東西に延びる西端から6mのところで溝21と切り合う全長で20.5m幅は60cmと一定である。深さは5cmと浅く、壁は緩やかな立ち上がりである。西側はいくつかの穴により切られる部分が見られる。

土師器の小破片が出土したのみであり、時期・性格等は不明である。

◇ 溝 23（挿図74）

No.79南側幅杭を取り囲むように弧を描きながら延びる溝である。方向は北西から南東である。北西の端では溝９と切り合い、南東側では用地外に延びている。全長7.6ｍ幅はほぼ一定で50cm深さは10cm前後と浅い。

◇ 溝 24（挿図74）

ＢＱ54付近で消滅してしまうが溝25に向かって南北に延びる全長4.4ｍほどの溝である。幅は60～40cm。深さは21～６cmとさほど深くないが、底は平坦になる箇所が少なく断面形ではおおむねＶ字形をしている。

◇ 溝 25（挿図74）

No.78南側幅杭付近には４本の溝がある。そのうちのNo.78南側幅杭を取り囲むように弧を描きながら延びる溝である。溝の向きはおおむね東西である。東端は用地境になるが溝９と合流する。また、西端もやはり用地外へ延びる。調査した部分で長さ12ｍ幅1.8ｍと比較的広めであるがそのわりに深さは20cmと浅めである。

◇ 溝 26（挿図76、第32図）

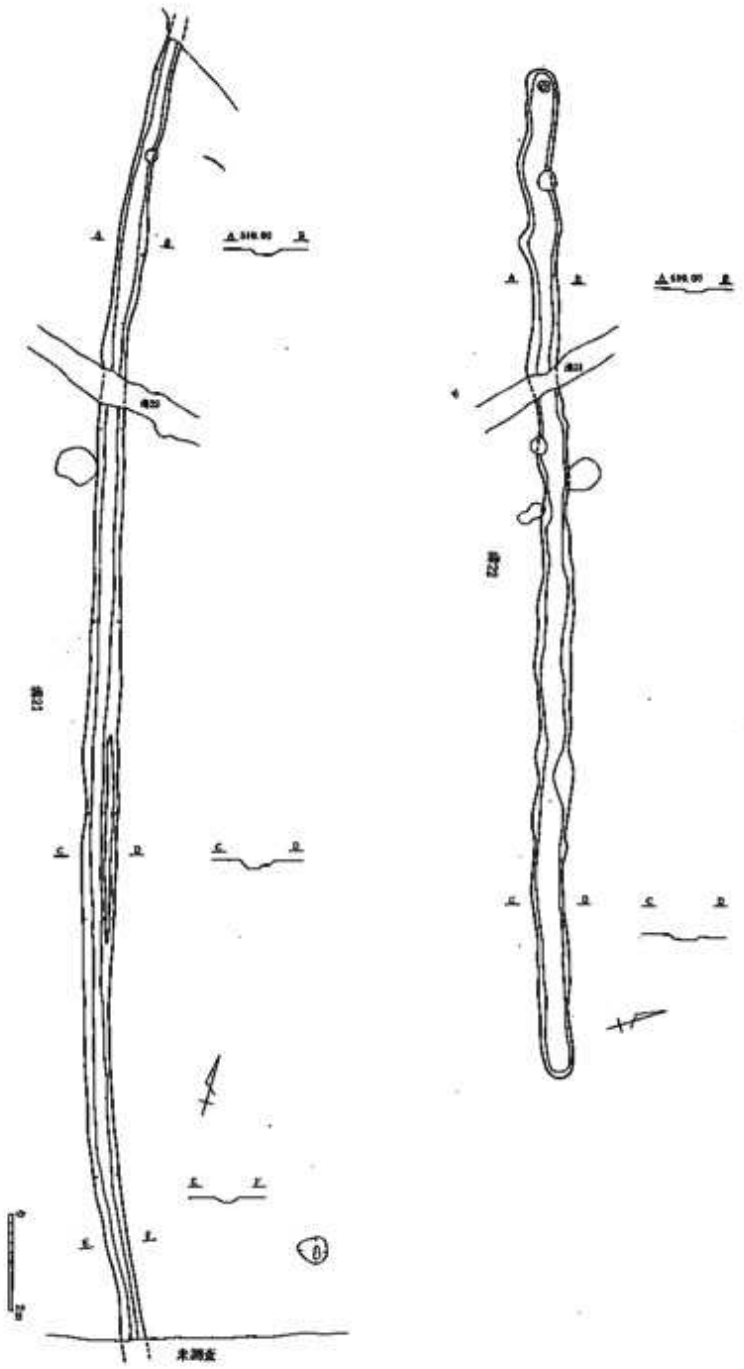
ＡＣ46からＡＨ44へ東西に向かって延びる11ｍの溝である。中央付近で溝28と合流し、東端では、溝27と合流している。幅1.2～0.7ｍ深さはごく浅く５cm程度しかなく壁の残っていない箇所もある。

遺物としては、近世の陶磁器を中心に多数出土した。混入品の有肩扁状形石器（第32図７）もあった。

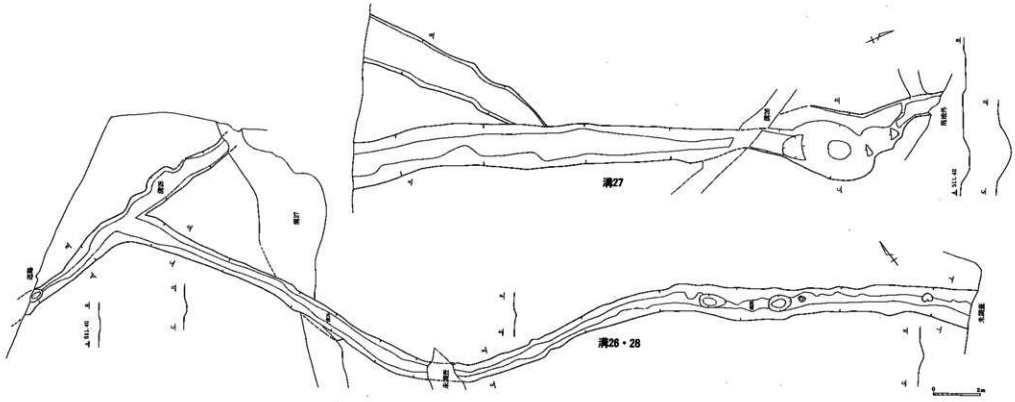
◇ 溝 27（挿図76）

No.75南側幅杭の北側に用地外からＹ字形に延びる溝がある。Ａ152付近で北へむかう２本が１本になる。西側のものは用地境で幅2.0と浅くなる。東側のものはほぼ真っ直ぐ南下しており、Ａ148付近で溝28と交差するそこから2.5ｍ南下すると3.5×2.5ｍの楕円形の落ち込みがあり、さらに3.5ｍ続く。この溝は全長で25.5ｍとなる。幅は溝28に交差するまでは1.8ｍと広いが、それ以北は1.0ｍになる。深さは南端で30cmあったのが交差するところで10cmさらに60cmのふかさをもつ落ち込みより北では６cmとなり、溝26と合流して用地外へ延びる。また、落ち込みの西側には４cmの段が４ｍほど確認できたが、これも溝の一部と考えた方が妥当だろう。

遺物としては、近世の陶磁器のほか縄文から中世にいたるまでの小破片も出土した。



挿図75　ＩＳＫ溝　21・22



挿図76　ＩＳＫ溝　26・27・28

◇ 溝 28（挿図76）

ＡＷ51の用地境から調査区をほぼ横断する形で東西に延びる溝である。センター杭№75付近で未調査の部分があるが、全長37.5ｍを調査した。多少南北に曲がりながら、溝27と交差し、溝26に至る。東端の用地境で幅1.5ｍ深さ20㎝、中央付近では幅0.8ｍ深さ10㎝となりさらに西端の合流地点では幅1.2ｍ深さ８㎝となる。壁は緩やかな角度で立ち上がっているが、東側半分の底にはいくつかの穴をもつ部分がある。

3）そ の 他

(1) 柱 穴 群

◇ Ｄ区柱穴群（挿図77、第32図）

№81～82南側幅杭の北側で検出した。エレベーションをとったものは掘立柱建物址の可能性が強い。それらの柱穴のひとつから中世とみられる素焼きの皿（第32図10）も出土している。

◇ Ｅ区柱穴群（挿図78・79）

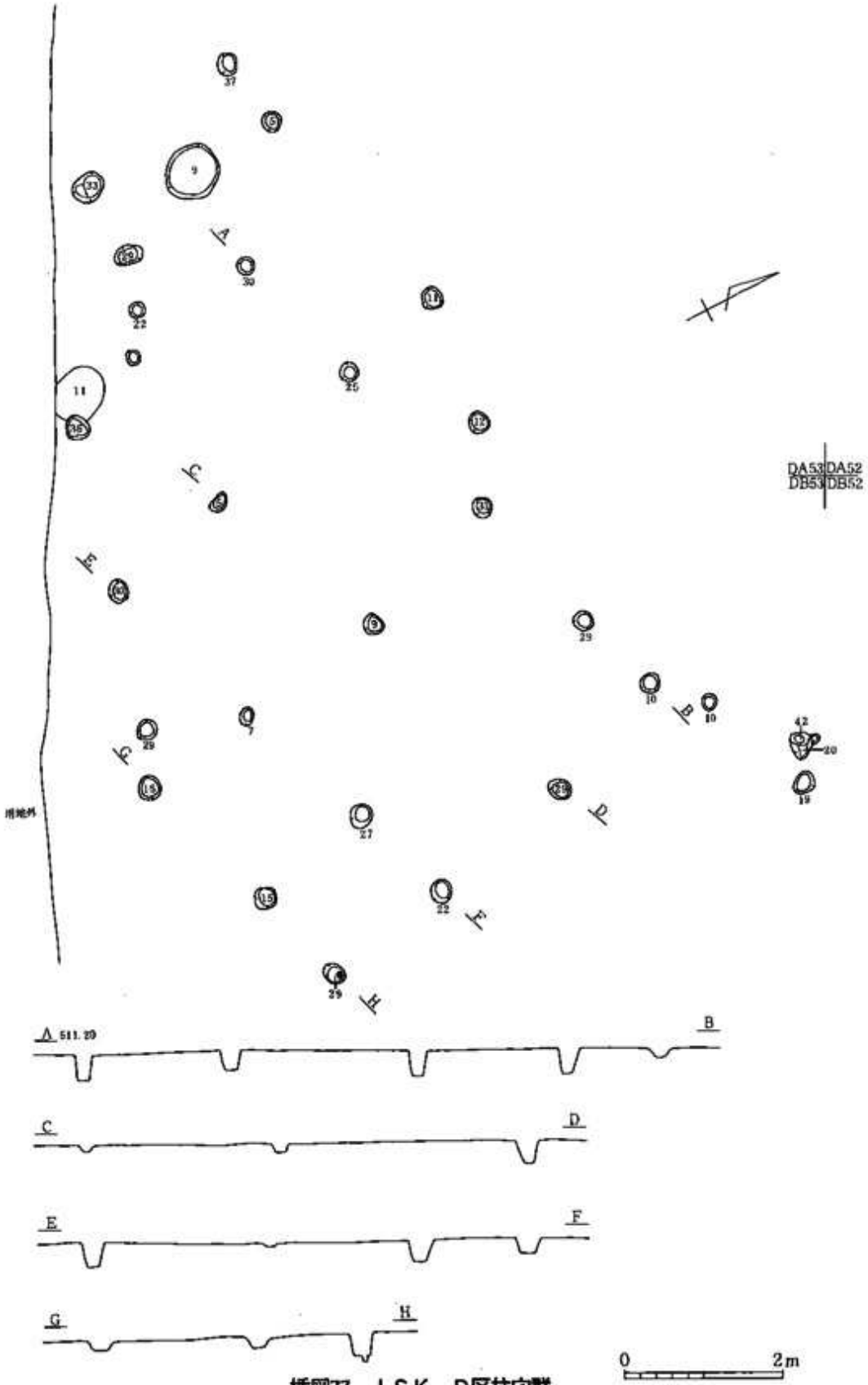
旧道の南と北とに分けたが、並ぶのはエレベーションをとったもののみである。いずれにしろ水田の造成時に削平されており、すべてを確認することができないため、実態はつかみ切れない。

◇ Ｆ区柱穴群（挿図80）

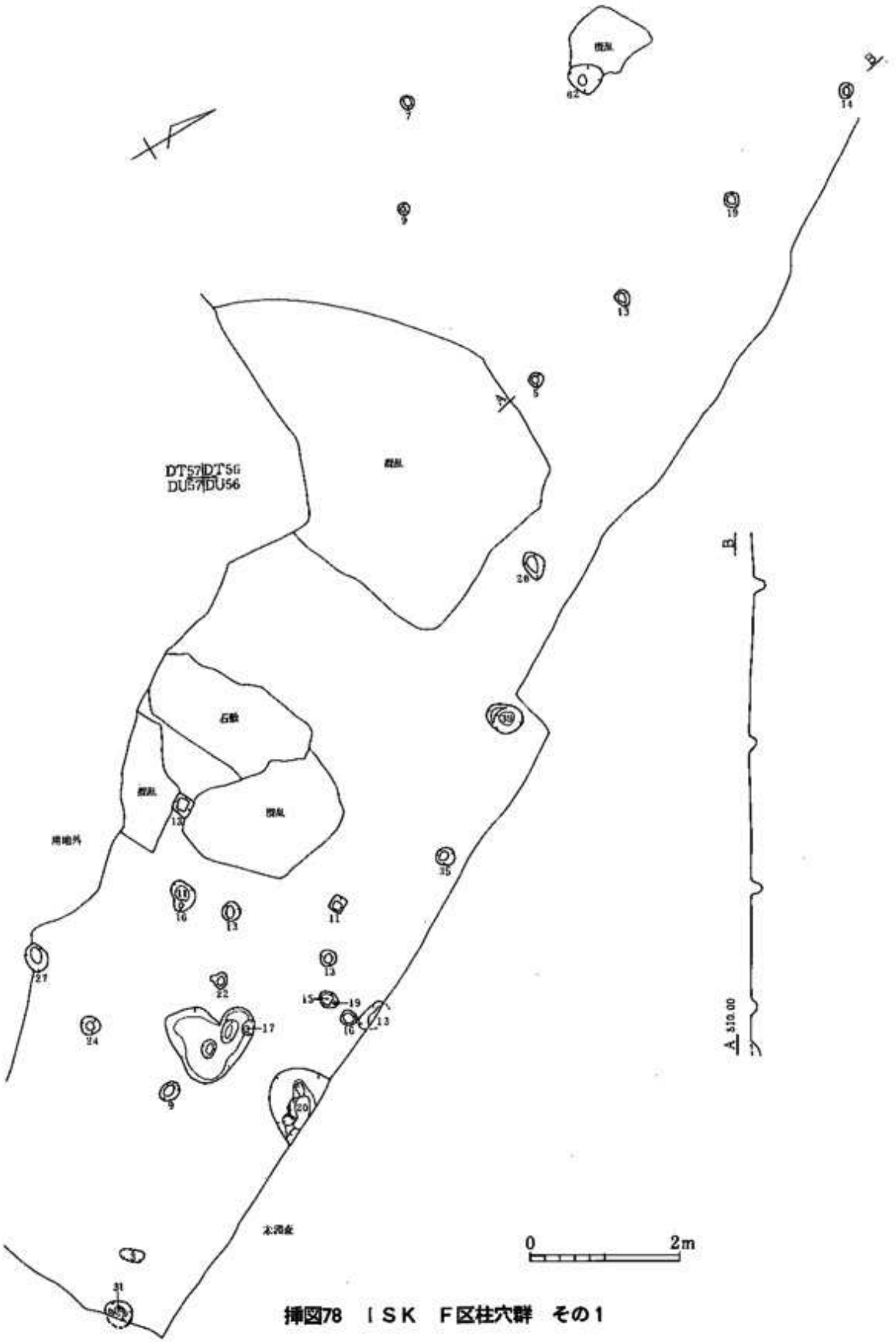
方形周溝墓１から溝１の間だけで検出できたが、配列・覆土の色・平面形などに統一性が見られないため掘立柱建物址の把握はできなかった。

(2) 構外出土遺物（第32・33図）

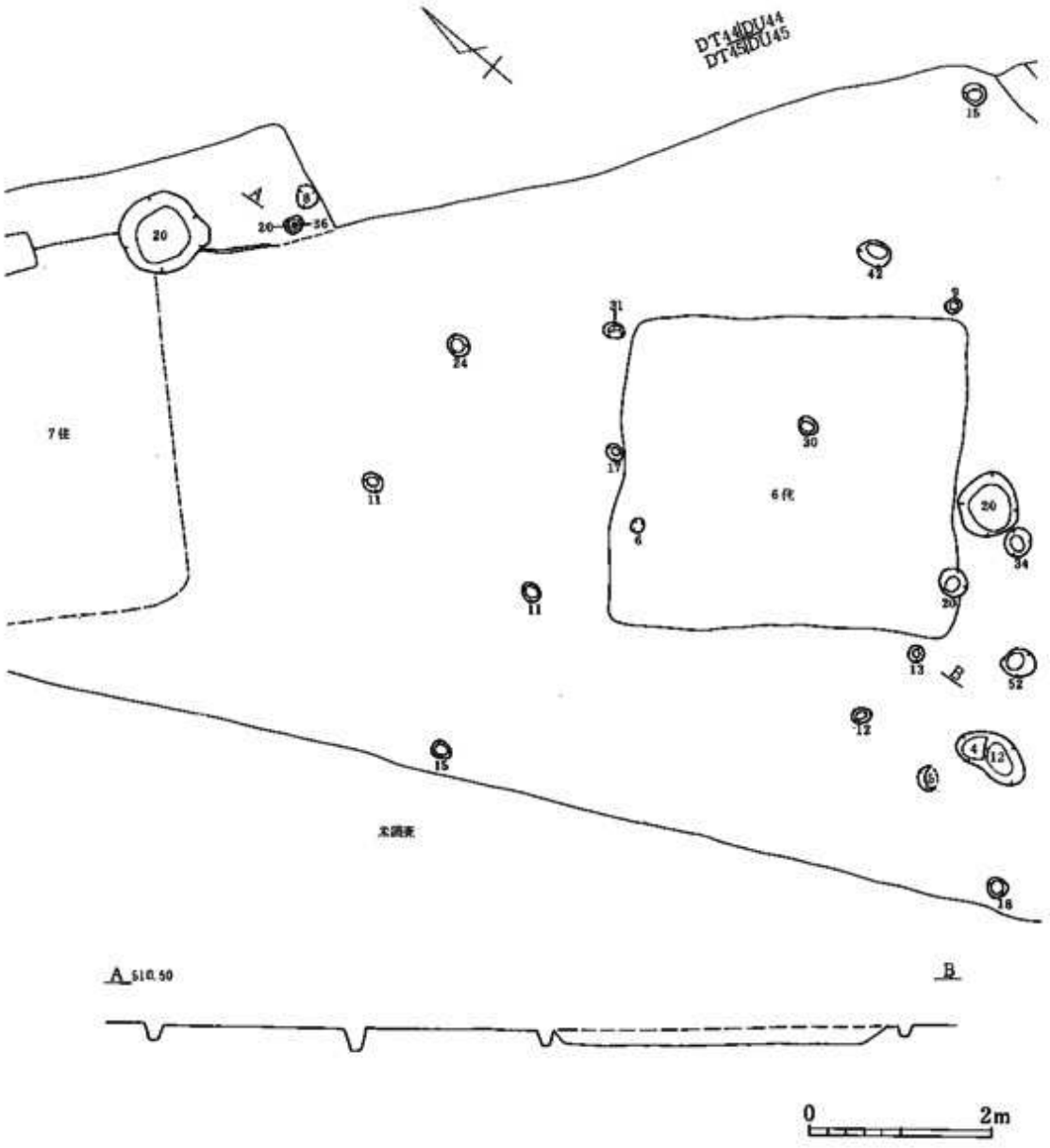
遺構の分布密度が稀薄であったため、遺物の量は比較的少ない。そのうち溝から出土した遺物がほとんどであり、遺構外として扱ったものは、土器では縄文時代と考えられる耳栓（第32図８）・須恵器の坏（第32図９）・中世の甕などであり、石器としては打製石斧・横刃形石器・有肩扇状形石器があり、ほとんどが硬砂岩製である。（第32図11～14、第33図１～６）その他に石鏃（第33図７）が出土している。



挿図77　ＩＳＫ　Ｄ区柱穴群



挿図78　ＩＳＫ　Ｆ区柱穴群　その１



挿図79　ＩＳＫ　Ｆ区柱穴群　その２

挿図80　ＩＳＫ　Ｆ区柱穴群

3．名古熊下遺跡

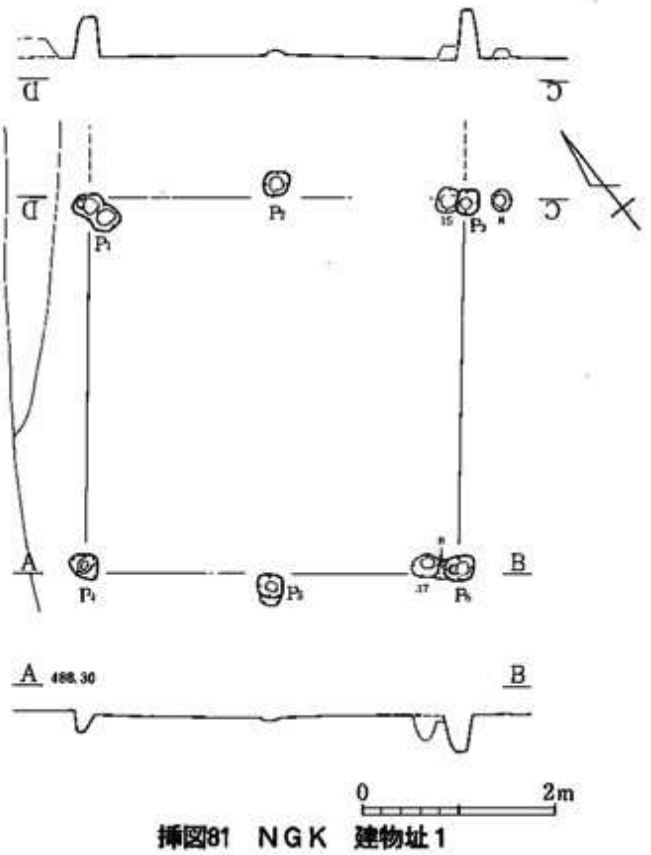
1）中世～近代、及び時期不明遺構

(1) 建 物 址

◇ 建物址 1（挿図81）

No.137南側幅杭は現道の脇になる。この杭の南側に2列に並ぶ柱穴を6個検出し、建物址とした。道路と用地境のため、規模や長軸方向はわからなかった。確認した部分では2×1間4.0×3.8mの部分のみである。柱穴はいずれも24cm前後の方形で深さはP₁が21cmとやや浅いがそのほかは40cm前後と比較的深い。また、P₂、P₅、P₆は2つの穴が連なった格好になっている。建て替えの可能性がある。柱穴列の北西側、道路際で深さ20cmの溝状の掘り込みが4.2mにわたり確認できた。これは、まだ続くものと思われ、建物に付随した遺構と考えられるため、この建物は東側に続く可能性が強い。

遺物の出土はなく、時期・性格とも不明である。



挿図81 NGK 建物址1

(2) 方形竪穴

◇ 方形竪穴 1

（挿図82・第34図）

33Lを中心に検出した隅丸方形の竪穴である。規模はほぼ2.5mの方形に入り口施設の階段がつく形態を呈する。入り口方向を主軸と見て、N 7.5° Wである。深さは検出面から1.0mあり、覆土は 4層に分かれレンズ状にきれいに堆積している。壁面はほぼ垂直で奥壁の両隅は、えぐり込まれている。底部はほぼ平坦で小穴が検出され、掘り方が無いことから柱が打ち込まれたものであろう。入り口の階段は全部掘り上げた後、構築したものである。

遺物としては、瀬戸焼の手付水注の口縁部（第34図1）のほか混入品と見られるのが

砂岩製の打製石斧（第34図２）が出土している。

時期は竪穴の形態、出土遺物から中世のものである。　　（佐々木嘉和）

◇　方形竪穴　２（挿図82）

43K溝１の底で確認した2.0×1.5mの楕円形の掘込みである。水流による凹凸の一部とも考えられるが、壁直下に６cmの穴が４個確認できたため方形竪穴とした。深さは溝の検出面から測ると124cmほどある。底はほぼ平坦である。壁は溝に削られたためすべてが残っている訳ではないが、ほぼ垂直に掘り込まれているものとみられる。この北隣にも同様の落ち込みがみられるが水流により削られている。

覆土は小石まじりの砂である。溝が埋まったと同時に埋まったものだろう。

◇　方形竪穴　３（挿図82）

40Lの溝１の底で確認した。方形竪穴２と同様の状況であった。東側が水流により削り取られているため、規模は推定であるが、2.0×1.7mの楕円形、底は平坦で深さは溝の検出面から測ると186cmとなる。壁直下には直径６cm深さ10cm前後の穴が５個ある。壁は溝のためすべてが残っているわけではないが、ほぼ垂直に掘られているものとみられる。

◇　方形竪穴　４（挿図82）

43Iで検出した比較的浅い掘込みであるが、やはり壁直下に小さい穴が確認できたため方形竪穴とした。直径1.5mの円形で壁はほぼ垂直に掘り込まれている。底は東西方向に２段に別れている。一段高くなっているのは、東側４分の１で深さ16cm西側はほぼ平坦で29cmある。直径６cm程度の小さな穴は一段高い東側で１個、西側では６個ある。それらの深さはごく浅い。状況から判断するに東側は入り口の可能性がある。

遺物の出土はなかった。

(3)　竪　　穴

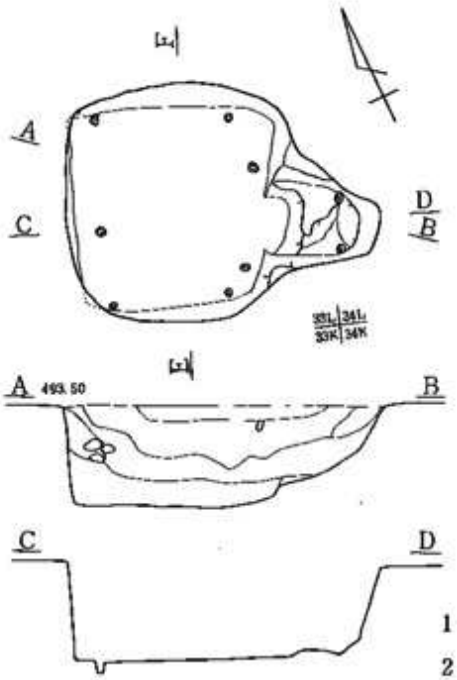
◇　竪穴　１（挿図83、第34図）

16L及び16Kで検出した。1.1×0.7㎡の方形に近い不整形である。中央へやや窪んでおり、深さは51cmある。東側の壁には30cm程度の段がある。また、西側は穴で切られているが、その以外の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

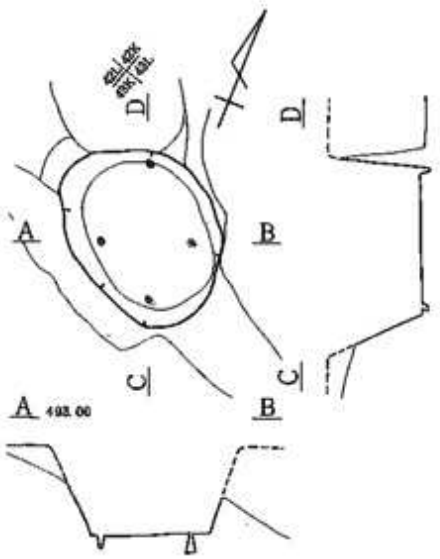
覆土は黄色砂質土であるが、遺物としては敲打器（第34図３）の出土のみだった。時期・性格については不明である。

◇　竪穴　２（挿図83）

17Iを中心に検出した。1.7×1.4mの方形である。深さは55cmであるが、西側の底が0.7×0.6mの範囲でさらに一段低くなっており、最深部で75cmを測る。底では地山の石が露出している部分がある。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。北側では1.3×0.9mの穴を切っている。

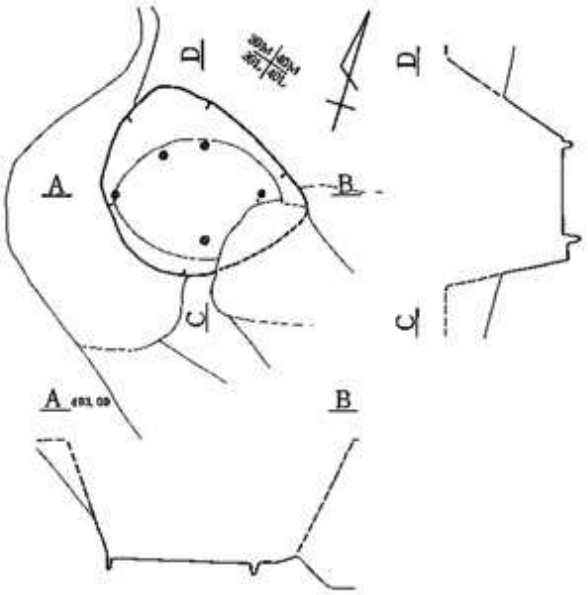


方形竪穴1

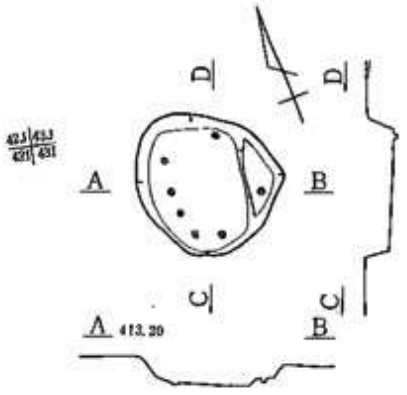


方形竪穴2

1．黒色土黄色土混り
2．褐 色 土
3．黒 色 土
4．漆黒土黒色土混り
5．黄色土(ブロック)
6．暗褐色土



方形竪穴3



方形竪穴4

挿図82　NGK方形竪穴1・2・3・4

◇ 竪穴　3（挿図83）

18Ｉで竪穴４と接している。南側は竪穴５と切り合うが新旧関係は不明。規模は4.0×1.6ｍの長方形と推定できる。底は、南よりに0.8×0.5ｍの円形の浅い穴がある以外は平坦である。深さは41㎝で壁はほぼ垂直である。

◇ 竪穴　4（挿図83）

竪穴２の東側、17Ｇで検出した。排土の関係で全範囲は確認できなかったが、4.0×2.0ｍの範囲を調査した。東西に二つの穴が切り合っており、西側のものは2.6×2.0ｍでさらに北西に延びるものとみられる。深さは東寄りが少し窪み52㎝を測る。東側のものは1.7×1.5ｍの方形で、北側は竪穴３と接している。底は壁際から中央へ低くなっている。深さは中央で67㎝ある。壁は双方とも比較的急角度に掘り込まれている。

遺物の出土はなかった。時期・性格は不明である。

◇ 竪穴　5（挿図83）

竪穴３の南側19Ｊで検出した。規模は推定で2.6×2.4ｍの方形である。底には３つの穴がある。東端には1.0×0.6ｍで深さ９㎝の楕円形、北西には半円形ではあるが直径1.4ｍ深さ23㎝、中央から北よりには北西側の穴と切り合う格好で2.2×1.6ｍで深さ18㎝の楕円形の物がある。それ以外の部分は検出面から24㎝の深さがあり、壁はほぼ垂直に掘られている。

遺物の出土はなかった。時期・性格は不明である。

◇ 竪穴　6（挿図83）

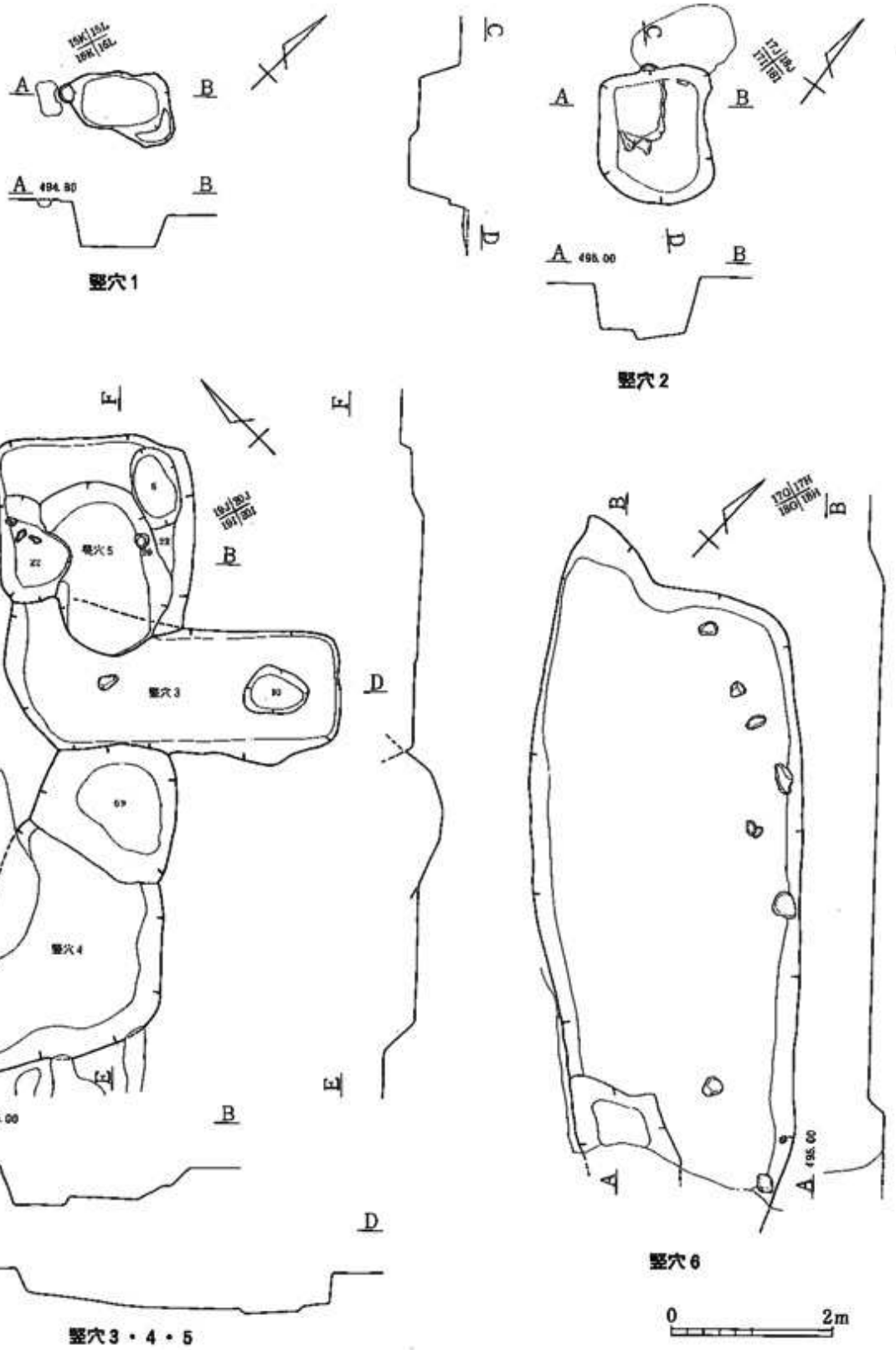
20Ｅで検出した落ち込みである。南西方向へ調査区を広げたが全範囲を確認することができなかった。調査できた部分で7.0×3.0ｍ、深さは14で底はほぼ平坦南端に20㎝掘り込みがある。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。

近世陶器片が１点出土したのみである。

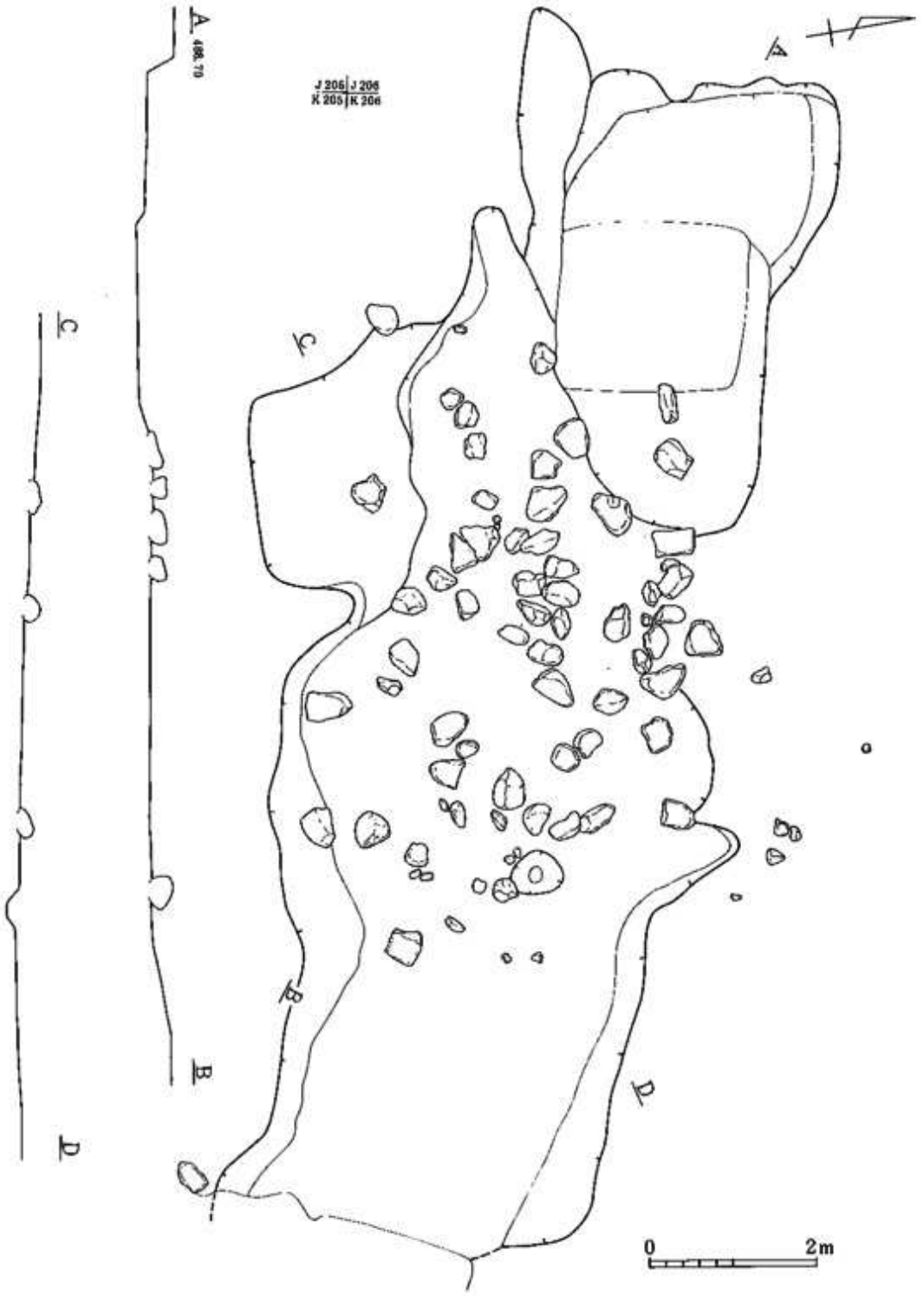
◇ 竪穴　7（挿図84）

センター№136付近で50㎝大の石がある落ち込みを確認した。範囲は12.0×4.0ｍの長方形に近い不整形である。底は中央に向かってやや傾斜しており、深さは中央部で25㎝である。壁は緩やかに立ち上がっているが、南と北の両側は試掘グリッドにより切られている。竪穴のほぼ中央に直径60㎝深さ15㎝の穴が一つだけある。石はほとんどが花崗岩であり、割れ口がある。しかし、これらの石は並べられたものとは考えにくく、後に投げ込まれたものと思われる。

時期・性格は不明である。



挿図83　NGK竪穴1・2・3・4・5・6



挿図84　ＮＧＫ竪穴7

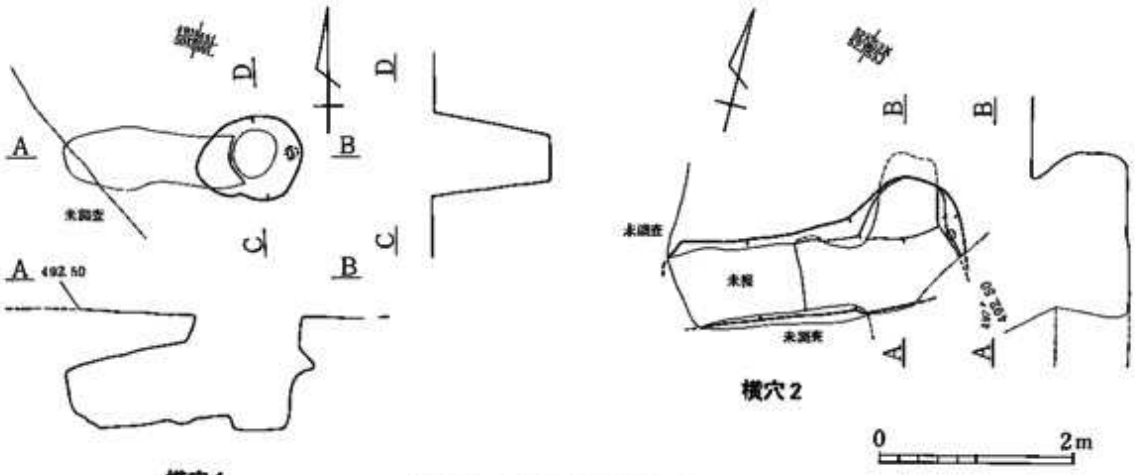
(4) 横　　穴

◇ 横穴　1・2（挿図85）

1は50Lに2は53Jで検出した横穴状遺構である。1は平面的に穴を確認し、掘り下げたところ、横穴の空間が現れた。横穴の部分には底から20cm弱の泥が堆積しており、長さは1.4m高さは80cmある。縦穴の途中に足をかける穴を作ってある。2も同様であろうが落盤しており、道路の下に入っているので調査は中止した。1、2とも推測の域を出ないが、近代の赤土を採取する穴、もしくは植物等貯蔵用の室などが考えられる。

遺物は出土していない。

（佐々木嘉和）



横穴1　　横穴2

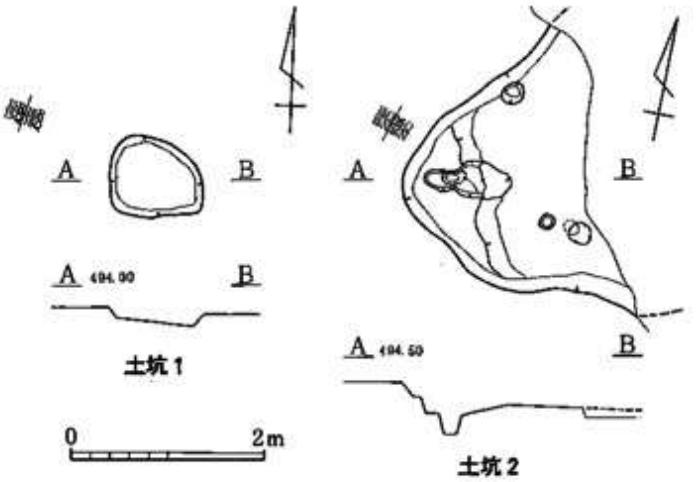
挿図85　NGK横穴1・2

(5) 土　　坑

◇ 土坑　1（挿図86）

16Rにかかって検出した1.0×0.4mの不整形のものである。底部は東にやや傾斜しており、最深部での深さは12cmと浅い。壁も緩やかに立ち上がっている。

褐色土の覆土からは横刃形石器（第34図4）が出土しているが、時期の特定をするにはい



土坑1　　土坑2

挿図86　NGK土坑1・2

たらなかった。

◇ 土坑 2（挿図86）

16Nを中心に検出した。東側には大きな攪乱があり、調査できたのは直径2.0mの半円形の部分である。底は東西方向に2段になっている。深さは西側で15cm東側で20cmある。底の中央やや西よりに90×40cmの楕円形で深さ39cmの穴のほか円形の穴が3つある。

暗褐色の覆土から、遺物は出土しなかった。

(6) 溝

◇ 溝 1（付図9、第34図）

№119南幅杭付近で旧道の北側で砂を覆土とする溝の北側の岸を確認した。またセンター№117付近では旧道の南に幅6.0mの溝を検出した。さらに30Sではやはり旧道の北に溝の北側の岸を確認した。これらは同じ溝である。状況からみると旧道に沿って西から東に向かって流れていたものと考えられる。調査できたところは22mのみであるが、この部分も道があり、全幅を掘ることができなかった。そのため、幅、深さはわからない。底の状態は水流による凹凸がある。

覆土である砂の中からは、中世の陶器片、特に大平鉢（第34図5・7）及び山茶碗（第34図6・8）が目立って出土している。その他に甕の破片もあり、底に近い下層部その量は多い。自然水流か人為的かの判断は困難であるが、かなりの水流があり、中世段階においてはかなり重要な意味を持った溝である可能性が強い。

◇ 溝 2（挿図87）

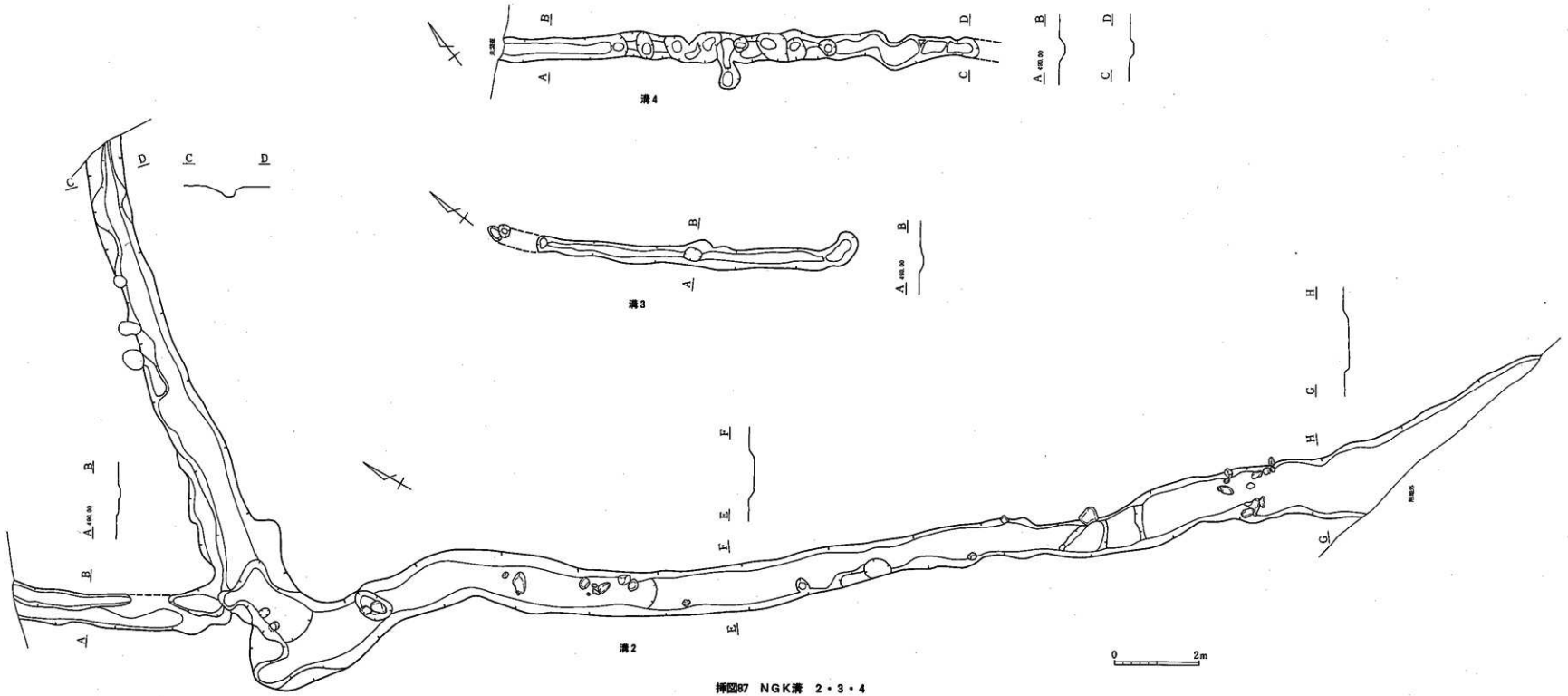
№125北側幅杭の北西側の用地外から南西に延びる溝は14m進んだところで北西から延びてきた溝と合流する。この溝は向きを南東に変え№126南側幅杭に向かって延びている。表土剥ぎの時点で覆土の白砂が地山の石の間にはっきりとわかった。調査した部分は全長で48mある。幅は一番北の用地境で0.8m、曲り角付近で1.0m、№126南側幅杭の北側で1.2m程度と、一定していない。底は水流による凹凸のほか地山の礫が露出している。深さは曲がり角以北は17cmであるが、曲がってからは7cm前後とごく浅い。№126南側幅杭の北側へきて16cmと再び深くはなるが比較的浅い溝である。そのため、壁もはっきりしない部分が多い。

◇ 溝 3（挿図87）

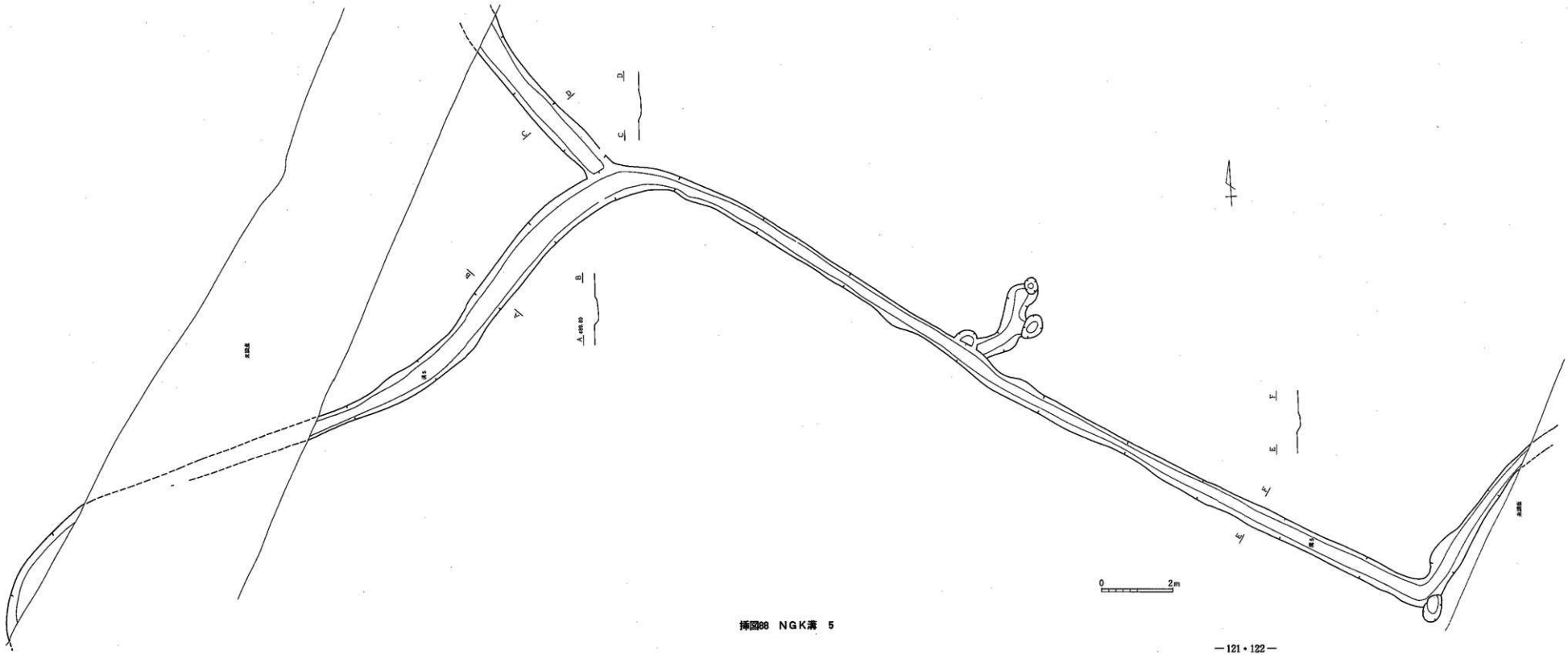
センター№126付近で旧農道に平行して検出した。全長8.8m幅50cm深さ5cm前後のごく浅い溝である。北西の端では壁がなくなり落ち込みのみになっている。壁はごく緩やかである。

◇ 溝 4（挿図87）

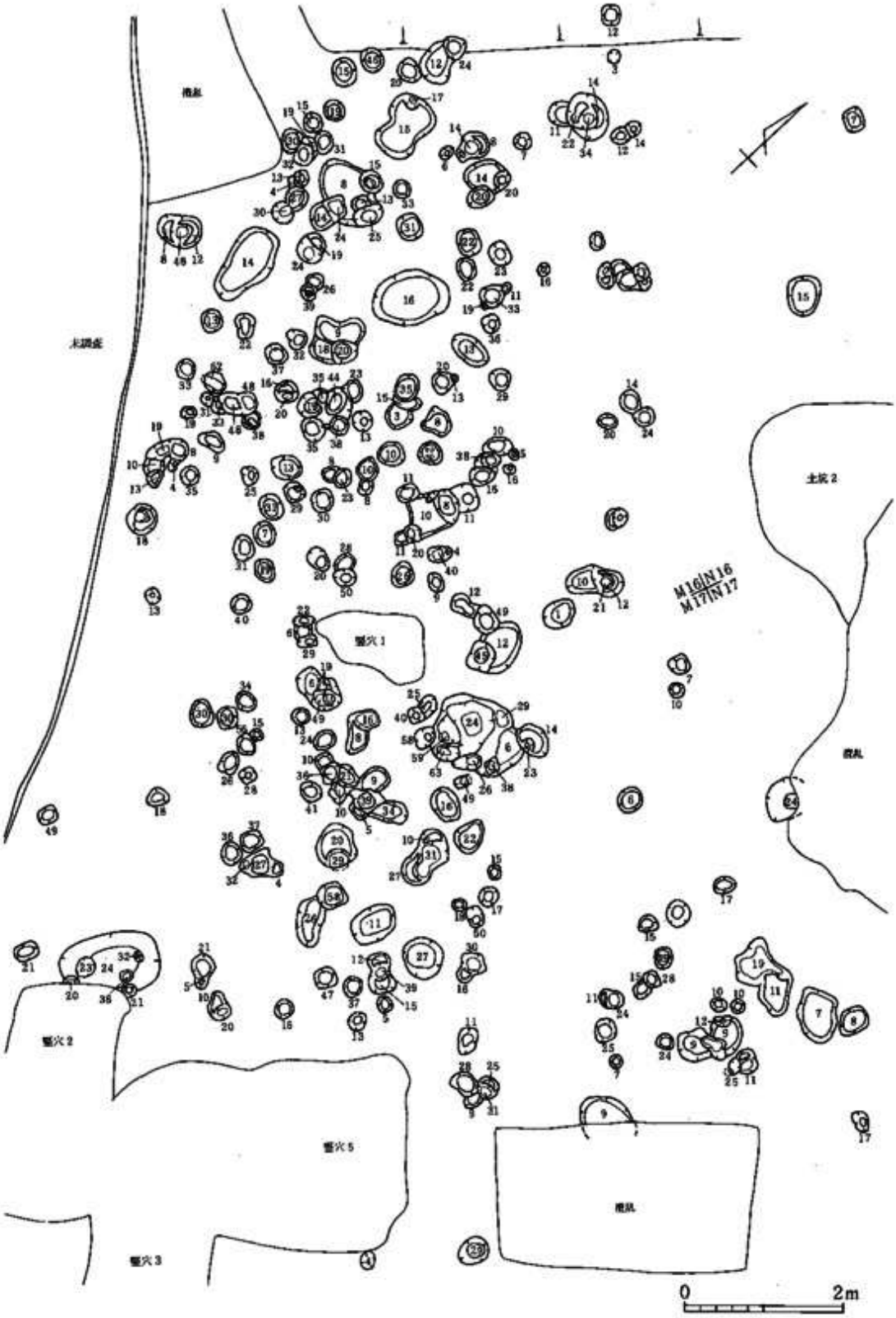
センター№124の西側から№125南側幅杭に向かって延びるものであるが、表土剥ぎの時深く削り過ぎたためか道路から南11mで消滅してしまう。幅は60cm、底はいくつもの



挿図87 NGK溝 2・3・4



挿図88 NGK溝 5



挿図89　ＮＧＫ北平区柱穴群（その１）

穴が連続したように凹凸が続く。深さは18cm程度である。

以前の水田境であろう。

◇ 溝 5（挿図88、第34図）

№128から№130の間で検出したものである。№130南側幅杭に近い農道の付近で南西方向から北西に向きを変え、さらに26cm直進して再び南西に向かい№128南側幅杭へ延びているため、形態はクランク状である。全長は46m幅は1.0～0.5m深さはごく浅い。一部2本が合流するところがあるものの、調査区を南東から北西方向に縦断するもので旧水田の境と思われる。遺物としては、横刃形石器（第34図10）及び敲打器（第34図11）が出土しているが、混入品と判断される。

◇ 溝 7（付図10）

249P付近には大きな攪乱があり、そこから南東に向かって8.6m延び北東に向きを変えて7.3mさらに用地外に続く溝がある。幅は70cm、深さ28cmとほぼ一定である。壁は比較的急角度に掘り込まれており、断面形でU字形になる。壁には一部陵を持つところがある。

◇ 溝 8（付図10）

258J付近から旧道に平行して251Kへいたる17.3mの溝である。方向は南東から北西に向かって延びている。幅は30cm程度あったものとみられるがところどころ壁がなくなっているため、底の穴のみが残る。

◇ 溝 9（付図10）

258M付近から溝7と平行して延びるものである。全長10.8m幅20cm程度とみられる。底には小さな穴がある。ごく浅く、壁もはっきりしていない。

◇ 溝 10（付図10）

257北側付近で溝8と切り合い、南北方向に延びて溝6につながるものとみられるが、途中で消滅してしまう。溝がはっきりしている部分は5.6mで、幅30cm深さ5cm程度とほぼ一定である。

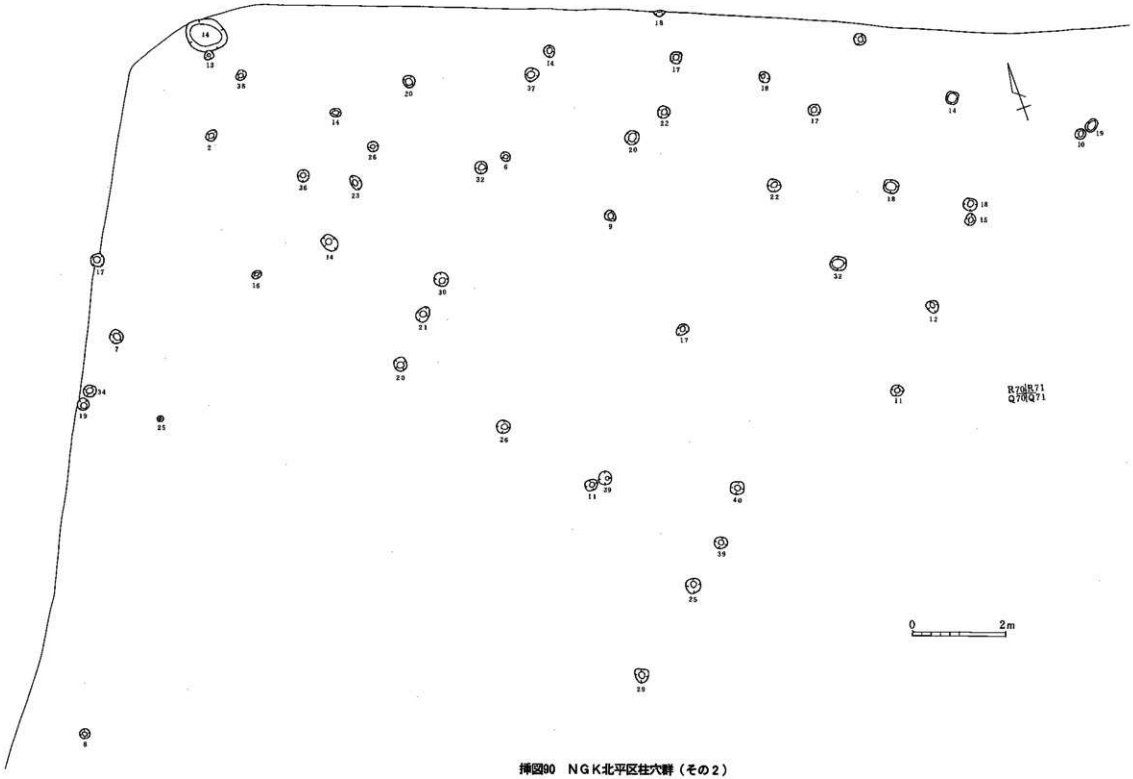
2）そ の 他

(1) 柱 穴 群

発掘地区の関係で3カ所に分け、西方から順次その状況を記すと次のとおりである。

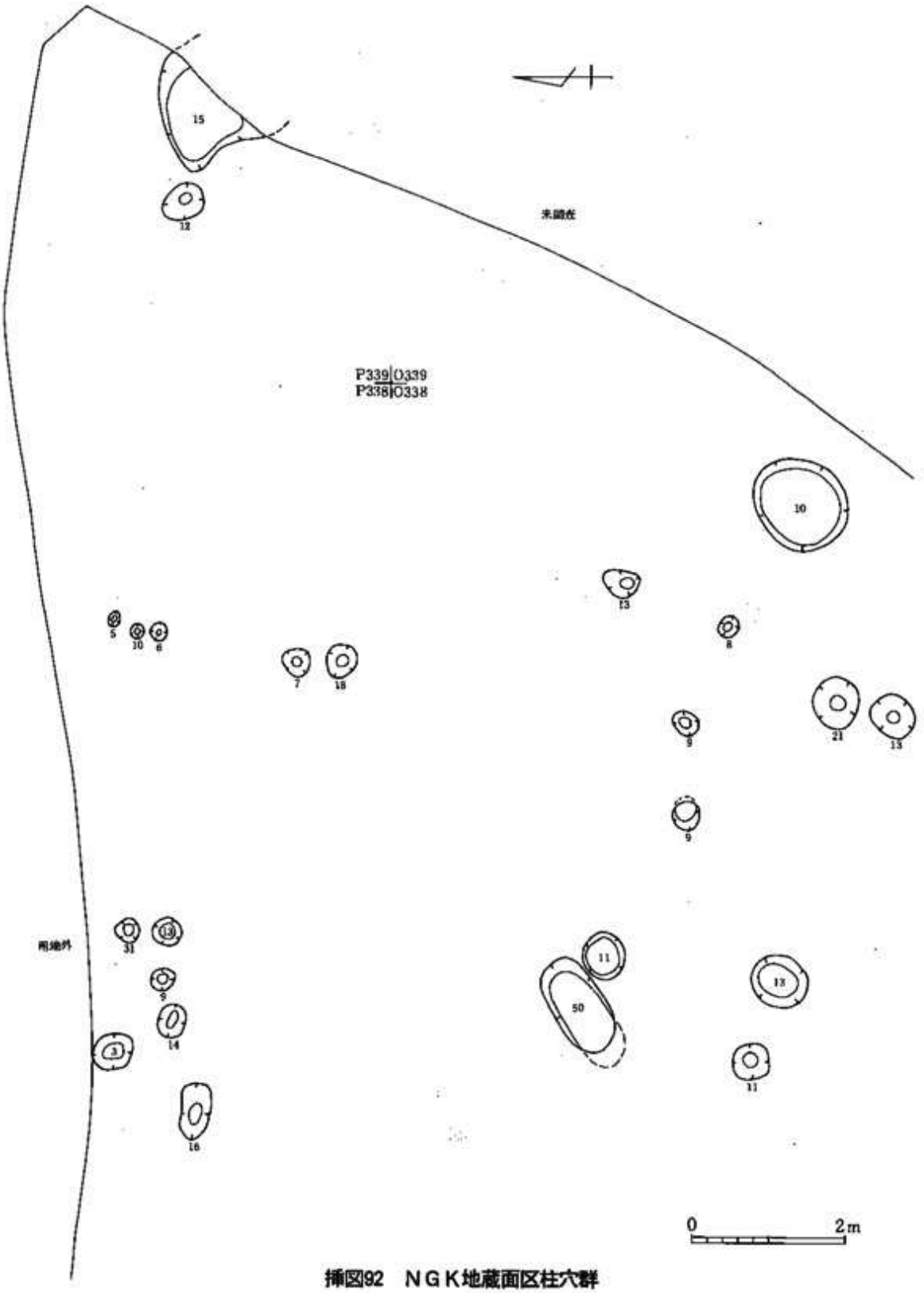
① 北平区柱穴群（挿図89、90）

全体的に分布しているが、場所的に見れば調査地区の南側、地形的にいえば崖下に近いほうにその数は密度は高い。配列からみると建物址となるものは見当たないが、柱穴の覆土はおおむね黒褐色である。また、№119南側幅杭付近には、直径20cm前後の柱穴がまとまっている。建物址の可能性が強いが確実ではない。



挿図90　ＮＧＫ北平区柱穴群（その２）

挿図91　ＮＧＫ沼区柱穴群



挿図92　ＮＧＫ地蔵面区柱穴群

また溝３以北にも比較的まとまった穴を検出したが建物址の柱穴ではない。

② 沼区柱穴群（挿図91）

№137から№139の間で多数の柱穴を検出した。大部分の柱穴の覆土は暗褐色土であり、大きさも直径20cm前後ではあるが、配列からみると建物址とはいえない。

③ 地蔵面区柱穴群（挿図92）

№146から№147の間のみで柱穴を検出したが、数はさほど多くない。形態・配列・覆土の状態から判断すれば掘立柱建物址とはならない。時期・性格ともに不明の柱穴である。

(2) 沼区畦溝群（挿図93）

№134から№135付近は水田であり、耕土を除去したところ、下部は砂と黒色粘質土の堆積があり、低湿地であることをしめしていた。ここは古来より『沼』と呼ばれている所であった。畦と思われるやや高く盛り上がった部分とそれに平行して続く溝を確認したが、何本もが切りあい、重なりあっているため、新旧関係はもとより、溝の全容もつかめない状態である。

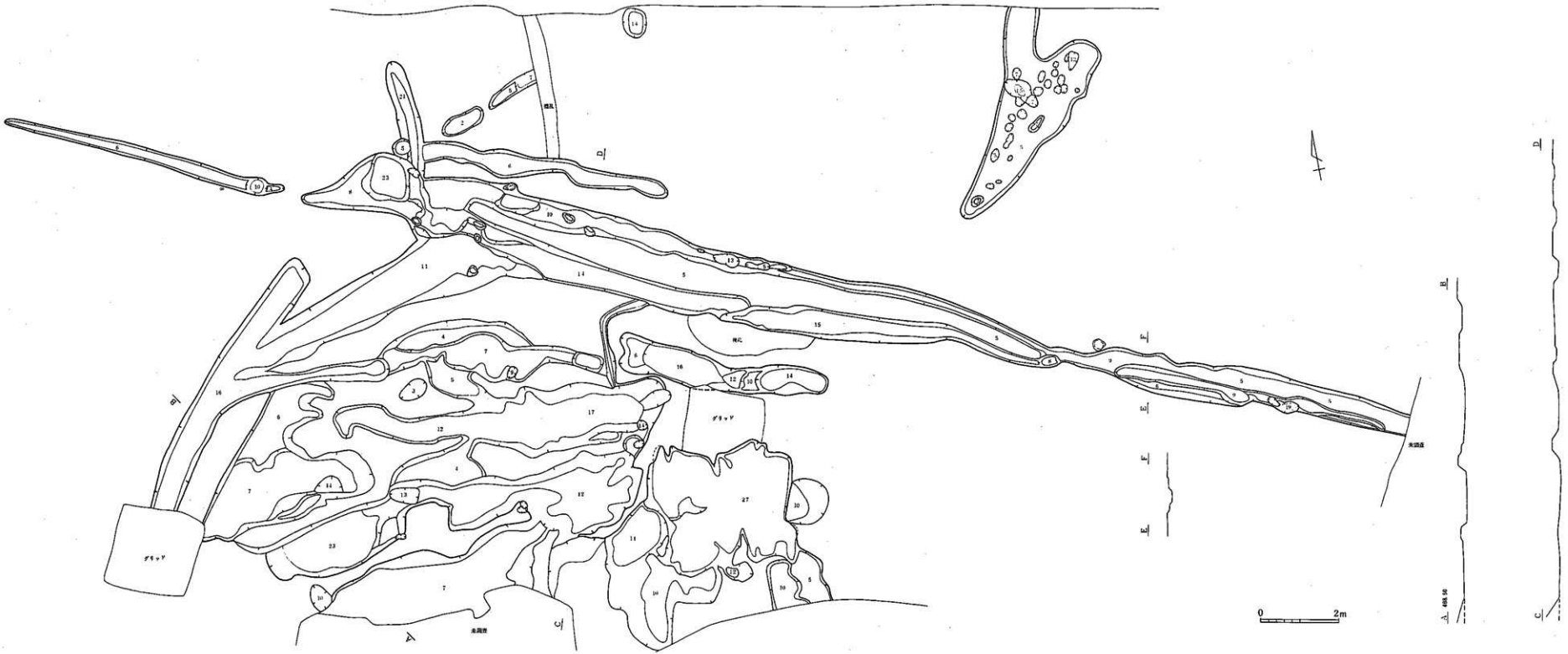
砂の中から中世の甕の破片が出土している。これらは流れ込んできたものと考えられる。

(3) 遺構外出土遺物（第35・36・37・38・39・40図）

遺構の分布が稀薄であったため全体的に遺物は少ない。その中でも遺構に関係する遺物よりも遺構外として扱った遺物のほうが多い。時代的に見ると、縄文時代から中世、近世まで様々である。

縄文時代のものとしては、土器の破片よりも石器が多い。打製石斧（第35図11～14、第36図１～13、第37図１～13、第38図１～４）・横刃形石器（第38図５～14、第39図１～５、９）は硬砂岩製がほとんどであり、全域から出土している。黒曜石製の石鏃（第40図２）、同じく黒曜石製のラウンドスクレイパー（第40図４）及びチャート製の石匙（第40図３）は沼地区の湿地の出土である。土器としては、脚部に透かしがあり胴部に円窓をもつ異形土器と見られる破片（第35図１）が出土している。そのほかにいくつかの破片（第35図２、３）が出土しているが、これらは遺構に付随するとは考えにくいものである。

弥生時代以降の遺物としては、有肩扇状形石器（第39図７）及び石包丁（第39図８）があるが、少ない。中世から近代にかけての遺物は、沼地区を中心にし比較的出土している。甕の破片（第35図４、５）や摺鉢（第35図６、７）があるが、やはり流れ込んだものと考えられる。また、北平地区の竹藪の下層から鉄釉の片口鉢（第35図10）・壺（第35図11）が出土している。



挿図93　ＮＧＫ沼区畦・溝群

Ⅳ ま と め

今回の調査経過は、以上のとおりであるが、調査対象が道路幅に限定されるものであり、それのみでは断片的な事実を知り得たのみといえる。遺跡の総体については、周辺一帯を含めた総合的な考究が必要であるが、遺跡によってその周辺部の状況が不明なものもあり、既調査結果及び地形的な立地条件なども含め遺跡毎に若干の整理を行ない本書のまとめとしたい。

≪田井座遺跡≫

本遺跡における今回の調査では、縄文時代、弥生時代、中世についていくつかの事実を明らかにすることができた。また、周辺部において何カ所かの調査例もあり、それらを総合的に検討する中で、遺跡の全体像がある程度推測される状況といえる。

遺跡の立地については、環境の項で触れたとおり、東西方向に延びる尾根状の地形を成し、北側に湿地を控え、南は毛賀沢川に面している。総体としては自然災害を受けにくく、水利条件にも恵まれた環境の中に所在するといえる。こうした条件下において、縄文時代前期初頭・弥生時代後期・中世とそれぞれ時代の隔絶した3時期の集落が展開した事実がある。

〔縄文時代〕

縄文時代前期の集落については、昭和62年に行なわれた飯田市道「運動公園通り」建設により明らかになった5軒の竪穴住居址が主体であるが、今次調査においても1軒の竪穴住居址と、同時期に属す可能性の高い集石炉が確認されている。いずれの住居址も浅い掘り込みの竪穴住居址であり、出土土器から早期最終末期から前期初頭に位置づけられる。

当地方において、当該時期に前後する頃の複数住居址の発見された遺跡は、豊丘村田村原遺跡・喬木村伊久間原遺跡などごく少数ではあるが、それらによって定住生活を営む集落の形成が普遍的に行なわれたことを知ることができ、本遺跡もその1例といえる。

今次調査及び今までに実施されたいくつかの発掘調査結果によれば、ほとんどの住居址が尾根状の台地のうち頂部にあたる高所に占地している傾向がある。すなわち、該期集落の中心部は、今回国道の通過する位置より北西方向の位置に考えられる。

当遺跡において、数回の発掘調査が行なわれているが、遺跡内における該期集落の東限はある程度把握し得たといえるが、尾根状に展開する西方については、どの程度の範囲で本集落がくくられるのか不明である。また、尾根上の一定範囲内に形成された集落は、未調査部分が圧倒的に多いことはいうまでもなく、未確認の遺構は相当数存在するといえる。また、遺構の検出状況から、すべての遺構が同一時期に存在したとは考え難く、複数時期にわたっていると判断され、一定期間継続した集落の可能性がある。

当然その時代における生業は、漁猟であり採集活動によっており、この場所の立地条件が大く関与していたといえる。この場所は、毛賀沢川の流路が扇状地上の浅い流れから、段丘面を浸食する深い谷へと姿を変ずることにより、鳥獣魚及び植物食糧を安定して獲得し得た条件を備えていたと考えられる。

なお、その後の縄文時代における遺構・遺物の検出状況としては、中期・後期の断片的な資料があるのみで、集落としての姿を把握し得ない。遺構としては、後期の土坑がわずかにみられるのみで、近隣に集落の中心を求めることすら困難である。ある一定の距離を置いて集落の中心を移動していたと推測され、西方の山麓から東方の段丘先端に至る広範囲にわたる遺跡分布を検討する中で、時代の流れそのものも考えることができる。

〔弥生時代〕

縄文時代前期の後、再び田井座遺跡に人々が居住するのは、弥生時代後期に至ってのことである。弥生時代の後期は当地方全体において集落の分布が飛躍的に拡大する時代であり、そうした地域全体の動きの中で本遺跡も同一の姿を示している。

今回の発掘調査により発見された遺構は、竪穴住居址19軒、方形周溝墓6基、掘立柱建物址3棟がある。また、今回の調査に限らず、既調査により検出された遺構数を合すると、竪穴住居址26軒、方形周溝墓10基となる。縄文時代で触れたとおり、遺跡全体における調査面積は、ごく限られたものであり、未調査部分の遺跡は、相当の数にのぼる推測され、遺跡全体における住居址の数は50〜100軒と考えられ、当地方における該期集落としては、中規模の典型的なものといえる。

合計の遺構数で遺跡を捉えれば以上のとおりであるが、すべての遺構が同時期に存在しておらず、弥生時代後期の中で集落の変遷がある。出土遺物の内容等から、当遺跡における最初の住居址は、後期前半にあたる座光寺原式期の中で2時期に細分されている可能性が強いが、遺構数が限られており断定はできない。

続く後期後半の段階は、集落自体が発展する姿を示し、住居数も多くなり、その分布も遺跡全体に広がりをみせる。出土遺物の内容から、当地方における後期後半の中島式の段階といえ、2〜3期にわたる集落といえる。しかし、相互に連続して存続したとみられ、各住居址を明瞭に細分するのは困難といえ、わずかに25・26号住居址が最終末期に位置づけられることが判断できる程度である。

いずれにしても、弥生時代後期の前半から終末期にかけて存在した集落が本遺跡といえ、後期前半に小規模な集落が始められ、後半期に一定規模の集落として安定した姿をみせ、弥生時代の終焉とともに集落も廃せられたといえる。

〔中　　世〕

発達した弥生時代の集落の後、当分の間人々居住した痕跡はほとんど確認できず、再々度その姿を見ることのできるのは、鎌倉時代に至ってである。欠落する時代については、地域全体の動行の中で、また、周辺の遺跡や古墳等の存在する状況などとの関連から、当遺跡を含む一帯がまったく意味の無い地帯とは考え難く、居住域・墓域等の直接的な生活の場以外の地として用いられていたことを推測させる。

いずれにしても、本遺跡において古代の姿を知るすべは、本発掘調査で得ることはできず、中世に再度地域の歴史を刻み始めたといえる。鎌倉時代における、本遺跡を含む一帯は、下伊那に置かれた５つの庄園のうち１つである伊賀良庄の一画である。その中頃において北条江間氏の地頭代を努めた四条金吾頼基は、「とのおか」に居を構えたとされ、その「とのおか」が今の飯田市殿岡であるとすれば、本遺跡はその地に接するといえ、重要な位置づけのなされる地といえる。　また、室町時代に至って小笠原氏の支配下となった地域の変遷の中で、その居城である松尾城跡とは、尾根続きで連続する地形的な位置関係も、本遺跡の性格付けに大きな意味を持つといえる。

今回の調査により検出された遺構等は、常滑焼大型甕の特殊な出土状態など興味深いものはあるが、遺跡全体における時代の具代的な姿を明らかにするには至っていない。しかし、前述のとおり、伊賀良庄に関連して、鎌倉時代における殿岡との位置、室町時代における松尾城との位置、関係など、当時の政経上重要な地であったことはいうまでもなく、今後の周辺城の調査等に大きな課題が託されているといえる。

≪一色遺跡≫

田井座遺跡から北東方向にある本遺跡は、地形上基本的には同一段丘面上にあるが、その間に低湿地をはさみ、微地形の上では別個の尾根といえる。また、尾根状部分の北側は南側同様に低湿地を成し、尾根の幅は南北に50ｍ前後の狭小なものである。

今回の調査では、この尾根上に４軒の弥生時代後期の竪穴住居址と２軒の中世と考えられる住居址を検出した。

弥生時代後期の住居址は、出土遺物がなく、一部詳細な時期を判断できないものもあるが、その分布状況等から同一時期と考えられ、いずれも後期後半の中島式段階のものといえる。調査は狭小な尾根を横断する形で行なったものであり、遺跡全体とすれば、ごく一部に限られたものであり、その全容を知ることは不可能ではあるが、周囲の状況等から10～20軒の住居により構成された集落の存在が推測される。

その生産基盤は尾根の南北両側に存在する自然湧水に起因する低湿地を水田として活用したものと判断され、その存続が可能な集落規模はあまり大とはいえない。

また、周囲の遺跡との関連としては、前述の田井座遺跡の中核を成す時代と共通した集落の存在時期であり、生産基盤及び位置関係などからその従的なつながりを感ずる遺跡である。

中世の遺構についても、具体的な内容を整理するには、その調査面積の限定されていることもあり、不可能に近いが、やはり、田井座遺跡との関連及び、松尾城跡との関連などの位置づけを慎重に行なうべき遺跡といえる。

≪名古熊下遺跡≫

田井座・一色両遺跡の所在する高位段丘面の北側に一段下がった中位段丘があり、その段丘面上に本遺跡がある。本遺跡は、中世の状況を除けば、前2者とはまったく異なった様相を持つ遺跡といえる。

段丘崖下に位置する遺跡のため、当初は段丘の後背湿地に関連した弥生時代の集落跡の存在が予想されたが、その結果は、調査面積の広さに比して、弥生時代の遺物すら皆無に近い状態であった。

縄文時代の遺構についても、具体的に捉えたものは、わずかに土坑があった程度で、集落等の存在を推測することも困難であった。しかし、段丘崖下に断片的な資料ではあるが、縄文時代後期の土器片等が若干集中して出土しており、同様の状況が、本遺跡よりさらに一段下がった段丘面上にある猿小場遺跡でも確認されており、地域全体における土地利用の姿を考える上で一石を投じている。

中世における遺構の検出状況は若干特殊なものがある。段丘直下に大きな溝址（川）の存在が確認され、その内部に堆積した土砂の状況からかなりの水流が考えられ、その形状等から人為的な施設である可能性も指適できる。そうとすれば、本遺跡のある段丘面を、中世のある時期において、水田経営のために開発した水路と考えることも可能といえる。

また、その溝址に先行して、方形竪穴が存在しており、小笠原氏居城の松尾城とは若干距離を置くが、それとの関連を考究する必要がある。当地方における同様の方形竪穴は、飯田城跡の発掘調査により多数確認されているが、本遺跡例のように一般の遺跡で検出されたのは、座光寺恒川遺跡例に次ぐものといえ、中世後半期における城館を中心とした周辺部の土地利用のあり方を検討する1つの材料といえる。今後、類例の集積を待って、本遺跡の当該遺構等についての考究も具体的になされるものと考えられる。

以上、今回の調査結果により、若干の整理を行なったが、各遺跡においていくつかの新事実を明らかにすることができた。いずれも、今後の地域史を考究する上で大きな示唆を与えてくれた。しかし、調査範囲は国道バイパスの用地に限られており、今後周辺部分における発掘調査等の実施により、更に新しい事実を知ることができ、より具体的な地域の歴史像が明らかになるといえる。

（小林正春）

V　引用参考文献

伴信夫・宮沢恒之　1967「長野県飯田市伊賀良西ノ原遺跡調査報告」『信濃』19巻12号

神村　透　1982「立野式土器の編年的位置について（完）」『信濃』34巻2号

中央道遺跡調査会　1972『中央道調査報告―飯田市内その2―』長野県教育委員会

中央道遺跡調査会　1975『中央道調査報告―下伊那郡鼎町その2―』長野県教育委員会

鼎町教育委員会　1975『下伊那郡鼎町天伯A遺跡』

飯田市教育委員会　1977『伊賀良中島平』

飯田市教育委員会　1978『伊賀良宮ノ先』

飯田市教育委員会　1980『猿小場遺跡』

鼎町教育委員会　1983『矢高原・八幡原遺跡』

飯田市教育委員会　1983『酒屋前遺跡』

飯田市教育委員会　1983『鳥屋平』

鼎町教育委員会　1984『鼎町黒河内遺跡』

鼎町教育委員会　1984『鼎町一色・天伯B遺跡』

飯田市教育委員会　1985『町道知久町中村線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』

飯田市教育委員会　1986『恒川遺跡群』

飯田市教育委員会　1987『殿原遺跡』

重要文化財文永寺石室・五輪塔保存修理委員会　1987『重要文化財文永寺石室・五輪塔修理工事報告書』財団法人文化財建造物保存技術協会

飯田市教育委員会　1987『飯田垣外遺跡・火振原遺跡・梅ケ久保遺跡』

飯田市教育委員会　1988『小垣外・八幡面遺跡』

飯田市教育委員会　1988『田井座遺跡』

飯田市教育委員会　1989『下原遺跡』

飯田市教育委員会　1989『六反畑遺跡』

下伊那史編纂委員会　1955『下伊那史　第2巻』

下伊那史編纂委員会　1955『下伊那史　第3巻』

下伊那史編纂委員会　1955『下伊那史　第4巻』

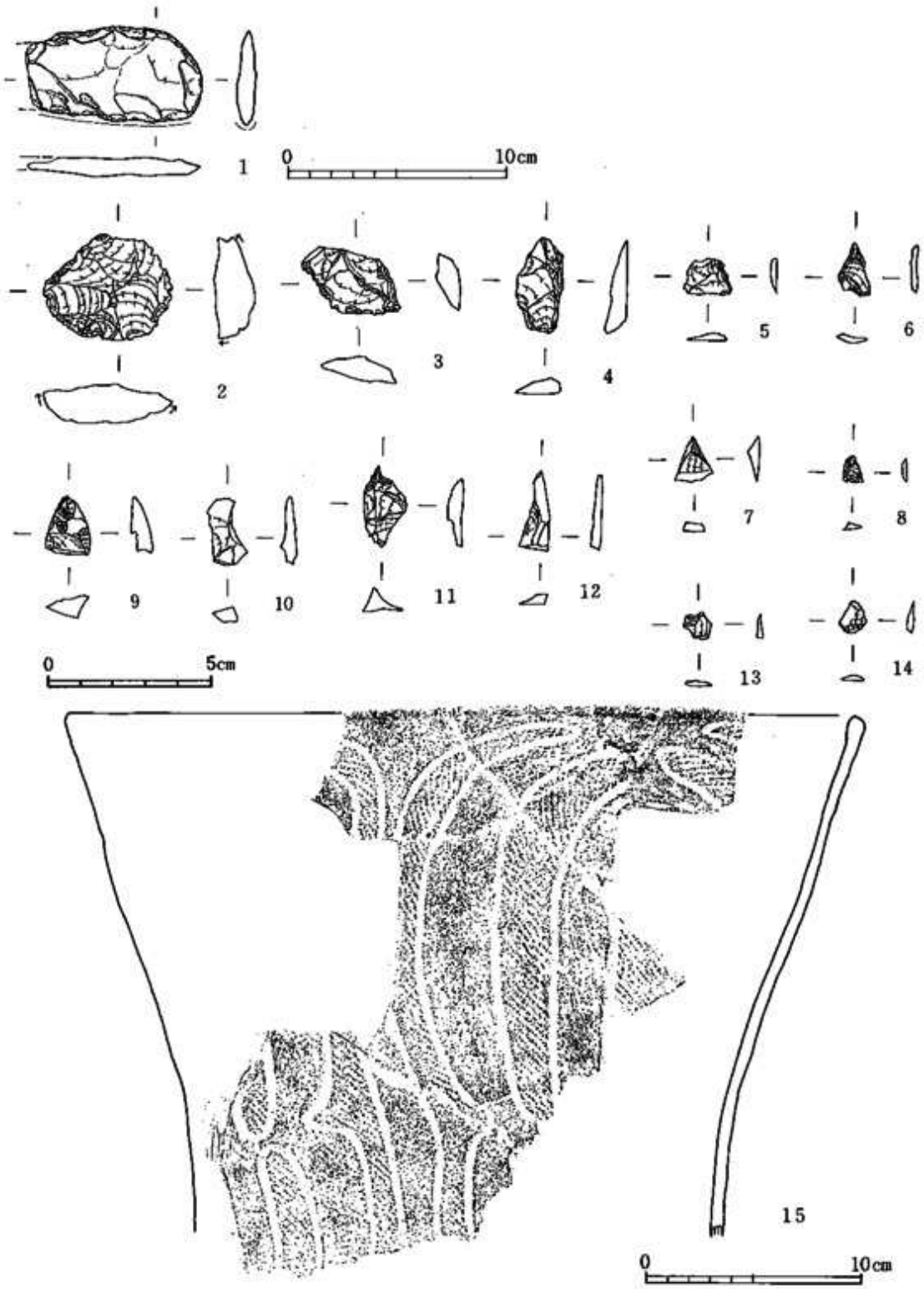
鼎町史編纂委員会　1986『鼎町史』

1980『日本やきもの集成　2巻』　平凡社

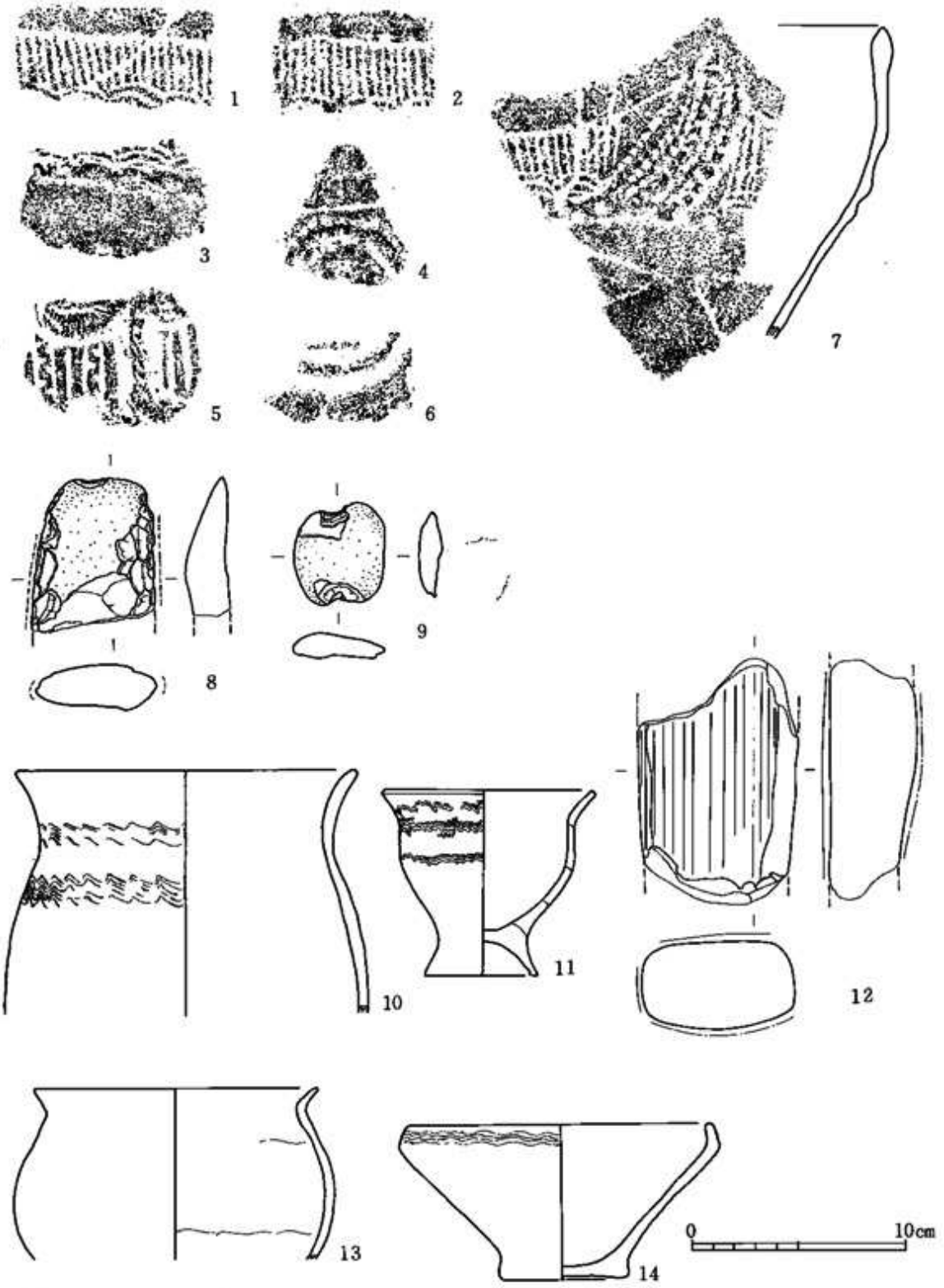
1980『日本やきもの集成　3巻』　平凡社

小林達雄　1988『古代史復元3　縄文人の道具』講談社

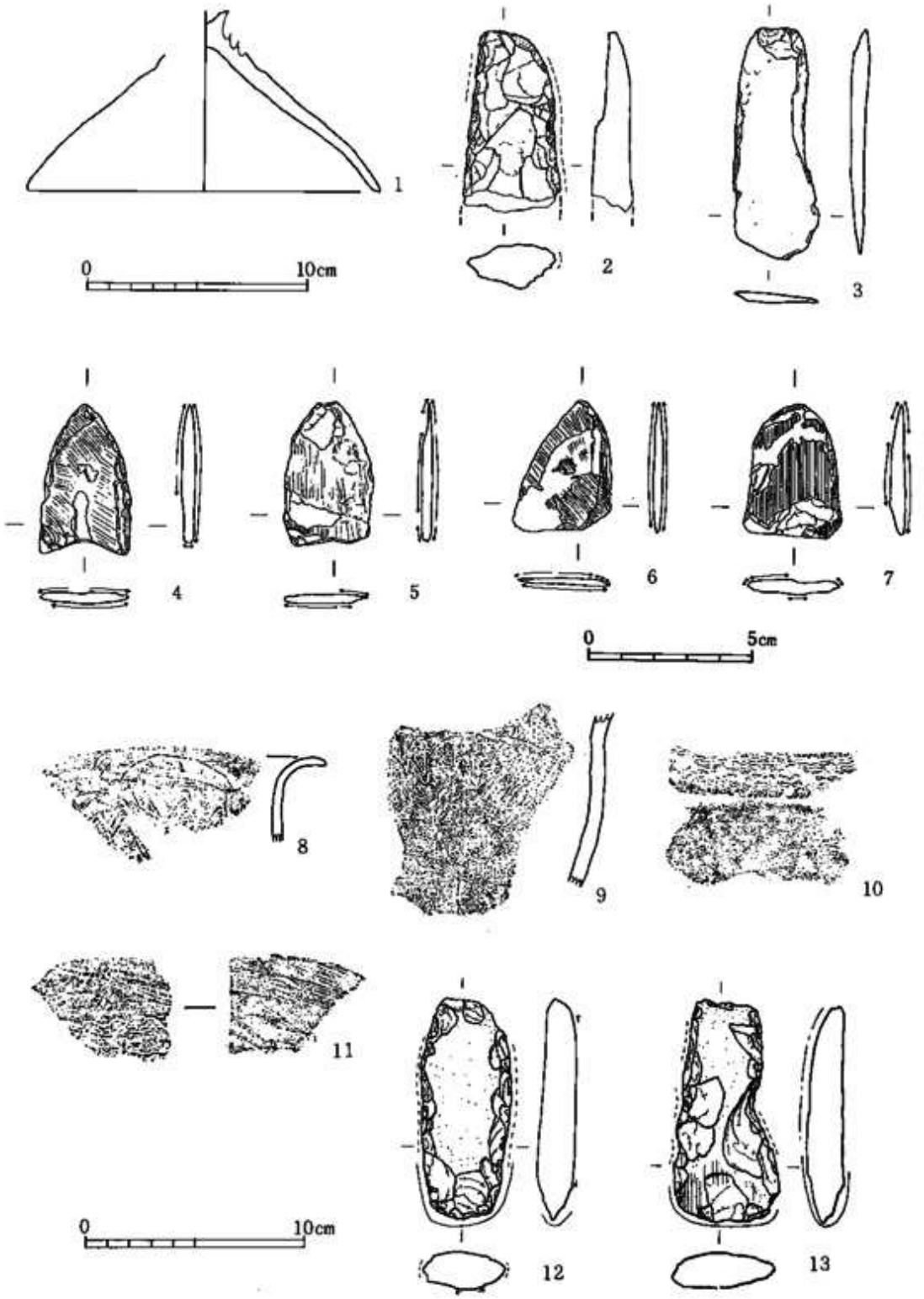
図　　版



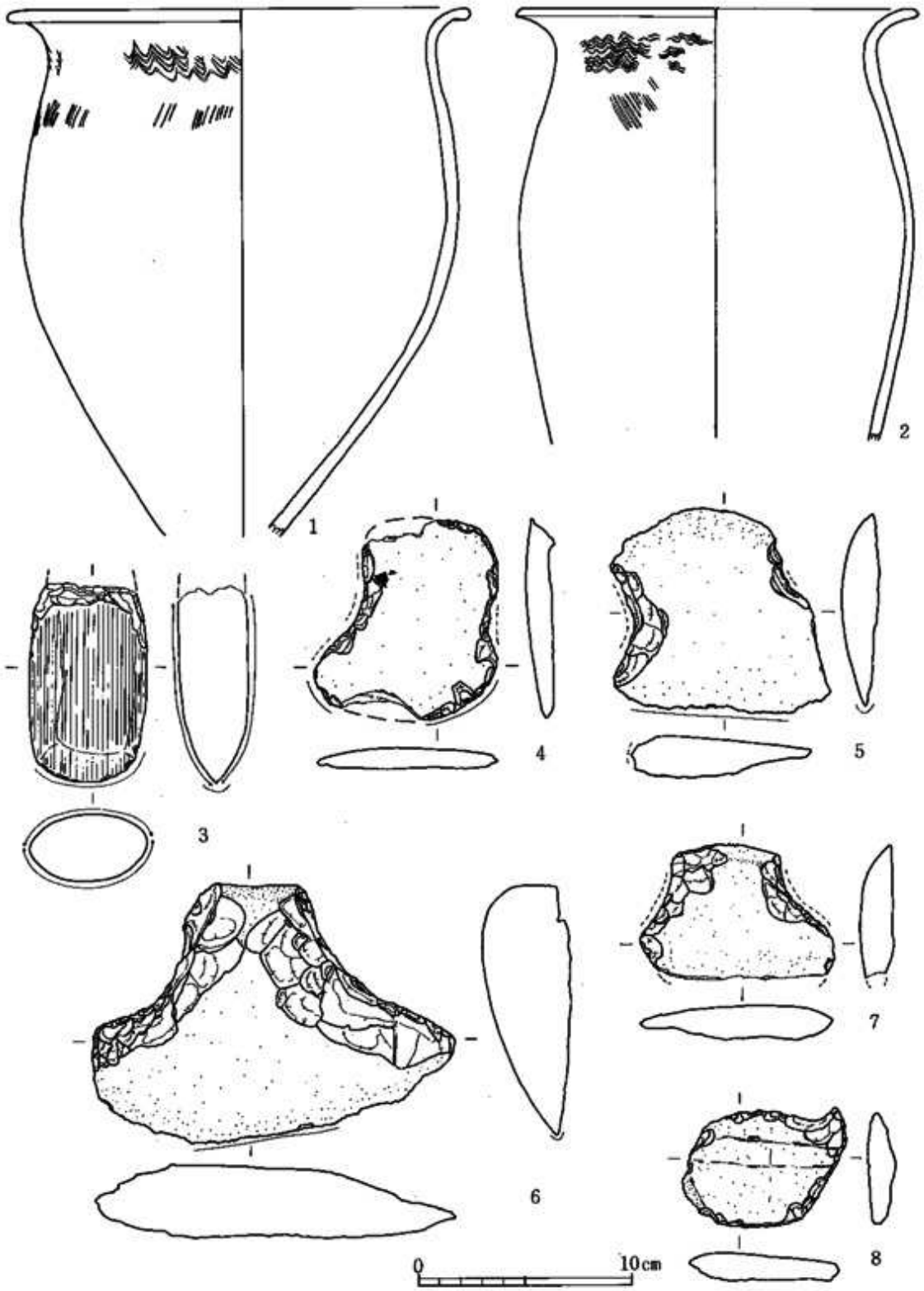
第1図　T I Z　9・20号住居址，土坑5出土遺物（9号住1，20号住2～14，土坑5…15）



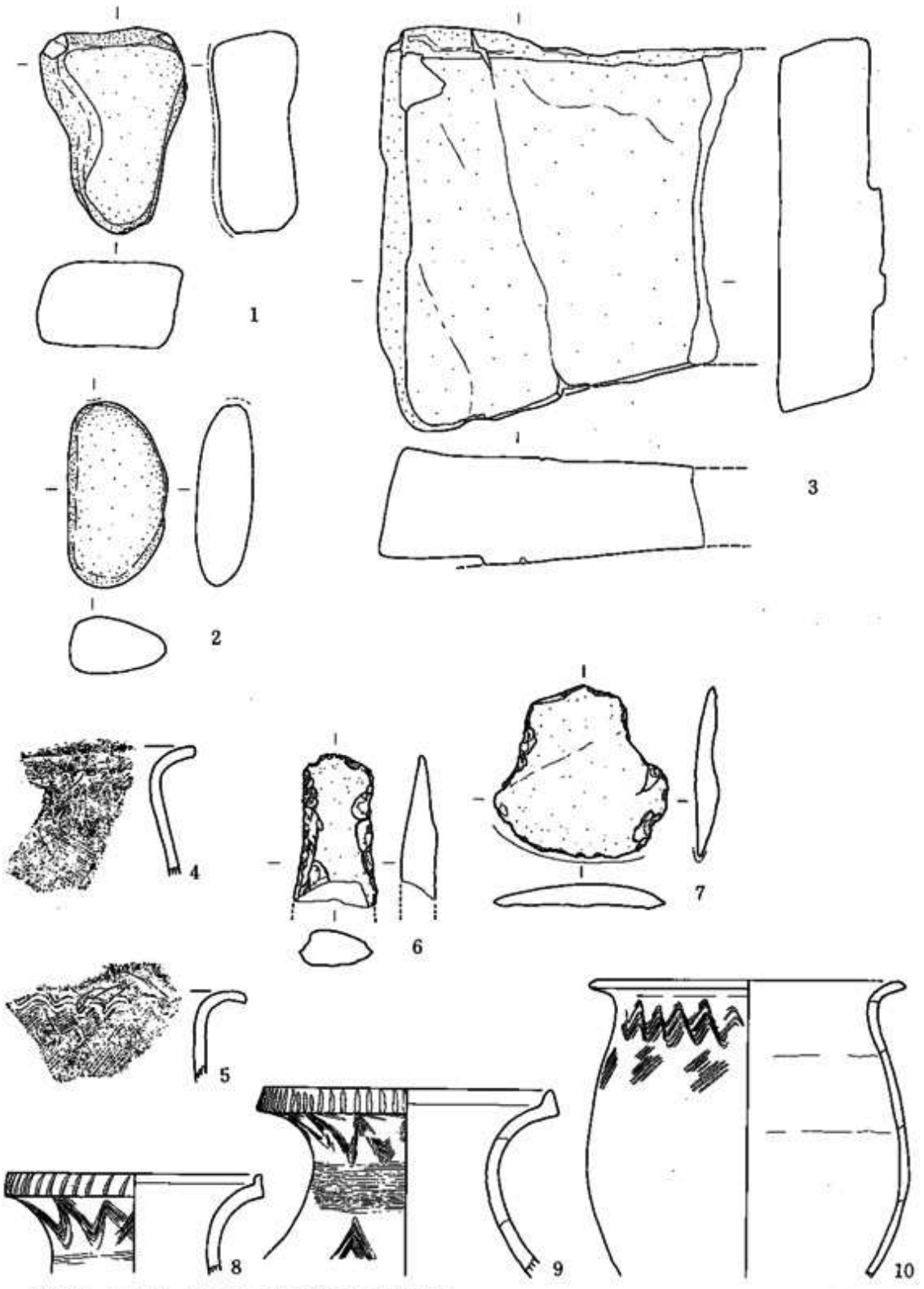
第2図　T I Z　土坑6，10・11号住居址出土遺物（土坑6…1～9，10号住10～12，11号住13～14）



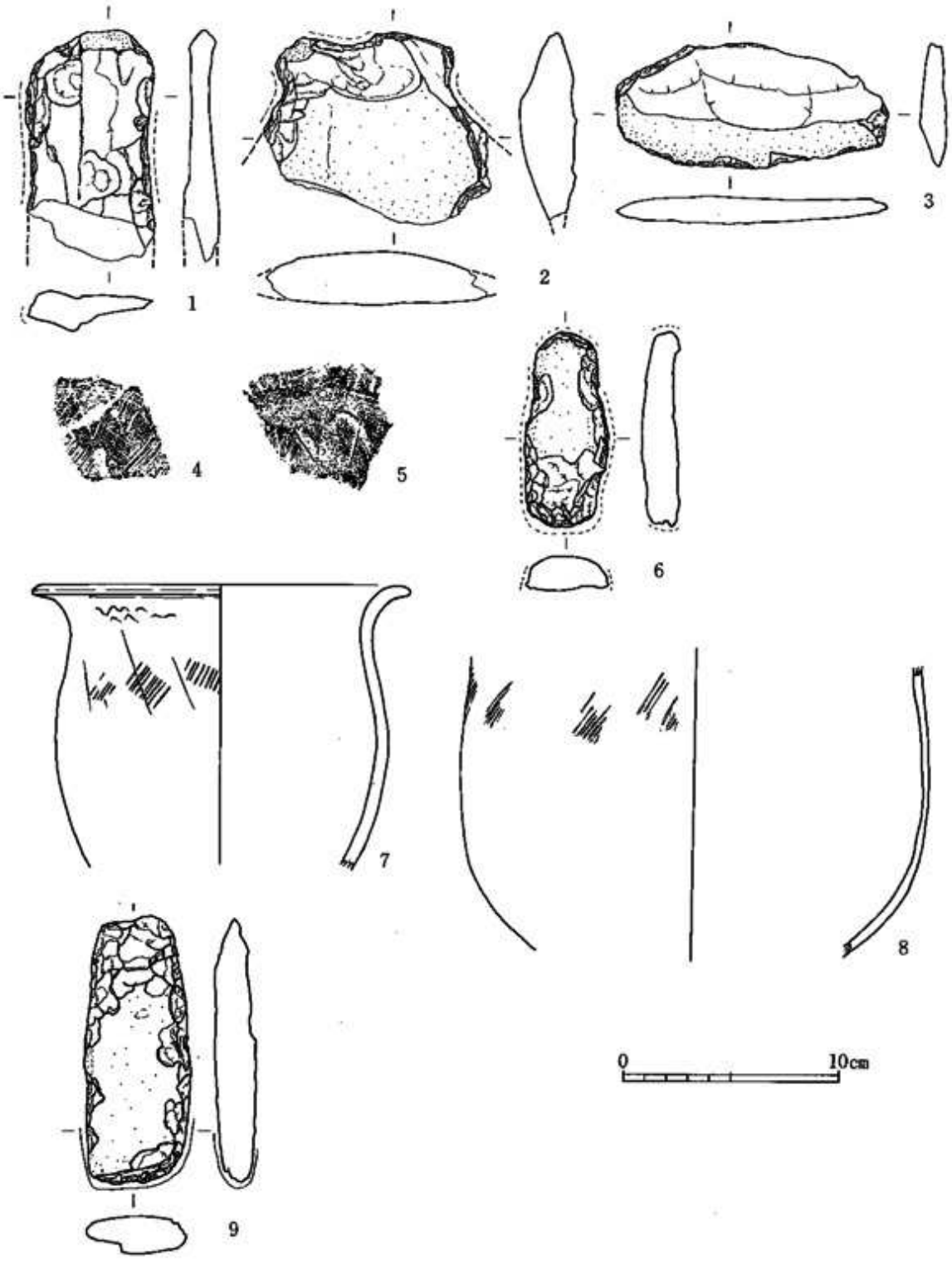
第3図　ＴＩＺ　11・12号住居址出土遺物（11号住１～７，12号住８～13）



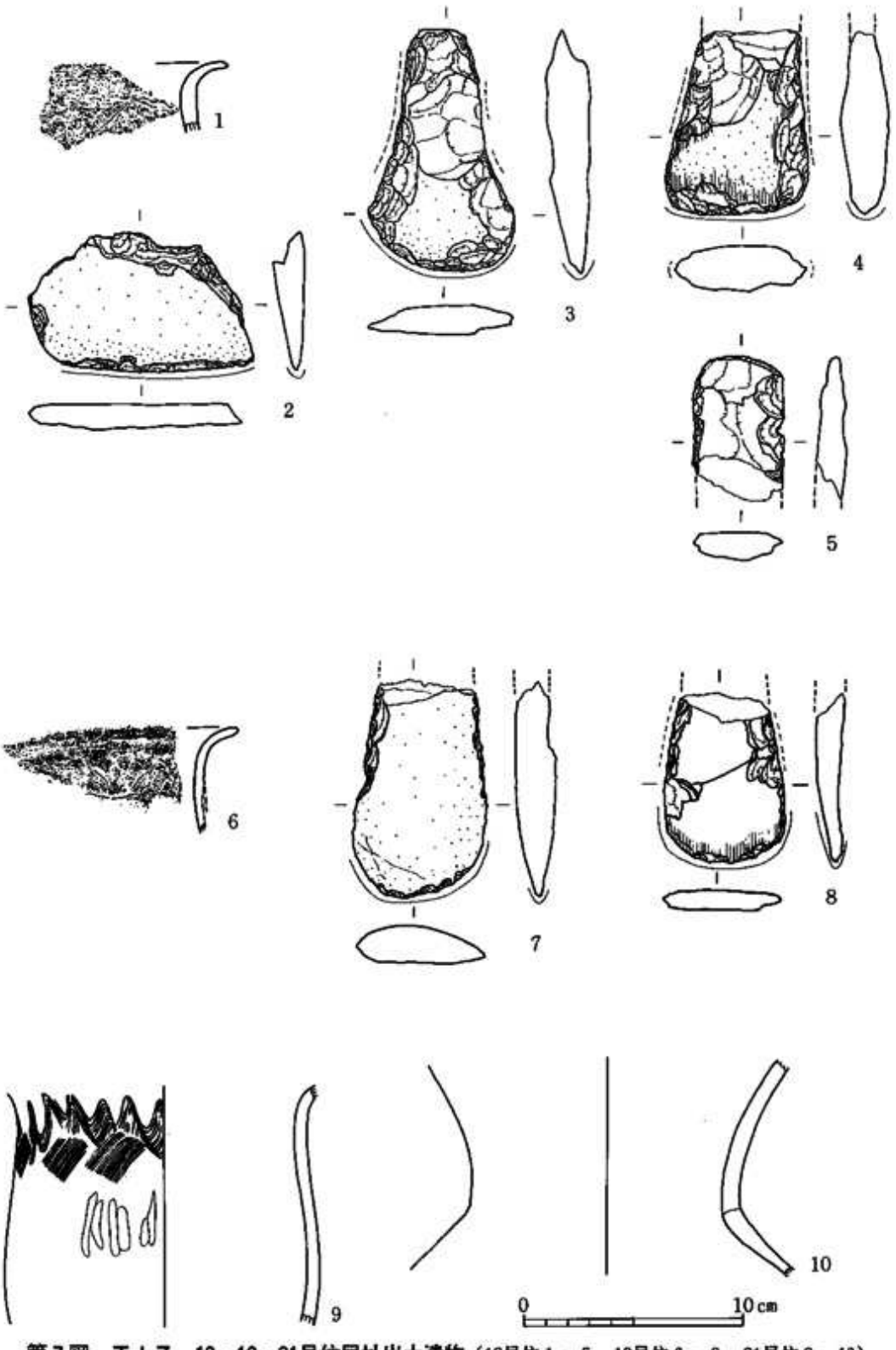
第4図　T I Z　13号住居址出土遺物



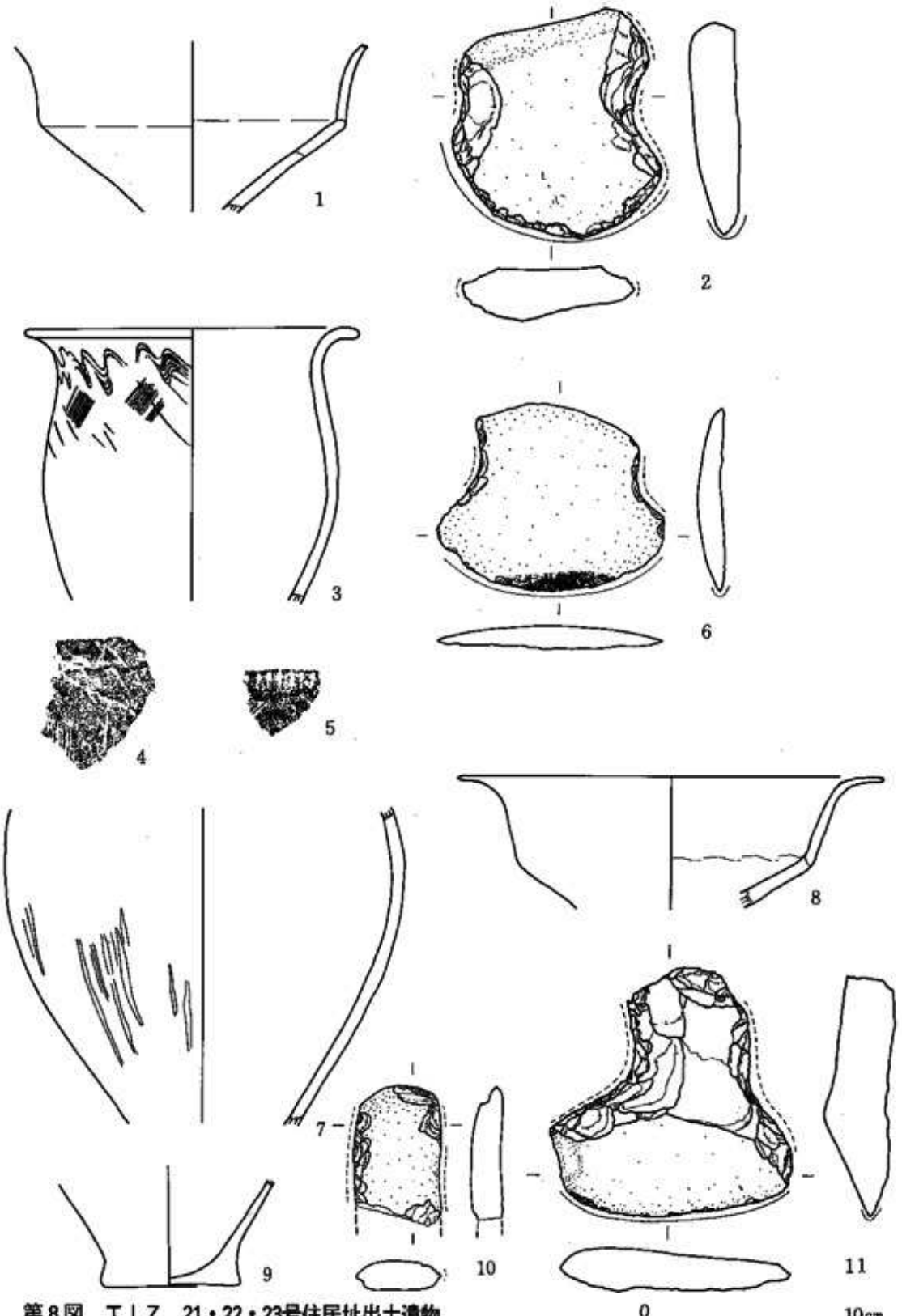
第5図　T I Z　13・14・15号住居址出土遺物
（13号住1～3，14号住4～7，15号住8～10）



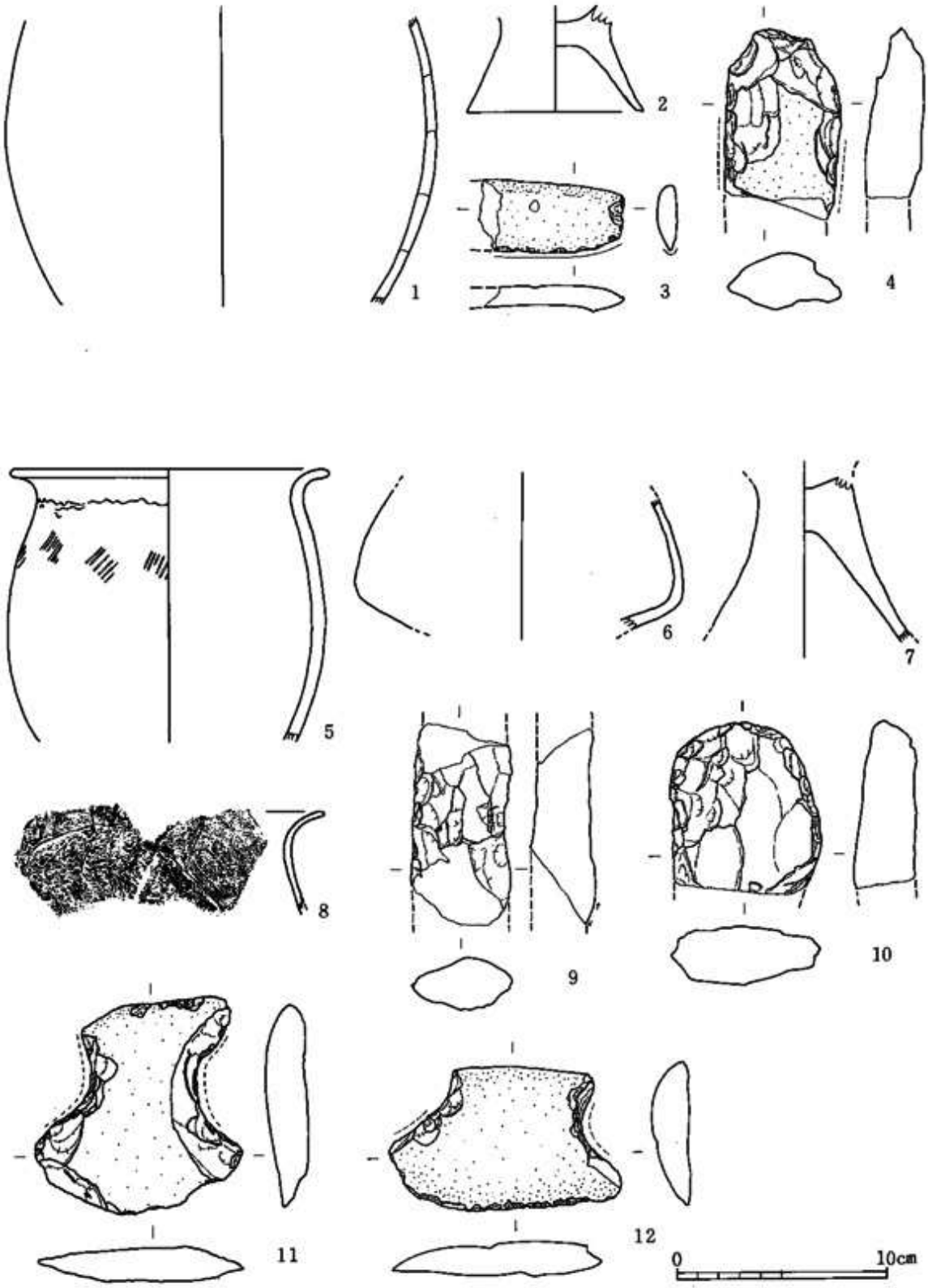
第6図　T I Z　15・16・17号住居址出土遺物（15号住1～3，16号住4～6，17号住7～9）



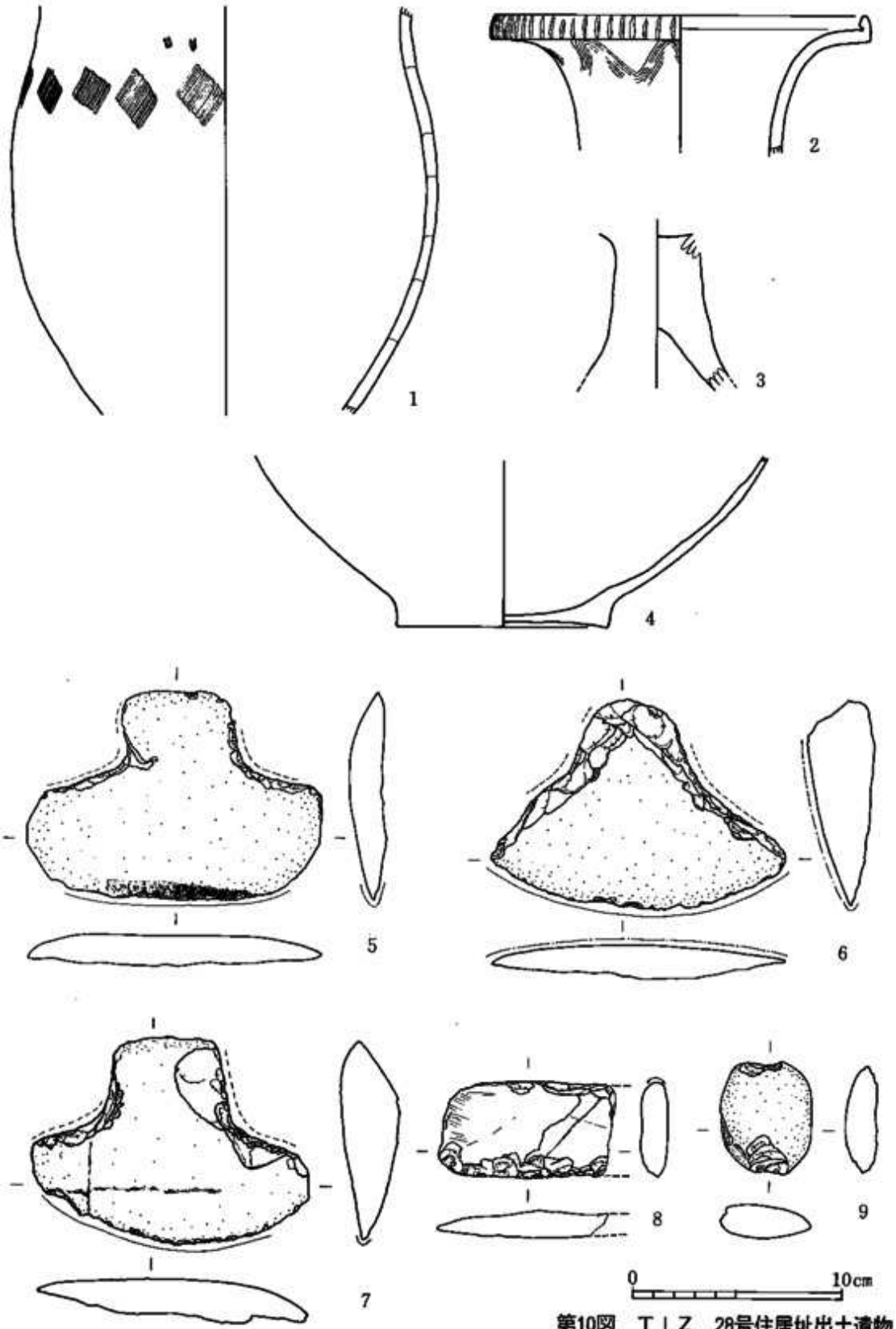
第7図　TIZ　18・19・21号住居址出土遺物（18号住1～5，19号住6～8，21号住9～10）



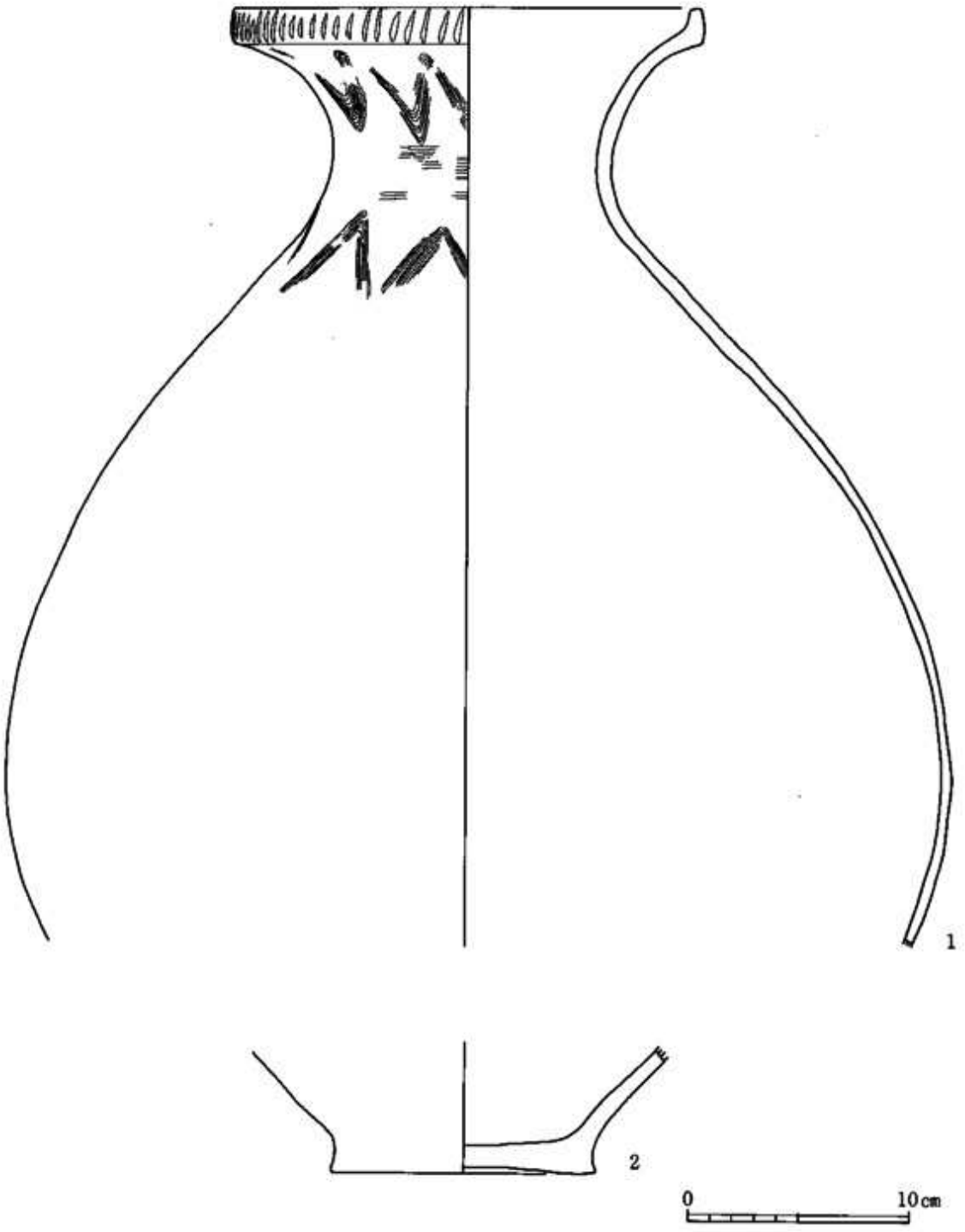
第8図　T I Z　21・22・23号住居址出土遺物
（21号住1～2，22号住3～6，23号住7～11）



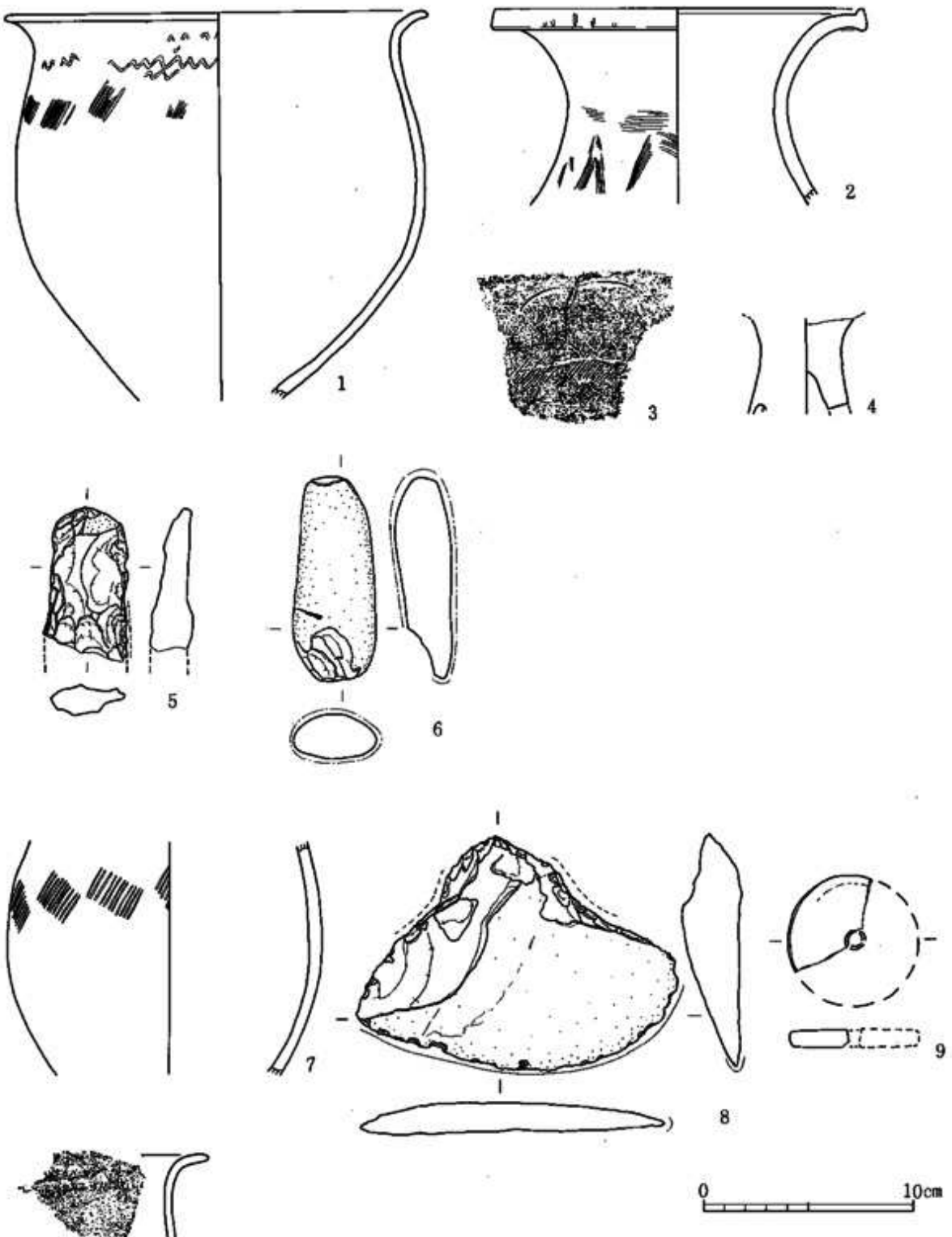
第9図　ＴＩＺ　25・26号住居址出土遺物（25号住１～４，26号住５～12）



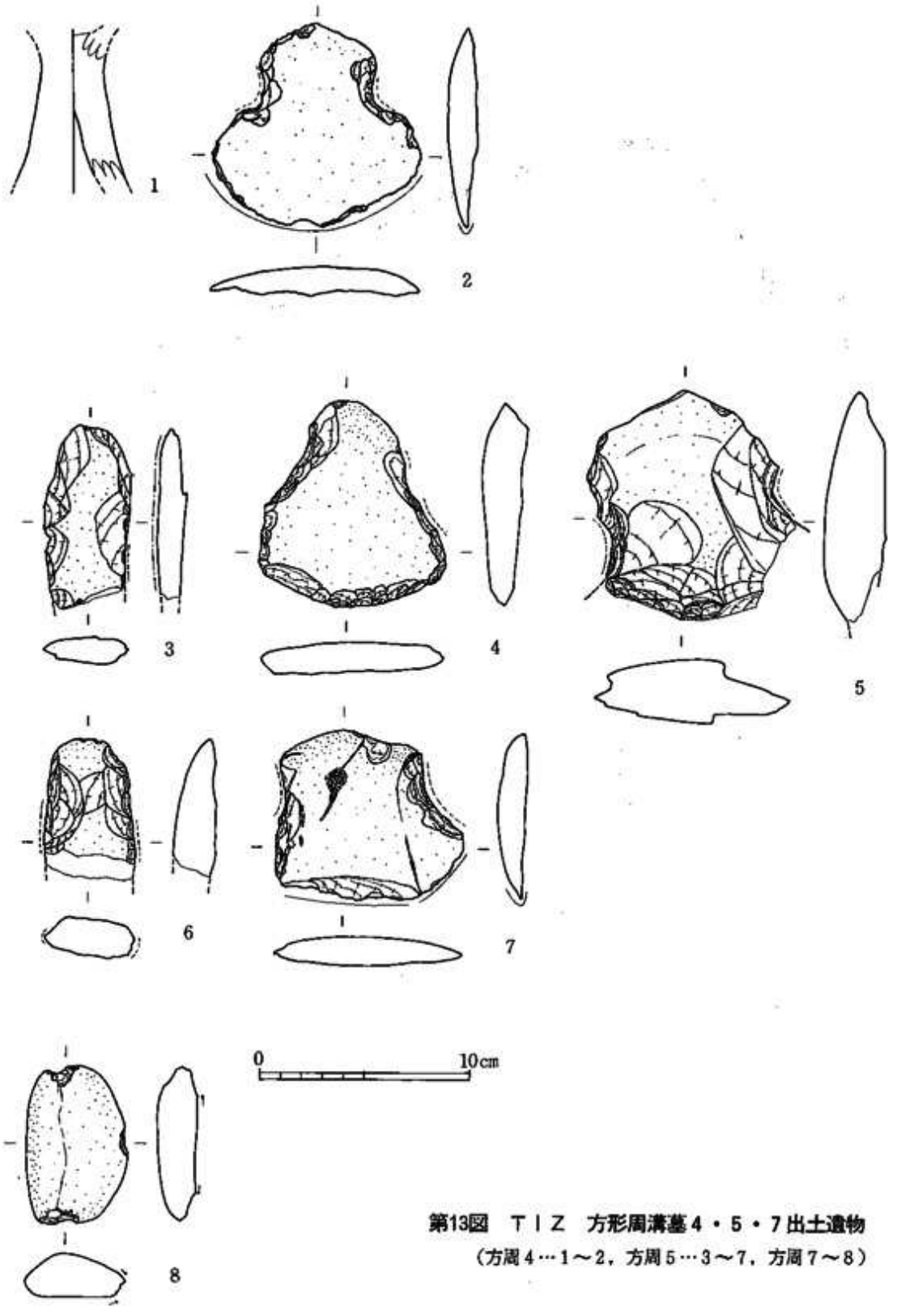
第10図　T I Z　28号住居址出土遺物



第11図　ＴＩＺ　29号住居址出土遺物

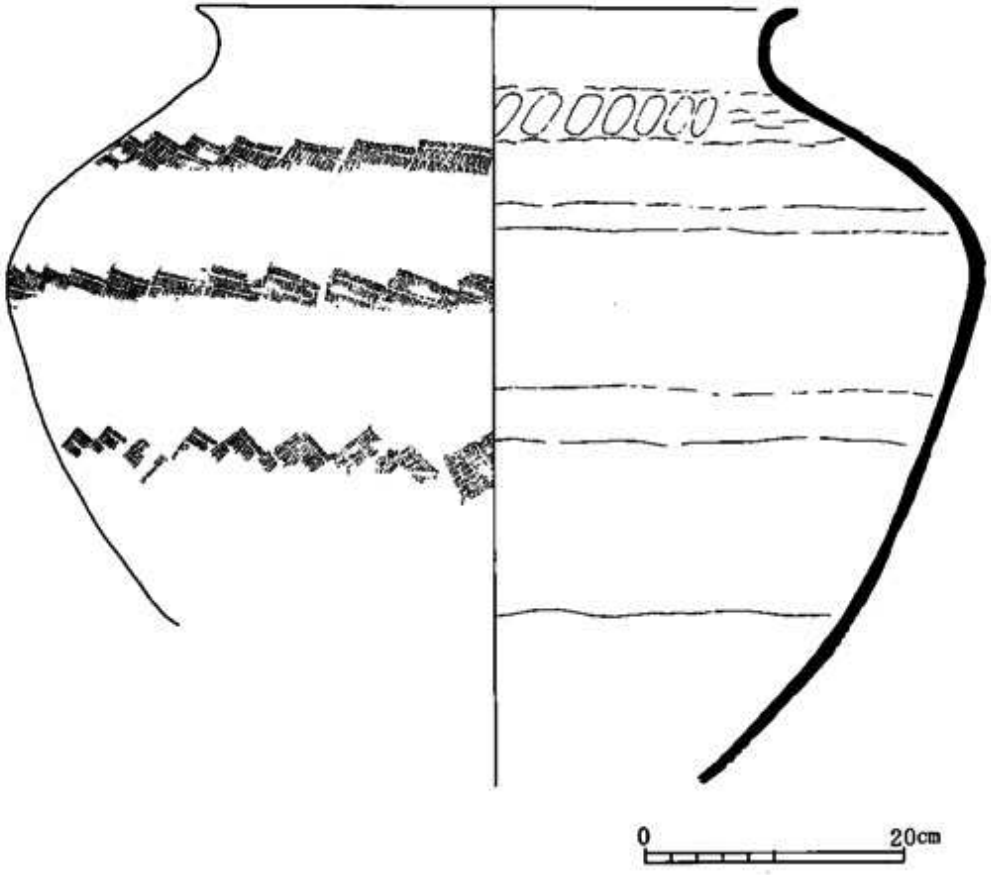


第12図　ＴＩＺ　29・30・31号住居址出土遺物
（29号住１～６，30号住７～９，31号住10）

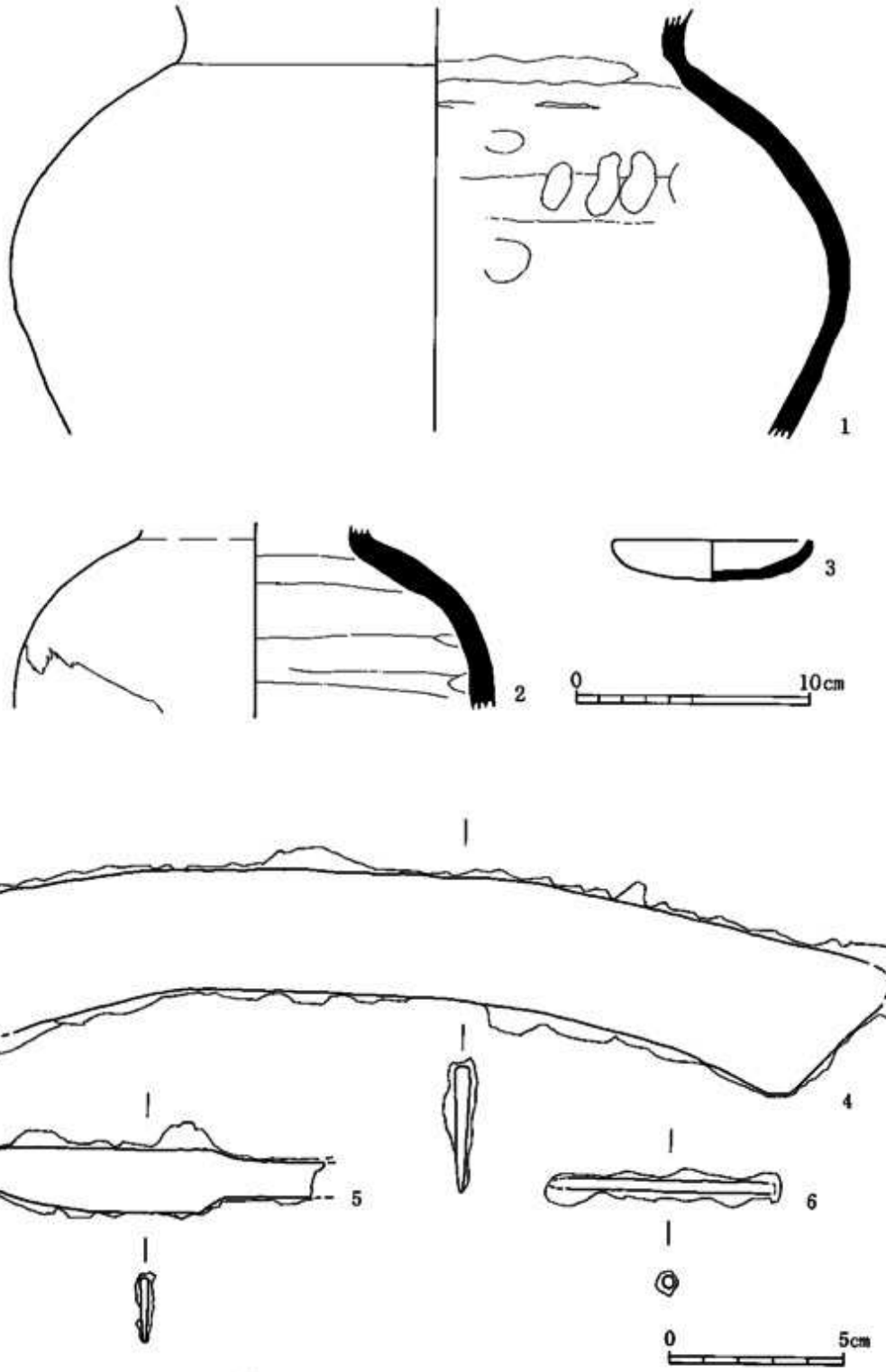


第13図　ＴＩＺ　方形周溝墓４・５・７出土遺物

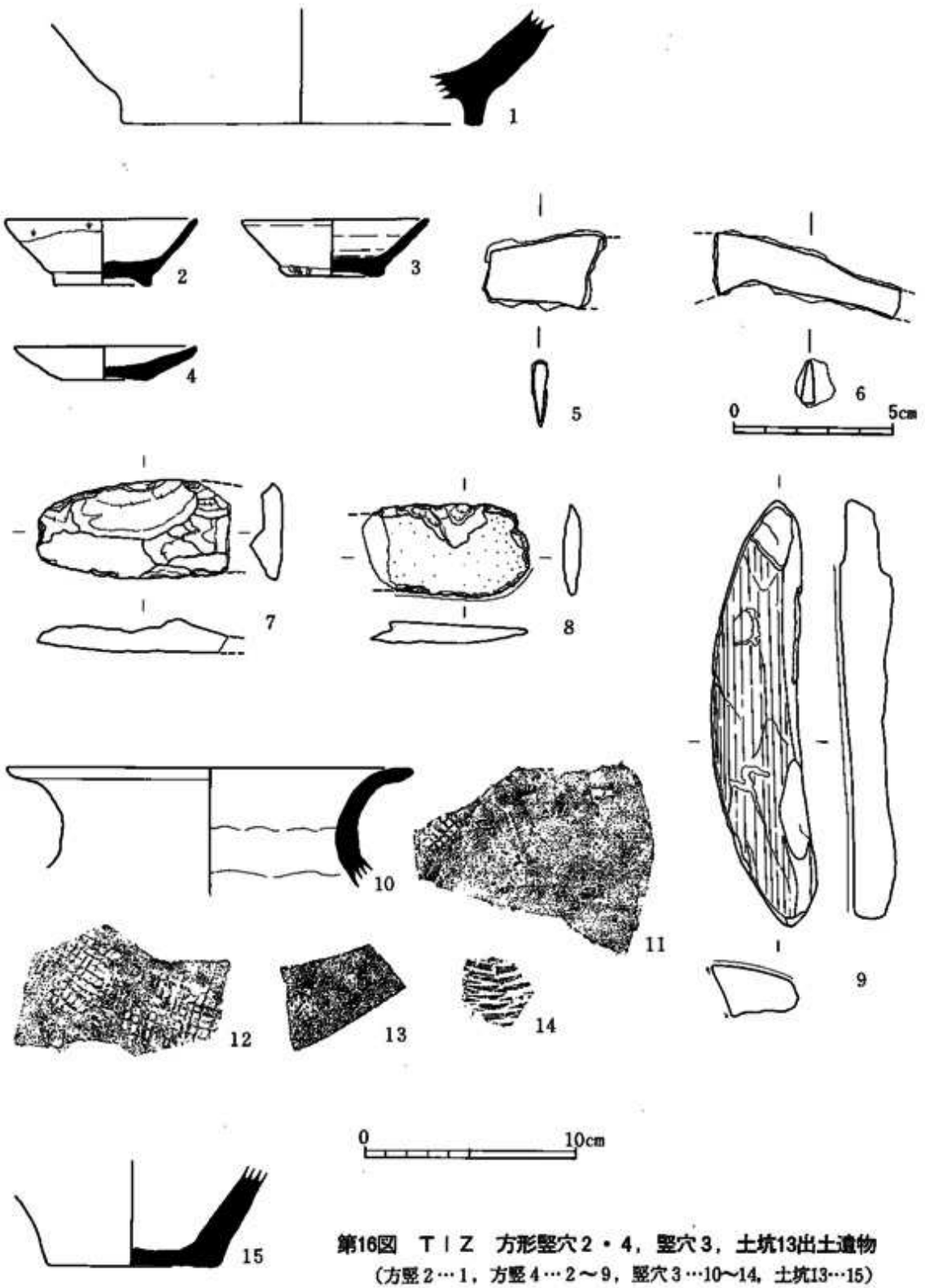
（方周４…１～２，方周５…３～７，方周７～８）



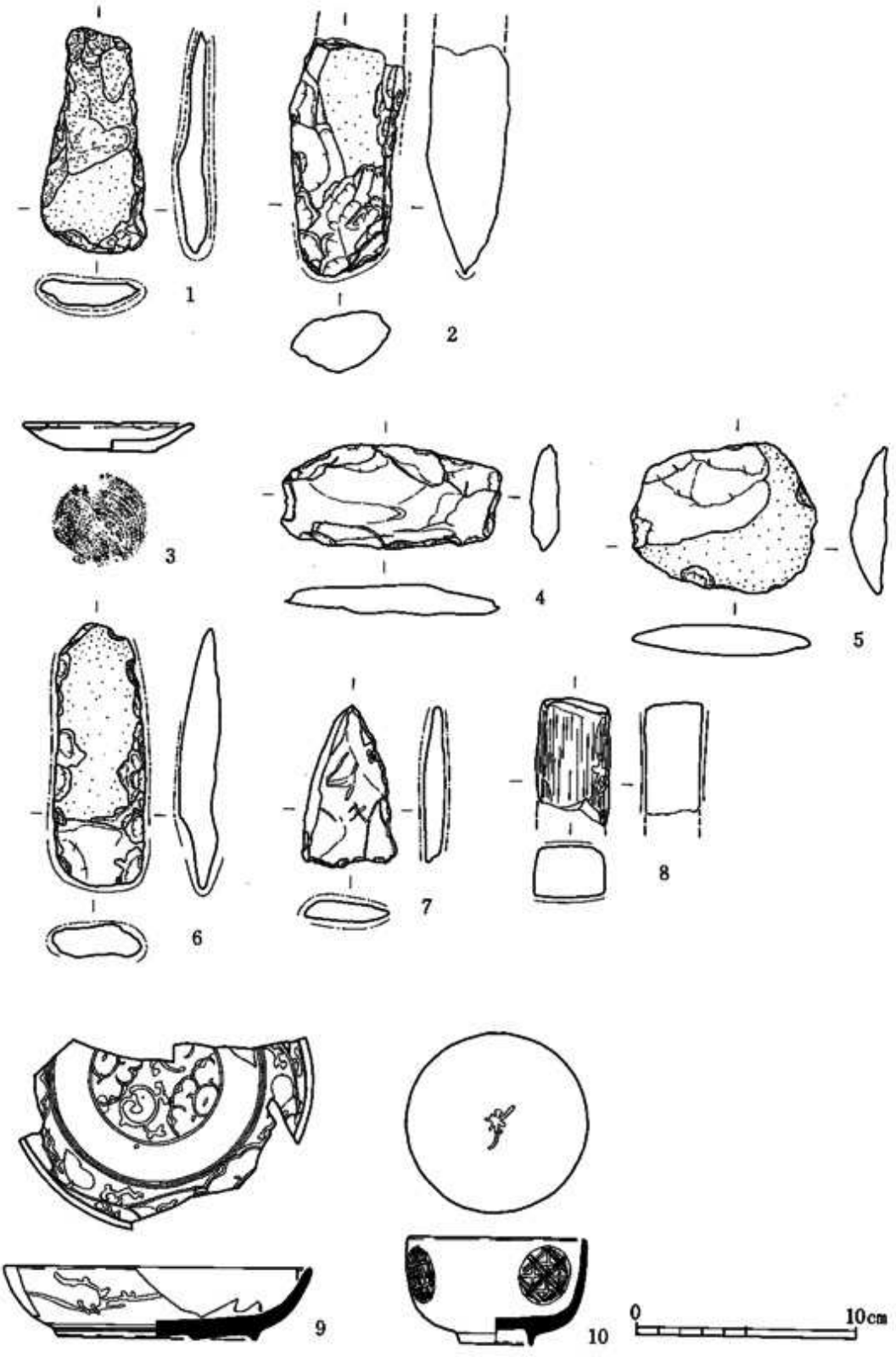
第14図　ＴＩＺ　方形竪穴１出土遺物



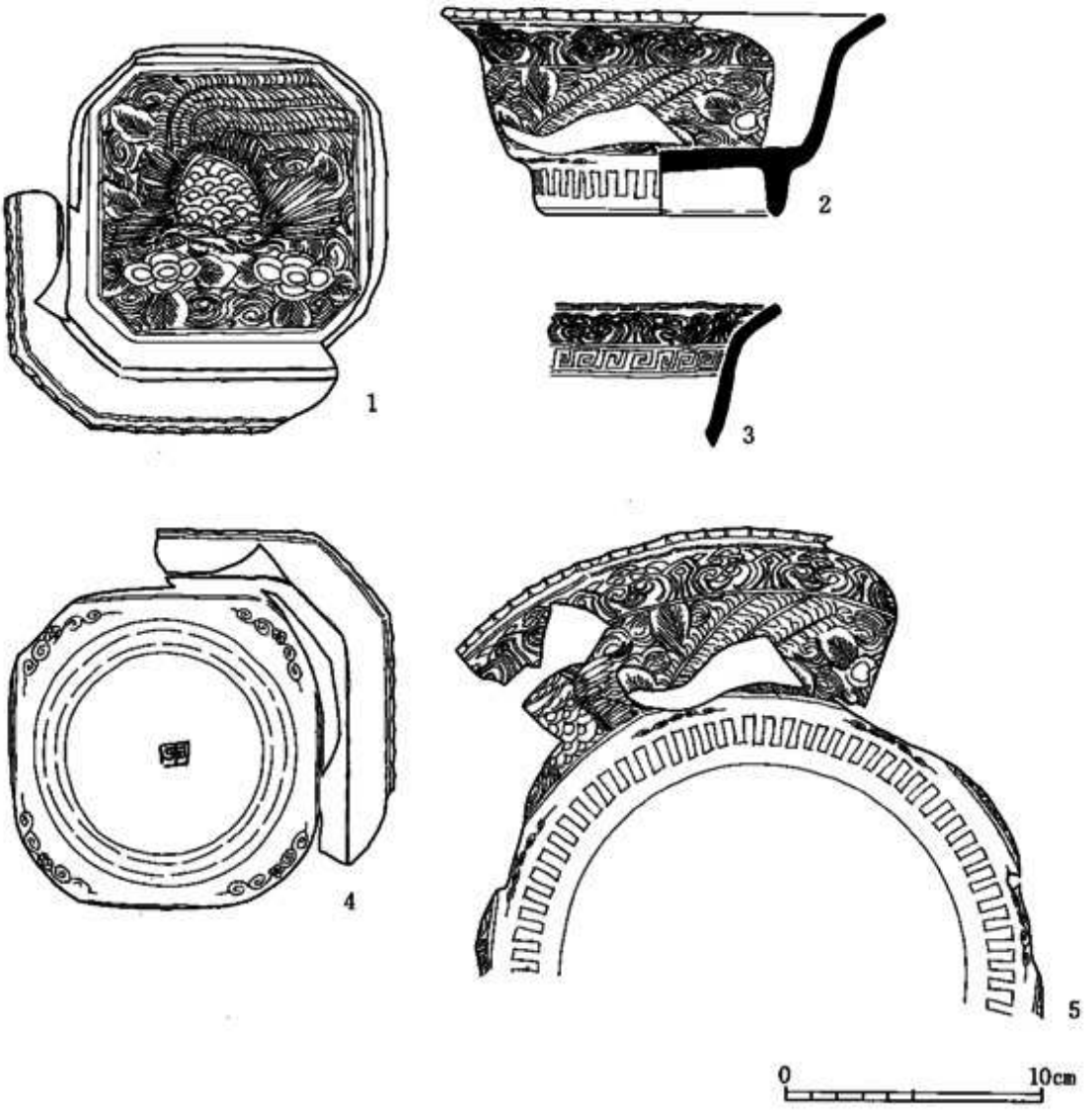
第15図　ＴＩＺ　方形竪穴１出土遺物



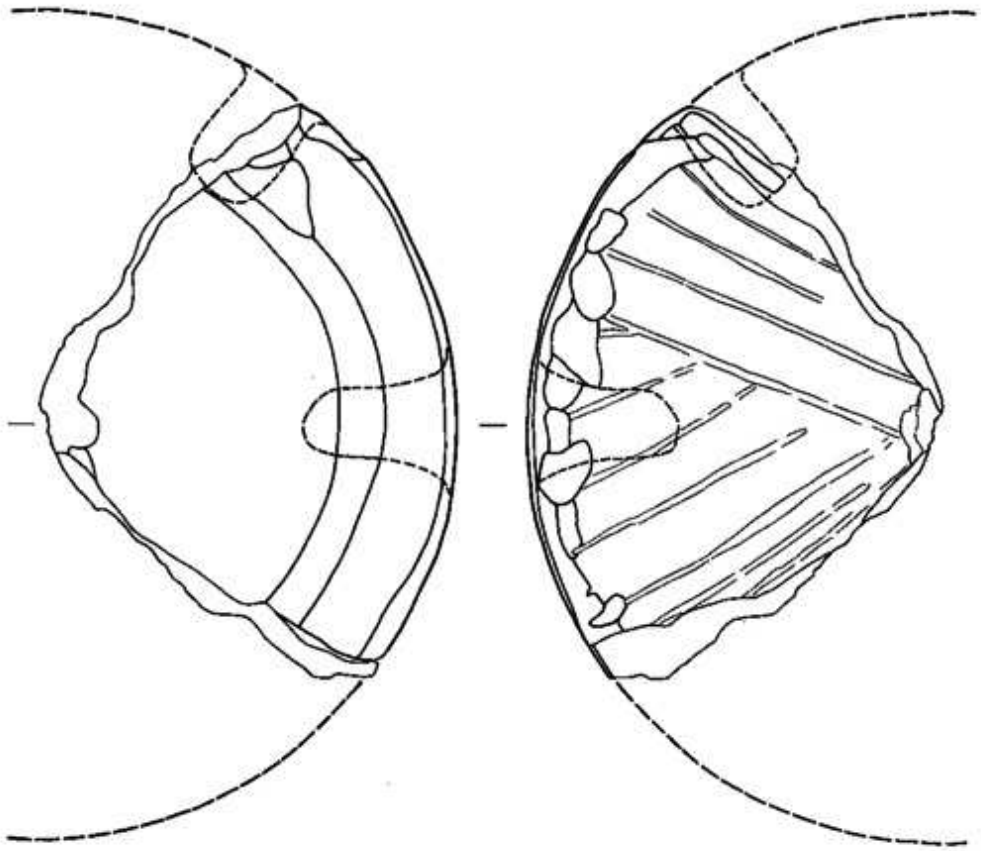
第16図　T I Z　方形竪穴2・4，竪穴3，土坑13出土遺物
（方竪2…1，方竪4…2～9，竪穴3…10～14，土坑13…15）

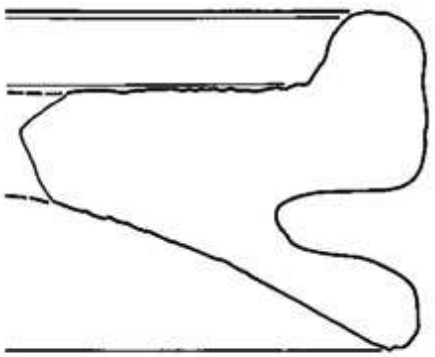


第17図　ＴＩＺ　溝址１・12・13出土遺物（溝址１…１～２，溝址12…３～８，溝址13…９～10）



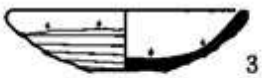
第18図　ＴＩＺ　溝址13出土遺物





1

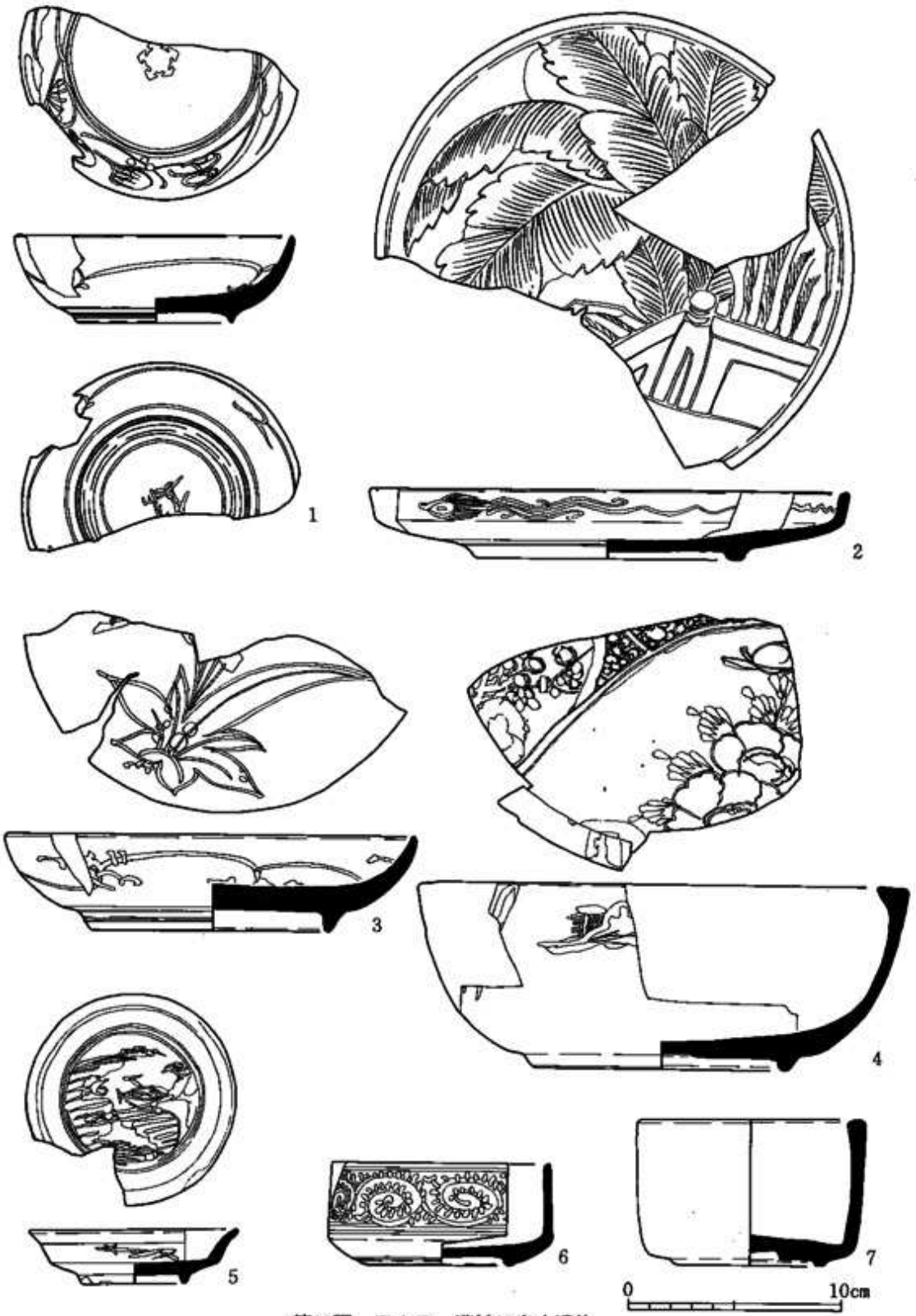
2



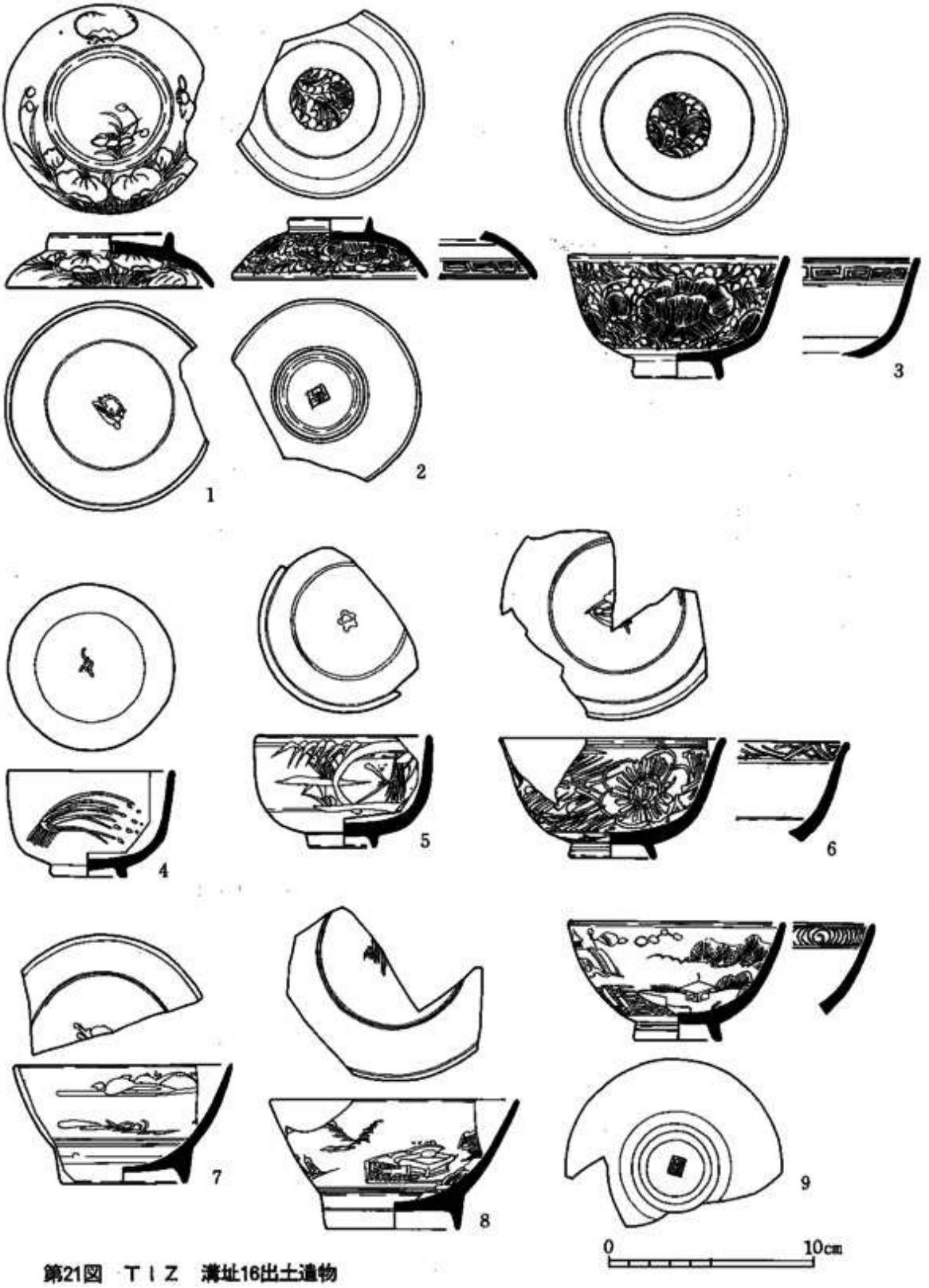
3

0 10cm

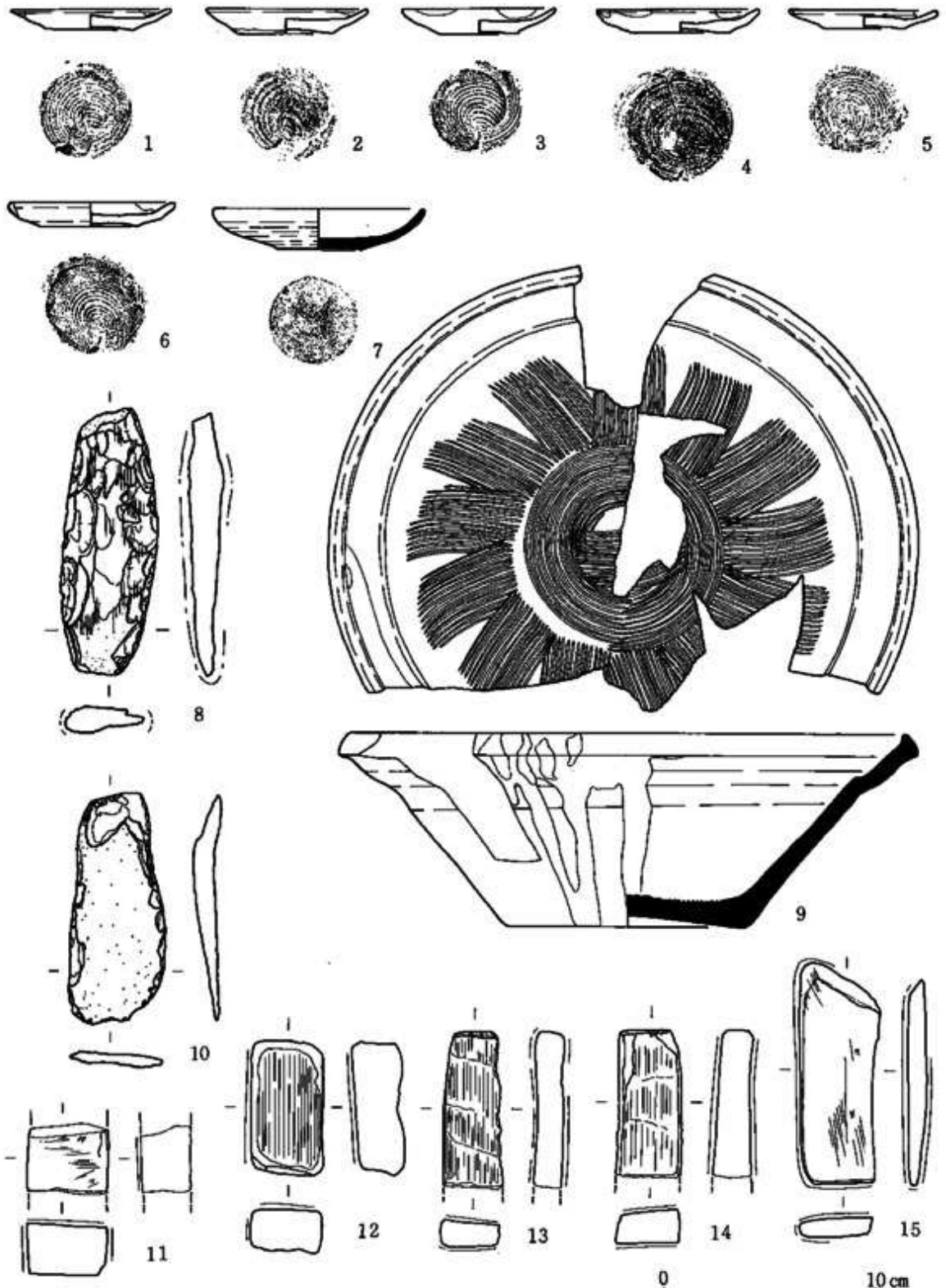
第19図　ＴＩＺ　溝址13・14出土遺物（溝址13…１，溝址14…２・３）



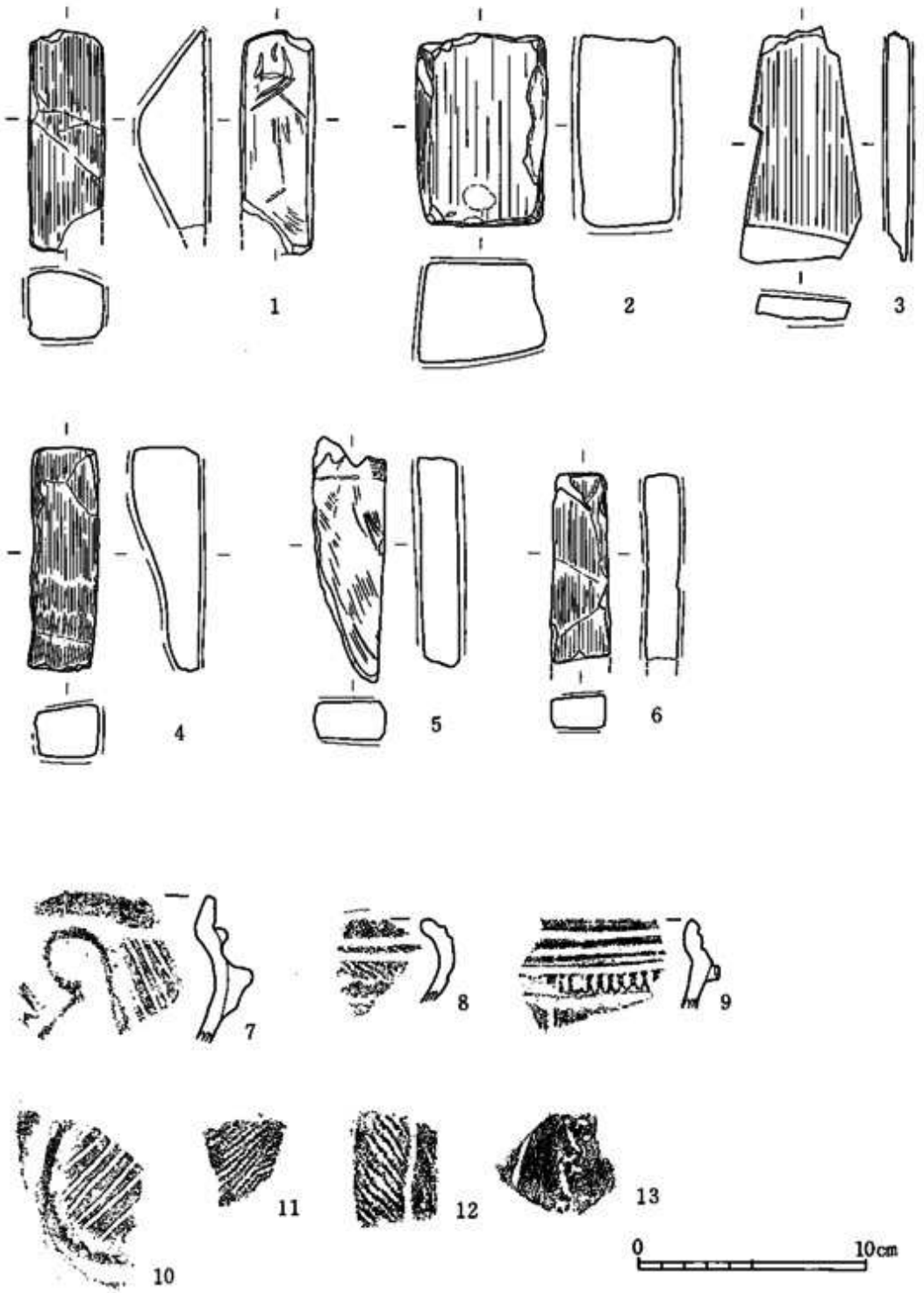
第20図　ＴＩＺ　溝址16出土遺物



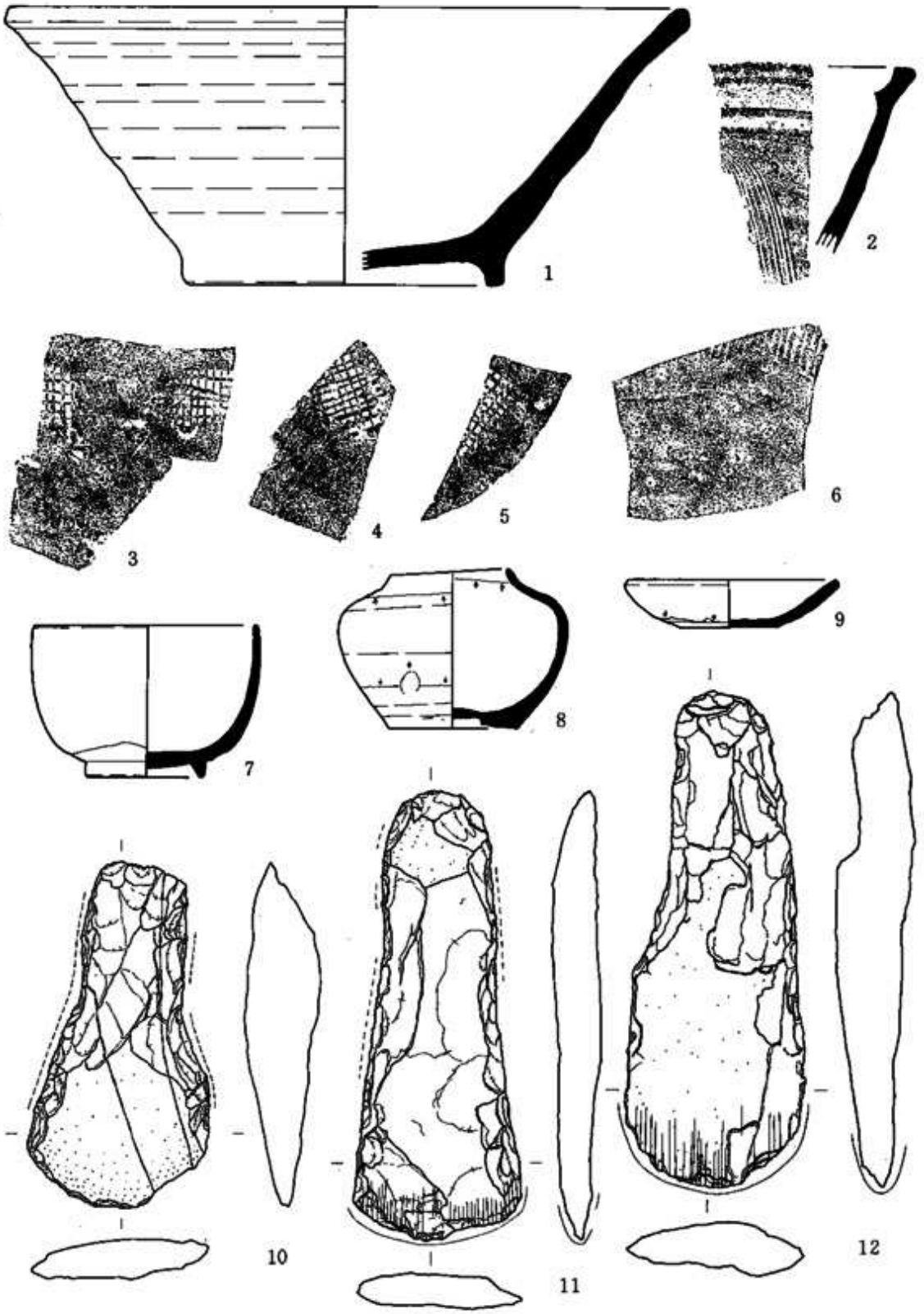
第21図　ＴＩＺ　溝址16出土遺物



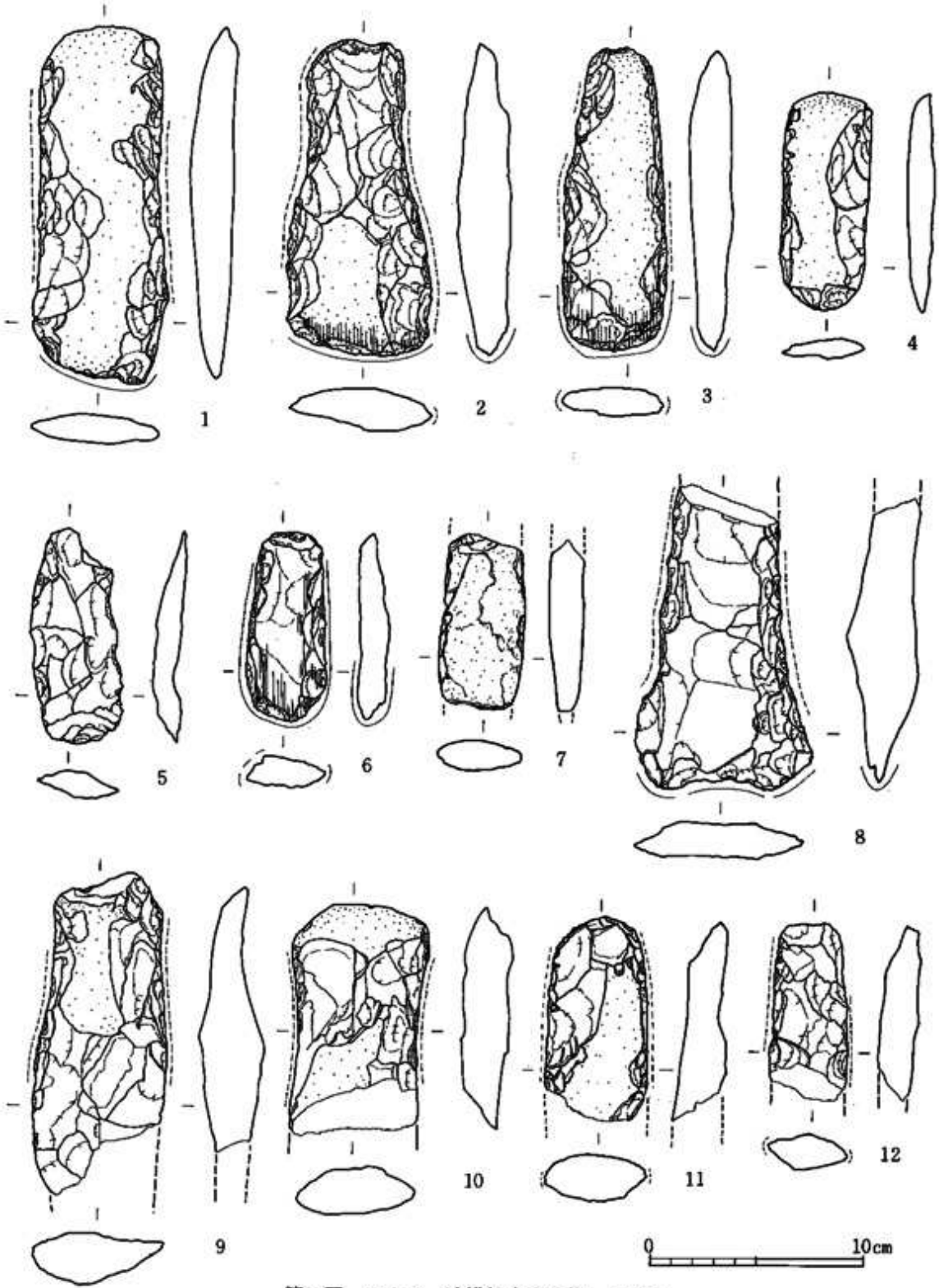
第22図　ＴＩＺ　溝址16出土遺物



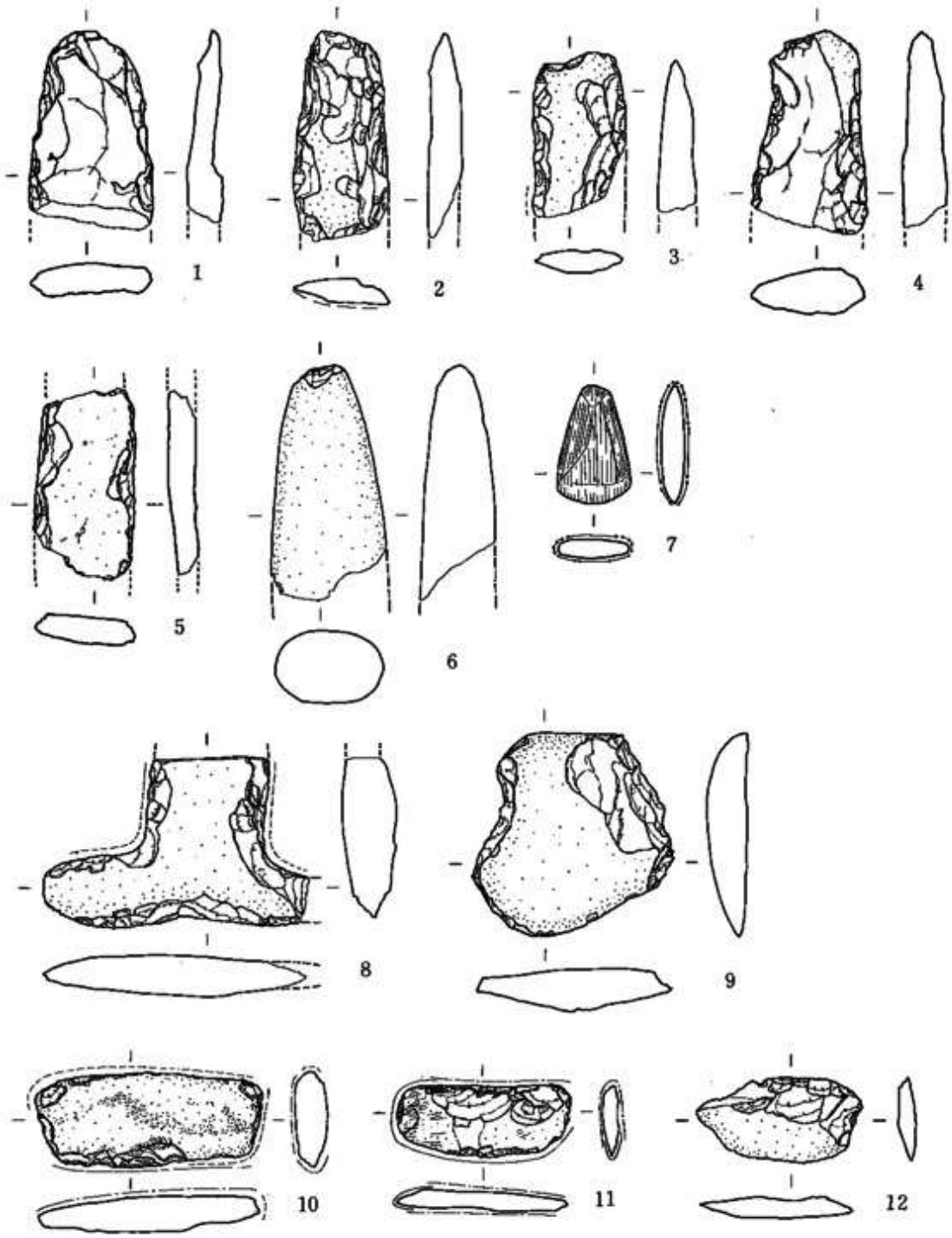
第23図　ＴＩＺ　溝址16・遺構外出土遺物その１（溝址16…１～６，遺構外７～13）



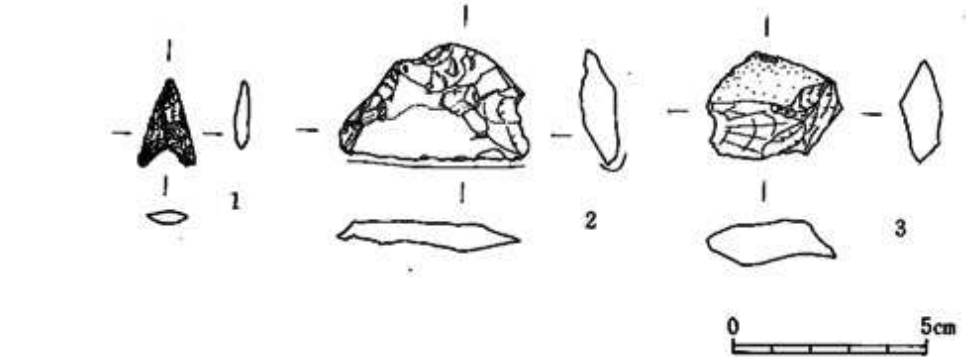
第24図　ＴＩＺ　遺構外出土遺物　その２

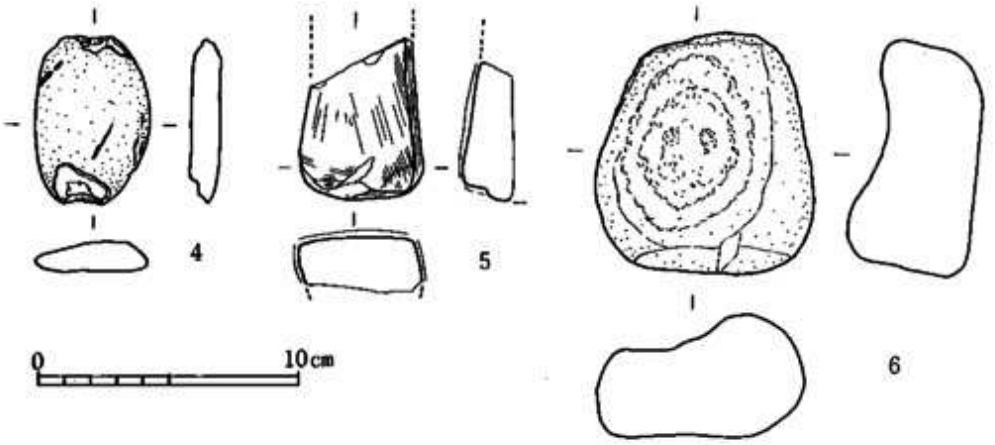


第25図　ＴＩＺ　遺構外出土遺物　その３

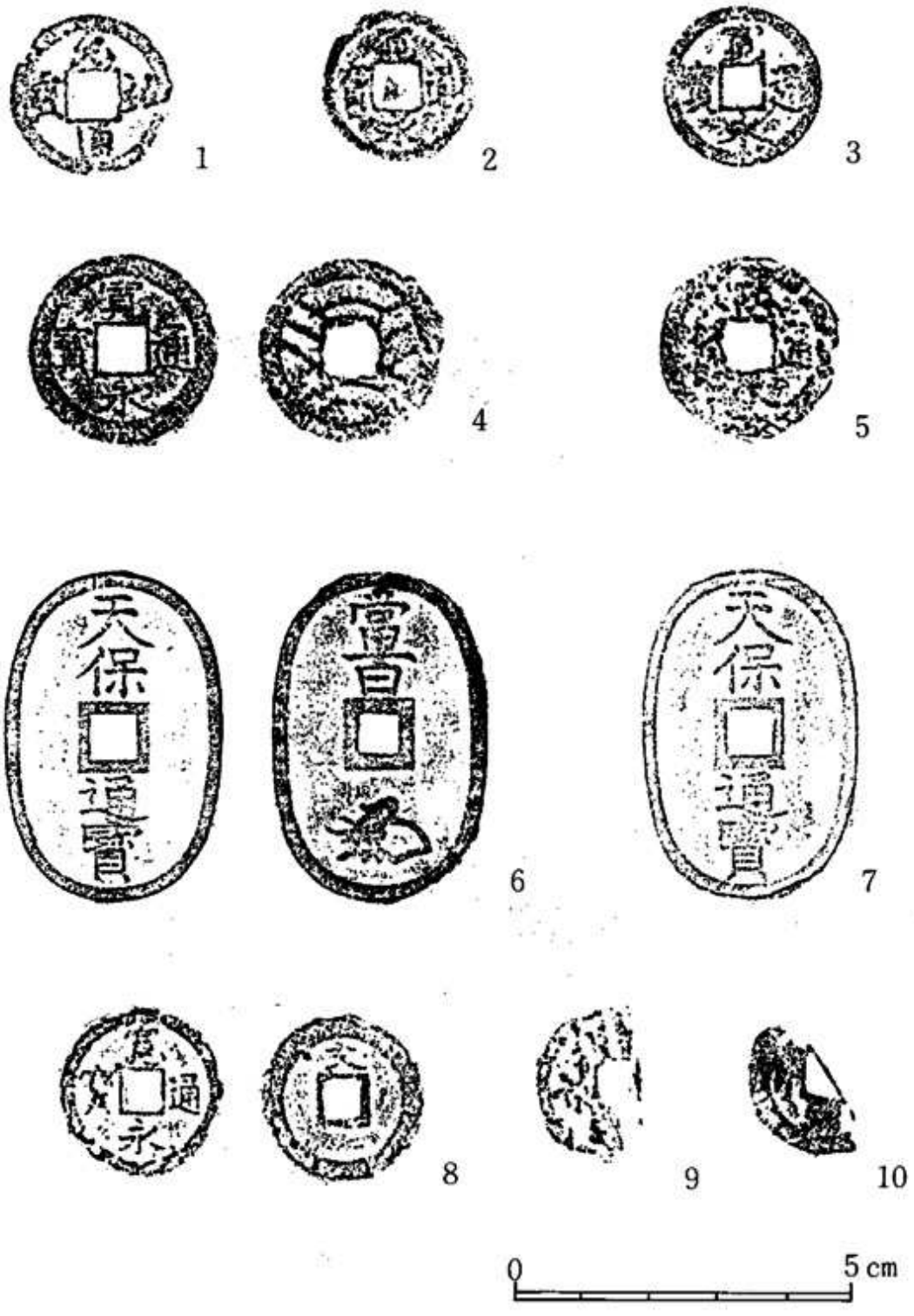


第26図　ＴＩＺ　遺構外出土遺物　その４

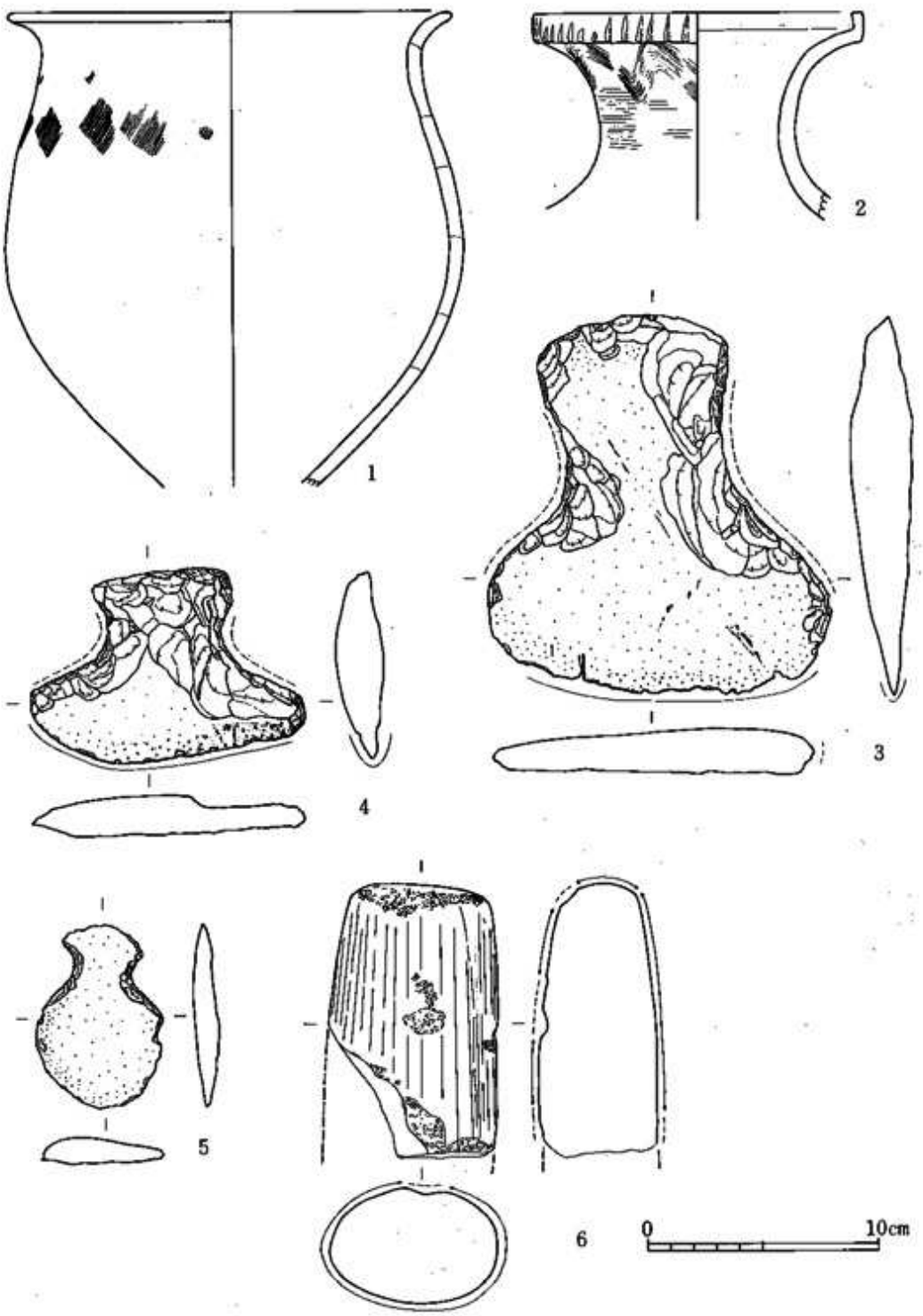




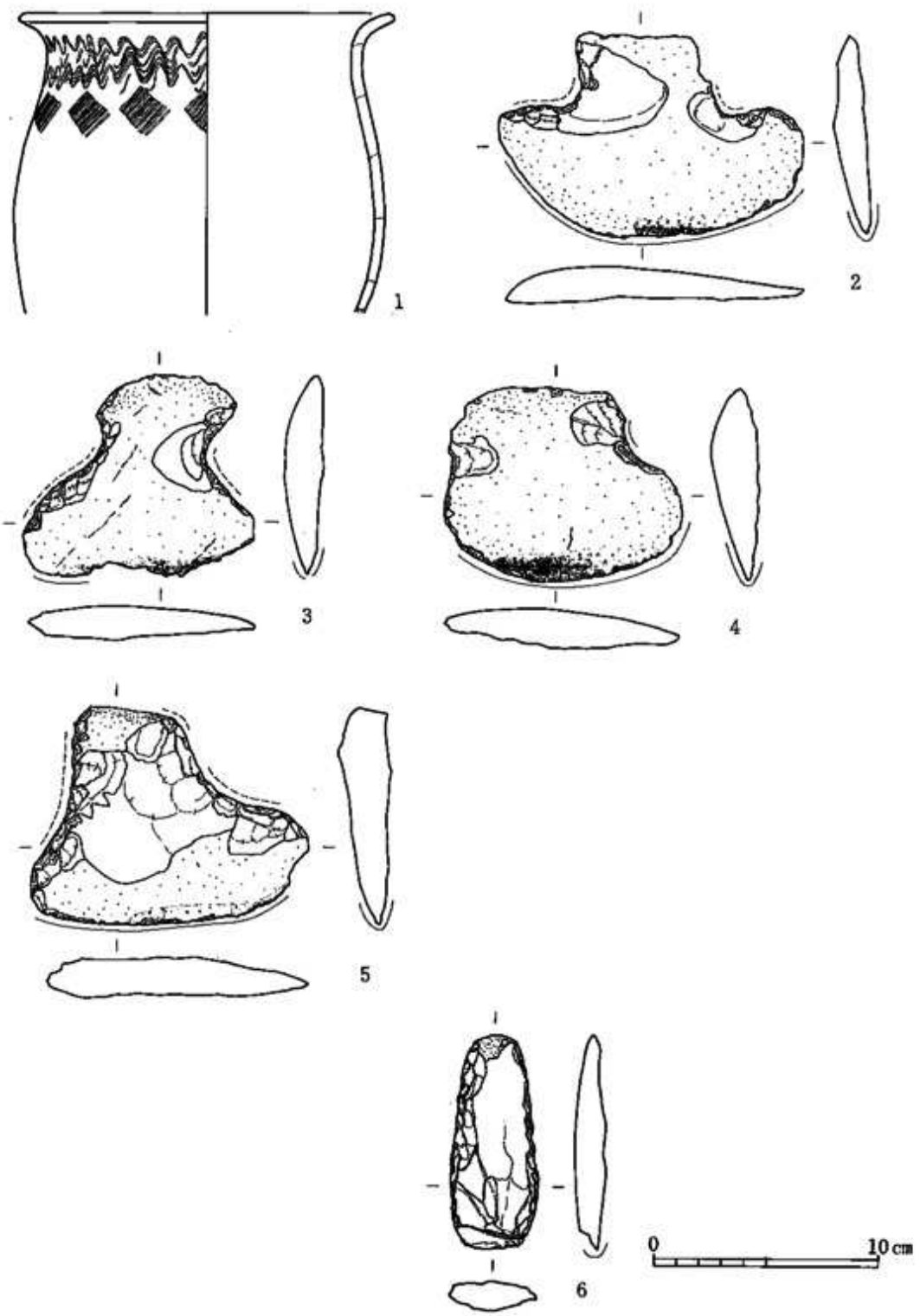
第27図　ＴＩＺ　遺構外出土遺物　その５



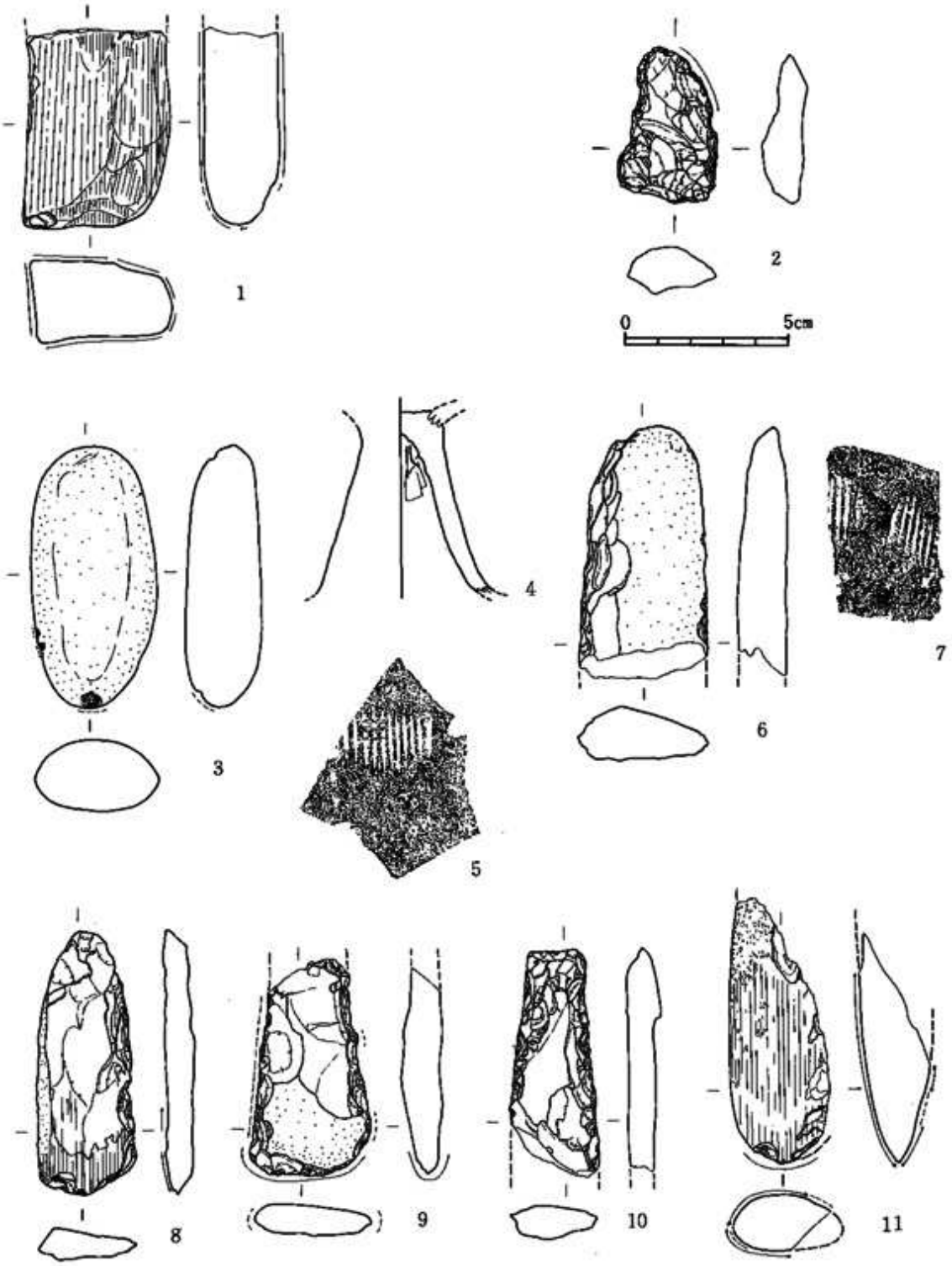
第28図　ＴＩＺ　出土古銭（墓壙１　1，溝址２　2，溝址３　3～7，遺構外８～10）



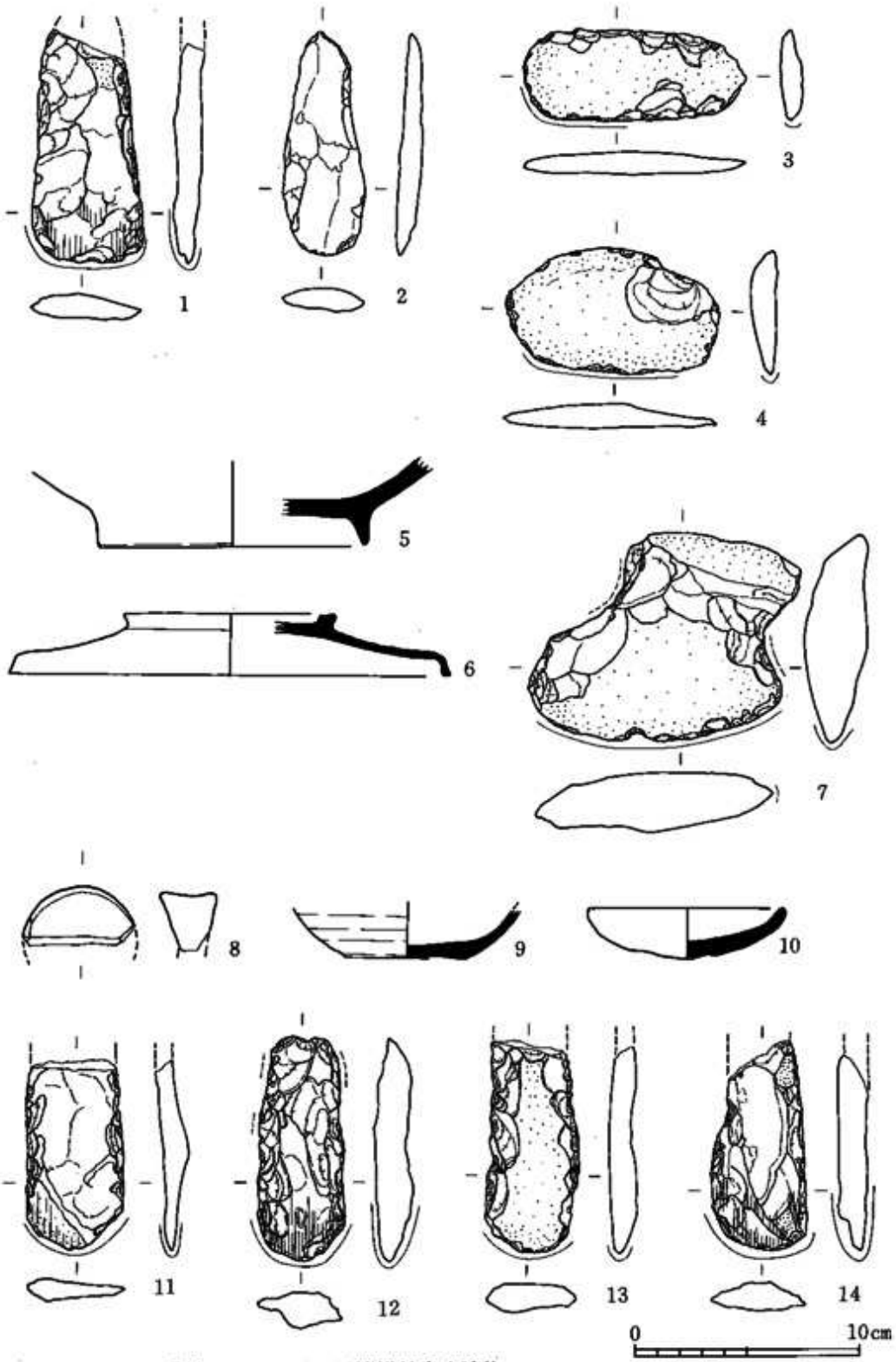
第29図　ＩＳＫ　３・４・５号住居址出土遺物（３号住１～３，４号住４～５，５号住６）



第30図　ＩＳＫ　６・７号住居址，方形周溝墓２出土遺物（６号住１～４，７号住５，方周２…６）

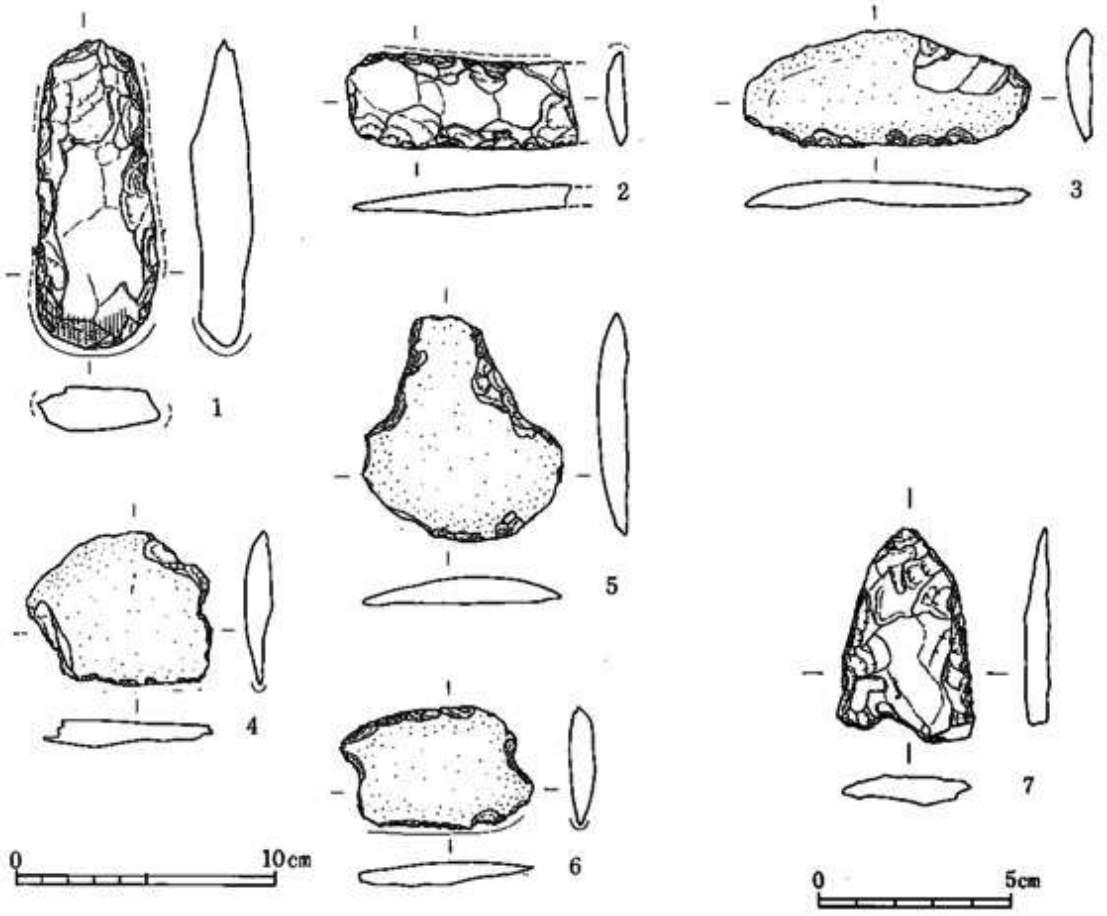


第31図　ＩＳＫ　方形竪穴１，土坑２，溝址７・８・９出土遺物
（方竪１…１～２，土坑２…３，溝址７…４～５，溝址８…６，溝址９…７～11）

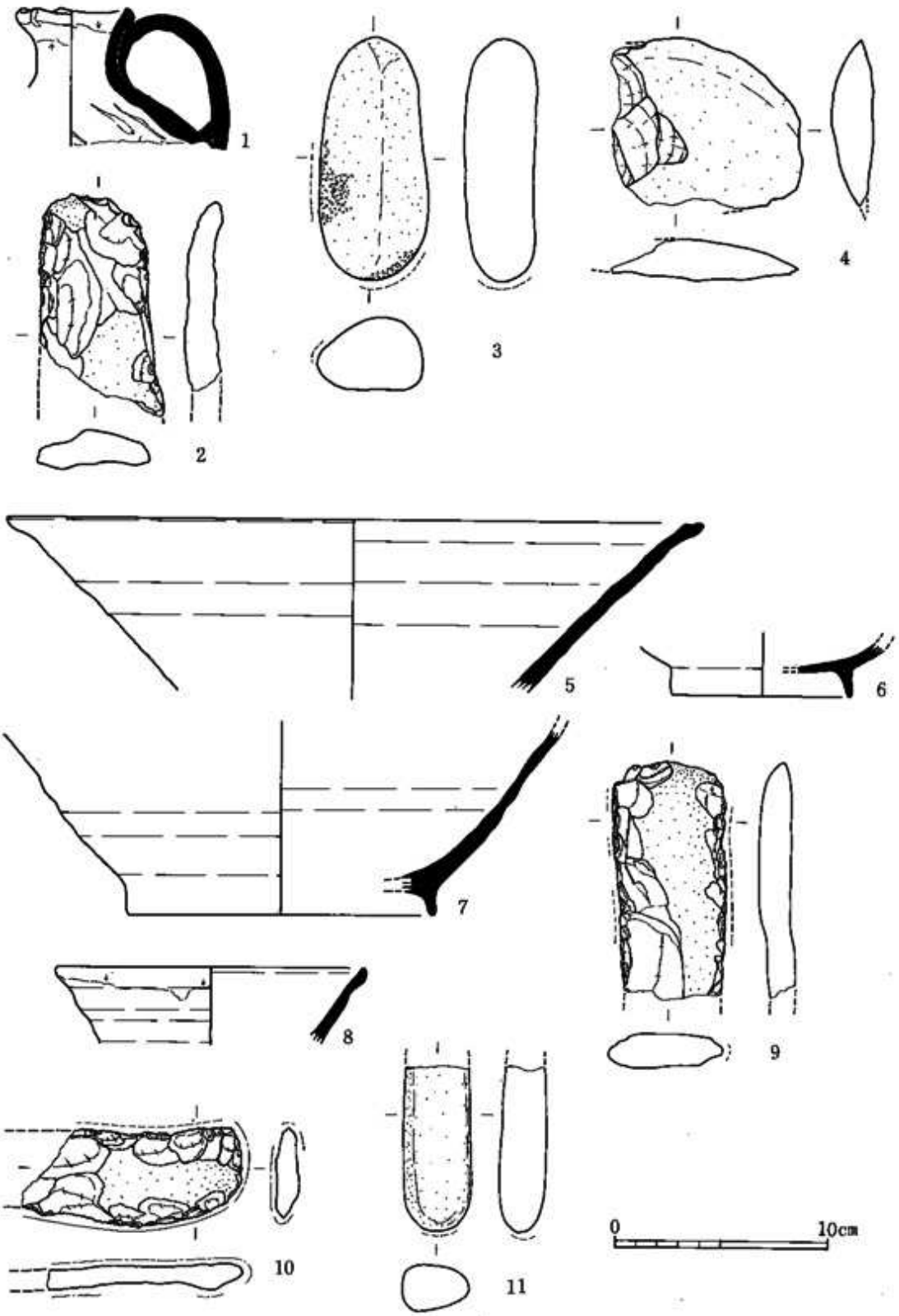


第32図　ＩＳＫ　溝址９・10・11・26遺構外出土遺物

（溝址９…１～４，溝址10…５，溝址11…６，溝址26…７，遺構外８～14）

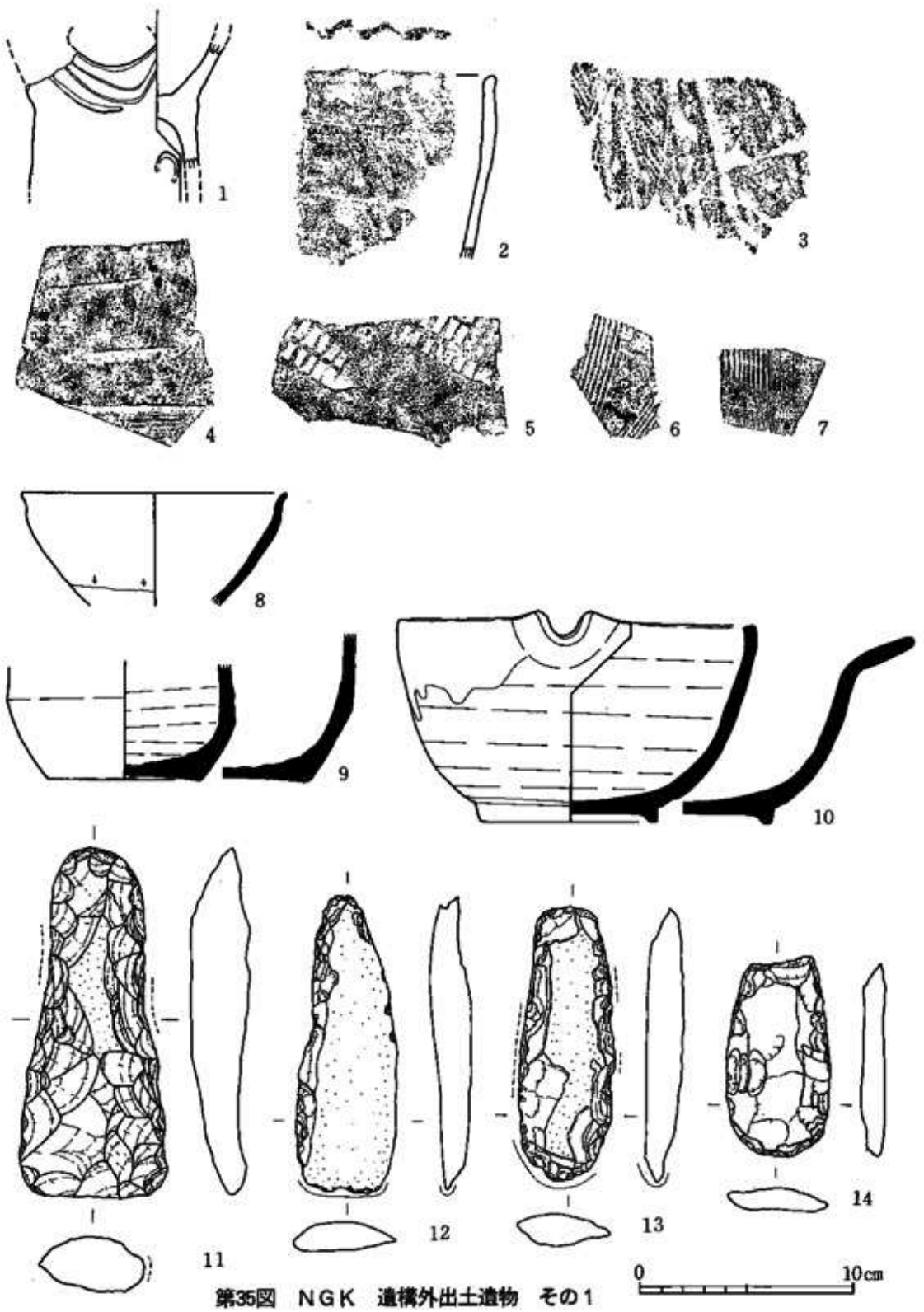


第33図　ＩＳＫ　遺構外出土遺物　その２

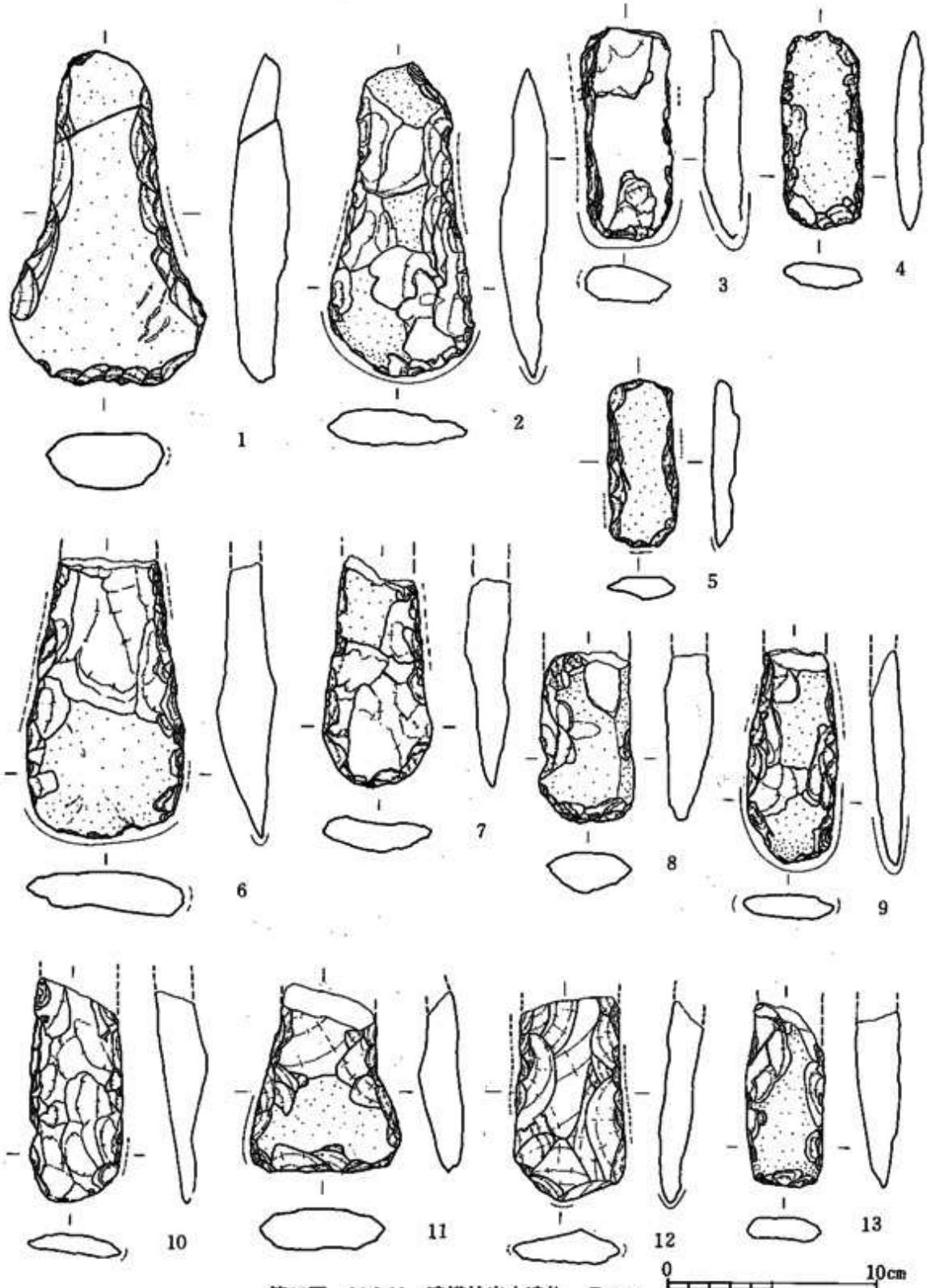


第34図　NGK　方形竪穴1，竪穴1，土坑1，溝址1・5出土遺物

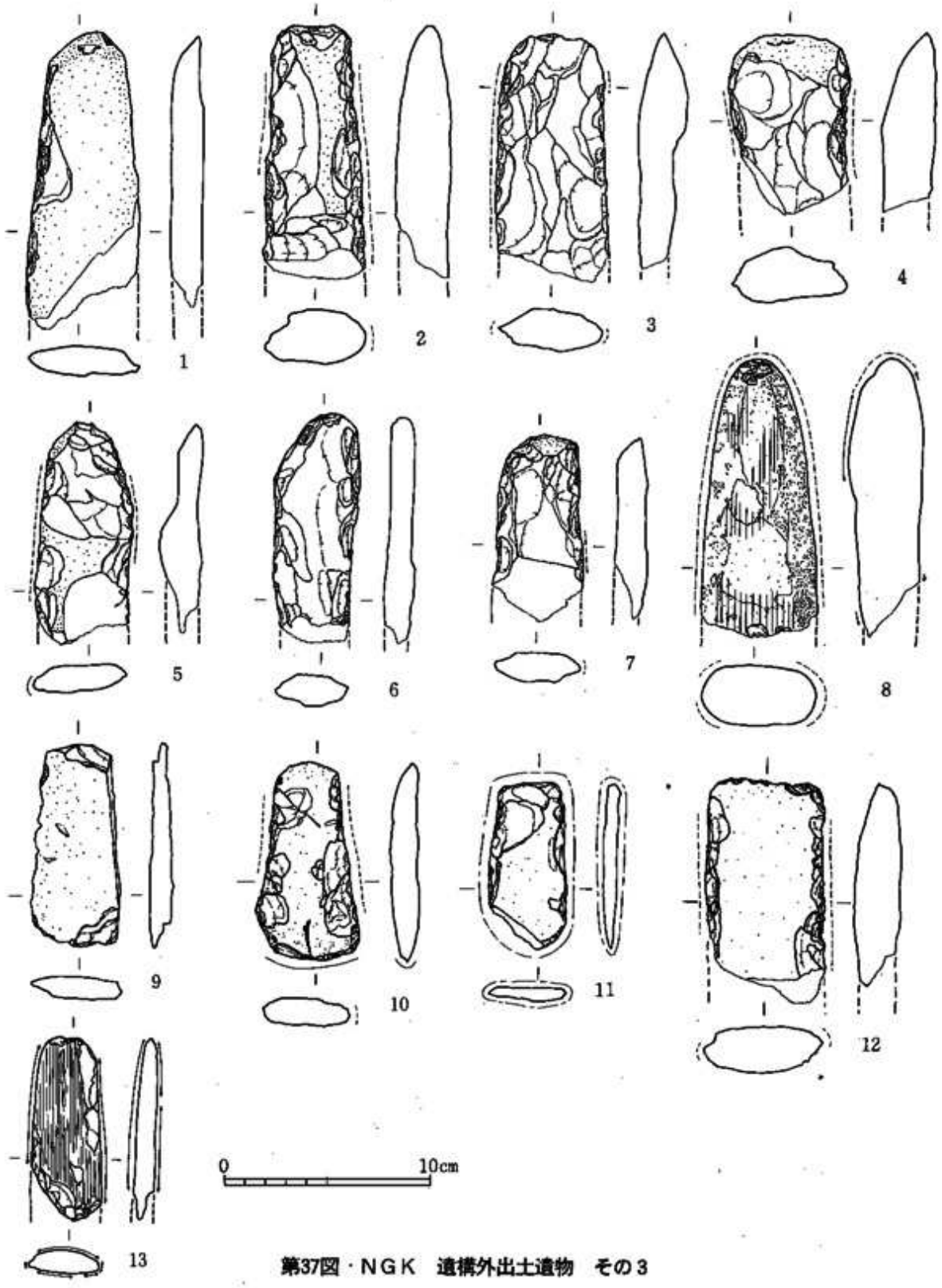
（方形竪穴1…1～2，竪穴1…3，土坑1…4，溝址1…5～9，溝址5…10～11）



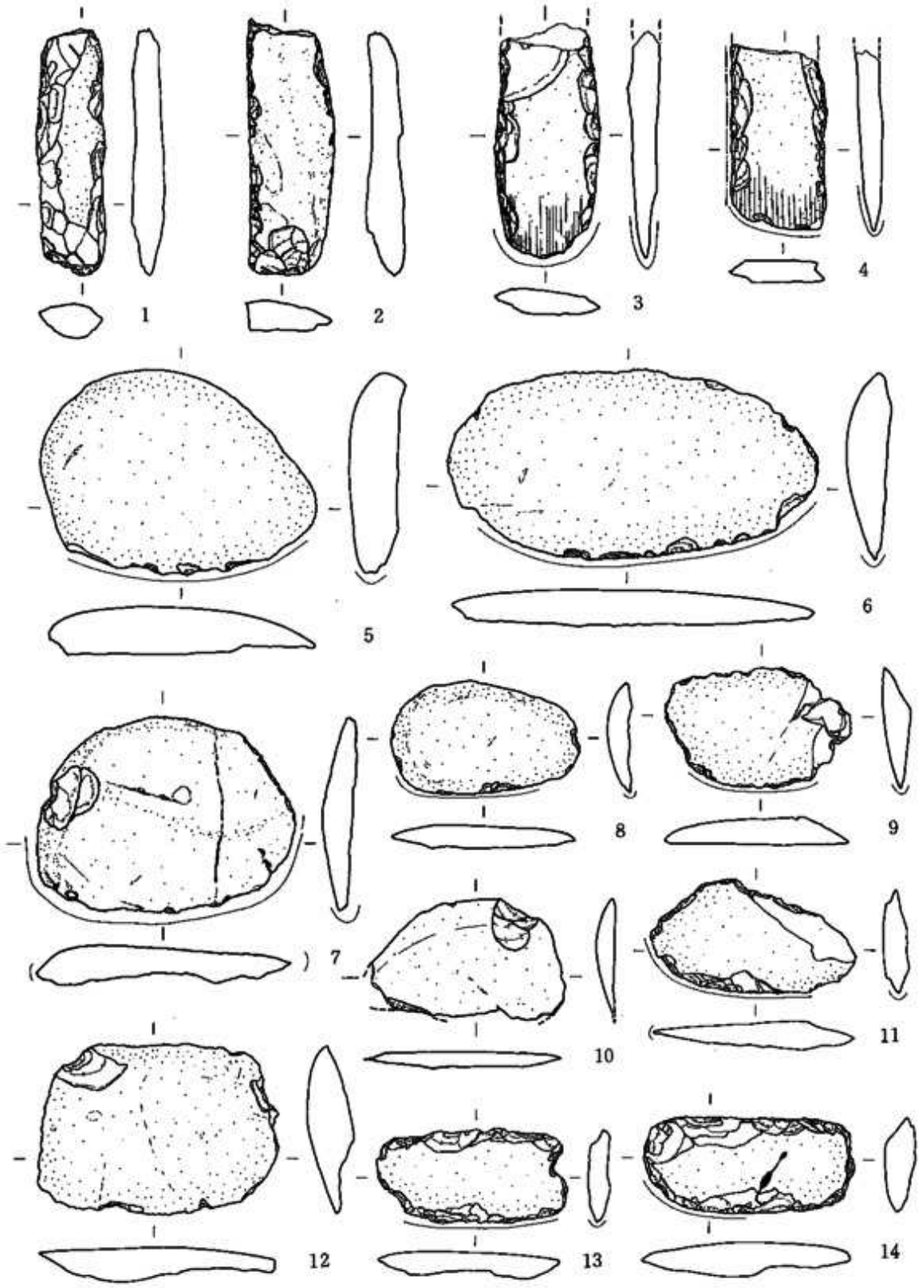
第35図　NGK　遺構外出土遺物　その1



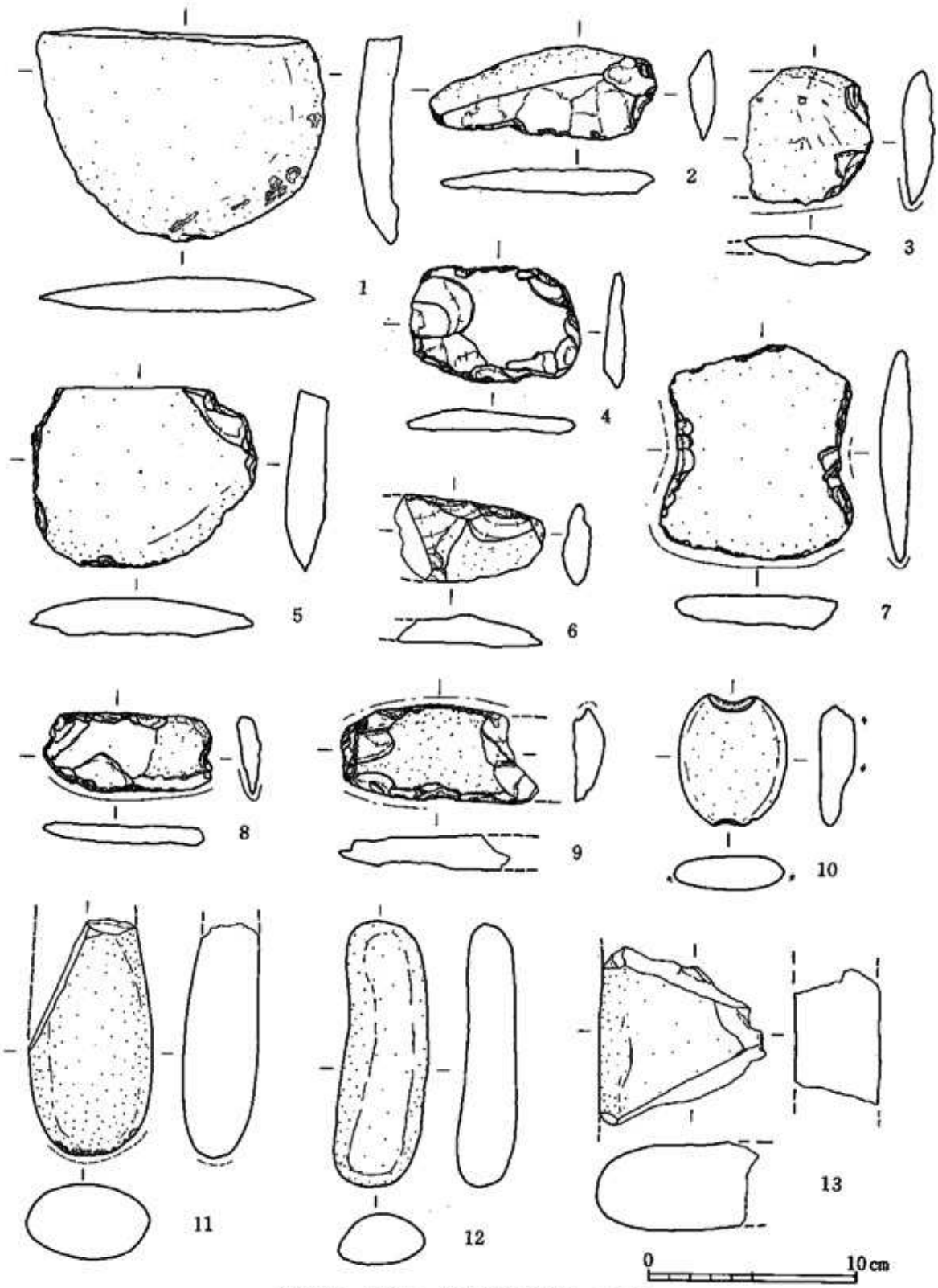
第36図　NGK　遺構外出土遺物　その2



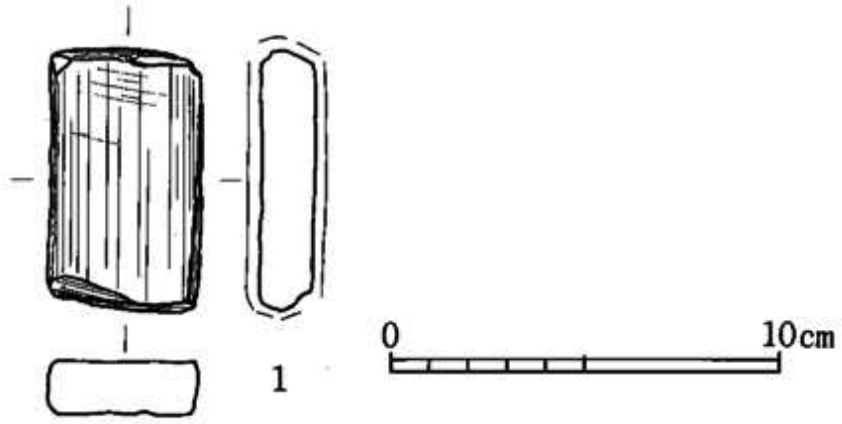
第37図・NGK　遺構外出土遺物　その3

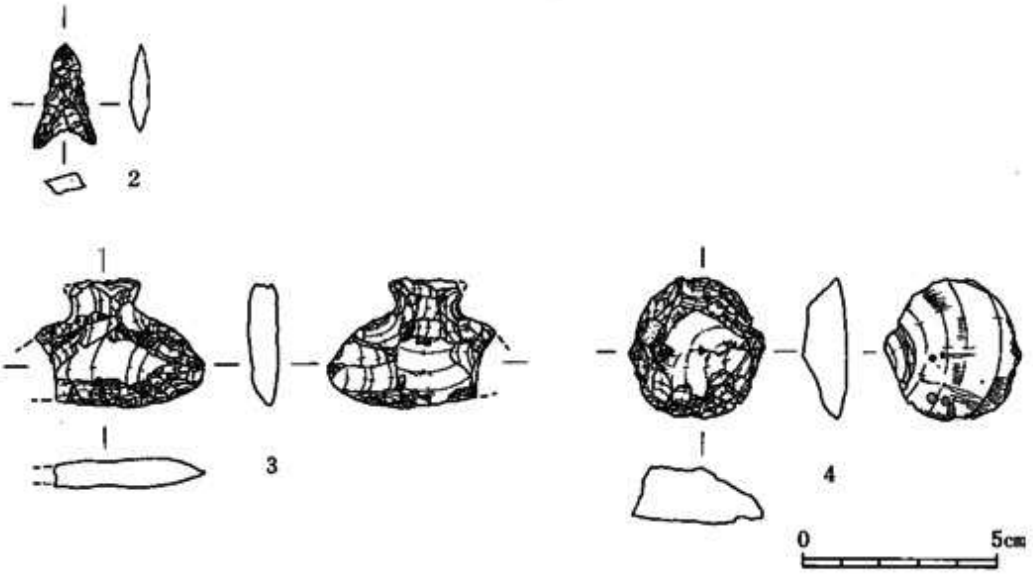


第38図　NGK　遺構外出土遺物　その4



第39図　NGK　遺構外出土遺物　その5





第40図　ＮＧＫ　遺構外出土遺物　その６

写真図版

田井座遺跡全景

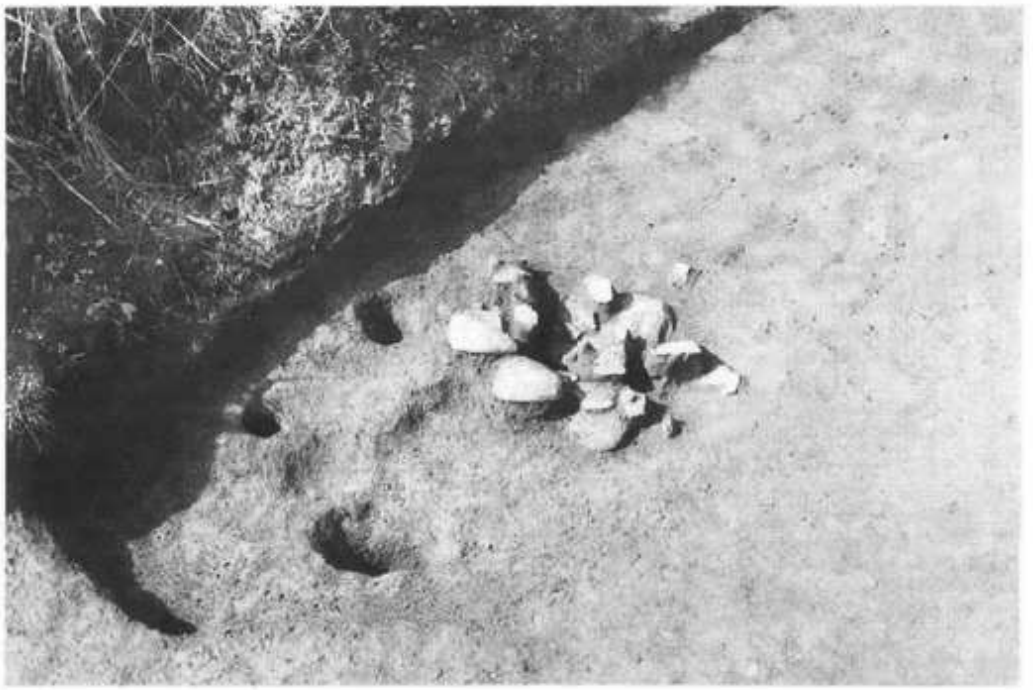
田井座遺跡全景

図版 2

T I Z　9号住居址

T I Z　20号住居址

T I Z　土坑 2



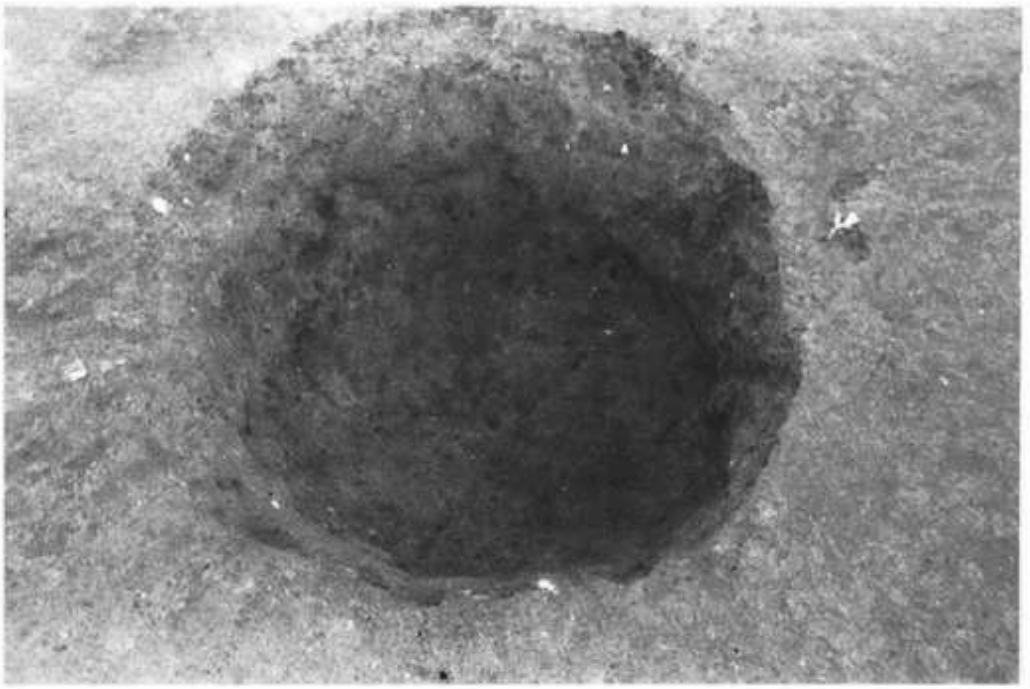
T I Z　土坑 5

図版 4

ＴＩＺ　集石炉１検出

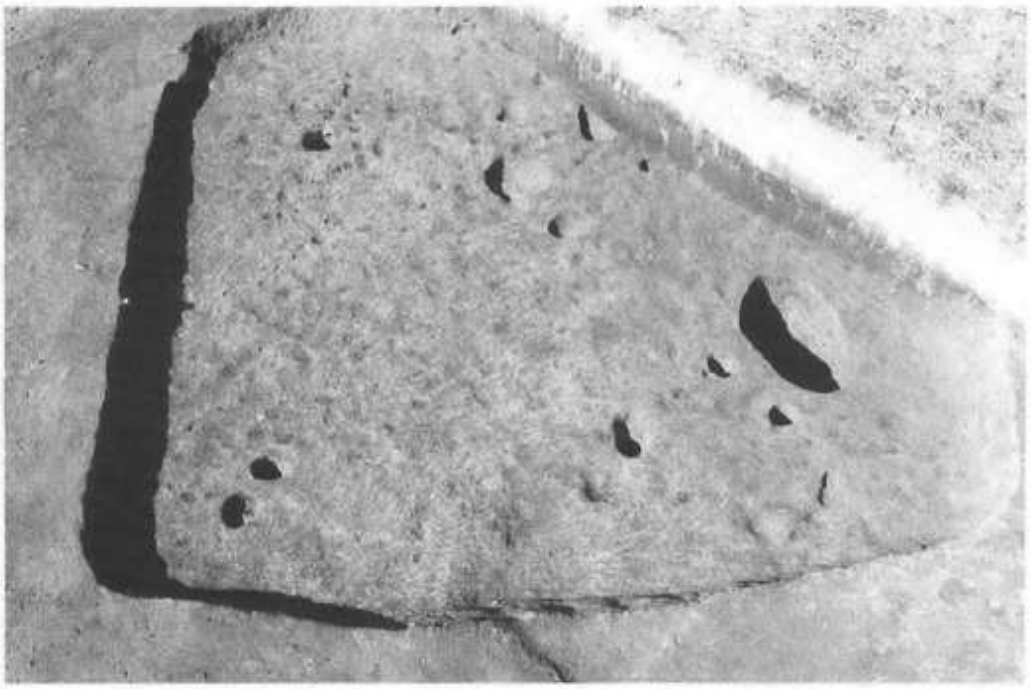
ＴＩＺ　集石炉１上部礫

TIZ　集石炉1断面



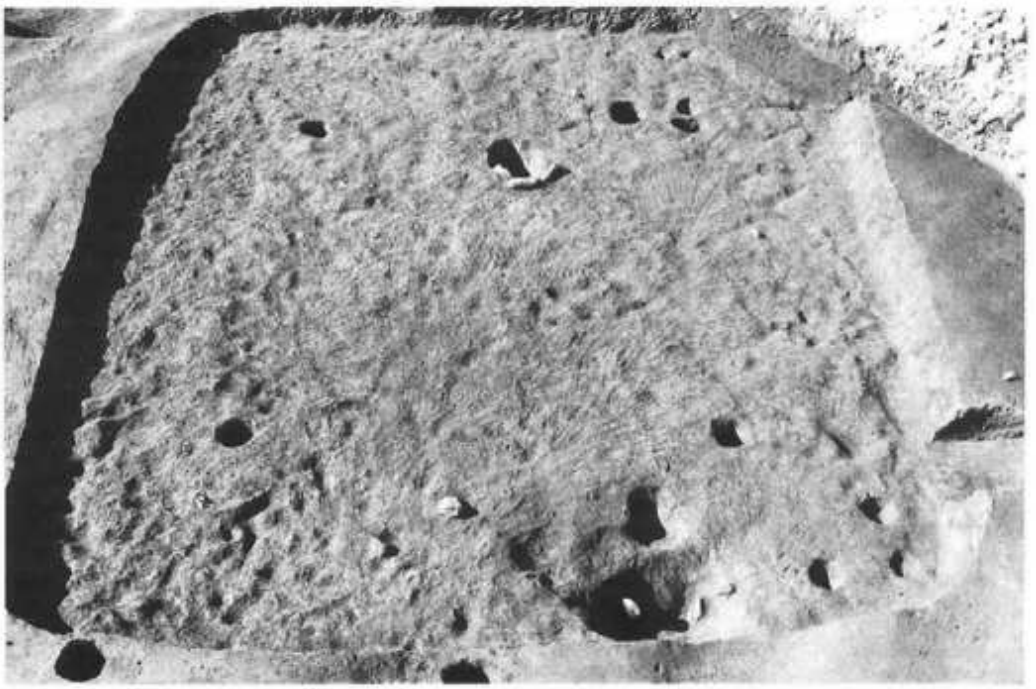
TIZ　集石炉1掘上がり

図版 6



T I Z　10号住居址

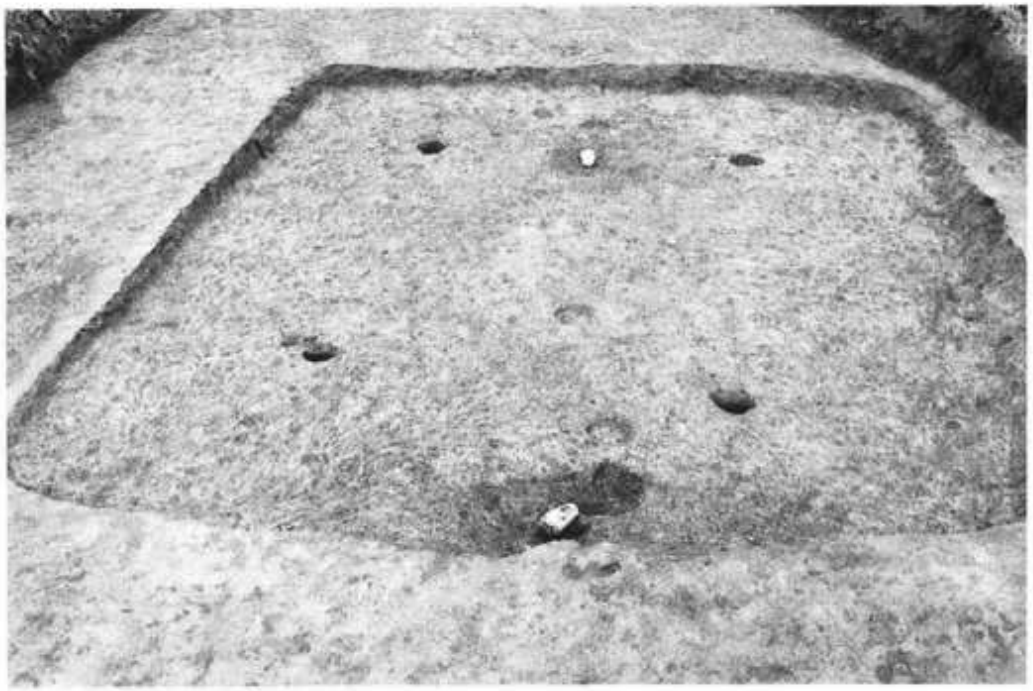
同遺物出土状態



T I Z　11号住居址

同遺物出土状態

図版 8

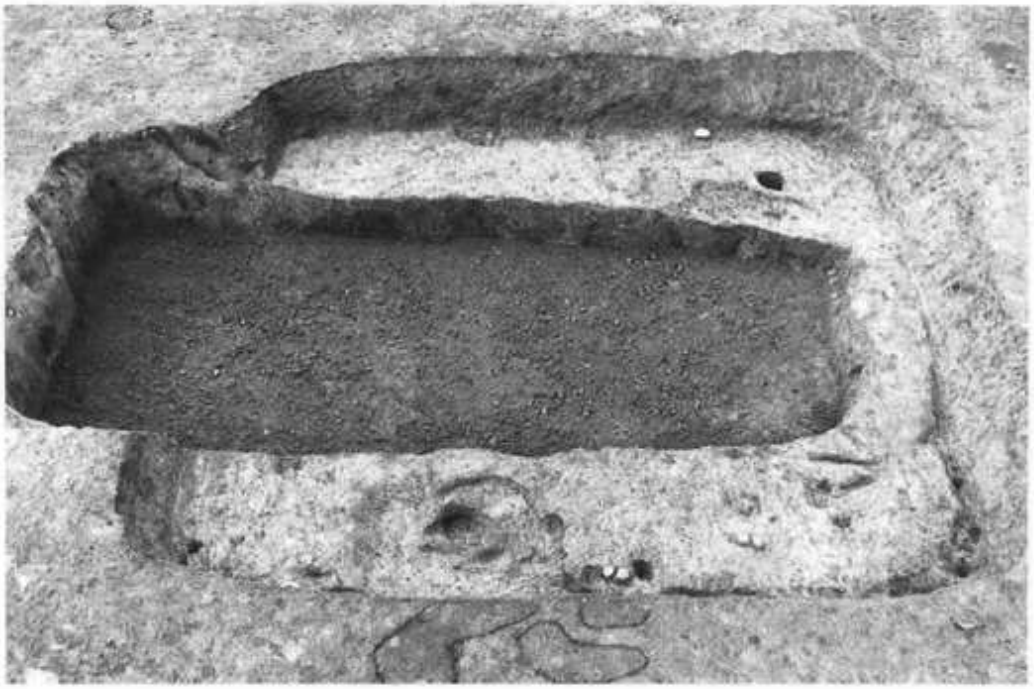


TIZ 12号住居址

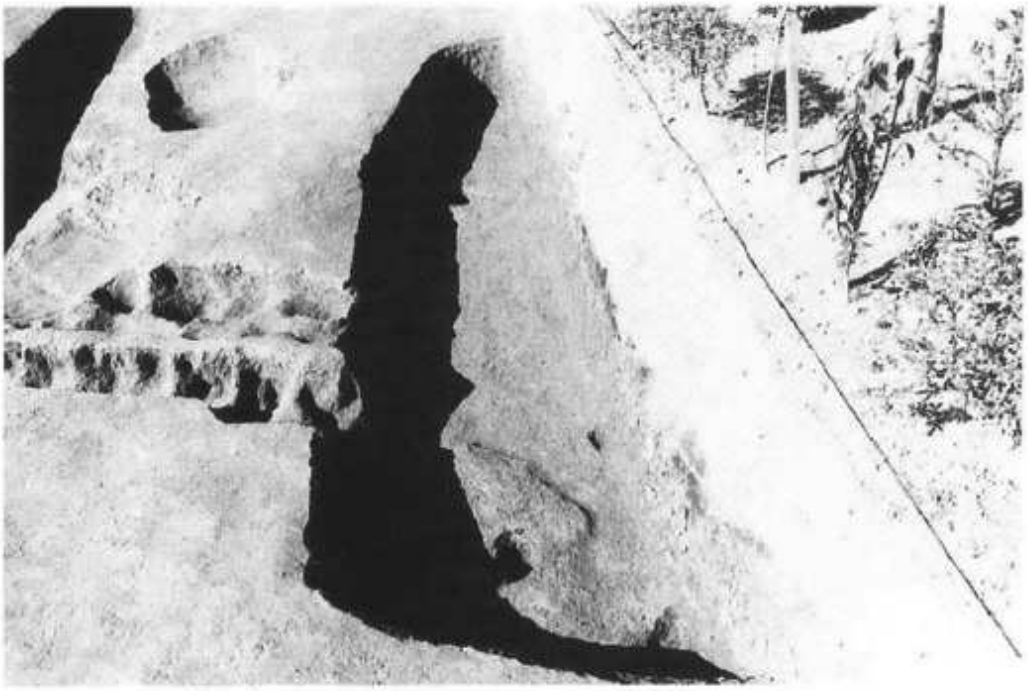
TIZ 13号住居址

T I Z　14号住居址

図版10

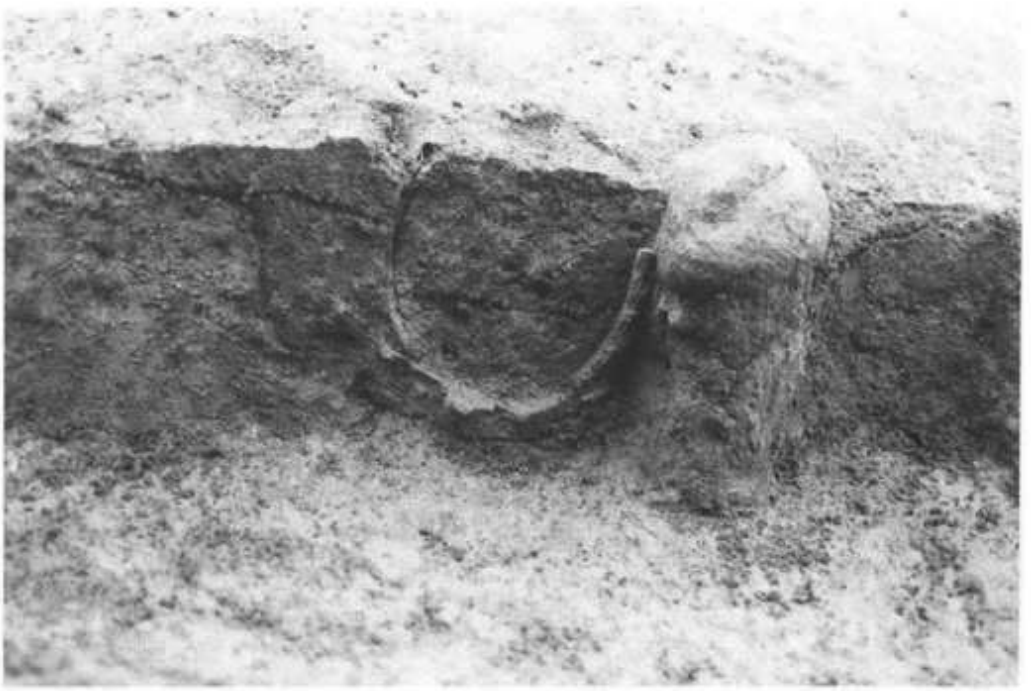


TIZ　15号住居址



TIZ　16号住居址

T I Z　17号住居址

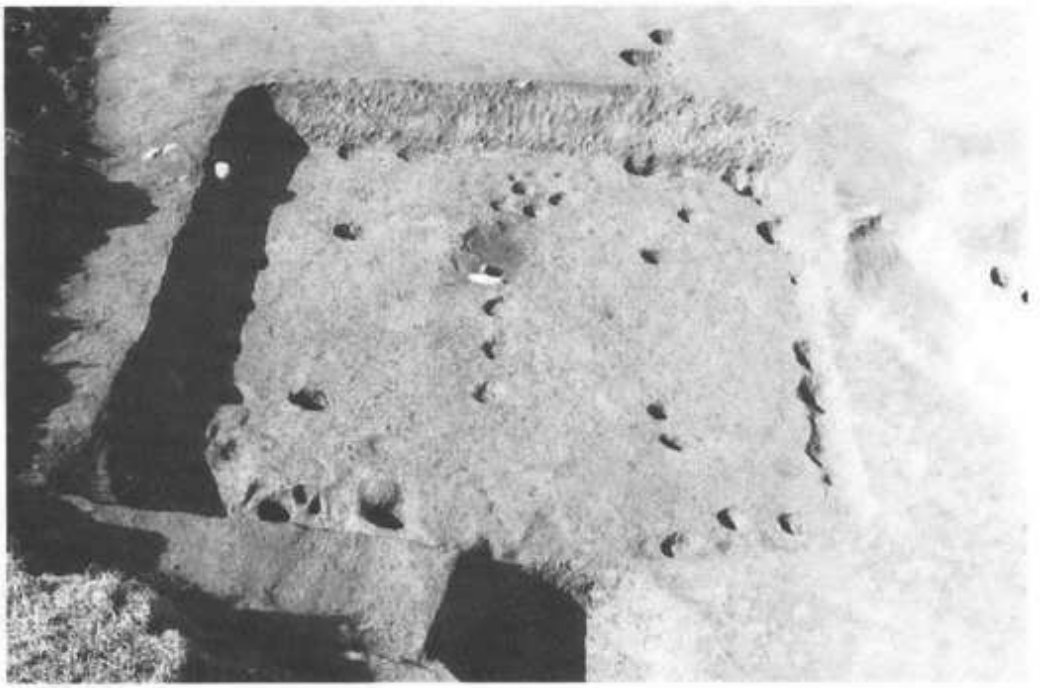


同土器埋設炉断面

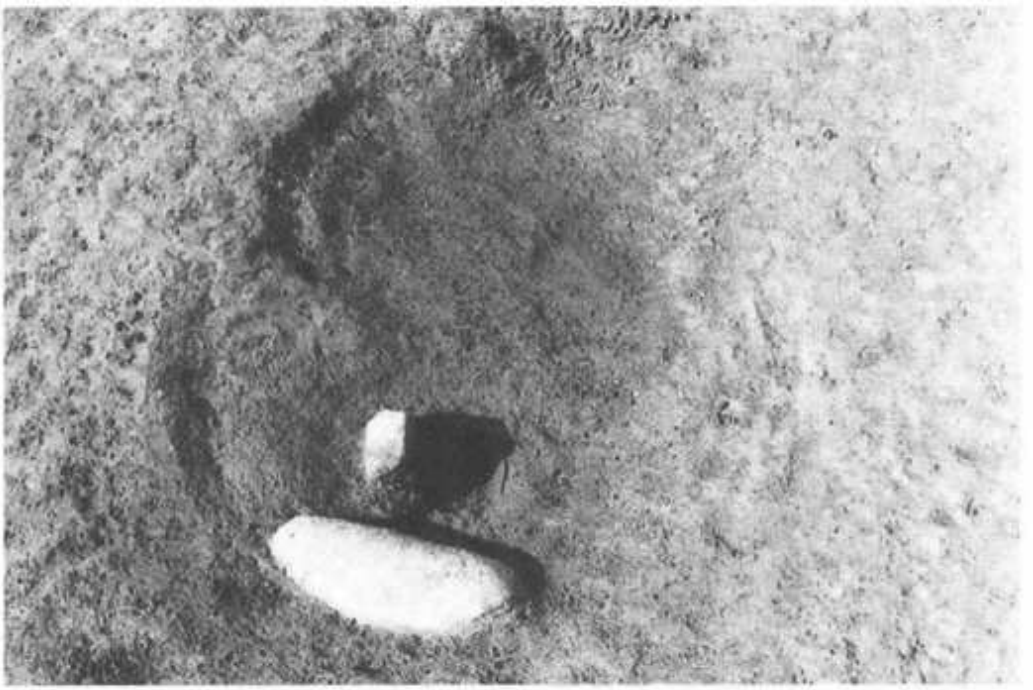
図版12

TIZ 18号住居址

TIZ 19号住居址

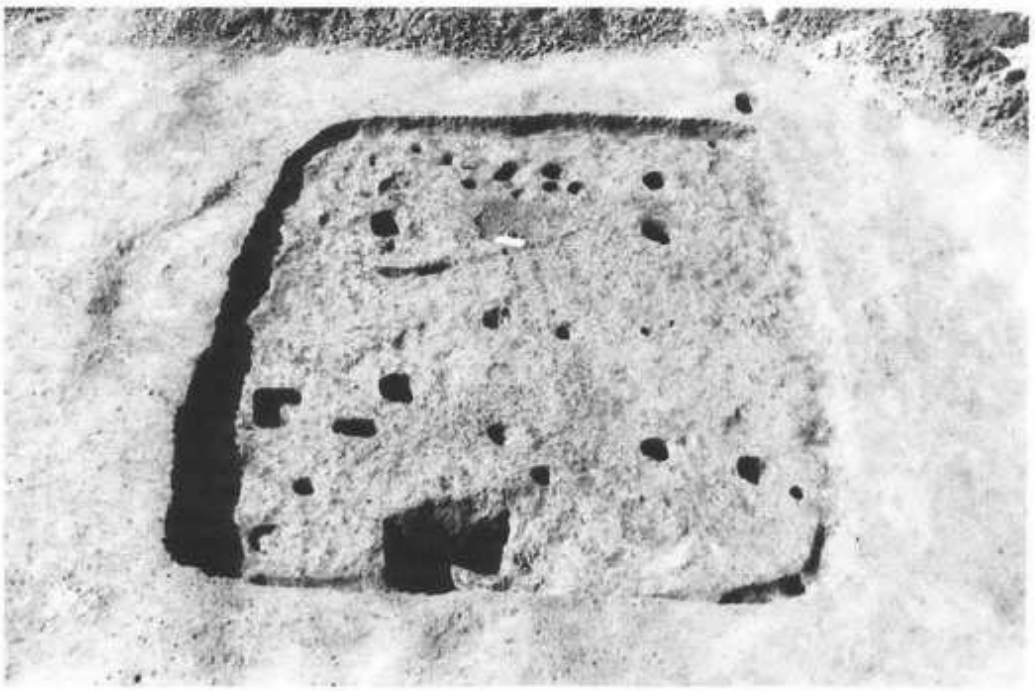


T I Z　21号住居址



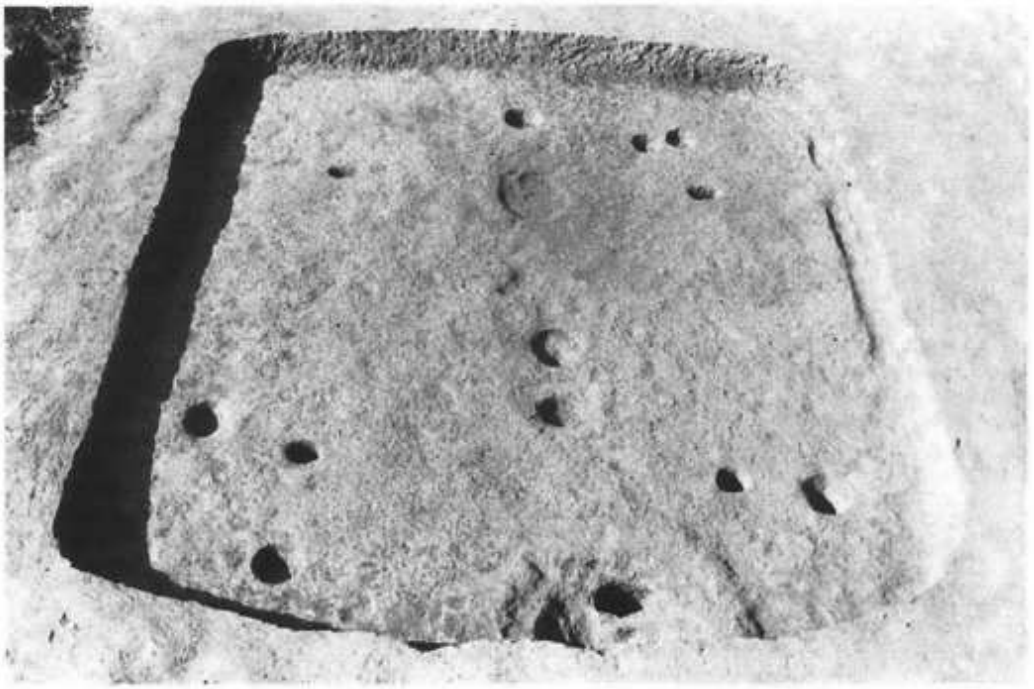
同炉址

図版14



T I Z　22号住居址

同土器埋設炉



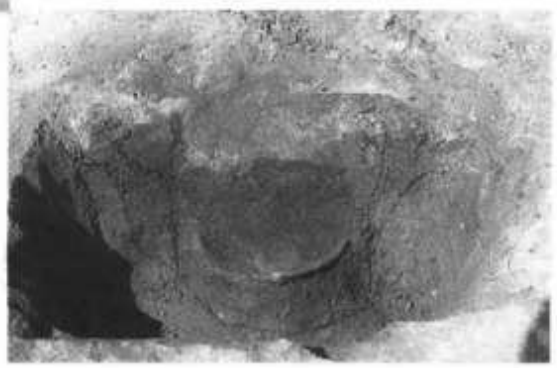
TIZ 23号住居址

同土器埋設炉

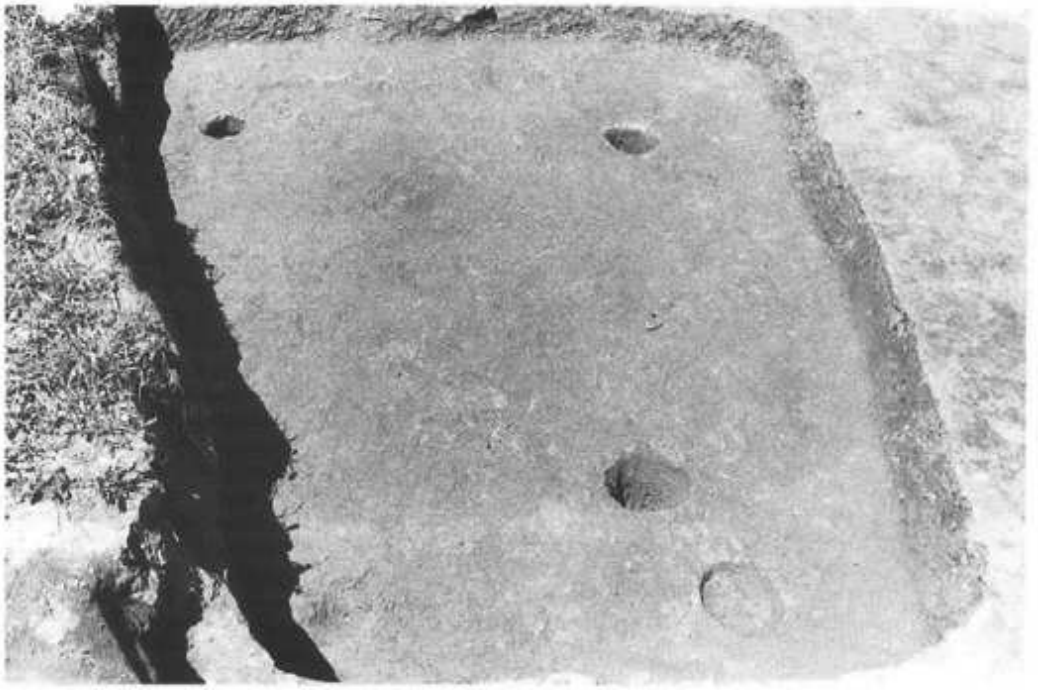
図版16

T I Z　25号住居址

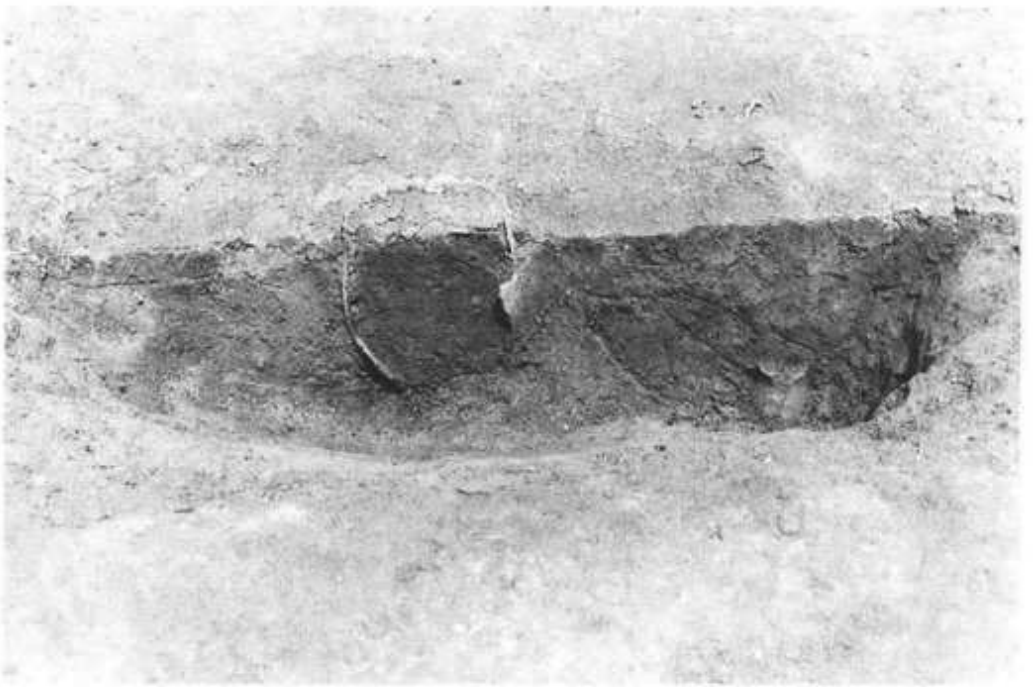
◀ 同土器埋設炉 1
断面



同炉 2 ▶
断面



T I Z　26号住居址



同炉断面

図版18

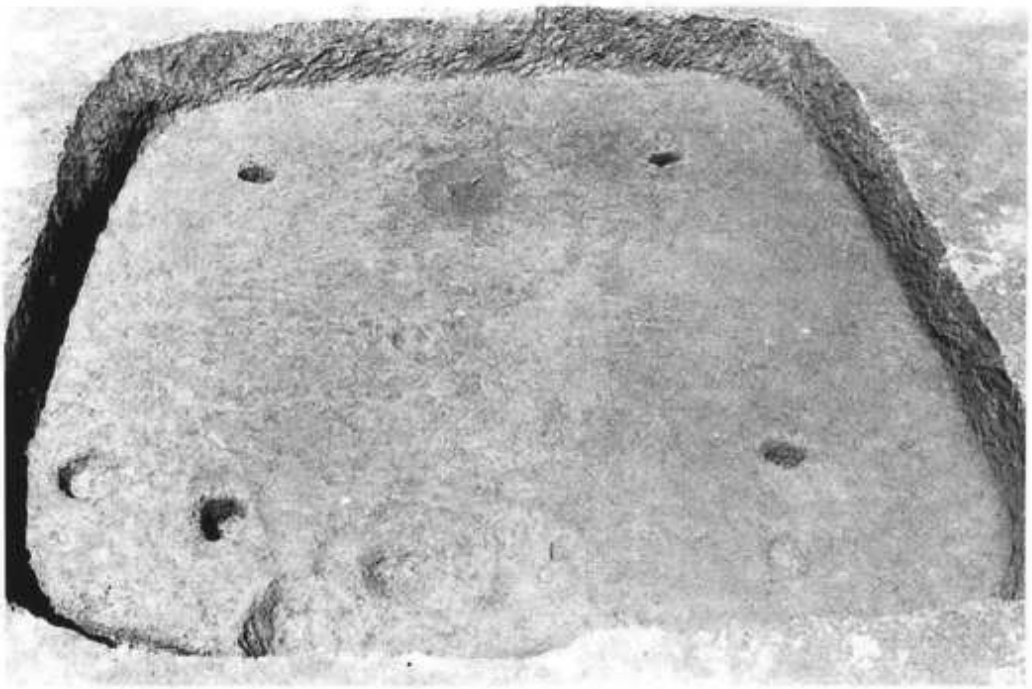
TIZ　28号住居址

同遺物出土状態

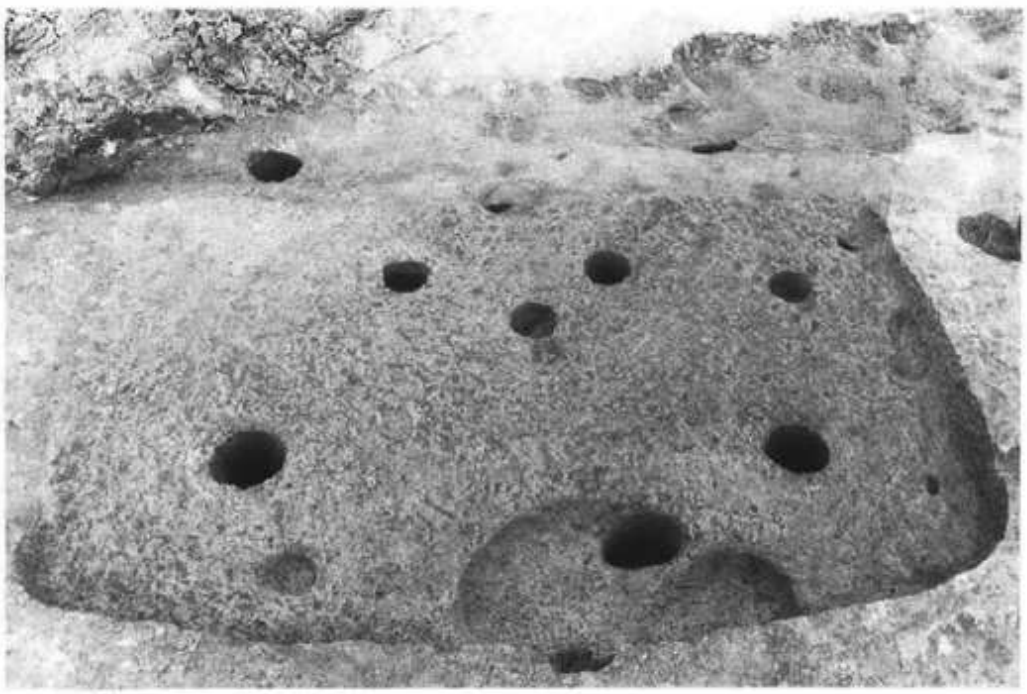
T I Z　29号住居址

同炉断面

図版20

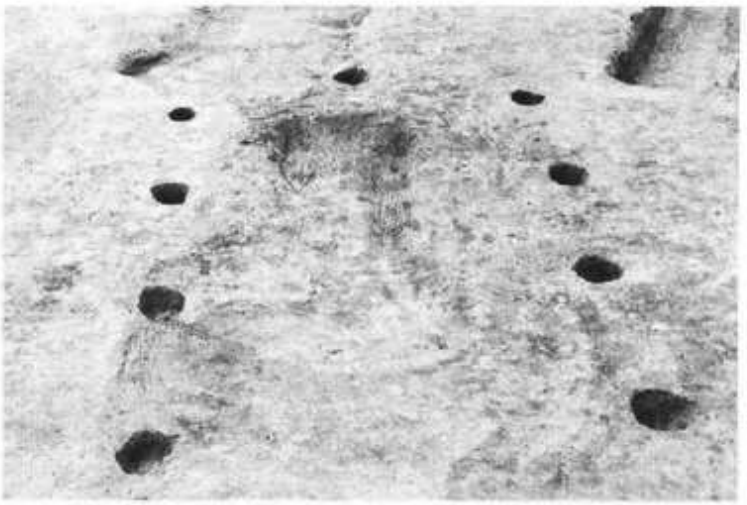


TIZ　30号住居址



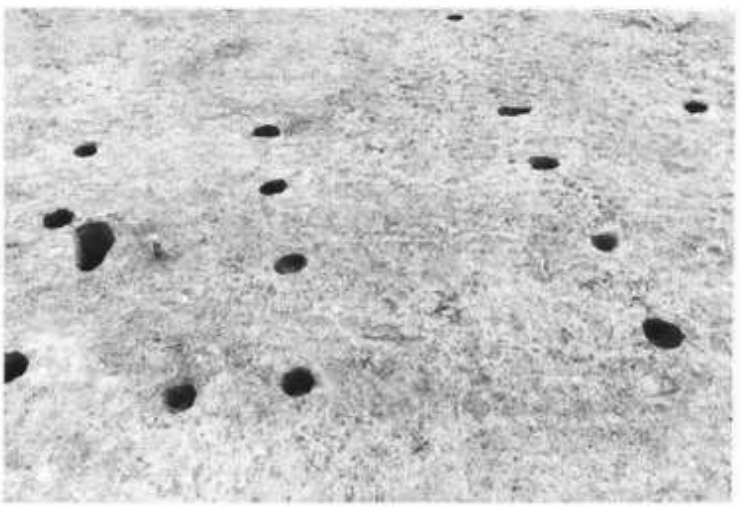
TIZ　31号住居址

TIZ　掘立柱建物址4



TIZ　掘立柱建物址5

TIZ　掘立柱建物址6

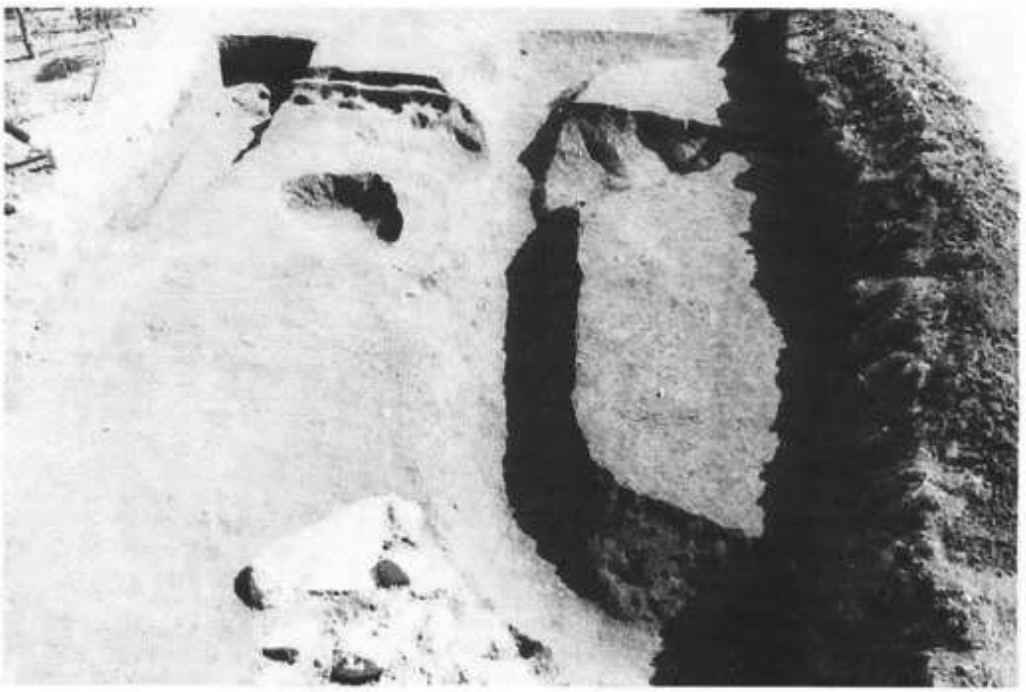


図版22

TIZ　方形周溝墓3

TIZ　方形同溝墓4

ＴＩＺ　方形周溝墓５　道路南側



同道路北側

図版24

TIZ　方形周溝墓6

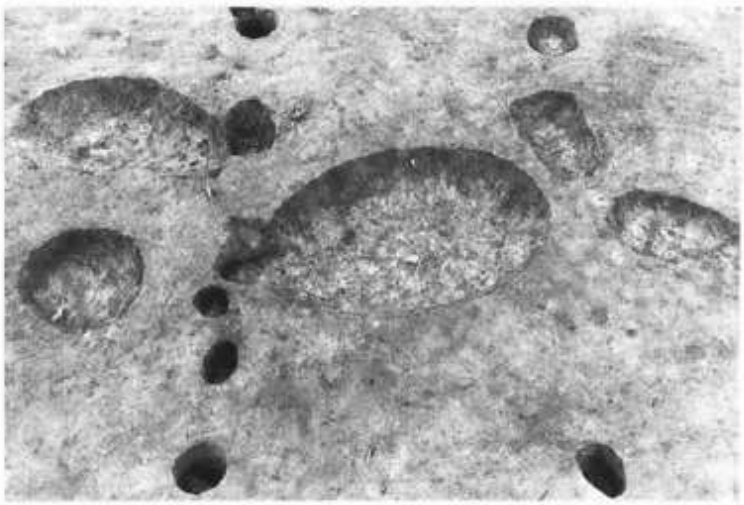
同主体部

TIZ　方形周溝墓7

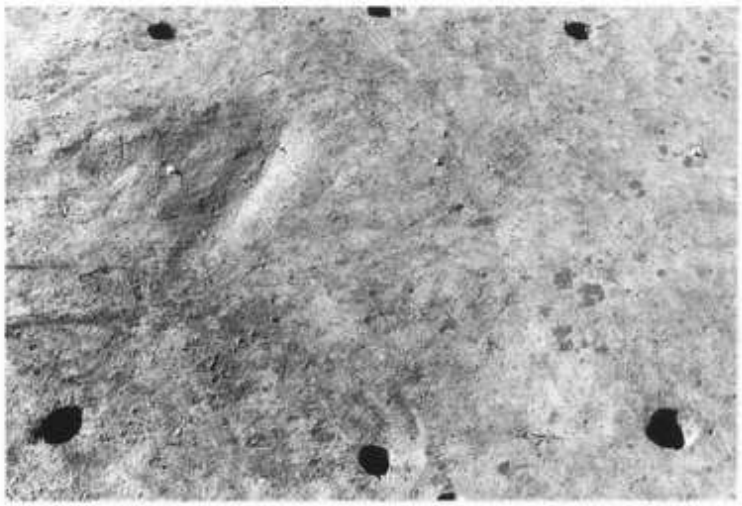
TIZ　方形同溝墓8

図版26

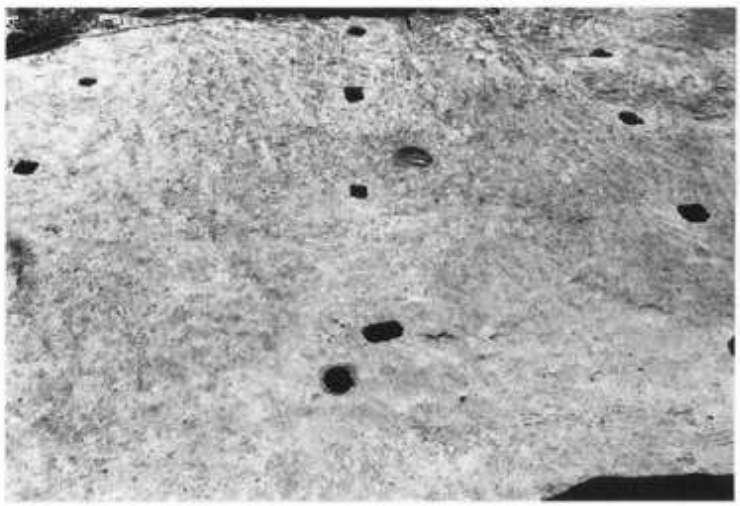
TIZ　掘立柱建物址1



TIZ　掘立柱建物址2



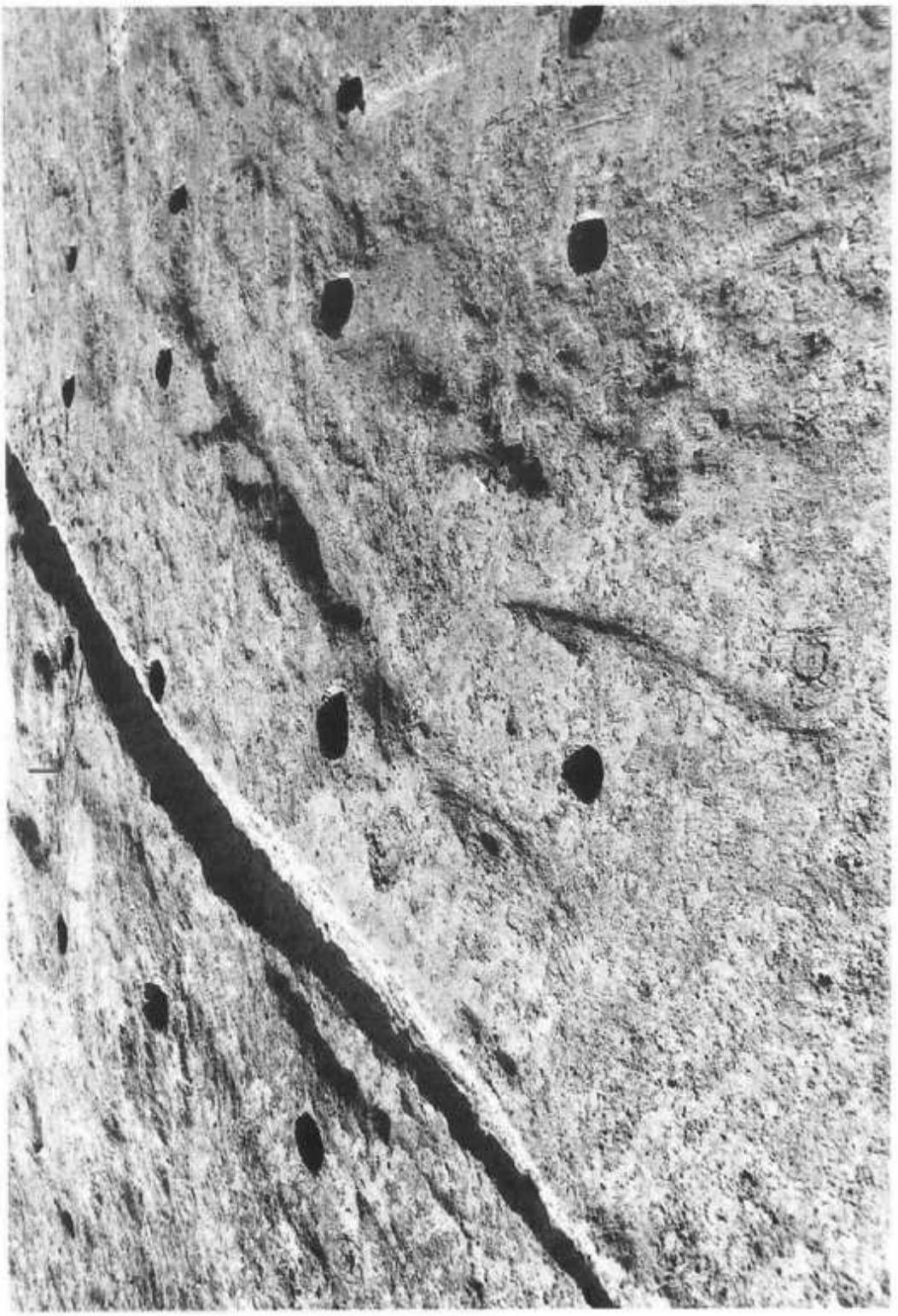
TIZ　掘立柱建物址3



TIZ　掘立柱建物址7

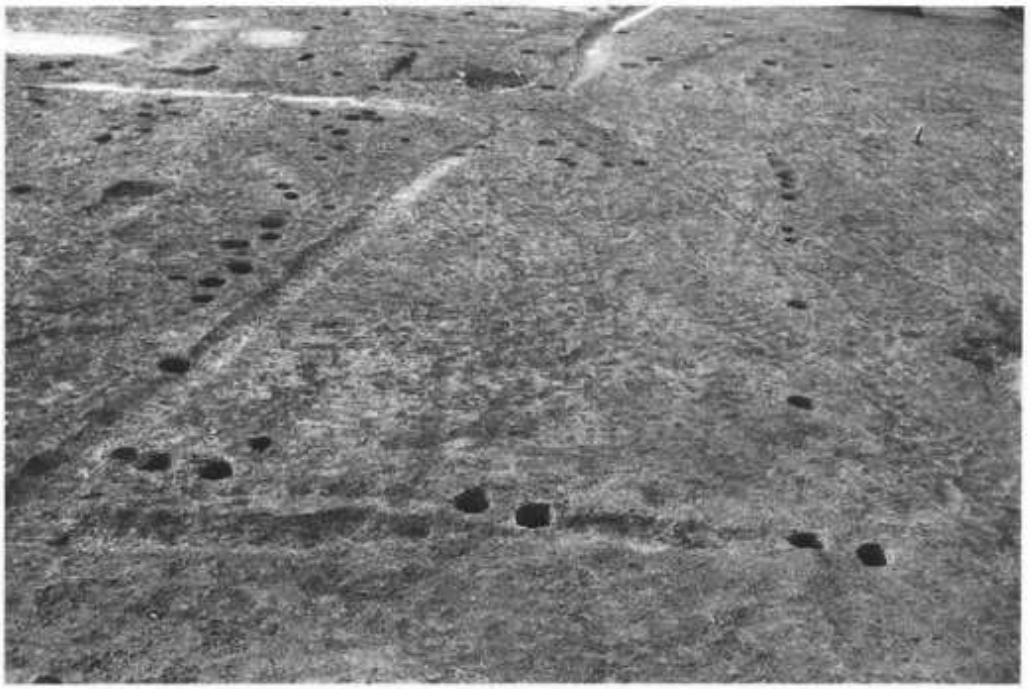
TIZ　掘立柱建物址8（土坑15）

図版28



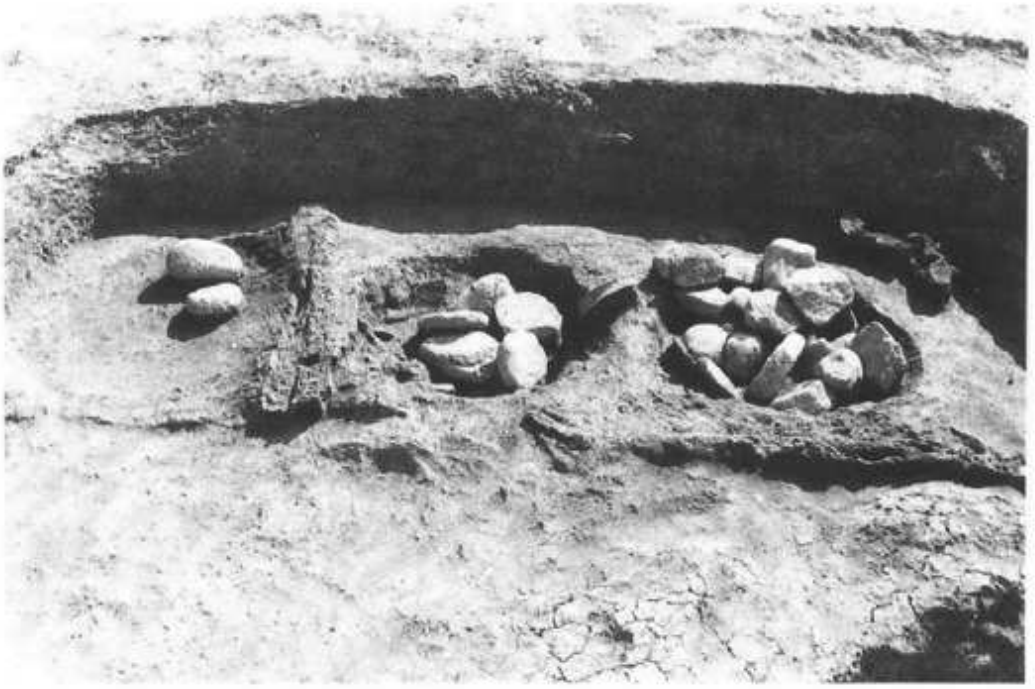
T I Z　掘立柱建物址 9

TIZ　掘立柱建物址10・12

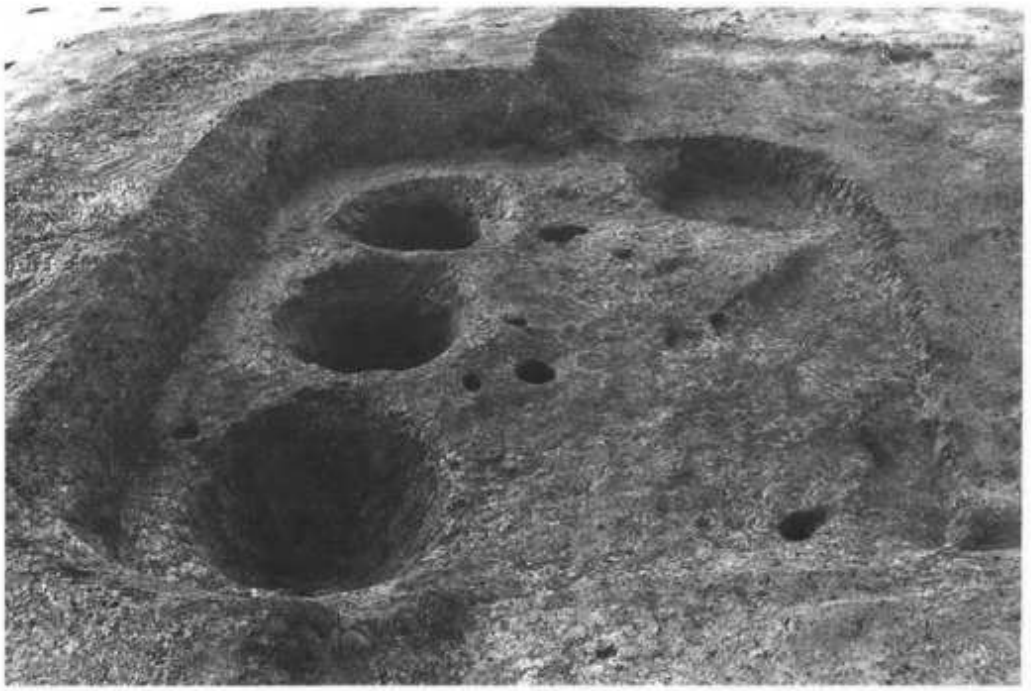


TIZ　掘立柱建物址11

図版30



T I Z　方形竪穴1



T I Z　方形竪穴1

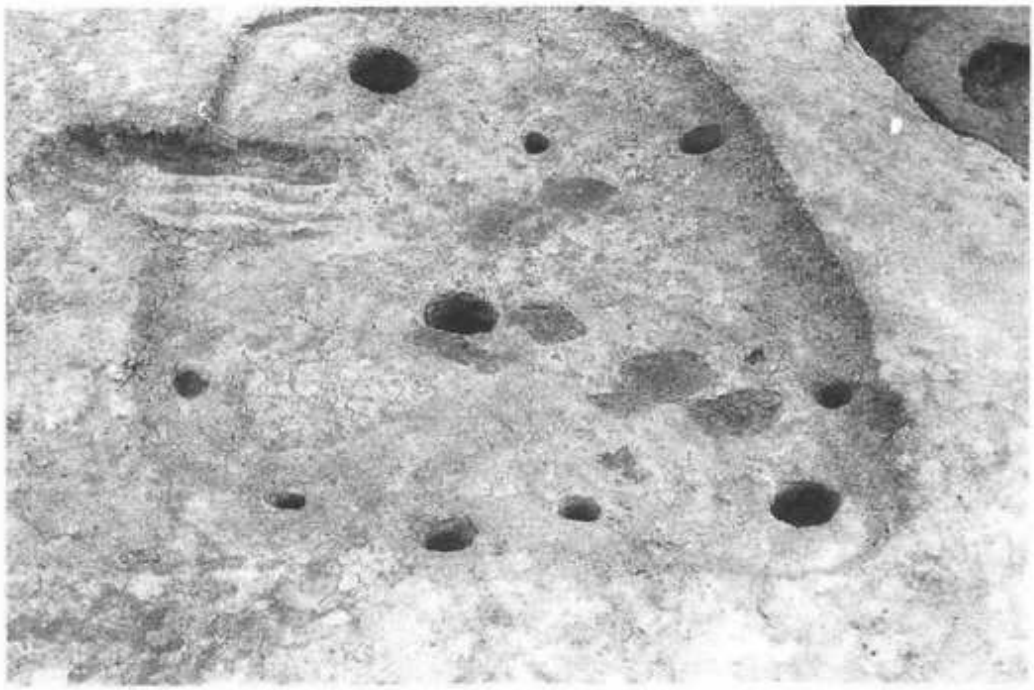
TIZ方形竪穴1
内部穴

西側

中央

東側

図版32



TIZ　方形整穴2

TIZ　方形整穴3

TIZ　方形竪穴4

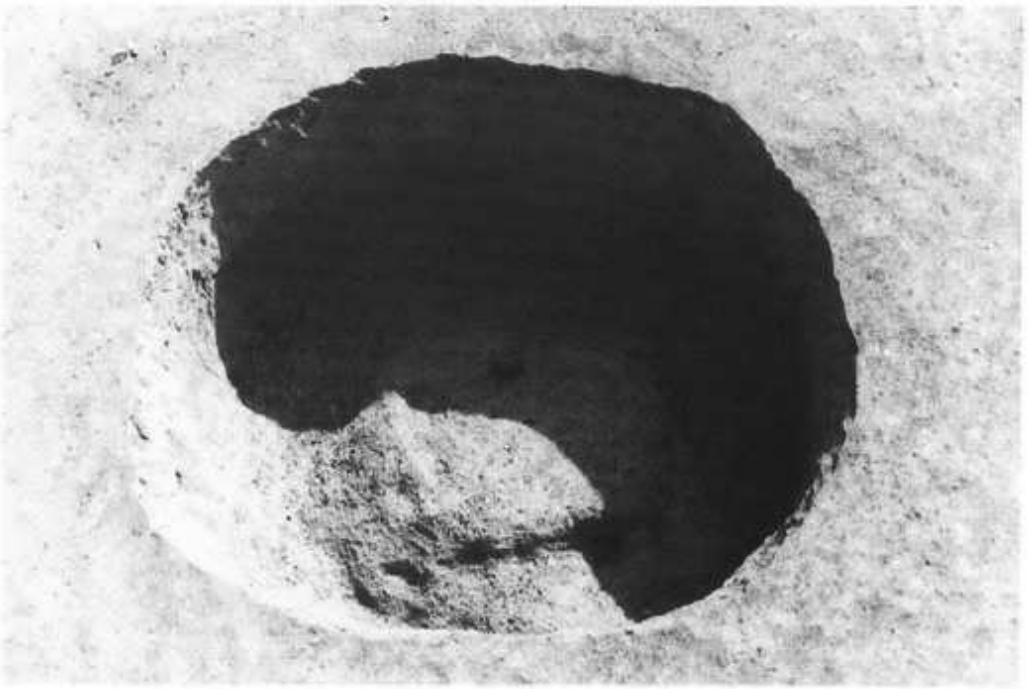
TIZ　竪穴3

図版34

墓壙1・2

墓壙5・6・7・8

T I Z　土坑3

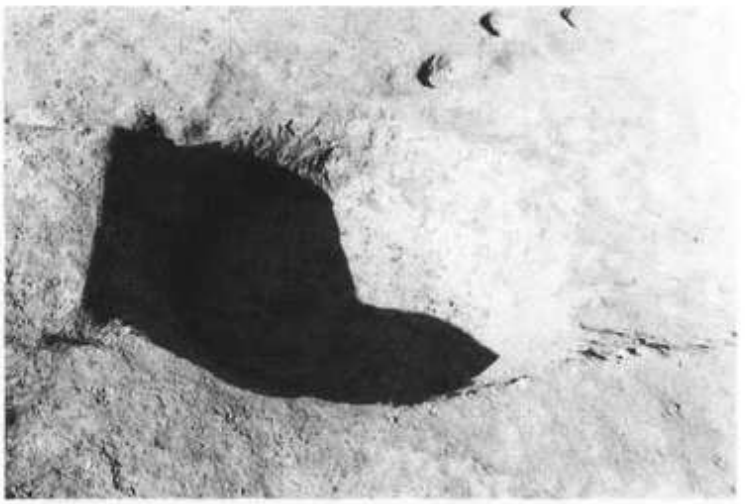


T I Z　土坑7

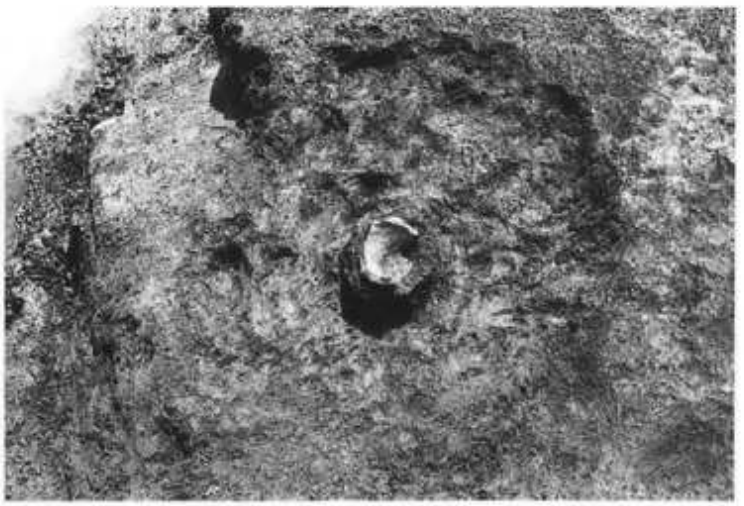
図版36

TIZ　土坑8

TIZ　土坑11



TIZ　土坑13

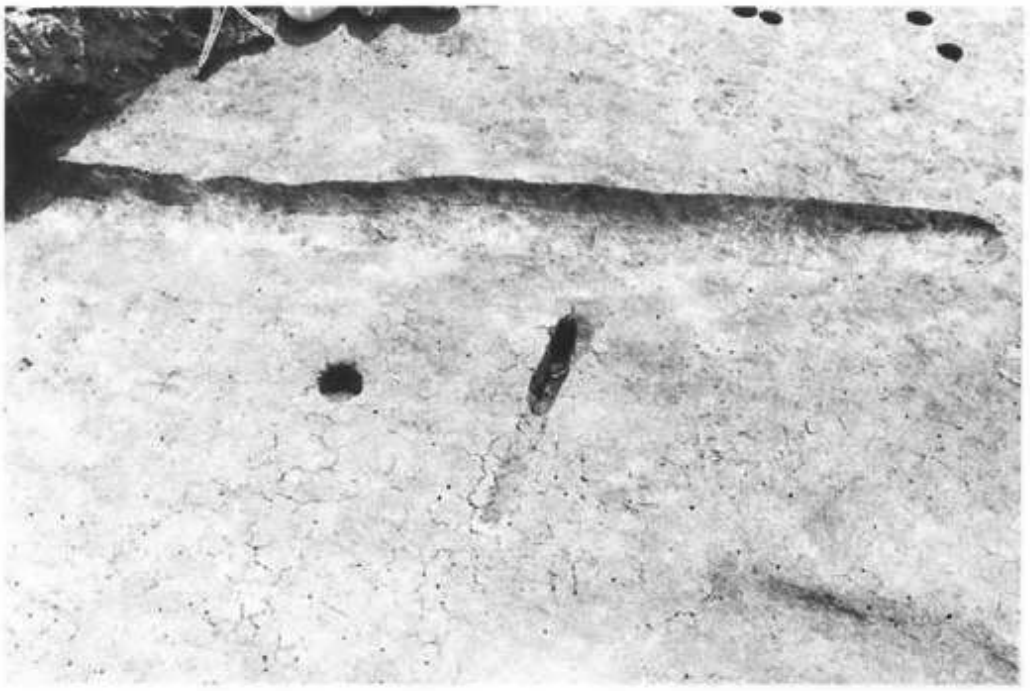


TIZ 溝1・4

TIZ 溝 2

図版38

TIZ 溝 3



TIZ 溝 6

TIZ 溝 9

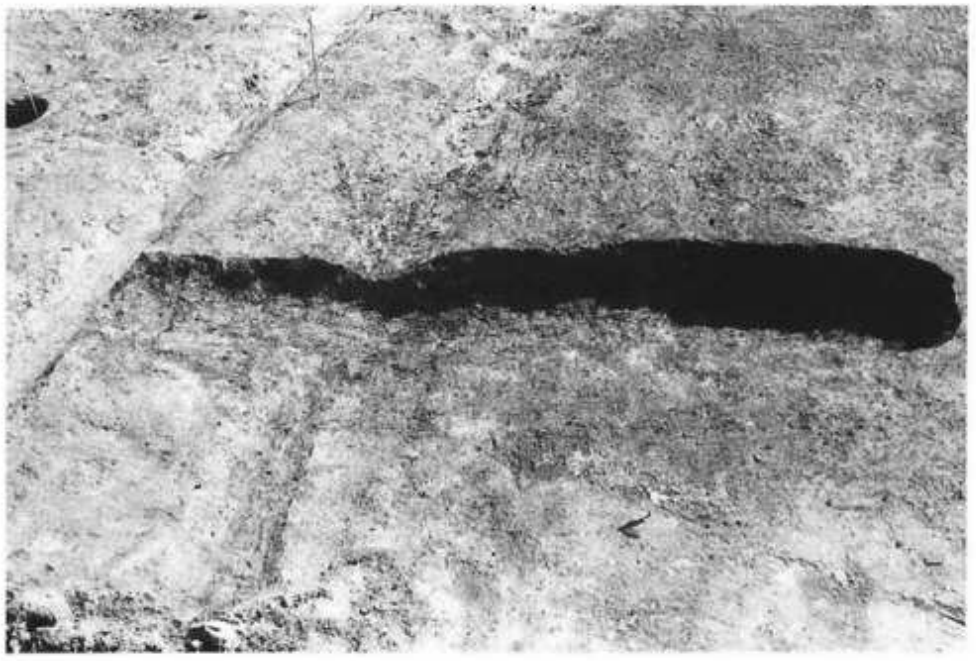
TIZ 溝 10

図版40

TIZ 溝 13・14・15

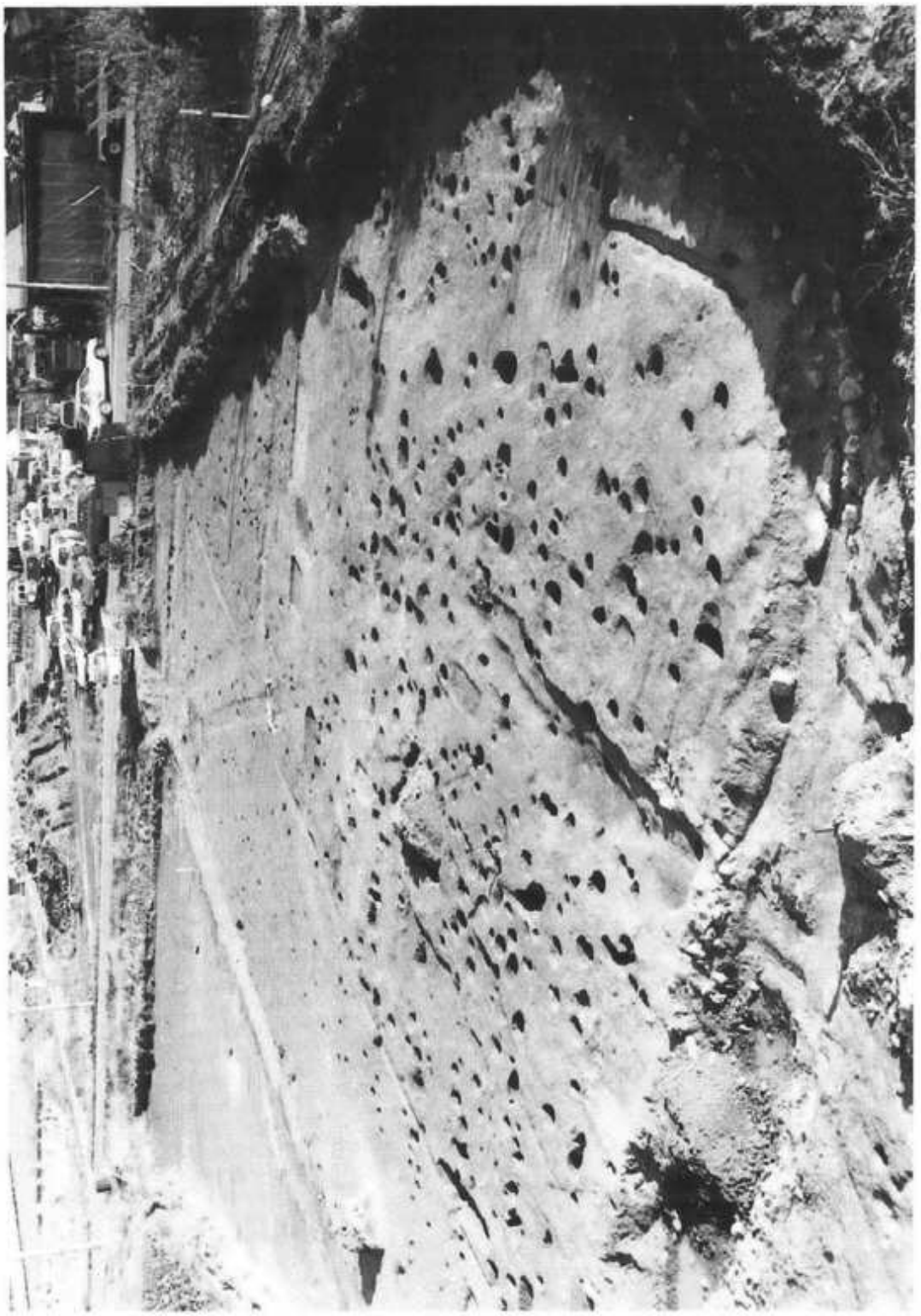
TIZ 溝 20

TIZ 溝 24



TIZ 溝 25

図版42



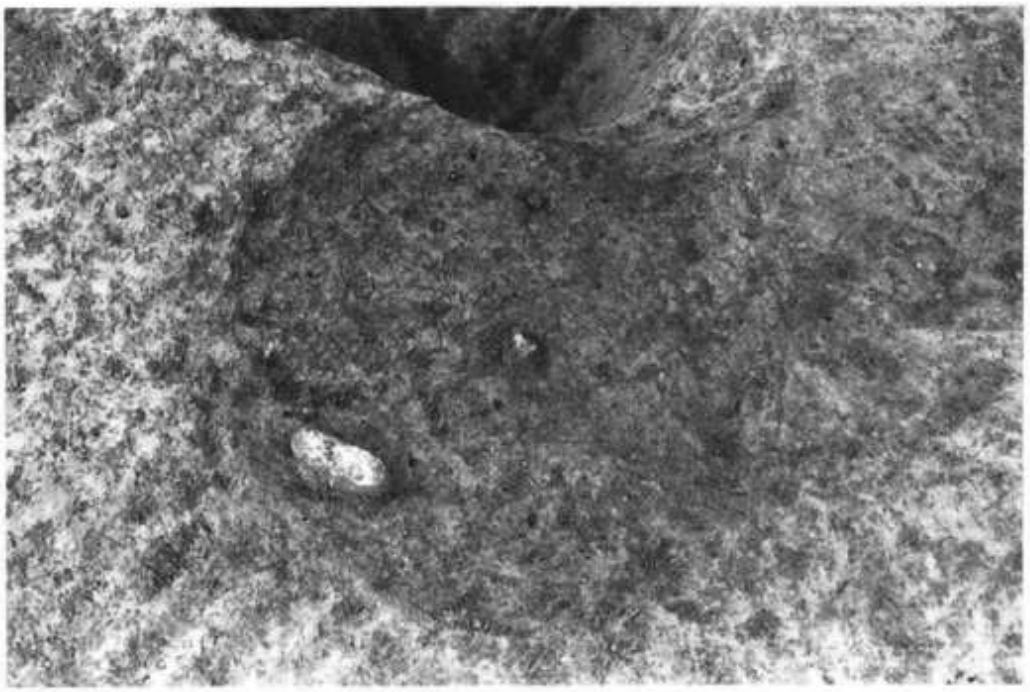
T I Z　D区柱穴群

一色遺跡全景

一色遺跡全景

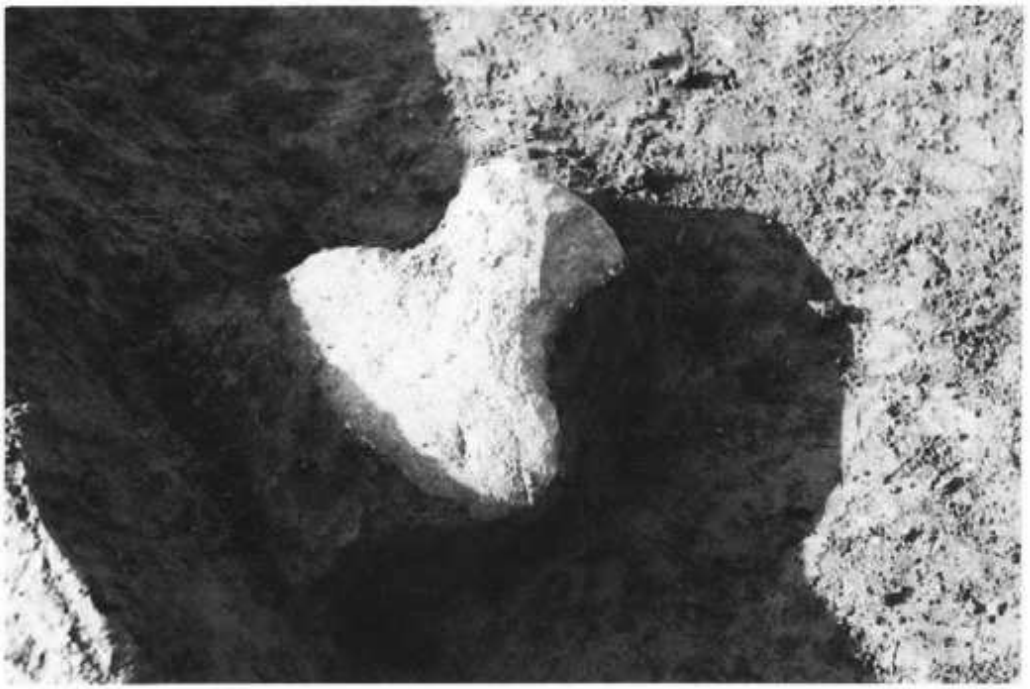
図版44

ISK　3号住居址



同炉平面

ＩＳＫ　３号住居址　遺物出土状態



同　上

図版46

ISK　4号住居址

同炉断面